
けいおん! ~ 例えば、俺が全てを忘れても ~

388859

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！〜例えば、俺が全てを忘れても〜

【Nコード】

N2418X

【作者名】

388859

【あらすじ】

大人一歩手前の男子、私こと中都藤馬は記憶喪失である。^{わたくし}

気が付いたら病院の一室にいて、神を名乗る男から俺の持ち物らしいヴァイオリンとか、喋る変なコウモリを一匹もらっ……
ってハア！？

（この作品は作者の処女作で、転生モノなのかよく分からないものになっております。

が、一応けいおん！の二次創作です。

なおバトル、ハーレムなども含まれますので、苦手な方はブラウザバック推奨です）

第一楽章 ♪ 第一幕 プロローグ!! (前書き)

どうも、初めまして388859です。これから、よろしく願
いします。
ではプロローグどうぞ。

第一楽章 ♪ 第一幕 プロローグ！！

――声が聴こえる。

ここは、とある病院の一室。

その一室のベッドの上で、青年はゆっくりと目を開けた。

「……う、うーん……」

久しぶりに目を開けたせい、太陽の光が眩しく感じるようだ。

青年は身体を起こそうと力を入れるが、

「……っ痛！？」

どうやら、身体中に痛みが走ったみたいだが何とか起きれたようだ。

（……それにしてもここはどこだろう、どっかの病院みたいだけど）
と、思い記憶をあさってみる。しかし、

「……あれ？」

青年は必死に思いだそうと何度も試みるが、

「……なんでだ、なんで、なんで、なんで！！！」

そう青年は、

「なんで、何も思い出せないんだよ！！！」

記憶（大切なもの）が思い出せなかった。

「そんなに大きな声を出してどうしたんだ、ここは病院だぞ」

ふと、聞こえた声の方を見ると、青年は口をあんぐりと開けて固まってしまった。

それも仕方ないだろう、何故なら

「どうしたお前の顔、面白い事になってるぞ」

その声を出していたのが、手のひら大の赤と黒の二色のコウモリだったからだ。

「……………ハア！？ちよつ、おま、ええええ！？

コウモリみたいなやつがしゃべってるぅー！！つか、顔が面白いってなんだよ！！」と、怪我をしてるにもかかわらず、ツツコミをいれた。

すると、コウモリは急に雰囲気を悲しいものに変え、

「そういえば、

奴によるとお前は記憶を全て失ったんだっただな」

と、コウモリは青年に言った。

「おい、コウモリモドキ、誰がモドキだ！！」取り敢えず、なんでも俺が記憶喪失だって知ってるんだ？」

「それはだな「俺が説明しよう」おい……………」

コウモリの声を遮ったのは、若い男だった。

四十歳に入っただくらいだろうか、年のわりにガツシリしている、いわば細マッチョだ。

服装は全身をすっぽりとおおったローブ、髪の色は灰色で瞳は青色だ。

「って、いつの間に部屋に入っただよ」

もう、青年は何が何だかわからなかった。

「まずは自己紹介からだ、俺はーだ」

しかし、ローブの男の名前の部分だけ聞き取れなかった。

「あゝ、ちゃんといってくれない」 青年は言う。

「そうだぞ、ちゃんと言え」コウモリも合わせて言った。

「はあじゃあねえなあ、一回しか言わねえから」「心底めんどくさいに、

「俺は、この世界の神様だ」

.....

「ハアアアアア!？」

青年の叫びが病院中に響いた。

――運命はいつだってわがままで

――理不尽な選択を迫り

――それが現実として続いていく

この物語は、そんな運命に死んでもなお、抗い続けた馬鹿な男の話である。

第一楽章 ♪ 第一幕 プロローグ!! (後書き)

どうでしたか、出来れば感想などもらえると有難い
では。

第一楽章 ♪ 第二幕 自己紹介!! (前書き)

どうも、私こと388859です。

というわけで第一楽章 ♪ 第二幕をお楽しみ下さい。

第一樂章♪ 第二幕 自己紹介！！

――青年 side

あのクソ神の爆弾発言の後、俺は看護師さんに思いっきり叱られ、クソ神とコウモリモドキに、良い笑顔で、

「ドンマイ♪」といわれた。俺の怒りは天元突破だ！！

つか、

「おいコウモリモドキ、お前の名前は何だよ」
と、俺は言った。

そしたら、

「そういえば、忘れていたな。私は、誇り高きキバット族の、キバットバットIEEE世だ」
とコウモリ、キバットは自信満々に宣言した。

「え」と、その説明じゃ全く理解出来ないんですが
と、ジト目でキバットをみる。

「まあそう言われても分からんよ、普通」と、クソ神がカラカラ笑いながら言う。

「仕方ない、特別にお前の頭の中に知識として、ぶちこんでやるうか」

と、笑いながらこちらに手を向ける。

って、そんなことして大丈夫なのか？

「ああ大丈夫、大丈夫、脳の神経が焼き切れるだけだ」

「チェンジでー!!」 というわけで、コントの後、教えてもらった。簡単に言つとこんな感じ。

―――NOW LOADING―――

キバツト族は魔族の一種であり、魔皇力と呼ばれる魔族の潜在能力を引き出すコントロールに長けているようだ。

ファンガイア（最強の魔族）の鎧という、戦闘鎧のコントロールが出来るため、ファンガイアとは同盟関係らしい。って話がちょっとそれたな。

話を元に戻すとこのキバツトバツトコウモリモトキエエ世は、そのファンガイアの鎧の中でも、強力なキバの鎧を二つも持っているらしい。

ちなみに、俺はそのキバの鎧を二つとも使えるらしい。って、

「いや、何で俺が使えんの？ファンガイアの鎧なんていう名前だから、人間には使えないんじゃないかねえ？」

という、俺の正直な疑問にコウモリモドキが答える。

「ちよつと勘違いしてるな、確かに普通の人間がキバの鎧を使えば、最悪の場合死ぬ」

と言って少し間を空ける。

「しかし、生憎とお前は普通の人間じゃあない」

と言って、コウモリモドキは悲しいオーラを漂わせる。

「結局、どういうことたい。じゃあ、なんだってんだよ」

ハッキリしない奴キバットに聞く。

「お前は馬鹿だから、あれを使える」

と憎たらしい笑顔で言ってきた。

え、何で笑顔なのか分かるのかって、それはあれだ大人の都合だ。

って！！

「ふ・ざ・け・ん・なあああ！！」

全っ然理由になってねえだろうが！！

何だよ馬鹿だから使えるって、あれか、俺は痛い人って事かこのコウモリモドキ！！」

俺は力の限り突っ込んだ。

――NOW LOADING――

――三人称side

「それで、何か思い出したか、クソガキ」と神は言う。

「ああ、二つ思い出したわ。」と言って、病室を見回して何かが入っているケースを見た。

「コウモリモドキ、そのケースとってくんね」と言つて青年はケースを指差す。

「仕方ないな、今回だけだ」と言つてケースを青年の方に持ってきた。

「……さてと」キバットが持ってきたケースを開ける。

ケースの中にはヴァイオリンが入っていた。

「ブラッディ・ローズ。」

確か、コウモリモドキの力を生身で使った男が作った、最高傑作のヴァイオリンだったな、そしてヴァイオリンの弾きかた」と、ヴァイオリンを弾き始めた。

そのときの、青年の顔はとても寂しそうな感じだった。

そして、弾き終わった後に、

「……他に思い出した事は何だ!!」
キバットは声をあげて聞いた。

「まあ、そう焦るなキバット」
そう言っつて、神はキバットはおちつかせようとする。

しかし、

「落ち着いていられるか!!」
貴様にも話しただろう、この馬鹿は、人間のくせに……」
キバットは声を詰まらせる。

「まあ、あとひとつ思い出した事は名前だ」
と、青年は言っつて

「俺の名前は、中都藤馬^{なかつとつま}だ。

改めて、よろしく!!」

そう青年、中都藤馬は自己紹介した。

I i t o b e c o n t i n u e d

第一章♪ 第二幕 自己紹介!!（後書き）

いかがでしたか？

藤馬「つか、原作メンバー誰も居ねーじゃん」

それは、言わないお約束ってやつだ。

キバット「そうだぞ、作者はギリギリ働いてさっさとメンバーを出せ」

わかつとるわい！

藤馬「こんなダメ作者ですが、これからも」

全員「よろしく願いします!!」

第一楽章 ♪ 第三幕 覚悟!! (前書き)

どうも、みなさん388859です。

それでは、第一楽章 ♪ 第三幕どうぞ!!

第一章 ♪ 第三幕 覚悟！！

――藤馬 side

あれ、なんか変な空気になっている気がする。

あ、どうも私こと中都藤馬です。

「なん…だと…この私に野宿で過ごせと言つのか！！」

「だ…から、しゃあないだろうが。」

てめえがここで見つかり、めんどくさいことになるだろ」

「だったら、貴様が泊めてくれればいいだろう！！」

「え…だって、人が出した食事にケチつけたりするから、めんどくさいわ、ぶっちゃけお前」

「それは、貴様がケチってパンと、私の嫌いな牛乳しか出さなかっただからだ！！私はトマトジュースが大好きなんだ！！」

「だ…うるせえ！！てめえら、人の病室で騒ぐな！！」

怒られるのは俺なんだぞ！！

つか、コウモリなのにトマトジュース好きって、やっぱりモドキじゃねえか！！

それにクソ神は神なのにケチりすぎだろ！！」

「馬鹿は黙ってる!!」
何で、てめえら息ぴったりなんだよ。

俺はハア、とため息をつく。

全く、まだ聞きたい事が山ほどあるのに、どうしてこうなった。

――NOW LOADING――

あの自己紹介をした後、質問を一つしたときの事だった。

「そうだ、俺ってどこに住んでんの。」
という、素朴な質問をした。

すると、

「はあ、何いってんだ、お前の家なんかねえぞ」
という、仰天発言をスパッと言いやがった。

「……はい？」当然、俺は固まった。

「それだけじゃない、お前には親、兄弟、友達これら全てがこの世界には居ない」

「イヤイヤイヤ、意味がわかんないんだけど。まるで、世界が別にあるみたいな言い方だな」

笑いながら、俺は言う。

「馬鹿のくせに勘は良いな。

お前の言う通り世界は無数に存在している。

そして、お前は二回も死んでいる珍しい転生者だ」

もう、訳が分からないです、安西先生。

「他の神による、肉体年齢の改変、能力譲渡の痕跡がお前の魂に残っていた。

それに随分雑な魂の修復の跡もあった。

……全くどんだけ無茶苦茶な野郎なんだ、お前は」呆れながら、クソ神が言う。

って、

「俺が二回死んだ……それに転生者って何だよ？」

俺は心底信じられなかった。だってそうだと、いきなりアナタは死んでますとか言われて、信じられるか。

「そのまんまの意味だ。お前は二回も死んでいて、それでもって転生者つつうのは、死んでから他の世界に文字通り転生する奴の総称だ」

長ったらしい説明ありがとう。

つか、

「つまるところ、俺って本当に普通の人間？」

俺は恐る恐る聞いた。

すると、

「私が言っただろう、貴様は馬鹿な人間だと」

と、コウモリモドキが何言ってるんのお前みたいな感じで答えた。

「いや、全然説明になってないから」

まあいいか、全然良くないけど。

「じゃあ、家が無いんだよね？」

と、クソ神に聞く。

「ああ、それなら大丈夫だ。

ついでに日用品も用意するから、体を治しとけよ」

「すまねえな、何から何まで」

意外に良い奴なんだなこの人、いや人じゃなかったわ。

「じゃあ、私は此処に今日は泊まろう」 と、コウモリモドキが
言ってる俺の頭に乗った。

「「いやいや、ダメだろ」」

お、初めてクソ神とタイミングがあつたな。

「なん…だと…この私に野宿で過ごせと言つのか!」

というわけで、冒頭に戻る。

―――NOW LOADING―――

だいたい、分かった（キリッ）。

回想している間にどうやら決着は着いたらしい。

「よし、じゃあトマトジュース—リットルでどうだ！」
と、クソ神。

それに対して、

「よし、取り引き成立だ！」

と、コウモリモドキ。

どんだけ、トマトジュース好きなんだよ。

って、

「おいコウモリモドキ、取り引きってなんだよ」

「ああ、お前にも関係あることだ。」

と、言っ て俺の右手の方へ小さい羽で飛んでいくと、右手を

「ガブリ！」

——噛んだ。

「っ痛アアアアあああああああ！！」

右手の甲が焼ける様に痛い。

「大丈夫だ契約をしたただけだ、すぐに治まる」
キバットが言う。

そんなこと言われても、痛いものは痛い。
ふと右手の甲を見ると、コウモリの紋章みたいなモノが浮き出てきた。

「何……っだよ、これ……!!」

「キバの紋章だ」

と、キバットが冷静に言う。

痛みが急にひいたかと思うと、体が急に軽くなった。

「どうやら、契約完了のようだな」

と、カラカラ笑いながらクソ神が言う。

「何か体が軽いし、体の痛みが消えてる……」

一体どうなってんだ？

「人間の身でキバの鎧を契約したのだ。しかも二つもな。痛みも強いが、その分身体能力も上がったと思うぞ。……死ななくて良かったな（ボソツ）」

何か、今恐ろしい事を口にしたようだが、気にしたら負けだ、うん。そういえば、

「取り引きって、何なんだ」
と言うと、

「ああ実はな、この世界にはテレビ等の空想上でしか存在しない、別世界の怪物が現れてな。」

この世界の人間達を襲い始めた。

しかしこの世界の武器じゃあ、怪物達を倒すのは無理だ。

ソコで、お前にその怪物達全て倒してもらっ

……はい？

「えっと、何、つまりこの世界での衣食住は用意するから、代わりに怪物ぶっ倒せっつつ事？」

「Oh-Yes!!」

サムズアップを、しながら言うバカ共、誰かこいつら殴ってくれ。

まあ、良いか。

「いいぜ、その取り引き受けてやる」と、

「……本当に良いのか？」

と、コウモリモドキが心配してくれたのか聞いてくる。
はあ、

「な〜に、言っただよお前。言い出しっぺだろうが」

「しかしだな……」

と、納得がいかないのか聞いてくる。

「確かにさ、俺なんかが戦って、全ての人達を守るなんて主人公み
たいな事は出来ないし、命が惜しくない訳じゃないから、スゲー怖
えよ」

と、言っ言葉を切る。

けどな、

「だからといって力を持っているのに戦わないっていうサイテーな野郎には成りたくねえ」

だから、俺は……

「助けを求めている人達に全力で手をのばすよ。

だって、のばせる時にのばさないと絶対に後悔する。そんな気がするから」

だから、

「力を貸せ、コウモリモドキ」

「その言葉忘れるなよ、藤馬」

ここに馬鹿な男とコウモリモドキという、奇妙なタッグが生まれた。

I i t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 ♪ 第三幕 覚悟!!（後書き）

どうでしたか？

藤馬「なあ、俺っていつになったら、仮面ライダーになれるの？」

大丈夫だ、次話で解決だ。

藤馬「まじで!!」

というわけで、

全員「次回をお楽しみに!!」

第一楽章 ♪ 第四幕 変身！！（前書き）

どうも、私こと388859です。

というわけで第一楽章 ♪ 第四幕をお楽しみ下さい。

第一楽章 ♪ 第四幕 変身！！

――神 side

「どうやら、覚悟は出来たようだな」
と俺が笑いながら言う。

それにしても、このガキは何者なのだろうか。

いくら、転生者とはいえ二回も死んでいる奴は初めてみるしな。

それに、コイツは只の馬鹿な（・・・）人間じゃない。

ま、キバットが言わないなら言わないで良いか。

――NOW LOADING――

――藤馬 side

あ、皆さんどうも、私こと中都藤馬です。今は、クソ神、コウモリ

モドキの一人と、一匹に質問タイムです。

「でもさあ、その怪物ってどんなの何だ？」

と俺がクソ神に聞くと、

「そうかお前は知らなかったな、まあ、教えるより見た方がぶつちやけ早い」
とめんどくさそうに答えた。

「まあ、そこらへんの事はあとで分かる」
そうクソ神が言った直ぐに、
「グ〜〜」と、

ええそうです、ご想像通りお腹が鳴るという、ベタな展開ですよ。

「えゝ、何かすみせん」

すると、

「マイペースだなやっぱりお前は」

キバットが呆れている。

「あ、言い忘れてたが、明日で退院だから」
と、このクソ神が言ってきた。

言つとくが、もう何言われても驚かねえぞ。

「面白くないな全く、でも次言う事は、絶対にビックリするぞ」

ニヤニヤするな、この野郎。

「まあ、そう言うな、

では、ダララララ……dっげほ、ゲホっ、」

(……うわぁ、)

コウモリモドキと、初めて心の声と同じになったな。

「ゲホッ、げほ、ダラララ……!!」

君には、来週から桜が丘女子高等学校に通ってもらい、軽音楽部に入ってもらおう!!」

――

――

――

――はい？

クールだ、coolになるんだ中都藤馬！

いくら、あのクソ神でもそんな馬鹿な事を……

「おゝいしっかりしろ藤馬、おゝい」

そつだよ、これは夢オチだよ、きつとそつだよH A H A H A！……。

「……ガブリ！！」「っ痛ああ！？」

何すんだ、このコウモリモドキ！！

「やっと、正気に戻ったか。」

何か、疲れてんなどうしたんだ？

「貴様のせいだ、貴様の……！」

と、牙をちらつかせながら言う。手が食い千切られるかと思った……。

つて！

「おい、どういふつもりだこのクソ神、俺は男だぞ……！」

何考えてんだよ！

「はっはっはっはっ、やっぱり最高だわお前！」「ガブリー！……」
とりあえず、一から説明してやろう」「
クソ神さまあ。

――NOW LOADING――

クソ神によると、世界には主要人物なる人物がいるらしい。

その主要人物たちの運命は決まっており、抗う事は出来ないらしい。
そこに何らかのイレギュラーが入れば話は別らしいが、この話はまた別の機会に。

話を元に戻すと、別世界から侵入してきた怪物達が、その主要人物達を殺すと、その主要人物達がいた世界は消滅するらしい。

そして、その主要人物達は俺が転入する女子高にほばいるらしい。

つつことは、

「つまり、俺は用心棒も兼ねるわけか」
でも、

「何で、軽音楽部に入らないといけないんだよ」

話を読めないんだが。

「本当に馬鹿だな、その軽音楽部に主要人物達が集まってるからにきまつてるだろ」
なるへそねえ。

「でも、女子高にどうやって転入するんだ」女装なんて絶対いやなんすけど、俺。

「そんなわけないだろ、そこところは心配するな、俺を誰だと思ってる？」

神様（笑）でしたね。

「そいじゃ、頼んだぞクソガキ」

あいよーっと。

そう言ってクソ神は、コウモリモドキと一緒に姿を消した。

――NOW LOADING――

――翌日の夕方

というわけで、退院 and 俺の新しい家に向かって、歩いていきます。

ちなみに、コウモリモドキはヴァイオリンケースの中にいますよ。

「何を言ってるんだ、お前は」

コウモリモドキが呆れながら言った。

そんなこと言わんといて！

「さてと、クソ神が用意してくれた家はどんなのだろうな？」

仮にも、神だしそれなりに良い家だとおもうけど。

「しかし、あの神はかなりケチだぞ」

と、コウモリモドキが言う。

大丈夫、だって神様だし。

うんうん、そうだよ、そのはず大丈夫だって…。

…

……

……………超心配になってきた。

「お前が、余計な事言うから心配になってきただろうが!!」

全く!

「なっ、私のせいではないぞ! だいたい……!」

この時点で、気付くべきだった。

だって、他の人から見ると、

ーヴァイオリンに話しかける痛い人ー

という変人にしか見えない。

気付いた時には、色んな人にみられてましたorz

こんなときはあれです、せーのっ、

「あゝもうっ、不幸だー!!」

あの絶対零度空間から、自分の新しい家まで走ってきました。

「はあ、っはあ、はあ……!」

何か疲れたな、ハァ。

って、着いたな俺の家。

「……思ったより普通だな」

ええ、普通の一階建ての家です。

「……とりあえず、家の中に入ろうか」

中に入ってみることにした。ついでにコウモリモドキをヴァイオリンケースから出しておいた。

普通に全部の、日用品が揃っていたのでびっくりした。

そういえば、

「あの野郎、日用品用意してくれたのは良いんだが、金とかどうしよう……」

とか思ってた時期がありました。

真ん中にあったテーブルの上に封筒があるのでみると、

「よつす、これを読んでるつつつことは、どうやら家に着いたみたいだな」

金の心配ならするな。神の特権を使わせてもらったから」

中を改めてみると、預金通帳があった。
開くと、

「……WA〱O……」

と、思わず言ってしまうぐらいの金額が入ってた

って、まだ続きがあるし。

「ついでに学校のついてだが、お前には共学予定の桜高に試験的に入学するつつ設定だ。」

くれぐれも、問題を起こすなよ。」

ハア、何だか知らない内にドンドン決められるなあ。

「彼奴には感謝しなければな」
そうだな、コウモリモドキ。

「夕飯でも買いに行くかな……」

そう思った直後、

「「っ！」「」

何だ、この嫌な感じの気配……。

「ファンガイアが出たようだな、行くぞ藤馬！！」

と、言ってコウモリモドキが、家を出る。

って！

「ま、待てよ!!」

この嫌な感じな気配がファンガイアなのかよ!!」と、質問をしつつ家を飛び出す。

「ああそつだ、ファンガイア以外の怪物もこのように感じる事が出来る……近いぞ!!」

俺とコウモリモドキは、徐々に暗くなり始めた道を必死に走った。

――NOW LOADING――

――少女side

どうも、皆さん私の名前は、平沢 憂です。

今は夕飯に、お姉ちゃんの好きなハンバーグを作ろうと思って、買い物をした帰りなんですけど……、

「待て、貴様のライフエナジーを貰うぞ　!!」

今、ステンドグラスの模様入りの、馬みたいな怪人から追われています。

最初は何かの撮影かなあと、のんきに思ってたんですが、私のすぐ近くにいた人が、何か牙みたいなモノに刺されたかと思うと、

「あ、ああああー!!」

その人の体が透明になって、

パリイイイイン!!

身体がガラスの様に砕けて、なくなっちゃいました。

――え？

思わず、立ち尽くしてしまい頭の中が真っ白になりました。

私もこのままだと、ああなっちゃう、そう考えていたら怪人がこっちを向いて、

「お前の分も、いただくのか」

と、言ってきました。

とりあえず必死に逃げています。

「っはあっ、はあ、はあ……!!」

どうやら、何処かの公園に着いたようです。

どうしよう、必死に逃げてたから、逃げる場所を間違えちゃった！
そう思っていたら、

「やっと、大人しくなったか。さあ、貴様のライフエナジーをいただきますぞ!!」

どうしよう、こんなところで死にたくない!!

誰か、助けて!

そう思って、目をつぶりました。

ここで死ぬなんて、運命なのかな、そんなことを思っていたときでした。

「女の子を襲うなんて何考えてんだ、キーツクウウウウ!!」

場違いなテンションで、男の人が現れたのは。

――NOW LOADING――

――三人称side

「全く、大丈夫か?危ねえから下がってろ」と、藤馬が言う。

「……あ、はい、大丈夫です」

少し遅れて憂が返事する。

どうやら、混乱しているようだ。

「貴様、いきなり現れて何者だ!!」

そう怪人、ホースファンガイアが聞く。

「てめえを倒す男だよ、コウモリモドキ!!」

そう言った直後にキバットが現れ、

「ああ、ガブリ!!」

藤馬がキバットを掴み、紋章がある右手の甲を噛ませる。

「っ!!」

キバットから右手の甲、全身と《魔皇力》が流れる。

痛みがあつたのか、藤馬は少し表情を固くする。

すると、藤馬の顔にステンドグラスのような模様が現れ、腰には紅黒いベルトがまかれる。

そして、キバットを持っている左手を前に出し、

「《変身!!》」その瞬間、中都藤馬は姿を異形へと変えた。

全体のカラーは紅にヴァンパイアのような外見、頭部はコウモリのような装飾、黄色の複眼、手足には鎖状の拘束具カテナと呼ばれるモノ

が巻き付いている。

その名も仮面ライダーキバ

「……仮面……ライダー……？」

憂が呟く。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え！！》」

吸血の戦士が、今宵舞い降りた。

I I t o b e c o n t i n u e d

第一章♪ 第四幕 変身!!（後書き）

どうでしたか？

藤馬「ヤッホーい!!」

やっと変身したぜい、どうも、主人公の藤馬です!!
あ、そうだ」

何か？

「何で、キバットEE世なのに黄金のキバなんだ」

ふっ、小さい事は気にするな。あとでわかる。

藤馬「次回は戦闘だな!!」

ああ、では、

全員「次回をお楽しみに!!」

第一楽章 ♪ 第五幕 初戦闘！！（前書き）

どうも、皆さん388859です。

それでは、第一楽章♪第五幕です。

戦闘描写ってムズいですね。

第一章 ♪ 第五幕 初戦闘！！

――三人称 side

「バカな、黄金のキバだと！？」

確か、キバはこの世界には居ないはずだ！！」

と、ホースファンガイアがうるたえる。

「ガタガタうつせえ、早くかかってこいよ、怖いのか！！」

と、キバが挑発した。

「貴様、調子に乗りおつて、人間がファンガイアを侮辱するなあ！！」

そう言つて、ホースファンガイアは、キバに向かい、拳を放つ。

しかし、

「動きが単調過ぎんだよ」

キバはファンガイアの拳を受け止め、お返しにと拳を放つ。

「さて、クイズだ」

お前の拳と、俺の拳、どっちが強いでしょうか？」

クイズを出しながら、拳をファンガイアの身体にドンドン叩き込んでいくキバ。

そして、最後に蹴りを入れてファンガイアを公園の遊具までぶっ飛ばした。

「つぐ、ふう、っふう……クソっ、人間ごときに」

ホースファンガイアは倒れたまま、悔しそうに言う。

「早く、クイズに答えろやこの野郎、じゃねえと倒しちまうぞ」

キバがゆっくりと、ファンガイアへ向かう。

「今、答えてやる、正解は」

そう言っ、ファンガイアの手には剣が作り出され、

「俺の剣だ！」

その剣を、目の前にいるキバのベルトに向かって突いた。

しかし、

ガキッ！！

「なっ！！」

その剣は、

「残念だったな」

キバットによって、防がれていた。

「おらっ！！」

そう言っ、キバは思いっきり、ファンガイアを公園の真ん中へ投げた。

「正解は、俺の必殺技だ」

キバは、腰にある紅いフェッスルを、一本キバツトに吹かせる。

「《ウエイクアップ!!》」

すると、周りが夜の筈なのにもっと暗くなり、三日月が出てきた。

「はああああ……!」

精神を統一した後、右足の拘束具^{カテナ}を解放し、蝙蝠の翼を象った扉^{ヘルズゲート}が出てくる。

そして、片足だけで一気に頭上へ飛び上がり、そのまま、蹴りを放つ!!

「だりやああああ!!」《ダークネスムーンブレイク!!》

ドスツ!! バゴオオオオ!!

キバはファンガイアの身体を、地面にめり込ませた。

地面には、ファンガイアの身体を中心にキバの紋章が刻まれた。

そして、

ミシ、ミシミシ、パリイイイイン!!

ファンガイアの体がステンドグラスになってから、粉々に砕け散り、光の玉みたいなものが浮いた。

――NOW LOADING――

――藤馬 side

倒した瞬間、キバの右足に拘束具カテナが巻き付き、
「オオオオオオン!!」

頭上に、巨大な竜が現れた。その竜は城から頭、尾、四肢が伸びたような外見をしている。

って、

「何じゃ、ありや!!」

そう言いつつ、変身を解除する俺。

「記憶喪失でも流石だな、藤馬」

コウモリモドキが、褒める。

「ありがとよって、そうじゃなくて!!何だよあれ!？」
俺が質問する。

「あれは、ファンガイアのライフエナジーを補食するドラン族の中でも、最強のグレート・ワイバーンを改造したモンスター、キャッスルドランだ」

と、コウモリモドキは説明する。

「成る程な、それで何でそのキャッスルドランが出てきたんだ？」
よく、分からんな。

「一回しか言わないからな。」

簡単に言えばファンガイアは寿命以外で死ぬと、
ライフエナジーのみがエネルギー球となって浮かび上がる、それが
あれだ」

あの、光の玉がそうなのか？

「そうだ、

そしてあのエネルギー球は、放っておくと大変なことになるから
な、ああやって、」

バクッ！！

「キャッスルドランが食べているんだ」

しょうゆことね。

つか、

「あの女の子は、何処に行ったんだ？」

もしかして、帰っちったかなあ？

「さあな、取りあえず探したらどうだ」

そうだな。

「あの〜……」

うん？

――NOW LOADING――

――三人称side

「あの……」

と、憂が気まずそうに口を開く。

「おおゝ大丈夫、怪我とかしてない？」
と、藤馬が聞く。

「あ、はい大丈夫ですけど……」
と、憂は視線を後ろに向ける。

パタパタ……。

「……なんだ、小娘？私に何か、付いてるか」

藤馬は、キバットを

ゴンッ！

思いつきり、殴った。

「がふっ!!」

キバットの頭にデカイたんこぶが出来る。

「あの、大丈夫ですか、その子？」

と、憂が質問する。

「あ、気にしないで良いよ、結構丈夫に出来てるから、え」と、先ずは自己紹介だな」

藤馬はそう言って、

「俺の名前は中都藤馬。

そして、相棒のキバットバットIEEE世だ。

コウモリモドキ、お前は何時まで寝てんだ」

そう藤馬は、キバットに言った。

「あとで、私にトマトジュース寄越せよ、藤馬。

私は、誇り高きキバット族の、キバットバットIEEE世だ」
キバットは自信満々に言う。

「藤馬さんに、キバット君ですね。

私は、平沢 憂です。よろしく願いしますね」

と、笑顔で紹介した。

I
I
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第一章♪ 第五幕 初戦闘！！（後書き）

どうも、みなさん388859です。

藤馬「どうも、ファンガイアを倒した、中都藤馬です」

やっと、原作メンバーが出てきたな。

藤馬「遅すぎじゃね、展開」

そう、言わんといて！

藤馬「えっと、作者は感想があると、やる気が上がるので、そろそろへんよろしくお願いします」

全員「それでは、次回をお楽しみに」

第一楽章 ♪ 第六幕 邂逅！！（前書き）

どうも、皆さんっ88859です。

先に言っておきますが、これから段々グダって来ます。

それでは、どうぞ。

第一楽章 ♪ 第六幕 邂逅！！

――藤馬 side

あ、どうも皆さん、私こと中都 藤馬です。

あれから憂ちゃんには怪人の事、キバの事を話した。
すると、

「か、仮面ライダーってホントにいたんですねー!!」
と、やや興奮気味に言った。

憂ちゃんによると、さっき変身したキバはテレビなどに出ているらしい。

……なんてこつたい。

そして今、俺たちは憂ちゃんの家に向かっています。
ちなみにコウモリモドキは、予め持ってきておいたバッグに、ぶちこんでおきました。

「憂ちゃんって、何処に住んでるの?」

「ここら辺って、俺の家のすぐ近くなんだけど。

「もうすぐ、……あ、此処です」

いやいや、

俺ん家の隣って、それ何てご都合主義……。

頭を抱えながら、そう思っていると、

「どうしたんですか、藤馬さん？」

そんな純粋な目で、聞かないでよ、憂さんや。

「俺たちの家は、隣なんだよね」

と、俺は笑顔で言う。

さあ、何て言って来るのかな。

「そうなんですか、すごい偶然ですね」

と、笑顔でおっしゃってきました。

なん……だと……！

「……そ、そうですか……」

何なんだ、この子は！

笑顔が眩しすぎる。

「それじゃあ、中に入りましょうか」

そう言つて、憂ちゃん・ズハウスのドアを開けた瞬間、

ヒュバツ!!

「うゝいゝゝ」

憂ちゃんと、双子かと思間違ふ程、似ている女の子がいきなり抱き着いてきました、はい。

つて、どういうこと!!

「もうゝ、帰ってきたらいつもご飯作ってる、ういが居ないからビツクリしたんだよゝもう!」

だ、誰なんだこの子!!

「そそそ、そんなこと言われても、ああ、あなた様の事を全く知らない、な、中都さんは困るだけで御座いますよ!!」
そして俺よ、何が言いたいんだ。

「ちょっと、お姉ちゃん!

何で藤馬さんに、抱き着いてるの!

うらやm、じゃなくつて、失礼だよ!」

憂ちゃんも、何をおっしゃってるの!!

「って、あれ〜ういじゃないや、キミ誰？」

やっと気付いたのか、って!!

「とりあえず、離れて下さい」

と、主に俺の理性の為に言つと、

「ごっご、ごめんなさい!!そんなつもりじゃ、なくて、ごにょごにょ」

何、この子顔が赤くなってる、超可愛いんですけど。

お持ち帰り「言わせんぞ!!」「チッ、コウモリモドキが。

この状況下で、

「あれ〜、どうしたんだ唯〜」

何だアノ、カチューシャ娘。

って、あれ待てよ、

――女の子が俺に抱き着いている――

まさか……、

「うわっ!!唯に抱き着いてんじゃないよ、この変態!!」

と、カチューシャ娘に言われ、ぶん殴られた。

って、ちょ、逆だっつうん「問答無用!!」

「あべし!!」

これは、いつものあれです。

「……不幸だ」

「りっちゃん、お見事!!」

「と、藤馬さん!?!大丈夫ですか?」

「どうしたんだ律、何か凄い音がしたけど、って男の人が倒れてる!!……きゆう」

「漣ちゃん、しっかりして!!誰か救急車、救急車をお願いします!!」

もう、疲れたよパトラッシュ……、そう思ってたなら、めのまえがまっくらになった。

――NOW LOADING――

――三人称side

あの事件の後、憂がその場の説明をした。

その時に、カチューシャ娘と、気絶した子、そして助けを呼んだ子の三人は帰ったようだ。

今は藤馬に抱き着いてきた子と、憂が必死に謝っている。

「本当にすみませんでした！」

でも、皆さん良い人なんです！」

と、憂が謝りながらフォローを入れる。

良く出来た子である。

「うん、そうだよ、皆本当に大事な友達だよ！」

と、抱き着いてきた子が笑顔で言う。

「とりあえず、もうさっきの事は良いから」

と、藤馬は一回言葉を切る。

「まずは自己紹介だな、俺の名前は中都藤馬だ」

と、自己紹介をした。

「あ、えっと、

私の名前は平沢 唯です。 ちなみに、憂のお姉ちゃんです。 えへ」

と、抱き着いてきた子、唯が自己紹介をする。
その直後、

「「「……ぐ」「」「」

と、三人と一匹のお腹が鳴った。

「……とりあえず、ご飯にしましょうか」

憂が、顔を赤くさせながら言う。

ちなみに、今現在の時刻八時でございます。

――NOW LOADING――

――藤馬side

憂ちゃんお手製のメチャクチャ美味しい晩御飯を、
いただきますNOW。

え、何で食べてるのかって？

だって、

「お礼になるかわかりませんが、食べていって下さい」

て、天使のような笑顔で言うんですよ。

いただかないと、失礼でしょ。

「さつきから黙ったままですけど、もしかして、……美味しくないですか？」

そんな、泣きそうな顔せんといて！

「うわあ、泣つかした、泣つかした♪」

「違うんだよ、ちよっち考え事をしてて、そして唯は何で、ああってんねん！」

この姉妹何で、こんな性格が違うの！？

「良いツツコミだよ、なっちゃん！」

「なっちゃんって、俺はオレンジジュースじゃねえよー！」
君は、もうお口にチャックをしてください。

「あれ、なっちゃんの右手になんか付いてる、……イレズミかな、何これ？」

しまった、キバの紋章見られた！

何て言って回避しよう？

そんなことを考えてたら、

「カッコイイね、なっちゃんのエレズミ!!」へっ?

「そうだよね、お姉ちゃん、やっぱりこの刺青かっこいいよね!」

憂さんや、顔が少しひきつってるよ。

「そ、そうかな?」

何とか、誤魔化せたみたいだ。

「それにしても、明日からまた一週間が始まるね」

この子、コロコロ話題変わりすぎだろ。

って、うん?

「……明日から?」

「うん、そうだよ。何言ってるの、なっちゃん?」

まさか……、

ギギ、ギと、首だけ憂ちゃんの方に向ける。

「つかぬことを聞きますが、今日は何曜日でしょうか?」

「日曜日ですけど。」

それがどうかしたんですか?」

ハ、ハメられたアアア!!

女子校だから、イロイロ心の準備をしたかったのに！

と、俺が固まってる、クソ神が笑ってサムズアップをしている顔が見えた。

「あの野郎オオオオオオオオオオ！！」
俺の魂の叫びが平沢家に響き渡った。

I I t o b e c o n t i n u e d

第一章 ♪ 第六幕 邂逅！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「なあ、作者、展開グダリすぎじゃないか」

ああ、こつから、もっとグタグダになっていくな。

藤馬「お前、文才なさすぎじゃね？」

orz

藤馬「ダメ作者は、放っておいて、次回をお楽しみに！！」
もうダメだ、死のう。

藤馬「ゴメン、言いすぎたわ！！」

第一章 ♪ 第七幕 学校！！（前書き）

どうも、皆さん388859です。

今回は、ちょっと暴走しちゃいました。

グダグダに注意して読んでください。

第一楽章 ♪ 第七幕 学校！！

――藤馬 side

「おい、起きろ！！」

誰かの声が聞こえる。

眠いんだから静かにしてくれ。

「……ガブリ！！」

「っ痛ああああ！！」

眠気が一気にぶっ飛んだ。

つか、

「頭を噛むな、コウモリモドキ！！」

お前のは甘噛みってレベルじゃないんだから！

「ほら、早く準備せんか」

「ハア、何の準備だよ？」

全く！

「学校の事だ、ヴァイオリンも忘れるなよ」

学校って何言って……。

バツ！！

俺は時計がある場所を見る。

現在時刻八時三十分

鳴り響く電話の音

これは、あれだ。

「はっはっは……」

不幸だ——！！」

——NOW LOADING——

どうも、おはようございます皆さん、担任からモーニングコールを貰った、私こと中都藤馬です。

私は今、新しい桜高の男子用の制服を、右手には包帯を巻いて、学

校までフルスロットルで走っています。

ちなみに俺の持ち物は、学校指定のカバン（コウモリモドキ入り）を肩にかけ、ヴァイオリンケースを手にとって、全力疾走です。

（急げば間に合うぞ、走れほら）

これはコウモリモドキとの契約の影響によって、出来るようになって意志疎通のようなものです。

何それ、怖い。

「呑気で良いなあ、テメエはよオ!!」
頑張るのは、俺なんだぞ!!

（ほゝら、着いたぞ）

バカなやり取りをしてたら着いたようだ。

よし、後は職員室に行けば……「ガシッ!!」……つぐえ!!

誰かが俺の制服の首を掴んだようだ。

って!!

「誰だよ、危ねえだろ が!!」

俺は、ガチで切れる。

すると、ゴリラみたいなガタイの男の人が、

「ほう、遅刻したのに先生にそんな態度を取るとはのお？」

え……。

先…生……だと。

俺の体から、冷や汗が滝のように出てきた。

やべえよ！

どんぐらいやばいかというと、スマブラで、ダメージが二百パーセント越えるくらいやべえ！！

「さてと、どんな感じに体罰もとい、叱ってやろうか」

ちょっと、誰かこの人止めて！！

「ちょ、引きずっちゃ禿げるって、このゴリ、あああああああああああ
あああ……………」

さようなら、俺の毛根……。

――NOW LOADING――

――唯side

こんにちは、平沢 唯です。

今は休み時間です。

今日は転校生が来るって聞いてたのに……。

「来ないねえ、転校生」

私がそう呟くと、

「確かに、朝に先生が言ってたのに可笑しいよなあ」

と、カチューシャをつけた元気な女の子、田井中 律、通称りつちやんが、そう返してきました。

「どんな子かしらねえ」

と、ポワワンとした感じのお嬢様は、琴吹 紬、通称ムギちゃんです。

「あ、そろそろ休み時間が終わるね」

そう私が言つと、

「じゃあ、席に戻るか」

と、りっちゃんが席に戻りました。

「私も」

と、ムギちゃんも席に戻っていきました。

えっと、次の授業は……。

ーガラッ

「皆さん、席に付いてください、転校生を紹介しましょう」と、先生が言いながら、教壇に立つ。

「センサー、転校生ってどんな子ですか？」

言わば、お約束の質問をりっちゃんが言います。

「それを言つと、面白くないでしょ、じゃあ、入ってきて」そう言つて、出てきたのは……。

ーガラッ

「ええっと、俺の名前は中都藤馬です。趣味はヴァイオリンです。男子ですが、よろしくお願いしやーす」

真新しい筈なのに、ボロボロな制服に身を包んだなっちゃんでした。

――NOW LOADING――

――藤馬side

はあ、酷い目に逢ったわ、制服がボロボロだよ全く。

何で、江戸時代の拷問器具が女子校にあるんだよ。

死ぬかと思ったわ。

（お前が、寝坊するからだ）

だったらもうちょい、早く起こしてください。

「着いたわよ、中都君」

ういっす。

「じゃあ、私が合図したら入ってきてね」――ガラッ

何か緊張してきたな。

（大丈夫だ、心配するな変態）

てめえは、人を励ますつつう行為ができねえのか。

「じゃあ、入ってきて」

よし、行きますか!!

ーガラッ

「ええっと、俺の名前は中都藤馬です。趣味はヴァイオリンです。男子ですが、よろしくお願いしやーす」

どうだ、この完璧な自己紹介!!

(普通すぎるな)

やかましいわ!!

って、反応が全く無いんすけど「あゝ、お前は昨日、唯に抱きついてた奴じゃん!!」

って!!

「お前はあの時の、バイオレンスカチューシャ娘じゃねえか!!」

あのパンチ、結構痛かったんだぞ!

「誰が、バイオレンスカチューシャ娘だ!!」

アンタが唯に抱き着いてたから、私は唯の代わりに殴っただけだ!!」

「だから、違うって言ってんだろ!

確かに良い匂いがしたし、柔らかい感じがしたけどさ、
……いや、違うからな、皆さんそんな目で見ないで、お願いだから
「！」

（今は自業自得だ、バカめ）

敵陣と真ん中、四面楚歌だよコンチキショー！！

これは、あれです。 今日二回目の、

「あゝもうつ、不幸だー！！」

その後、休み時間に唯と、お嬢様みたいな子、ムギと意外にもバイ
オレンスカチューシャ娘、律が来て、

「昨日と今日は、ゴメンな」
と、謝ってきた。

律って、意外に良い奴かも。

――NOW LOADING――

というわけで、昼休み。

ご飯を出そうと思っていたら、

「あちゃー、そういえば寝坊したから無いんだっけ」

カバンをゴソゴソしながら言う。

トマトジュースを幸せそうに、鞆の中で飲んでいる、コウモリモドキを潰してやりたいわ。

「売店でパンでも買うか。」

そう言っつて、席を立つが、

「……売店って何処だっけ？」

俺って、この学校の地理全然知らないんだよな。

「……どうしようか」

と、俺があーでもない、こーでもないと表情を変えながら考えていると、

「なっちゃん、何してるの、顔が面白いよ」

と、唯がこつちに来ながら言った。

ちなみに、律とムギも一緒だ。

唯さんや、あなたの天然って心へのダメージが、いつもの三割増し高いんだけど。

「ああ、ちょっと売店って、どこにあるのかなあと思ってな、どこなのか案内してくれないか」

と、俺が聞く。

すると、

「じゃあ、私が案内してやろう！！
唯とムギも、いっしょに行こうぜ！」

意気揚々と律が言う。

その瞬間、俺は律の手を取り、

「律さん、やっぱりアンタええ人や！！
ワタクシ、中都藤馬、感服いたしました！！」

と、涙を流しながら言った。

「そうだろ、もっと、もっと私を誉めろ、誉めろ！！」
そう言ったので、ヨイショしまくって、騒いでたら、

ーガラッ

「ほう、遅刻した奴が何騒いでんだ、ああ？」

と、ゴリ先生がおっしゃってきました。

あれ何これ、死亡フラグじゃね？

「……………ええっと、律さん、唯さん、ムギさんどうします」

そう言っつて、後ろを向いたら、

三人の姿がなく、教室の外から、

「ーただいま、留守にしておりますー」

そんな、三人の声が聞こえた。

ハ、ハメられたアア！！

「それじゃ、指導を受けてもらおうかのお」

何で、指をパキパキ鳴らすの！？

「ご飯食べてからじゃあ駄目ですかね、先生」

と、一応聞いてみると、

「……………無理じゃ」

ですよね。

――バツ!!

「逃げるな、ゴラァァァ！」

「先生、顔が鬼にランクアップしてます!!」

何、この人、ファンガイアより怖いんですけど!!

「待たんかい、ボウフラァァァ!!」

とりあえず逃げないと、殺される、確実に!!

――NOW LOADING――

チクショー、何処だ此処!

「退いて、退いて、退いてえええ!!」

ハッ、あ、あれは……!!

売……店……の……女の子の……行列……だと……!?

チクショー、女の子の行列で道が塞がれてやがるっ!!

まさか、買い食い派がこんなにいるとはっ!!

どうする……!!

「年貢の納め時じゃい、ボウフラアア!!」

やべえ、ゴリさんキタアア!!

その瞬間、俺の頭の中には、尊敬する先生の顔が浮かんた。

——諦めたら、そこで試合終了ですよ——

安西……先生っ!!

俺っ、やります!!

何かを起こしそうな雰囲気ですが、何も起こりません。

「どうおりゃあアア!!」

某二番目のチルドレンのような声を出しながら、行列に突っ込む。

（このまま、紛れてやり過ごせば俺の勝ちだ、残念だったなゴリさん！！）

そんな事を思つてると、

ードサッ

誰かが、倒れる音がした。

「だ、大丈夫……」

俺は固まってしまった。

何故なら、

「あ、すいません、

て、藤馬さんじゃないですか！どうして、この学校に？」

憂ちゃんの縞パ。が、丸見えだったからだ。

「どうしたんですか？

何か私の顔に付いてます？」

言えない、思春期の子にこんなこと言えない！！

そう思い、後ろを向いたら、

ーガシッ！！

ゴリさんにつかまっちった、テヘッ。

「全く、逃げ足が早い奴じゃの」

ーミシ、ミシ、……

「そ、そうかな、あはは、あはははは」

マジ痛いっす、ゴリさん！

「とりあえず、生徒指導室へ連行するからのお」

そう言つて、俺の制服の首を持って、引きずりだした。

その直後、

キーン、コーン、カーン

「ちょっと、鐘なってますよ、掃除しないと先生」

解放してくれるだろ、飯にも先生だし。

「な、飯を食べとらんのに、お前のせいじゃいー！」

え、地雷踏んだんじゃね、これ。

って、

「憂ちゃん、見てないで助けて！って、あり……」

良く見ると、人一人っ子居なかった。

「アハハ、やべえええ、誰か助けてー！！」

I I t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 ♪ 第七幕 学校！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「……ゴリさん、マジパネエ」

ああ、これからも出るからな。

藤馬「マジかよ……」

それでは

全員「次回をお楽しみに！！」

小休止♪ 設定！！

名前

中都なかつ

藤馬とうま

詳細

身長173cm、体重は65kg、ふたご座の5月30日生まれ、O型。

名前の由来は、日本の地名、中津と、『とある魔術の禁書目録』の上条当麻の漢字を変えただけ。

趣味は、ヴァイオリンと読書、料理。

尊敬する人は、安西先生。

桜高軽音部に所属し、転生者であり、仮面ライダー。この物語の主人公。

気付いた時には記憶が無く、名前とヴァイオリンの弾き方しか覚えていなかった。

なので、何故人間の自分がキバになれるのか、以前どんな所にいて、何をしていたのかわからない。（キバットと、アームズモンスターは知っているようだが、教えていない）

キバットと契約の証として、右手の甲にキバの紋章がある。
キバに変身出来るが、負荷がそれなりにある。

しかし、怪人と戦えるのが、藤馬しかいないため、負荷もいとわず戦う。

この世界での、衣食住を神に保証される替わりに、イロイロな怪人たちと戦うはめになった。

だが、前の世界でも戦っていたのか、その強さはなかなかのもの。

軽音部での立ち場は、ツツコミ兼、ヴァイオリン兼、唯一の男子。

律と澪によく暴力を振るわれる。

ヴァイオリンの弾き方はわかるものの、専用用語がまるでわからない。

性格は、某上条さんのように、正義感は強いが、メンタル面が弱い。

そのうえ、かなりのお調子者。

女子に無意識にフラグを立てている、天然フラグメーカー。

容姿は、紅音也を黒髪にして、髪の毛を立たせた感じ。

ちなみに、不幸スキルもあるが、ラッキースケベがあつた後は、必ず何かしらの不幸が起こる。

ゴリさんとは、毎日追いかけてあう仲。

キバの正体は、極力ばらさないようにしている。

しかし、憂だけは知っている。

キバとして戦っているため、勉強がかなりやばい。

イメージC V 水島 高宙

『瀬戸の花嫁』 満潮 永澄役

『べるぜバブ』 古市 貴之役

名前

キバットバットII世

詳細

藤馬と契約している、キバット族。

前の世界でも、藤馬と一緒に行動していた。

藤馬の行動には、毎回苦勞しているらしい。

本来なら、闇のキバの鎧しか持っていないが、本作では、黄金のキバの鎧を持っている。

藤馬の過去を知っているが、教えていない。

容姿は、基本的に原典のII世と同じだが、羽の色だけIII世のものになっている。

性格は、II世とIII世を合わせた感じで、ややII世に近い。

牛乳が嫌いで、トマトジュースが大好き。

イメージCV 杉田 智和

『銀魂』 坂田 銀時役

『魔法少女リリカルなのはs t r i k e r s』 クロノ・ハラオウ
ン役

名前

けいおん！の世界の神

詳細

藤馬とキバットを助けてくれた神。

藤馬が目覚めるまで、キバットの世話をしていたようだが、かなりのケチ（キバットによると、牛乳とパンしか出さなかったらしい）。

その性格は、DSで、かなりいい加減。

容姿は、『交響詩篇エウレカセブン』のホランドそのまま。
全身をローブで覆っている。

イメージCV 藤原 啓治

『クレヨンしんちゃん』 野原 ひろし役

『交響詩篇エウレカセブン』 ホランド・ノヴァク役

第一楽章 ♪ 第八幕 演奏！！（前書き）

今回、かなり急展開です。

それでは、第一楽章 ♪ 第八幕をお楽しみください。

第一章 ♪ 第八幕 演奏！！

――藤馬 side

あ、どうも、今絶賛ゴリさんのありがたい説教を正座で受けてる、私こと中都藤馬です。

「おい、聞いてるのか、ボウフラ！！」

「は、はいいいい！！」

俺の心に入ってこないでえええ！！

――ゴンッ！！

「ガタガタ、騒ぐな、だいたいお前はな……………」

――暫く、お待ちください――

四時間後……………」

「わかったか、明日から遅刻するな、気を付けて帰れ、ボウフラ！！」

「うぷっ……………はい、了解です」

魂が出てきそうです、先生。

俺は、ゴリ先生の言葉を聞き流しながら、フラフラと生徒指導室を

出た。

とりあえず、教室に行こう。

――NOW LOADING――

はっはっは、誰もいない……。

「ゴリさんの、説教長すぎじゃね？」

呆れながら、ヴァイオリンケースと、学生カバンを持つ。

「帰るか、今日のご飯どうすっかな？」

何か、忘れてるような……、まっ、良いか♪

（軽音部だ、軽音部！！）

カバンの中で、ゴソゴソとコウモリモドキが暴れる。

「てめえ、いきなり声をだすなよ！！」

びっくりした」

すっかり忘れてたな、恨むぞゴリさん。

「誰かに、軽音部の活動場所を聞いてみるか」

そう言って、少し校内を散策する。

――

――

――

――

「結局、職員室までできてしまった……」

なんてこったい

＼（＾ー＾）／

（これは、もう一種の奇跡だな、他人とはいえ、同情するしかない）

コウモリモドキに言われると、めっちゃ落ち込むんだけど……。

かなり凹みながら、

「すみませーん、軽音部の顧問って、いらっしゃいますか？」

と、先生方に質問する。

すると、

「はーい、ちょっと待ってね」

と、赤い眼鏡をかけた、おとしやかで綺麗な女性がこっちに向かってきた。

「あら、噂の男子転校生じゃない！」

え、有名なの、俺？

「転校初日から、郷田先生と追いかけてこしたのは、貴方が初めてだからね」

ゴリさんって、名字、郷田って言うんだ……。

て、

「声に出てました？」

「ええ、出てたわよ」

マジすか……。

「まずは、自己紹介ね。

私の名前は山中さわ子です」

この人、弄ると面白そうだな。

「えっと、俺の名前は中都藤馬です。
よろしく願います、さわっち先生」
さあ、何て言うかな。

「また、変なアダ名付けられた……orz」

予想通り（ニヤリッ

「それで、どうしたの、軽音部の顧問である私を呼んだって事は、
入部希望かしら」

と、さわっちが笑顔で言う。

「ええ、まあ、そんなとこです」

と、俺が言うと、

「またまた、冗談でしょ？」

イヤイヤ！

「入部希望ですけど？」

何言ってんのみたいに俺が言うと、

「……ホントに？」

俺ってそんな信用出来ないかな？

「ええ、マジです」

そう俺が言つと、

「やったわ、待望の男子部員よ!!」

と、さわっちが俺の手を掴んでブンブンとまわす。

何か、俺の中でのさわっちのイメージが、ドンドン崩れていくんすけど？

「先生、喜ぶのは良いんですけど、いい加減、軽音部の活動場所を、教えてください」

さわっち、喜びすぎ!!

「それも、そうね!!
ええっと、軽音部はね……」

と言つて、さわっちは場所を教えてくれた。

「先に行つて、挨拶の一つでもしておいてね、私はもう少し後で行くから」

「わかりました、先生」

そう言つて、俺は職員室を出た。

――NOW LOADING――

――梓 side

どうもみなさん、中野 梓です。

最近自分が、何で軽音部の先輩方の新歓ライブに、何であんなに感動したのか、それがわからなくてずっと考えていました。

でも、漣先輩が言った、

「私は、このメンバーでバンドするのが楽しいから、だから、こんなに良い曲になるんだと思う」

この言葉を聞いて、私はこの先輩達とバンドをしたい！

そう思って、軽音部に居続けようと決めたんですが……、

「あずにゃくん、猫ミミ着けて」

そしたら、頑張れるから！」

この場違いな事を言ったのは、唯先輩です。

本当にがんばってくれのかな？

「だったら、着けます」

と言って、私は猫ミミを着ける。

ううゝ、やっぱり恥ずかしいなあゝ。

「やっぱり、あずにゃんは猫ミミが似合っねえ、にゃんって言うてにゃん！」

また、言わないといけないんですか！

ーガチャ

「ううゝ……にゃ、にゃん」

今、誰かドアを開けたような？

――NOW LOADING――

ー藤馬side

ここか、軽音部。

どんな奴らだろうな、コウモリモドキ。

（ま、お前の予測を超える奴等だ）

え、何か知ってんの お前？

(っ！、いや、何でもない)

……変な奴。

そう思いながら、準備室のドアを開けた。

ーガチャ

俺の視界に飛び込んできたのは、

「……ううゝ、にゃ、にゃん」

と、猫ミミを着けた女の子が言う姿だった。

ーガチャン！！

俺は光より速く、ドアを閉めた。

「今のは……あれだ、ドアの開け方が雑過ぎて、違う部室の扉を開けたんだ」

(……苦しいぞ、藤馬)

だまらっしゃいー！！

と、とりあえず、ノックからすれば大丈夫だ。

ーコンコン、ガチャ

「あの……、入部希望なんすけど」

そう言った俺の視界に再び入ってきた光景は、

猫ミミを着けた女の子

それをてなづける唯

空腹+ゴリさんの説教でかなりキテいた俺は、

「なんでやつ!!」

ースパアアアン!!

今日一番のツツコミを唯に決めた。

つか!

「あんたら、ここなに部かわかってんの!!
はい、そこでリラックスしている律!!」

「ええっと、軽音部だけど」

「そうだよ、軽音部だよ!!」

なのに、何で猫ミミ少女がいるんだ!!

ここは、コスプレ会場か!!

それと、何で残りのムギと、黒髪少女は吞気にブレイクタイムを

してんだ!!

カオス過ぎるわ!!」

と、暴走機関車のようにツッコミをいれると、

「はい藤馬君、ケーキ」

と、ムギがケーキを差し出してきた。

「おいムギ、ケーキで怒りが収まるわけ……」

と、黒髪少女が言いながら、俺を見る。

しかし、

「ほえええ、このケーキ美味しいです、ムギさんや」

俺の怒りは収まった。

「「収まるんかい!!」」

律と黒髪少女が同時に突っ込んだ。

――NOW LOADING――

――藤馬 side

というわけで、正座をしながら、軽音部の皆さんに状況説明中です。

「つまり、入部希望者なんだよな？」

と、律が聞く。

「まあな、で……、」

俺は、出されたお茶を飲みつつ、部屋をみる。

「どうかしたの、藤馬君？」

いや、ムギさん……

「ここって、喫茶店じゃないよね、
何でこんなケーキとか、ティーカップとかがあんの？」

と、至極当然の質問をする。

すると、

「ここにあるものは、ぜんぶ、ムギちゃんが持ってきてくれたんだっ」

さいですか、唯。

それで、

「そこにいる、二人はどうしたの」

と、指差した先には、

「男の人に、猫ミミをみられた……」

「は、恥ずかしい……」

さっきの黒髪少女と、猫ミミ娘が体育座りでブツブツ何か言っている。

「はぁ……おい、漣ー、梓ー、新入部員だぞ」

すると、

「「本当か（ですか）……」」

うおっ！！

「えっと、さっきの人ですよね？」

と、猫ミミ娘が聞く。

「まあな、今日からこの学校に転入してきた、二年の中都藤馬だ、よろしくな、ええっと……」

「梓です、一年の中野梓です。宜しく願いします、藤馬先輩！」

と、元気一杯に自己紹介する梓。

「わ、私は、に、二年の秋山澪だ、よろしくき中都君……」

と、顔を赤らめながら紹介する、澪。

ゴハアツ!! ↑吐血

「だ、大丈夫、なっちゃん!？」

く、くそう、何という奴だ、俺を萌え死させるつもりか!!

「ねえ、藤馬君、あなたは楽器は何が出来るの？」

と、ムギが聞いてくる。

「ああ、一応√「ヴァイオリンよね、藤馬君」いつ入ってきたんだ、さわっち」

神出鬼没過ぎるわ。

「私、ミルクティーね」

そう言っつて、席に着くさわっち。

あんたも飲むのね。

「へえ、ヴァイオリンかあ、すげえなあ、藤馬!」
と言っ、律。

「弾いてみてよ、なっちゃん!」

やや興奮しつつ、いう唯。

「じゃあ、弾いてみるわ」

そう言って、準備をする。

「……いくぞ」

皆が、うなづく。

――演奏♪ 仮面ライダーキバOST♪音也――

「うまいわね」

「……凄い」

「……音が綺麗ですね」

「……でも、なんだか」

「……凄く悲しくてそれでいて、」

「懐かしい感じがする」

よし、終わり。

って、何か皆、さわっち以外固まってるし、どうしたんだ？

「えっと、次はみんなの演奏を聴きたいな」
「これでどうだ？」

「……あ、ああ、じゃあホッチキスにするか？」

「う、うん、それが良いよ」

「じゃあ、準備をしましょうか」

「そ、そうだな」

「じゃあ、藤馬先輩はコッチに来てください」

何か、歯切れ悪いな。

そう思いつつ、梓に言われた所に座る。

「準備は良いか」

律が他の三人に聞く。

それに三人もうなずく。

「……1 2 3 4 ! !」

——演奏——私の恋はホッチキス——

この曲……、聞いたことがある気がする。

そう思った瞬間、頭の中に映像が流れてきた。

「っ！！」

――声が聞こえる

――今日の学園祭のライブ良かったな！

――私も、そう思います！！

――うん、うん♪

――来年はどんな感じにする？

――その前に、まずお前は風邪を治せ。

――それを言うなら、なっちゃんもだよ！

誰かが俺に言う。

その瞬間、全員の身体が、

パリイイイイイン！！

跡形もなく碎けた。

――へっ？

何が起きているのか、俺には分からない。

ヒトだった欠片が俺に降りかかる。

そして、俺は

――あは、は、は、はははは、ああアアああアアあああ……！
壊れた。

I t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 第八幕 演奏！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「いや、何あれ」

かなり重要なんだぞ、あれ。

藤馬「けいおん！じゃないよね、これ」

だまらっしゃい！！

藤馬「それでは

全員「次回をお楽しみに！！」

第一楽章 ♪ 第九幕 すれ違い！！（前書き）

どうも、皆さん388859です。

やっぱり、携帯で投稿するのは、大変ですね。

それでは、第一楽章 ♪ 第九幕をお楽しみください。

第一樂章 ♪ 第九幕 すれ違い!!

――律 side

よつす、容姿端麗、みんなのアイドル田井中 律だ!!

今は、藤馬が私たちの演奏を聴きたいっていうから、演奏したところ
なんだけど……。

「先輩、藤馬先輩、どうしました!？」

藤馬が、泣きながら、頭をおさえている。

どうしたんだ、あいつ!？

「なっちゃん、しっかりして、なっちゃん!!」

「大丈夫、藤馬君!？」

唯とムギが藤馬に呼び掛ける。

すると、

「あ、あ、あはは、あはははは、ああああアアああ!!!!」

急に、笑いながら、獣のような大声を出した。

「っひい!!!!」

漣、怯えている場合じゃないぞ!!

「さわちゃん、どうしよう?」
そうさわちゃんに聞くと、

「とりあえず、落ち着かせましょう、その後の……っ!!」

さわちゃんが、視線を藤馬に向けている。

見てみると、

藤馬の包帯が巻かれた、右手の甲から、赤黒い怪しい光が漏れていた。

私は、藤馬の居るところまで行き、右手の包帯を千切りとろうとする。

しかし、

――ガシッ!!

千切ろうとした手は、藤馬につかまれた。

「……ハア、っはぁ、もう、大丈夫……だから……」

大丈夫なら……、

「みんなも……ごめんな……ふう、俺の為に演奏してくれたのに」

何で……何で!!

「帰りになんか、おこるよ」

そんな悲しい顔をするんだよ!!

何故かわからないけど、凄く、くやしかった。

「……ふざけんな!」

気付いた時には、藤馬の胸ぐらをつかんでいた。

「ちょっと、りっちゃん!!」

「どうしたの、ケンカは駄目よ!!」

「律先輩、おさえてください!!」

唯、ムギ、梓の三人に、身体をおさえられる。

「大丈夫か、藤馬?」

「保健室に、言った方が良いんじゃない?」

漣とさわちゃんが、藤馬の心配をする。
すると、

「やっと、名前で呼んだな、ありがとう、漣、さわっち」

と、酷く疲れた顔をしていた。

「ま、まあ、これから同じ軽音部の仲間になるわけだしな」

と、漣が顔を赤らめる。

どうして、皆そんなに冷静でいられるんだ!!

「……ごめん、ちょっと今日は帰るわ」

私はそう言いつつ、荷物を持って準備室から出た。

――NOW LOADING――

――藤馬side

何だったんだろう、あの映像、でもすごく懐かしい感じがしたな。

つか、俺のせいで空気を悪くしちゃったな。

「ごめん、俺があんなことになっちゃったから……」

「そんなことないよ、なっちゃん」

「そうよ、私たちにも原因が有るのだから」

「そうですよ、気にしないでください」

おまえら……。

「大丈夫だ、あれは律なりに、心配した結果なんだから」

「りっちゃんって、意外にツンデレなのね」

さわっち、空気をよめ。

「みんな、本当にごめんな」

本当にこいつら、人が良すぎるわ。

そして、さわっち以外の全員に何かお礼でもしようか、そう思った時だった。

「「っ！！」」

この感じ、ファンガイアだ！！

「ゴメン、用事が出来たから！

また、明日！」

皆がキョトンとしているが、急がないと!!

荷物を持って、準備室から出る。

(コウモリモドキ、近いか、遠いか?)

(それぐらい、わからないのか?)

(だいたいの方角はわかるけど、距離は分かんないんだよ!!)

コウモリモドキを外に出しながら、毒づく。

(そうだな少し遠いぞ、だいたい二キロぐらいだな)

右手の包帯を外しながら、脇目もふらず走る。

――

――

――

――

(その森林の近くだ!!)

ちきしょう、何処だ!

そう思い、周りを見渡す俺。

その時、

「くそ、コッチに来るな!!」

その視線の先には、

「……っ、律!？」

さっき、帰ったはずの律だった。

――NOW LOADING――

――律side

はあ、気分最悪だ。

明日、藤馬になんて顔すりゃ良いんだよ。

そんなことを思いながら、商店街を歩く私。

「はあ、ジュースでも飲むか」

そう思い、近くの公園にある自販機で、ジュースを買い、ベンチに

座る。

罪悪感で、押し潰されそうになっていた時だった。

「こんな時間に一人でいるなんてね」

三十歳ぐらいの女性が、私に話しかけてきた。

「なんですか、今、一人になりたい気分なんですけど」

今思えば、このときに逃げればよかったと思う。

――スパッ

ベンチが真っ二つに切れた、そして、

「なぐに、キミを殺すだけ」

あの女との、鬼ごっこが始まった。

――

――

――

――

「はあ、はあ、……」

あの女の蛾みたいな怪人から逃げるために、森林に飛び込んだのは良いけど……。

「こんなところに、逃げても無駄、無駄」

そう言つて、鱗粉を飛ばす怪人。

すると、鱗粉が当たった場所から火花が出る。

絶対当たったら、やばい！

「くそ、コツチに来るな！！」ーガッ

やばっ！こけちゃった。

「やっと、落ち着いたわね、それじゃ」

そう言つて、頭上に牙みたいなものが出てきて、

「いただきます♪」

コツチに向かつてきた。

その刹那、

「セイヤアアア！！」

今、一番会いたくない奴が飛び蹴りをしながら現れた。

その瞬間、私は意識を失った。

――NOW LOADING――

――三人称side

「おい、律、律――！」
意識が無い律に問いかける藤馬。

「全く、何してくれるの、気分最悪なんだけど」

そう言いながら、立ち上がる怪人、モスファンガイア。

「てめえ、律に何しやがった――！」

激昂する、藤馬。

「別に何もしてないわ、ま、その子の代わりに、アナタのライフエナジーをもらおうかしらね」

モスファンガイアが藤馬の方に向かう。

「それは、ごめんこうむるな、コウモリモドキ――！」

藤馬がキバットを呼ぶ。

「落ち着いてやれよ、藤馬」

注意するキバット。

「わかっている、いくぞ!!」

そう言っで、キバットを左手で掴む藤馬。

「ああ、ガブリ!!」

「っ!!」

キバットを右手に噛ませる、すると、右手から全身へと《魔皇力》が流れ、藤馬の顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

藤馬は、キバットを腰のベルトに逆さにしてはめる。

その瞬間、中都藤馬は仮面ライダーキバへ姿を変えた。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ!!》」

そう言っで、キバはファンガイアに立ち向かう。

「あなたが、キバね」

モスファンガイアはキバの拳を受け流しつつ、蹴りを放つ。それをバックステップで避けるキバ。

しかし、

「離れて良かったのかな？」

そう言いつつ、モスファンガイアは身の軽さを活かして、周りの木々を足場に使い、死角から攻撃してくる。

キバは、何とか避けていたが、

ーードガッ！！

一発もらってから、ドンドンダメージを負わされる。

「ちっ、くそつたれ！！」

思わず、悪態をつくキバは、そのまま一旦近くの木に隠れる。

「威勢だけね、良いのは」

そう言って、鱗粉を飛ばすモスファンガイア。

鱗粉は、木の後ろに隠れているキバにかかり、

「……っ、ぐっ！！」

キバの身体から火花が散り、そのまま倒れそうになる。

普段のキバなら、この程度の敵は倒せるのだが、あの見たことの無い映像を見た影響か、反応が遅くなっているようだ。

「……つぐ、はあ、はあ」

キバが肩で息をしている。

「大丈夫か、藤馬？」

キバットが声をかける。

「大丈夫に見えるか、ボケ、コウモリモドキ、ちょっと賭けに出るぞ」

そう言つて、木の後ろから出るキバ。

「おい、何をしてるんだ藤馬、死ぬ気か!？」

キバットが怒りながら言う。

「まあ、見てろつて」

笑いながら、肩で息をするキバ。

「あれ、諦めたのかな？」

と、キバに聞く、モスファンガイア。

「……やべえ、身体に力が入んねえ」

そう言つて、キバは地面に手をつく。

「それじゃあ、」

そして、モスファンガイアがキバの真っ正面から、

「――さようなら」

拳を放った。

しかし、

「――ガシッ――！」

「っ――！」

モスファンガイアの拳は、

「――残念ながら、今は演技です」

キバの身体に拳が食い込みながらも、受け止めていた。

「――オラオラオラオラ――！」

モスファンガイアの身体に拳のラッシュを叩き込む。

「なっ、がっ、ごはっ――！」

「……ラストオオオオ――！」

そして、最後にキバは、モスファンガイアに蹴りをぶちこみ、森林から公園までぶっ飛ばした。

「……つく、このつ……！」

モスファンガイアのダメージはかなり大きいようで、上手く立てない。

「……これで、おわりだ……！」

そう言つて、キバは右腰にある紅い笛、ウェイクアップフエッスルをキバットに吹かせる。

「《ウェイクアップ……！》」

その瞬間、周りが夜になり、三日月が出てくる。

「ふん、はああああ……っ……！」

精神を統一させた後、右足を振り上げ、右足の拘束具カタナを解放し、蝙蝠を象った扉が飛び出す。

右足をあげたまま、片足で跳躍し、そのままモスファンガイアめがけ、必殺の蹴りを放つ……！！

「セイヤアアア……！」

《ダークネスムーンブレイク……！》

本来なら、これで決まるはずだった。

しかし、

ドスッ、バキイイン!!

キバの《ダークネスムーンブレイク》は、白い真珠のようなものに、跳ね返された。

「なっ、がはっ!!」

突然の事に呆然とするキバ。

すると、

「へえ貴方が、キバなんだ」

そんな、場違いなのんきな声が聞こえた。

キバがその声がしたほうをみると、

「あれ、どうしたの、そこにいるファンガイアさん、逃げないの?」

ピンク色の真珠をモチーフにしたファンガイア、パールシエルファンガイアがいた。

「ありがとうございます、クイーン。では」

そう言って、モスファンガイアが逃げる。

「おい、待てよ!!」

キバが、追いかけようとするが、

「っ、待て、藤馬!!」

キバットに呼び掛けられる。

「何だよ、早くあいつを追わないと!!」

「少しは、落ち着け!!」

その貴様、さっきのファンガイアにクイーンと呼ばれていたな」

クイーンにキバットが質問する。

「ええ、私がファンガイアのクイーン、そして」

「あなたの過去を知るものだよ」

クイーンは、そう嬉しそうに言った。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 第九幕 すれ違い!!（後書き）

どうでしたか？

藤馬「なあ、伏線ばらまきすぎじゃないの？」

ああ、自分でも改めてそう思った。

藤馬「なら減らせよ、イロイロ大変だろうけどさ」

いや、最近最後の学園祭の、オリジナル曲の歌詞を気分転換に考えたんだけど……。

藤馬「何だよ？」

歌詞作りつて、めっちゃムズいじゃん!!

藤馬「今ごろかよ!!」

というわけで、

全員「次回をお楽しみに!!」

第一樂章 ♪ 第十幕 狼の戦士!! (前書き)

どうも、みなさん私こと388859です。

やばい、

駄文すぎる W W

すいません、それでは第一樂章 ♪ 第十幕をどうぞ。

第一樂章 ♪ 第十幕 狼の戦士!!

――三人称 side

「俺の……過去……?」

キバが警戒しながら、聞く。

「うん、そうだよ。上、じゃなくて、中都藤馬くん」
クイーンが何かを言いかけたが、すぐにやめた。

「貴様、何が目的だ?」

キバットが、クイーンに質問する。

「私の目的は……あれ、何だったわけ?」
と、クイーンが逆に質問する。

「何で、コッチに聞くんだよ!!」
余りの天然っぷりに、思わず突っ込むキバ。

「やっぱり、キミのツツコミは良いね」。

「って、あ、思い出した、思い出した」
クイーンはこつちを指差すと、

「中都藤馬くん、あなたには私達の仲間になってもらいます」

そう、断言した。

「嫌だと言ったら?」

キバが質問する。

「なぐに、その時は力づくで、仲間にするだけだよ」
そう言つて、睨み合うキバとクイーン。

「でもまあ、今の君は弱っちいから、興味は無いかな」
クイーンを笑いながら言う。

「何だと、てめえ!!」
そう言つて、キバはクイーンに殴りかかる。

「バカ、安い挑発に乗るんじゃない!!」
キバットが注意するも、

「バカな所も、変わらないね」

クイーンは黒い真珠を出し、それを、

「じゃあ……」

試してみる?」

キバへ放った。

ドゴオオオオン!!!!

すさまじい音と、土煙が出る。そして、土煙が晴れた後には、

「……………ぐっ、っはぁ、はぁ、くそっ……………たれ……………」

極度のダメージで、変身解除したボロボロの藤馬がいた。

「それじゃ、また今度会うときまで、バイバイ♪」

そう言って、クイーンは去った。

―――NOW LOADING―――

――藤馬side

「……………くそ、あのクイーンとか言う奴、メチャクチャ強えじゃねえか……………」

あんな、安い挑発乗らなきゃ良かったな……。

そう思っていたら、

「……全くお前は、仕方の無い奴だ」

と、コウモリモドキが右手を噛む。

すると、傷が少しずつ治っていく。

おおー！

「スゲーな、コウモリモドキ、傷がちょっとずつ治っていくぞ」

そしてあらかた治してもらつと、

「……ここまでで、大丈夫だろう」

そう言つて、コウモリモドキが右手から離れる。

「……すまねえな」

「全く、無茶すぎだ、今のままのお前じゃ、クイーンどころか、ビショップにも勝てんというのに」

と、コウモリモドキが言う。

「そのクイーンとか、ビショップって何なの」

なんか、強いつつうのはわかるけど。

「ファンガイアの中での、トップクラスの实力を持つ集団、チエックメイトフォーお前は、

その一人のケンカを買ったんだ」

WA～O……。

「命知らずだな、俺」

さてと、

そういえば、律を探さないとな。

俺は、右手に包帯を巻きつつ、森林に向かって歩く。

――

――

――

――

確か、ここら辺だよな……。

あ、あつた――！

ヴァイオリンケースと、学生カバンにコウモリモドキを入れる。

律の野郎、何処に居るんだ？

「おーい、律――！」

「……………不幸だ」

――NOW LOADING――

――律side

うわっ、藤馬を殴っちゃったよ！

「だ、大丈夫か？」

「……………そう言うなら、何で殴ったんすか？」

不服そうに、藤馬が言う。

だ、だって、

「起きたら、目の前に男の人の顔があつたら、そりゃくなあ？」

「……………そんなに、俺って信用無いかな」
藤馬がorzポーズをとっている。

「い、いやいや、そんなことないと思うぞ、私は！」

何で私が、こんなにフォローしなきゃいけないんだよ！

「……つく、くふつ、アハハハ！」

へっ？

「な、何で笑うんだよ？」

「だって、律はあの怪人の事は、何も言わないんだなあって」

怪人って、何の事……。

「……あつ、そういえば、何で私を助けてくれたんだ？」

「助けてやったんだから、お礼ぐらいないのか？」

頭を抑える藤馬。

「そ、その、なんだ、ありがとな」

私は顔を赤らめながら言う。

「……か、可愛い」

ーードゴッ……！！

私は藤馬に左フックを腹にブチこんだ。

「ゴハッ!」

な、な、可愛いつて今言われた……。

「……ちょ、おまつ……褒めたのに……それは……ないでしょう」

藤馬が悶絶しながら言う。

「ご、ごめんな、つい手が出ちまった」

「あなたは、つい、で、左フックを出すんですか!？」

そ、それより、

「どうして、私を助けたんだ？」

藤馬は、頬をかきながら、

「いや、律と一緒にバンドしてみたいし、それに」

それに？

「今日は律に悪い事しちゃったしな、ごめんな、ホントに」
藤馬が私の頭を撫でてきた。

あ、何か気持ち良い。

「一人で、あんな奴からよく逃げてたな、恐かったろ」

藤馬の声が、私の心に響く。

――ポツッ

あれ、私なんで泣いてるんだ、身体も震えてるし？

すると、藤馬は私を抱きしめ、

「怖いときは、我慢しなくて良いんだよ、確かに、それは弱さだけ
ど、」

「……うう…っあ……」

「……生きてる証拠なんだから」

こいつは、ズルイ。

こんなこと言われたら、

――泣くしかないじゃないか。

その後、私は泣いて、泣いて、泣いた。

――NOW LOADING――

――藤馬 side

あの後、律を家まで送り、家に帰った。

そして、翌日。

「はあ、よく寝たわ」

そう言って、起きる俺。

昨日の戦いで、ボロボロになった制服を真新しい物に変え、家から出る。

今日も、晴れてんな。

「あ、なっちゃん、おはよー!」

「おはようございます、藤馬さん」

「おはよう、憂ちゃん、唯」

通学路を歩きながら、二人と他愛ない会話をする。

「そういえば、昨日はどうしたの、なっちゃん。
急に帰っちゃったけど」

そう、唯が俺に質問する。

(藤馬さん、もしかして……)

（ああ、ご想像通りだ、初めて負けちつたよ）

そんな感じに、憂ちゃんと小さい声で会話する、俺。
すると、心配してくれたのか、

「怪我とか、大丈夫ですか!？」

もう、危ないことはしないでくださいよ、だいたい……」

と、憂ちゃんがいきなり声のトーンをあげてきた。

何か、お母さんみたいだな。

「あの、憂ちゃん……?」

「何ですか!?!」

「……周りの人が見てるから、そんな大きな声出さんというて」

「……へっ!？」

そう言っつて、周りを見渡し、顔を赤くさせる憂ちゃん。

あえて言おう。

めっさ、可愛い。

「どっしたの、うい、なっちゃん?」

唯さんや、あなた天然すぎ。

―

――

――

――

というわけで、学校に着きました。

憂ちゃんとは、ここで分かれ、教室に向かう。その途中、

「あ、りっちゃんだ〜!!」

律を見つけた。

「お〜、唯、おはよう」

「俺をスルーすんな、バイオレンスカチューシャ娘」

「誰が、バイオレンスカチューシャ娘だ!!」

「だって、お前、昨n「ふんっ!!」ひでぶっ!!」

―ドガッ!!

律の回し蹴りが、頭に炸裂する。

ふっ、白か。

「昨日、どうしたのりっちゃん？」

「い、いや、何でもない、何でもない!!
さあ、今日も頑張るかな!!」

うう、く、苦しいぞ、律。

「……っ!!」

まあ、朝から食欲旺盛な奴だな。

「唯、律、ちよつと授業遅れるわ!!」

そう言つて、走る俺。

「ちょ、ちよつと、藤馬!」

あ、そうだ!

そう思つて、振り返る。

「律、先生への言い訳頼んだぞ!!」

「何で私なんだよ!」

「唯じゃ、無理だろ!!」

「ああ、なるほど」

「それ、どういう事、りっちゃん、なっちゃん!？」

「「そのまんまの意味だよ!!」」

そうつつこんで、階段をかけ降りた。

――NOW LOADING――

――三人称side

ここは人の少ない通り。

そこで、あり得ないことが起こる。

「く、来るな、来るなよ!!」

そう言つて、逃げる会社員。

会社員を追いかけているのは、

「もう我慢出来ない、あなたのライフエナジーいただくわ」
昨日律を襲った、モスファンガイアだった。

しかし、

「ちょっと、待った!!」

それに、待ったをかけた人物がいた。

それは、

「また、あなたなの？」

と、モスファンガイアが呆れながら、藤馬に聞く。

藤馬は、右手の包帯を外しながら、

「まあな、こっちは学校なんだ、すぐに終わらせる。

コウモリモドキ!!」

キバットを呼び、掴む。

「ああ、ガブリ!!」

「っ!!」

紋章がある右手を、キバットに噛ませ、《魔皇力》を身体に流す。

その瞬間、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

そう言って、キバットをベルトにつるす。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え！！》」

そして、藤馬は仮面ライダーキバへ変身した。
すると、モスファンガイアが、

「最初から、本気で行かせてもらっわ！！」

得意のスピードを活かして、突っ込む。

しかし、

「残念ながら、お前のスピードはもう効かないよ」

一回勝てた相手に、負けるキバではない。

相手の攻撃を避けながら、蹴り、拳を放つ。

「ちっ、なら……」

そう言つて、モスファンガイアは手に剣を出現させる。

「ほう、じゃあ……」

その瞬間、腰のベルトの横が光り、青いフェッスルが追加される。

キバはそのフェッスルをとり、

「《ガルルセイバー！！》」

キバットに吹かせた。

↓

――

同時刻、キャッスルドラン内

その大広間には、

優雅に、コーヒーを飲む男。そしてチェスをする少年と、青年がいた。

すると、

「……」

何処からともなく、音楽がキャッスルドランに響く。

「ちがう、僕じゃない！」

と、少年、ラモンが言う。

「……俺……違う」

青年、力が拙い言葉遣いをする

「……久しぶりに、シャバの空気でも吸いに行くか」

コーヒーを飲んでいた男、次狼がコーヒーを置いて、席を立つ。

そして、地面を引っ掻くと、

——ジジジジジッ！！

青い火花を出し、次狼は元の姿、ウルフェン族、最後の生き残り、ガルルへと姿を変える。

——アオオオオオオン！！

そう雄叫びをあげた直後、ガルルは彫像へと姿を変え、

——ドンッ！！

主人の元へと向かった。

――

――

――

――

睨みあつ、キバとモスファンガイア。

その時、

「……っ！！」

何かを感じたか、モスファンガイアが横へ転がる。

その何かは、キバの左手に吸い込まれるように、握られた。

すると、なにかは形を変え、ひとつの剣になる。

魔獣剣ガルルセイバー。

その刹那、ガルルセイバーのエレメントの影響で、握った左腕が拘^カ束^テ具に包まれ、弾けとぶ。

そして、左腕はガルルの腕のように変わっていた。

同じように、胴体も蒼く変質する。

すると、キバットの目も同じ青になり、キバの顔に、ガルルの幻影が吸い込まれ、複眼が蒼に変わった。

そうして、狼の戦士、仮面ライダーキバ・ガルルフォーム（以降、Gキバ）へと、変わった。

「……ウウウ、ウオオオオオアアア!!」

雄叫びをあげ、野獣のように構えるGキバ。

「こ、こけおどしよ!?!」

そう言いつつ、剣を振るうモスファンガイア。

Gキバは冷静に、振り下ろされた剣を受け流し、横薙ぎにガルルセイバーを振るう。

そのまま、蹴りをファンガイアの身体へ何発も打ち込む。

「くそ、ハッ！！」苦し紛れに鱗粉を放つモスファンガイア。

しかし、Gキバはその攻撃をバックステップで避け、

「……ふんっ！！」

ガルルセイバーの持ち柄の狼の口から、衝撃波を発射する。

ーバヒュッ！！

「……ぐあああ！！」

その衝撃波の威力に、思わず声をあげる、モスファンガイア。

「今だ、一気に決める！！」

キバットがGキバに言う。

Gキバはガルルセイバーの刃を、キバットに噛ませる。

「《ガルルバイト！！》」

その瞬間、ガルルセイバーには《魔皇力》が流れ、切れ味が倍増し、周りが満月の夜へと変わる。

「ふうううう……！！」

精神を統一、ガルルセイバーを口にくわえて、モスファンガイアへ

走り出す。

「……来ないで、来ないでよ!!」

逃げようとするモスファンガイア。

その二人の姿はまさに捕食者と、獲物。

Gキバは、走った勢いで天高く飛び、後ろの満月と重なる。

そして、そのまま、ファンガイアを剣ごと切り裂く!!

《ガルルハウリングスラッシュ!!》

ザシュッ!!

狼の幻影と共に、モスファンガイアは、

ーミシ、ミシミシ、パリイイイイン!!

消え去った。

――NOW LOADING――

――藤馬side

ふう、何とか倒せたか。

そう思いながら、変身を解除する藤馬。

――オオオオオン！！

どうやら、キャッスルドランは、ライフエナジーを食べれたようだ。

「ながさ、いや藤馬」

声が聞こえた方を見ると、

「お前は、本当に全てを忘れたんだな」

確か、次狼だっけ。

「ああ、その、ごめんな、お前達の事を忘れて」

一緒に戦ってくれるのにな。

「ふっ、俺の知るお前は、そんな男じゃないぞ」

それはそれで、問題だともうけど。

「とりあえず、記憶は後で良い、力を貸してやる」

次狼は悲しそうに言う。

「……記憶は絶対取り戻してやるさ、絶対にな……」

そう言っつて、次狼と拳を合わせた。

「おい、藤馬？」

何だよ、コウモリモドキ？

「学校は良いのか？」

はい？……あつ！？

――バツ！！

腕時計をみる。

現在時刻九時三十分

この感じ、デジャブじゃね？

これは、あれです。

「ふ、不幸だ――！！」

その後、ゴリさんにコブラツイストをかけられちった」

そして、律の先生への言い訳は、

「あれ、中都君は？」

田井中さん、何か知らない？

「センサー、藤馬君は天下一武。会に出るために修行しに、どこかに行きました」

律、

それは、無理だろ。

I i t o b e c o n t i n u e d

第一章 ♪ 第十幕 狼の戦士!! (後書き)

どうでしょうか？

藤馬・キバット「いや、ダメだろ」

藤馬「何で、律に殴られまくってるの、俺!？」

キバット「良いぞ、もったこいつを苦しめろ」

藤馬「お前のトマトジュースを捨てるぞ!!」

キバット「やゝめゝろゝ!」

それにしても、歌詞作リムズすぎる。

どうしても長いポエムになってしまう。

藤馬「確かに、他のけいおん!作品のオリジナル曲見たら、スゲーよな」

キバット「作者と大違いだな…」

……………それでは!

藤馬・キバット「Σごまかした!？」

全員「次回をお楽しみに!!」

第一楽章 ♪ 第十一幕 期末試験そして追試 前編！！（前書き）

どうも、みなさん私こと388859です。

今、ちょっと行き詰まっていますが、頑張って更新します。

それでは、第一楽章 ♪ 第十一幕をどうぞ。

第一樂章 ♪ 第十一幕 期末試験そして追試 前編！！

――藤馬 side

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

あれから、数週間が過ぎ、俺は学校と軽音部にも慣れてきた。

最初は、軽音部って楽しいのになって思ってたけど、毎日しゃべって、食って、お茶して、演奏してめっちゃ楽しいです。

そして、現在の季節、もうすぐ夏に入るか、入らないかというところ。

これが何を意味するか。

そう、

「明日から、期末試験だ！！」

「何を言ってるんだ、藤馬、痛いぞ」

遷にジト目で言われる。

今は、二年生の皆で学校から帰っています。

「まあまあ、藤馬君だって、男の子なんだから」

ムギが笑いながら言う。

「ムギさんや、男の子は関係ないです」

「そうだよ、なっちゃんが『ちゅーにびょー』なだけだよー
ーバシッ！」

俺は、唯の頭を叩きながら、

「お前、それは俺が痛い人って言うことになるぞ
ツッコミを入れる。」

「えっ、そうなの！」

ハアと、ため息をつく。

「なあ、藤馬？」

お前、授業を抜け出したりするけど、勉強大丈夫なのか？
律が、珍しく心配してくれる。

「珍しくは余計だ！」

すると、唯の横に居た眼鏡をかけた優等生、真鍋和が、

「そういえば、中都君はいつも授業を抜け出して、何してるの？」

えっ？

「ああ、確かに気になるな、それ！

よし、部長命令だ、話せ藤馬」

「りっちゃん、何だかつこいいー！」

「私も、気になる、気になるー」

律に唯、ムギまでもが聞いてくる。

ちなみに、ファンガイアはあれから三日に一回の割合で、出てくる。

いくらなんでも、こいつらに危険な目にあわせることは出来ないな。

「零、和たすけてくれない？」

わずかな希望にすがるが、

「私も、気になる」「

くそつ、味方がいねえ！

その瞬間、

「……っ！！」「

ナイスタイミング♪

「ごめんな、ちよつち用事が出来たから、また明日！」

そう言つて、その場から逃げる。

「……えゝ、またゝ！！」「」

あゝ、聞こえない、聞こえない。

（今回はかなり近いぞ、一キロだ）

全然近くねえよ、コウモリモドキ。

――NOW LOADING――

――三人称side

ここは裏通り、人の目が届かない場所。

「ふうう、今日はどんな奴をいただこうか？」

その刹那、そう言った男は姿を怪人、シープファンガイアへと変えた。

すると、

「ちくしょう、何処なんだよって……！！」

一人の青年、藤馬が走って来た。

「ふっ、お前のライフエナジーをいただくぞ」

そう言って、牙のようなものを出す、シープファンガイア。
「って、やばっ！」

「コウモリモドキ!!」

藤馬は牙を避けながら、キバットを呼ぶ。

そして、キバットを掴み、

「ああ、ガブリ!!」

「っ!!」

藤馬の右手から、全身へと《魔皇力》が流れる。

顔にはステンドグラスの模様が浮かび上がり、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

そして、キバットをベルトにつるす。

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え!!》」

そう言って、シープファンガイアへと向かうキバ。

「ちっ、キバか!!」

シープファンガイアは、瞬時に銃を作り出し、タイミングを見計らって、

――バキュン――!

キバへ撃つ。

「……うお!？」

キバは、当たりそうになるが、何とか避ける。

「はっはっはっ、さっさと死ね――!」

そう言って銃を乱発する、シープファンガイア。

キバは直ぐに、物影へと隠れる。

「くそっ――!こうなったら……」

そう言って、腰にあるガルルフエッスルを取り、

「《ガルルセイバー――!》」

キバットに吹かせた。

――

――

同時刻内、キャッスルドラン大広間

ポーカ―をしているリキ、ラモン、次狼。

すると、

「~~~~」

ガルルを呼ぶ音楽が、鳴り響く。

「また、次狼だ〜」

少し、頬を膨らませながら言っラモン。

「……いい加減……俺も……呼ばれたい」

リキが、少しイラつきながら言う。

「ふっ、行くか」

そう言って、次狼は地面を引っ掻き、元の姿、ガルルへとかわり、キバの元へと向かった。

「

――

「……よし、来た!」

キバの元へと来たガルルの彫像を掴む。すると左手、胴体に拘束具カタナが巻かれ、弾けとぶ。

キバは、ガルルフォームへとフォームチェンジした。

「ウウウ、ウオオオアア!」

キバは、咆哮したあと野獣のように、物凄い速さでシープファンガイアへ飛びかかる。

しかし、

「なかなかのスピードだ、だが……！！」

シープファンガイアがそう言って、消えた。

そして、

「……ウアッ！？」

キバの身体から火花が散る。

周りを見渡すが、何かが動いていることしかわからず、攻撃を受け続けるキバ。

「おいおい、姿が変わっただけか……！」

シープファンガイアがそう言いつつ、攻撃の手を緩めない。

「これで終わりだ、キバ」

そう言って、シープファンガイアはキバを、自分の銃で吹っ飛ばす。

「……っぐあああ……！」

強制的に変身解除され、表通りへ藤馬は吹き飛ばされた。

「ちっ、表に吹き飛ばしたか、ここまでだな」

そう言っつて、シープファンガイアは姿を消した。

――NOW LOADING――

――藤馬side

「……くそ……やろう……大丈夫か…コウモリモドキ……」
コウモリモドキを呼びつつ、ヨロヨロと立ち上がる俺。

（ああ、私は問題ない、しかし、奴は追ってこないな）

「確かに追ってこねえな、どうやら静かな所で食事はしたいらしい
……っ痛――!」

やっばし、怪我がひでえな。

（荷物を回収しておこう、私は先に戻る、治療はその後だ）
この薄情ものめ。

そこへ、

「あれ、藤馬先輩じゃないですか!」

「あつ、ホントだ。奇遇ですり、って、凄い怪我ですよ、大丈夫ですか!？」

ちょうど、憂ちゃんと梓の二人が歩いてきた。

憂ちゃんは良いけど、梓はやべえな。

「……ああ、ちょっと……な」

憂ちゃん、アイコンタクトわかってくれよ。

「ど、どうしよう、救急車呼ばないと、梓ちゃん!!」

「うん、あつ、藤馬先輩は、座ってなきゃ駄目ですよ!」

うん、全然、聞いてないよ、この子達……。

「あ、あの大丈夫なんですけど……」

「ダメです!!!」

さいですか。

!

――

というわけで、マイハウス、ではなく何故か憂ちゃん・ズハウス。

憂ちゃん曰く、

「私がしないと、気が済まないんです!!」

らしい。ホントにお母さんだな、こりゃ。

「梓ちゃん、帰らなくて良かったの?」

と、憂ちゃんが聞く。

すると、

「私だって、藤馬先輩が心配だもん!」

と返す、梓。

「ありがとな、二人とも、心配してくれて」

俺は笑顔でそう言う。

「いえいえ、そんなことないです。

私に出来ることはこれぐらいしかありませんから……」

と、憂ちゃんが段々声を小さくする。

はぁ、全くこの子は。

「良いんだよ、これだけで充分だよ」

「……………?」

梓が、意味がわからないという顔をしている。

「そういえば、藤馬先輩はどうしてこんな怪我をしたんですか?」

ギクッ!

「そ、それはだな、不良とケンカしました、はい」
「どうだ、この完璧な嘘!」

「……………声に出てますよ」

え、マジで?

「はい、思いつき」梓に、ジト目で見られながら、言われる。

そんな目で見ないで、罪悪感はないっす!!

「それで、何してたんですか?」

ずずいっと、梓が寄る。

「ええと、それはですね、えーあーはい」

ちよっとドキマガシつつ、言い訳を考える。

その直後、

ーガチャ

「たっだいま」

どうやら、唯が帰ってきたようだ。

「あ、お姉ちゃん、お帰りなさい」

憂ちゃんはホントによく出来てるよな。

それに比べて……。

「あずにゃん」

唯が梓に抱きつく。

「ちょっと唯先輩、抱きつかないでくださいよ！」
こっちはどうしてこうなった。

それに梓、顔がにやけているぞ。

「あれ、なっちゃんは家で家にいるの？」

梓から離れながら、唯が質問する。

「ああ、ちよつと用事の帰りに、な」

すると、

「そろそろ、ご飯の準備をしないといけないですね。」

あ、藤馬さんも一緒にどうぞ」

はい？

「

――

というわけで、晩御飯NOW。

あ、梓は帰りましたよ。

「誰に話してるの、なっちゃん？」

いや、何でもないです。

つか、

「憂ちゃんの料理って、出来るの速すぎじゃない？」

俺だったら、二時間かけてする料理を、一時間で終わるってどういう事？

「でも、早く晩御飯が食べれるから、気にしたことはないよ」

あなたは、もっと気にしなさい、唯さん。

「味も美味しいし、レベル的に、お嫁にすぐ行けるよな」

万能すぎ、何なのこの子。

「お嫁って、そんな／＼／＼」

なして、赤くなるの？

「ういは、嫁にはやらん！」

「お前はお父さんか！」

それにいつからそんな話になったんだ！？」

シスコンも、大概にしろや。

「お姉ちゃん。そういえば、ちゃんとテスト勉強してる？」

「大丈夫、赤点はないから！」

そついう問題じゃ……って、うん？

俺は、ファンガイアと戦っているため、授業中に出ることもある。

その時は、授業をサボって戦い、その後、ゴリさんとの第二ラウンドとなるが、それは今は関係ない話。

話を元に戻すと、キバに変身して戦うのはかなり疲れる。

なので、疲れをとるため、苦手な教科の授業は寝ているのだが、その教科は……。

テスト前なのに全然勉強してねえ

W
W

「じ、しまったああああ!!」

|

――

一週間後♪

―― 零side

放課後 音楽準備室

どうも、秋山零です。

さあて、今日も部活頑張るかな。

――バンッ!!

「ひっ!!」

な、何だ……。

ドアを見ると、

「はははははは……」

この世の終わりのような顔をする、藤馬。

「よつす漣、ムギ、お茶の準備」

「ムギちゃん、ムギちゃん、今日はどんなお菓子を、持ってきてくれたの？」

「ちょっと待っててね、すぐ準備するから」

律、唯、ムギがいつも通りに来る。

なんだ藤馬達か、若干一名怖いけど。

「どうしたんだ、そんな顔して、藤馬？」

「ヒヤッホー、聞いてくれますか、漣さん？」

藤馬が壊れてる……。

「おい、律、藤馬の奴どうしたんだ？」

今の藤馬に、聞くのなんか怖い。

「それは、本人から聞いてくれ」
笑いながら言う律。

「漣さん、私こと中都藤馬、物理で赤点とっちゃった、てへっ」

……はい？

「……今、何て？」

「いや、もっかい聞きます、普通？
結構、恥ずかしいんですけど」

ー ドゴッ！！

「アオッ！！」

「だったら、ちゃんと勉強しろおお！！」

ー ガチャ

「みなさん、こんにちり、って、藤馬先輩大丈夫ですか！？」

あ、梓。

ー ー NOW LOADING ー ー

ー ー 藤馬 side

というわけで、全員で恒例のブレイクタイム中。

漣の一撃、強すぎ。

たんこぶが、マジパネエ大きさになってるんですけど。

「状況がやっとなかりました、来たら藤馬先輩が倒れているので、びつくりしましたよ」

梓、そのままの君でいてね。

「それで、追試は何時なんだ？」

漣が聞いてくる。

「ああ、三日後」

「「「ふん、って三日後!？」」」」

おお、見事なシンクロだな。

「三日って、全然時間無いじゃないですか!」

梓がつっこんでくる。

「そうかねえ、三日あれば、このカス小説の本編が三話ぐらい書けるけど」

実際、そうだし。

「藤馬、例えがわかりにくいし、メタい!」

律、メタ発言は必要な事なんだ。

「大丈夫なの、勉強？」

ムギが、心配そうに聞く。

「ああ、実際めっちゃヤバイ」

「なっちゃんって、開き直ったよね、りっちゃん？」

「ああ、ああいう奴にはなりたくないよな、唯」

俺の近くでそう言う二人。

「そう言うこと言わないで、君たち」

ヤバイ、泣きそう。

そう思いながら、部室の隅で体育ずわりをする俺。

「ご、ごめん、なっちゃん、でも、なっちゃんは他の事で頑張れば良いんだよ」

「そうだ、そうだ！他の事を頑張れば良いんだ！」

おまえら……！！

「ああ、俺は勉強以外の事を頑張れば良いんだ、やってやるぞ！！」

「何で、最初から諦めてるだ。
せめてやってから、そういうことは言え」

はい。

というわけで、勉強やるZ!!

I I t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 第十一幕 期末試験そして追試 前編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「どうも、追試を受ける事になっちゃった、てへりんこ、中都藤馬です」

ーードゴッ！！

藤馬「アパス！！」

いい加減にせんかい！！

藤馬「でも、お前ストック後二話しかないじゃん」

うつ！！だから、今執筆してんだろ。

藤馬「へえ、そうかい」

それでは、

全員「次回をお楽しみに！！」

第一樂章 ♪ 第十二幕 期末試験そして追試 後編！！（前書き）

どうも、皆さん388859です。

今回は、リキとラモンの扱いが、かなり酷いです。

それに注意して、読んでください。

それでは、第一樂章 ♪ 第十二幕をお楽しみください。

第一樂章 ♪ 第十二幕 期末試験そして追試 後編！！

――藤馬 side

「前回のあらすじ」

そっだ、勉強しよう！

「いやいや、まとめすぎだろ、確かにあってるけど！」

おい作者、ちゃんとやれよ。

「藤馬君、話を聞いている？」

「聞いてます、ムギ先生！」

すると湊先生が、

「だったら、何て今言ったか、言ってみろ」

「俺に質問するな！！」

――ドガッ！！

「勉強を続けるぞ」

はい。

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は、見ての通り、俺の家で、ムギ先生と澪先生に家庭教師をしてもらってます。

なぜこうなったのか、今から説明します。

――NOW LOADING――

く追試まで、後三日く

というわけで家で追試の勉強だ、やってやるぞ！

「大丈夫なのか、バカ？」

と、コウモリモドキが聞いてくる。

もうちょっと、オブラートに包んで。

そういえば、

「お前って、頭良いんだよな？」

と、コウモリモドキに聞く。

「ああそつだ。なにせ、お前の倍以上生きてるからな」

こいつ、ジジ「ガブリ!!」なんでもないです。

「だったら、わからないところを教えてくれよ」

「ああ、良いだろう」

よっしゃ、じゃあ、まずここ!!

「早いな!？」

ええと、なになに、この時の摩擦力を答えなさい……??」
え、まさか、わかんないとかいうんじゃねえだろうな。

「そ、そんなわけないだろ、私は誇り高きキバット族だぞ!」

ふん。

俺はジト目で、コウモリモドキを見る。

「な、なんだ、その目は!？」

だいたいこいつのは自分でやるべきだ!」

上手く逃げるな、コウモリモドキ。

「うるさい、ほら次の問題に行くぞ」

こんな感じで全然進まず、三日前終了。

く追試まで、後二日く

「「っ!」」

ファンガイア……じゃねえな、何この感じ？

「これはイマジンだな、急ぐぞ!」

「いやいや、イマジンって何?」

「簡単に言えば、時の怪人だ!」

「意味がわかんないから!」

「

――

――三人称side

「うひょひょ、この時間も消してやる」

と、モグラのような怪人、モルイマジンが言う。
しかし、

「どうおりゃあああ!」

「あフツ!」

そんな藤馬の声と共にモルイマジンが、蹴り飛ばされる。
「で、電王か?」

ヨロヨロと立ち上がるモールイマジン。

「電王？違うな、俺は」

藤馬はそう言って、

「キバだ、コウモリモドキ!!」

キバットを呼び、掴む。

そして、

「ああ、ガブリ!!」

右手の甲を、キバットに噛ませる。

「っ!!」

藤馬の全身へ、《魔皇力》が流れる。

すると、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

藤馬は仮面ライダーキバへと変身した。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え!!》」

「うひょ、仮面ライダーだよ、兄貴!」

「はぁ？誰が兄貴だ!!」

すると、キバの後ろから、

「そうだな、弟よ!」

もう一体、モールイマジンが現れた。

「二体同時とか、セコいぞ、お前ら!」

そう言って、二体を見るキバ。

「一気に決めるぞ、弟よ」

「うん、兄貴!」

そう言っで、二体のイマジンは身体をドリルのように回転させ、キバへ突っ込む。

ーギャリイイン!!

コンクリートの道が、ドンドン削れていく。

「くそ、あんなの当たったらやべえな!」

キバは、何とか避けつつ、対策を練る。

「一気にぶっ飛ばす事が出来れば……!!」

キバがそう呟くと、突然、ベルトにひとつの紫のフェッスルが追加される。

そして、そのフェッスルを、

「《ドツガハンマー！！》」

キバットに吹かせた。

「

――

同時刻キャッスルドラン内大広間

今は、次狼とリキがチェス、ラモンがそれを見ている。

すると、

「~~~~~」

リキを呼ぶ音楽がキャッスルドランに鳴り響く。

「……ちっ、違うか」

次狼が悔しそうに言う。

「……違う」

ラモンは、ふてくされているようだ。

「……ふん」

リキは、チェスの駒を潰し、腕を組む。

その瞬間、リキはフランケン族、最後の生き残り、ドッガへと姿を変え、

ー ドンッ！！

主人の元へと向かった。

ー

ー

「アヒヤヒヤ、どうしたどうした？」

「次で決めるぞ、弟よ！」

そう言っつて、攻撃の態勢をとる、イマジン兄弟。

「……ぐっ、ハア、ハア……」

イマジンの攻撃を受けて、かなりボロボロになっているキバ。

すると、

ー バキッ！！

「ぐほっ！！」

なにかにブッ飛ばされる、イマジン兄弟。

すると、そのなにかはキバの目の前で形を変え、ひとつのハンマー

になる。

魔鉄槌ドツガハンマー。

キバがドツガハンマーを握ると、その直後、エレメントの影響で両手と胴体カタテに拘束具が巻かれ、弾けとぶ。

両手と胴体は、どんな攻撃もものともしない、ドツガの身体のようにかわっていた。

すると、キバットの目も同じ紫になり、キバの顔に、ドツガの幻影が吸い込まれ、複眼が紫に変わった。

そうして、豪腕戦士、キバ・ドツガフォーム（以降、Dキバ）へと姿を変えた。

「うん、姿が変わったぞ？」

「電王みたいだな、兄貴！」

イマジン兄弟は、そういいながら、Dキバヘドリル攻撃をしかける。
しかし、

ーードゴッ、ギャルルルル、ガシッ！！

キバはイマジン兄を、ドツガハンマーをフルスイングさせてぶっ飛ばし、イマジン弟を片手で掴んだ。

そしてそのまま、

「むううううん!!」

「嘘おおおん!?!」

兄の方へと、放り投げた。

「今だ、決めるぞ!!」

キバットがそう言った後、キバはドツガハンマーをキバットに噛ませた。

《ドツガバイト!!》

ドツガハンマーに《魔皇力》が伝達していく。

その瞬間、世界が夜に包まれ、朧月が出る。

キバは、ドツガハンマーの柄の先を地面に立てる。

すると、拳の握り目がドンドン開いていき、トゥルーアイ真実の目が見えてくる。

「な、何だか、ヤバイよ、兄貴!」

「そ、そうだな、逃げるぞ、弟よ!!」

そう言っ、イマジン兄弟が逃げようとするが、

「う、動かないよ、兄貴!」

「く、くそ、このままじゃ、ヤバイ!」

《トゥルーアイ》の効果で、その場から逃げられない。

キバは、ドツガハンマーを持ち上げると、落雷エネルギーを得た。

そのまま横に振ると、オーラの纏った巨大な拳が頭上に現れ、そのままイマジン兄弟目掛けて、全力で降り下ろす！！

「フンガアアア！！」

《ドツガサンダースラップ！！》

ドゴオオオオオン！！

イマジン兄弟は消えた。

――NOW LOADING――

――藤馬side

たっはぁ、つかれたぁ。

「……藤馬……久しぶり……」

うん、リキだっけか。

「ああ、久し振りだな、ごめんな本当に忘れて」

俺は頭を下げた。

「……別に……また……いつしょ……嬉しい……から」

リキ……。

「ああ、これからもよろしくな」

そう言っつて、リキと握手した。

「おい、藤馬。

テスト勉強をしないと、やばいと思うぞ」

と、コウモリモドキが言っつてきた。

あ、忘れてた。

↓

――翌日、部室

「というわけで、助けて、漣先生！」

俺は漣に頼み込む。

「自業自得だ、自分で何とかしろ」

呆れながら、漣が言う。

「そつだよ、なっちゃん、前もって計画立ててやらないと」

「いや、お前も一年の時とつたる」「やっぱり、唯先輩は唯先輩ですな」

「あゝ、それどういう事、あずにゃん!？」

唯、律、梓の三人が華麗な漫才をする。
お前ら、もう吉本いけるよ。

「じゃあムギ先生、お願いしやす!」

俺はムギ先生の方を見て、お願いする。

「……ムギ先生、良い響き……。私、やります!」

なして、目がそんな輝いているのかわからないけど、よっしゃ!!

「はあ、仕方無い。私も手伝うからな」

漣先生ありがとうございます。

「それで何処でするの、藤馬君？」

ああ、それなら。

「マイハウスでやろうか」と、藤馬の家!？」……何か問題でも？」

漣先生は、恥ずかしがり屋だからな。

「……私達を襲うのか?」「違うわ!」

何でそうなるの!?

「だって、男の人は皆そうだって、パパじゃない、お父さんが」

今、スゴく可愛いこと言った気がする。
とりあえず、

「確かにこの軽音部の皆可愛いよ、だからといって襲ったり、」
「「可愛い!?!」「」「」」
何で、漫才トリオまで聞いてんだ!?

冒頭に戻る。

――NOW LOADING――

現在、ブレイクタイム中。

ちなみに梓、律は居ないよ。

唯？ 唯は……。

「あ、なっちゃんのおせんべいも〜らい♪」今、俺の醤油味のせんべいを取りました。

って、

「ああっ!？」

俺の、醤油せんべいが……orz

と、まあこんな感じです。

「勉強を再開するぞ、藤馬」

はいよ〜。

↓

――

そういえば、

「なあ、ムギさんや？」

「うん、何かしら？」

「ムギって、何でお嬢様なのに、桜高に入ったの？」

「あら、お嬢様が入ったらダメですか？」

そんなことないですが……。

「ムギの学力なら、もっと上に行けるんじゃないかな？って、思ってたさ」

すると漑も、

「確かにそうだよな、ムギは将来会社を継ぐんだろ？」

「そうなんですけど、その前に愉快な人達と一緒に、学園生活を送るのが夢だったのよ」

ふう〜ん。俺にも、そんな人達が居たのかな、会ってみたいな。

でも、その人達との記憶は無いし、会ってどうする……。

ちょっと、憂鬱になっていたら、

「だから、藤馬君達は、私にとってかけがえのない人達なんですよ」

ムギが幸せそうに微笑んだ。

「……ありがとう、俺の中で、ムギはかけがえのない人達に入っているよ」

って、

「どうしたんだ、漑先生、さっきからだんまりだけど？」

具合でも、悪いのかな？

「いやいや、良い雰囲気になってるなあって、なあムギ？」
ムギ先生を見ると、

「大切な人……／＼／＼／＼／
えっ？

「ムギ先生、大丈夫？」
そう聞くと、

「え、ただ大丈夫よ！／＼／＼／」

「いや、顔赤いけど……」

「べ、勉強しましょう、勉強！！／＼／」

んじゃ、頑張るかな！！

――

――

――翌日、放課後 部室

「ほわたああああ！！」

――ドゴツ！！

俺は、準備室のドアを蹴破った。
その直後、

「うるさあああい!!」

「ーバゴツ!!」

「ナイスキック!?」

さわっちの回し蹴りが、俺の腹にジャストミートし、準備室の外へ砲弾のように飛んだ。

「「「おお、お見事!!」」」

他人だから言える言葉を吐く、唯、律、ムギ。

「「Σさわ子先生、自重してください!」」

まじめな遷、梓。

「……俺の……心配……なしすか……」

腹を押さえて、千鳥足で準備室に入る。

「はい、ケーキ」

ムギが天使のような笑顔で、ケーキを差し出してきた。

「うう、ケーキの美味しさが身に染みます……」

涙目で言う、俺。

「それで、追試はどうだったんだ?」

漣が、ソワソワしながら聞く。

「ああ、これを見るオオオ!!」

俺は、追試の解答用紙を叩きつけた。

ちなみに、合格は八十点以上。

そして、俺の点数は……。

「……………めっちゃ、ギリギリ……………」

八十一点でした、やったZ!

「ある意味、藤馬らしいよな」

と、呆れながら言う、律。

「スゴいね、なっちゃん!」

目を輝かせながら、言う唯。

「本当に、一瞬ダメかと思いましたよ……………」

と、少しげっそりして言う、梓。

何か、すいませんでした。

「また家庭教師したいわ〜」

ムギが、何だか怖いことを言っている。勘弁してください。

「とりあえず、これで解決だな」

漣、弄ることがないな、省略。

「さてと、お茶でも飲もうかn……っ！……はあ」

ファンガイア、もうちょい空気読もうか。

「すまん、用事が出来たから、また明日！」
この感じ、この前やられた奴だな。

（ああ、今回は勝つぞ！）

もちのろんだ！！

――NOW LOADING――

――三人称side

「……見つけた、コウモリモドキ！」

藤馬は、キバットを呼び、掴む。

「ああ、ガブリー!!」

「っ!!」

キバットを右手に噛ませ全身に《魔皇力》を流す。

顔には、ステンドグラスの模様、赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ!!》」

そう言つて、シープファンガイアへ、飛び蹴りを放つ。

「……っ、キバか、くっ!!」

吹き飛ばされながら、銃を作るシープファンガイア。

「銃なら、銃しかねえだろ!!」

キバがそう言つと、腰が光り、緑のフェッスルが追加されている。
それを掴み、

「《バッシャーマグナム!!》」

キバットへ吹かせた。

↓

——同時刻 キャッスルドラゴン内 大広間

次狼とリキ、ラモンは優雅なティータイム中のようなのだ。

「~~~~」

バsshャーを呼ぶ、音楽が鳴り響く。

「あつ、やっとよばれた」

すると、ラモンは鼻歌を歌いながら、マーマン族最後の生き残り、バsshャーへと姿を変え、

ーードンッ！！

主人の元へと向かった。

ー

ー

キバが、物影に隠れてシープファンガイアの様子を伺う。

すると、キバの目の前へ何かが来る。

キバがそれを右手で掴むと、それは形を変え、銃になった。

魔海銃バsshャーマグナム。

バsshャーマグナムのエレメントの影響で、右手が拘束具カタナに巻かれ、弾けとぶ。

右手はマーマン族のように変質した。

そして胴体も同じようになる。

すると、キバットの目も同じ緑になり、キバの顔に、バツシャアの幻影が吸い込まれ、複眼が緑に変わった。

キバは、銃戦士、バツシャーフォーム（以降、Bキバ）へと姿を変えた。

「どこだ、キバ……」

キバを探す、シープファンガイア。
すると、

ードドンッ、バシッ!!

「……っ痛!!」

銃を水の弾丸に弾かれた。

弾丸が来た方向を見ると、Bキバが銃を構えていた。

「だが、銃では俺に勝てないぞ」

シープファンガイアがそう宣言した。

しかし、

「ふん、ならば一気に決めるぞ、藤馬!!」

その宣言は直ぐに覆る事になる。

キバは、バツシャーマグナムをキバットに噛ませる。

「《バツシャーバイト！！》」

バツシャーマグナムの《魔皇力》が最大になる。

その瞬間、周りの景色が半月の夜へと変わる。

すると、キバの足元から水が溢れ出す。Bキバの特殊能力、疑似水^{アクアフィールド}中環境だ。

そして、バツシャーマグナムのトルネードフィンを高速回転させ、《アクアフィールド》から竜巻を作り出す。

「ふっ、逃げさせてもらう！」

シープファンガイアが逃げる。

しかし、もう時に既に遅し。

Bキバは竜巻の中で、シープファンガイアをロックオンし、巨大な緑の弾丸を放つ！！

「《バツシャーアクアトルネード！！》」

シープファンガイアは当たらないよう、得意のスピードで逃げるが、

ードキュウン!!

それ以上のスピードで、《バッシャーアクアトルネード》が撃ち抜いた。

そして、Bキバはシープファンガイアに近づき、

「……えい!」

手で突いた。

パライイイイン!!

――NOW LOADING――

――藤馬side

よっしゃ、リベンジ達成!!

ガッツポーズをとっていると、

「……久し振り、お兄ちゃん」

笑顔のラモンが居た。

「よっす、確か、ラモンだったよな、ごめんな、お前達の事を忘れて」

リキと次狼が、止めてくれと言ったが、謝らないと俺の気が済まない。

「全く、そんなことじゃなくて、なんで僕をいつまでも呼んでくれなかったの？」

はい？

「いや、なんと申しますか、あなた様の力を借りなくても、どうにかなる場合が多いので……」

「そう言う問題じゃない、前だって、次狼じゃなくて、僕を呼べば良かったのに、もう……」

俺は、この後ラモンにむっちゃ叱られ、お詫びとして俺の家に一日泊まった。

I t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 第十二幕 期末試験そして追試 後編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「何だよこれ、ハチャメチャな展開だなあ」

次話の合宿は、シリアスとコメディの振り幅がすごいぞ。

藤馬「もっと、ちゃんとやれよ」

仕方無いだろ、一日更新するには時間が無いんですよ。

藤馬「はあ、んじゃしめるぞ、それでは！」

全員「次回をお楽しみに！！」

第一楽章 ♪ 第十三幕 合宿 前編!! (前書き)

やべえ、シリアスとコメディの差がパネエ、どうしてこうなった。

藤馬「だから、プロット立てれば良いのに」

だまらっしやい!

藤馬「それでは、第一楽章 ♪ 第十三幕をどうぞ!」

あ、俺のセリフ……。

第一樂章 ♪ 第十三幕 合宿 前編！！

――藤馬 side

現在、夏休みでございます。

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は、部活が終わって皆で帰るところです。

「はあ、暑い〜」

セミもうるさいわ、ガスバーナーで焼いてやるうか、この野郎。

「よし、久し振りにみんなそろった事だし、合宿の買い物に行くか！！」

と、律が無駄に元気一杯に言った。

合宿ねえ〜。

「確か海だっけか」

「そうだよ、ムギちゃんの別荘にいくんだ〜」

唯さん、遊びに行くわけじゃないんだから。

「あ、藤馬も来いよ、お前には大事な役目があるんだから！」
律がこついうことを言うときは、大抵不幸な事しか起きないんだよな。

！

――商店街♪

というわけで、軽音部の皆+俺というハーレム状態で、商店街でシヨッピングです。

「ところで、何を買うんですか、新しい機材とか!」

梓が期待の眼差しを漑に向けている。

すると漑は、

「ええっと……「水着だよ!」はあゝ」

唯は遊ぶ気満々じゃねえか……。

「どうせ、こんな事だろうと思いました……」

梓がやっぱり、という顔しながら言う。

すると律が、

「別に、ずっと遊ぶわけじゃないよ」

心外だなあみたいに言うが、

「そんなの信用出来ません!」

「Σ何で!?!」

梓は直ぐに否定した。

まあ、こいつらの普段の態度を見れば、そうだよな。

それに見かねて、漑が、

「まあ、息抜きも大切だから、な」
と笑顔で言う。

「……そっか、そうですよね！」

そう言うのと、漑が梓の頭を撫で出した。

何か、本当の姉妹みたいだな。

つて、あれ？

何か律の奴、ぼけと漑たちを見てるな。

「どうしたんだ、律？」

「へっ？べ、別に何でもない！」

もしかして……。

「……やきもち？」

「チエイサアアア！！」

「ーゴスッ！！」

「おぶっ！？」

律のハイキックが俺の後頭部にめり込んだ。

「そ、そんなわけないだろ、ほら、買い物行くぞ！！」

律の蹴り、怪人に効くと思う。

その直後、

「「っ！！」」

こんな時に……。

「ゴメン、用事だ、またな！」

そう言っつて、俺は走り出した。

――

――

――

（ここらへんだ、藤馬！）

「ああ、わかった！」

くそ、何処だよ！

「アハハハハ、君のライフエナジー、もらっつよ」

そんな声が後ろで聞こえた。

まさか……。

後ろを向きながら、嫌な予感がした。

ードスッ！

「やめろ、くるな、あ、ああああ！！！」

そこには、牙のようなものにライフエナジーを吸われている、若い年だと思われる青年がいた。

冷や汗が吹き出し、身体が震える。

「やめろ、この野郎！！！」

俺はファンガイアに体当たりをし、身体がガラスのようになった、青年の元へと言った。

「おい、しっかりしろ、大丈夫か！！！」

お願いだから、死ぬなよ！

「……キ……ミ……は……？」

青年は息も絶え絶えに喋る。

「しゃべるな、お前を助けるから！！！」

「ぼ……く……は……し……ぬ……の……？」

「っ！！！」

ハッキリ言っ、こいつはもう助からない。
俺はどう答えるべきか迷っていた。

しかし、

「……そっ……か……ぼ……く……は……し……ぬ……ん……だ……」
「っ、そんなわけないだろ！！！」

「自分……の事……ぐら……い……わかる……よ……」

「お前はまだ生きたいだろ、だから……」

「い……い……か……ら……に……げ……て……」

青年は目を閉じた。

「……おい起しろ、死ぬぞ……」

俺は青年の顔を触ろうとした。

しかし、

パライイイイン……！！

青年だったものは、跡形もなく消え去った。

その瞬間、

「っ……！！」

――声が聞こえる。

――皆待つてろ、今助ける！

俺は、見たことの無いキバになり、皆を助けた。

そのはずなのに

後少しという所で

――パライイイイン……！！

「あ、アアあああ!!」

――NOW LOADING――

――三人称side

「おい、藤馬!!」

キバットが、藤馬に呼びかける。

「ああアアあ…ハア…はあ…はあ」
どうやら、藤馬は落ち着いたようだ。

「……大丈夫か？」

「……おい、コウモリモドキ？」

藤馬がキバットに聞く。

「どうした、奴なら居なくなつたぞ」

「まただ、また誰かが死ぬ映像を見た、……俺は皆を救えないのか？」

「それは……」

藤馬は、夏休みに入ってから誰かが死ぬ映像を、見ることが多くなっていた。

「前にも言っただろう、お前はバカな男だと」

キバットがやれやれ、という感じで言った。

「……それじゃあ、全然答えになんねえよ」

そう言って、藤馬は家に帰った。

――NOW LOADING――

――藤馬side

今日から、三泊四日の合宿で、ムギの別荘に向かっているところなんだが……。

「……………はあ」

「どうしたんですか、藤馬先輩？」

「いや、ちよつと嫌な夢見てな」

「へえ、藤馬つて意外に怖がりなのか？」

ニヤニヤしながら言うな、バイオレンスカチューシャ娘。

「藤馬君、元気だして♪」

ムギさん、あなたが女神に見えます。

そうだな、せつかくの合宿だもんな、元気ですか！

！

――

別荘に到着！

「ムギ、此処なのか？」

と、零が半信半疑で聞く。

そりゃ、疑うよね。

だって、ホテルみたいだもん。

「おゝ、こりゃまた一段とスゲーなあ！」

と、律が言う。

「これが去年言ってた、借りれなかった別荘だね！」

「ごめんなさい、その別荘はまた駄目だったの、多少狭いと思うけど、我慢してね」

（（（Σまだ上があるのか！！）））

――数分後♪

「よし、遊ぶぞー！」

「おおー！」

律と唯が、水着に着替えて、別荘から飛び出した。

先に、遊ぶのかよ……。

「うおーい！」

遊ぶのは練習してからー！」

流石、真面目キャラだな。

「えー、遊びたい！」

改めて思うけど、うちの軽音部って、美人が集まるよな、水着がめちゃくちゃ似合ってるもん。

そう思いながら、唯と律を見ると、

「なあ藤馬、私たちの水着、どうだ？」

「可愛いかな、なっちゃん？」

「うん、二人ともよく似合っていると思う」二人の問いに答えると、

「「いや、それほどでも」／／／／／」

お前らは、クレヨンしんちゃんか。

「それじゃあ、多数決で決めよう」

そして、多数決の結果……。

「結局こうなるのね……」
遊びになりました」

「それじゃあ、遊ぶか！」

その後は、バレーやら、スイカ割りをして、俺は軽音部の皆と夏を満喫した。

ちなみに右手は、きっちり包帯しているから大丈夫。

――

――

――別荘内、スタジオ

「「「お腹すいた」」」

と、俺と唯、律の三人が悲鳴を上げるも、

「練習してからな」

漣のケチ。

「ーゴンッ!」

「お前ら、もっと、熱くなれよ!」

「藤馬、暑苦しいからそのテンションやめろ」「うっ!?!律に言われるとは。」

「それじゃ、行くよ、」

「1、2、3、4!」

「

」

「…もうだめざます…」

マジで無理っす。

もう、お腹が空いて力がでない……。

「それじゃあ、ご飯にするか」

この鬼軍曹め……、やっと、ご飯がたべれる……。
すると漣は、

「準備は、藤馬にお願いするよ」

……へっ?

「え、マジで、ありがとう藤馬!」

「藤馬君、頑張つてね」

「なっちゃん、全部するなんて、男前」

「わ、私は手伝いますよ！」

くそう、梓しか味方が居ないよ！

「わかった、殺つてやらああ！！」

「先輩、字が違います」おだまりっ！

その時の俺は、チェックメイトフォーを倒せるぐらいの気迫があったとか。

↓

――三十分後

「スゴいな、三十分で準備したぞ」

「なっちゃん、料理上手いんだね！」

返事がない、まるで燃え尽きた火のようだ。

「藤馬先輩、燃え尽きたら駄目ですよ！」

大丈夫だ、問題ない。

俺は、最後の気力を振り絞り、バーベキューを開始した。

↓その時の一部始終↓

「あゝ、それ、私が焼いた肉だよ、なっちゃん!？」

「食事にルールもくそも無いだろう、小娘？」

「Σ藤馬が遂に、壊れたー!!」

「ほう、ならこれを……いただくぞ！」

「律先輩も!？」

「会いたかった、会いたかったぞ、鶏肉!!」

「なんだか、いつもより賑やかなね」

「食事ぐらいまともにしろおお!!」

――

「肝試しをしよう！」

「お」

まあ、よく出るよな、そんなポンポンとしたいことが。

「やっぱり、夏で合宿といえば、肝試しだね！」

律が、そう力説する。

「私はやらないぞ」

「あはゝ、そっか、澪は怖いの手苦手だもんね」

律のそんな挑発に、

「ぜんっぜんよ、やってやろうじゃない！」

漣って、怖いのが苦手なんだな。

ここで、言っておこう。私こと中都藤馬、怖いのが苦手なんです、辞退しようと思ったのですが、

漣が、

「なあ、藤馬……一緒に肝試ししてくれないか？」

と、涙目で言ってきました。

やるっきゃないでしょ、男なら！

――

――森の中――

というわけで、漣と手を繋いで歩いていきます。

それにしても、

「こ、高校生にもなって、肝試しはないよな……あはは」

――ギリギリリリ、ギリ――

「あのさ、手が万力に掛けられているんですけど？」

漣さん、勘弁して。

――ガサツガサガサ――

「ビクッ――！」

「な、何だ今の！？」

「き、き、きつと、り、り、り、律の仕業だよ」

そう言つて、懐中電灯で後ろを照らす。
すると、帽子を被った女性が、

――ああ、あああ、漣ちゃん!!

「イヤアアアア!!」

「うおおお!!?」

漣の顔の方が怖いわ!

つて、うん?

「……さわつちじゃん!」

その正体は、ボロボロのさわつちだった。

「うう、ようやく会えた……」

「あれ、さわちゃん先生!

どうしたの、ていうか何で居るの?」

と、後ろから来た、唯、ムギの二人。

すると、さわつちが

「後から、合流しようとして、皆を驚かそうと思ったんだけど、道に迷つて……」

驚かせようというのは、成功したみたいだけど……。

漣が屍みたいになっているし。

「あれ、梓は居ないのか？」

と二人に質問すると、

「そういえば居ないね、あずにゃん」「確かに、最初は居たのにね」

もしかして……。

「遭難し……っ!!」

この感じ、この前のファンガイアだ!!

「ちょっと、梓を探してくる!!」

「え、私達も探すよ!」

ファンガイアの事に皆を巻き込めねえ!

「一人で探した方が、良いから皆は先に戻つて!」

そう言って、ファンガイアがいる方角へ向かって走った。

――

――

(コウモリモドキ、早く来いよ!)

そう思った直後、

「藤馬先輩、藤馬先輩ですか!？」

目が赤くなっている梓が居た。

「梓、大丈夫か!？」

「大丈夫で……す……う、う、うわああん、怖かったよおお!」
そう言つて、梓は抱きついてきた。

怖いよな、そりゃ一人で森のなかにいたら……。

「取りあえず、梓が無事で良かった、本当に良かった……」
すると梓が、

「とう……ま……せんぱい……ぐすっ……、もう少し……このままで……いて
ください」

はあ、断れる訳ないよな。

「……了解」

そう考えていたら、

（おい藤馬、ファンガイアの反応が消えたぞ!）

と、コウモリモドキがあり得ないことを言ってきた。

（……本当だな。

どういうことだ、コウモリモドキ？）

（わからん、私達以外に倒されたのか、ライフエナジーをもう吸いとったか、取りあえず別荘に戻るぞ）

「あの…藤馬先輩、そろそろ大丈夫です／＼／＼／」梓が顔を真っ赤にさせながら言う。

「あ、ゴメン、ゴメン」

そう言っ、離れると梓は残念そうな顔をした。

どっちなの、この子。

「それじゃあ、帰るか」

「あ、あの……」

梓が、さっきより顔を赤くさせながら、

「……手を繋いで下さい／＼／」

なんか、手のかかる妹みたいだな。

「はいよ、しっかり握っとけ」

梓と手を繋いで、一緒に森から出た。

！

――森の中

藤馬達が、いなくなった直後、それに合わせたように、フードを着た女が現れた。

「全く、あずにゃんが此処に迷い込んでくるとは思わなかったなあ」
歩きながら、フードの女は、そう呟く。

すると後ろから、ヒトデを彷彿とさせたファンガイア、シースターファンガイアが現れた。

「貴様、どういっつもりだ、人間を襲うなと言ったが？」

「そのままの意味だよ、あずにゃんには死んでほしくないんだよね。なっちゃん私は好きだから、かな」
フードの女は、嬉しそうに言った。

「なっ、ファンガイアが人間に恋をするなんて、タブーだぞ、わかっているのか!？」

シースターファンガイアが、驚く。

「うん、そんなのわかっているよ」

「なら、どうしてだ!」

「そりゃ、私が

クイーンだからね」

「なっ、ク、クイーンだと!!」

「さてと、君にはこの後、なっちゃんを襲ってもらいたいんだ」

「……あの男を?」

「うん、それじゃよろしくね」

シースターファンガイアは、そのまま姿を消した。

すると、

「ふう、今頃なにしてるかな」

そう言ったクイーンは、悲しそうな顔をしていた。

「キミの声が、聞きたいよ、なっちゃん……」

I t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 第十三幕 合宿 前編！！（後書き）

どうでしたか？

「最後の奴の正体、バレバレじゃね？」

それは、気にするな！

「ていうか、プロット作った方が、やっぱり良いんじゃないの？」

代々のあらすじは、頭の中にあるから
大丈夫だよ。

藤馬「んじゃ、しめるぞ」

全員「次回をお楽しみに！！」

第一樂章 ♪ 第十四幕 合宿 後編！！

――藤馬 side

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は、梓と手を繋いだまま、一緒に肝試しから帰ってきたところです。

「アイツら、今、何してるかな」

「私達の事、待っていてくれてるんでしょうか？」

「待つてるだろ、皆お前の事を心配してたからな」

すると、梓は嬉しそうに、はにかんだ。

「ただいま、梓を連れて帰ったぞー！」

玄関のドアを開けながら、俺は言った。

「おー、帰ってきたk……何やってんだ、お前ら？」
と、明らかに不機嫌そうに律が言う。

「あらあら、藤馬君？」

梓ちゃんとはで手を繋いでるの？」

ムギさん、何だか怖いんです。

「なっちゃん、しっかりしてよ、なっちゃん!」
唯が、ノリに乗ってくる。

「ぐっ、…な、なんじゃこりやあ!」
手に付いた血を見ながら叫んだ。

「うるさいわ、この変態が!」

「ードグオツ!」

「おぶっ!」

律が、俺の顔に久しぶりに、黄金の左フックをぶちこんだ。

「さてと、何で梓と手を繋いだのか、教えてもらっぜ、藤馬?」

「いや、律さんや、別に深い事情があるわけは」
「あらあら」
「…へっ?」

ムギの方を見てみると、

「藤馬君、私も知りたいわ」

顔に手を当てて、負のオーラを身に纏う、ムギさんがいました。

あれ、死亡フラグの匂いが、プンプンするぜい?

「ちよっ、律さん、人の話を聞いて、ムギさん、右手はそっちに曲がらないで」
「痛ったアアア!」
「唯さん、何で左手も曲げ」
「アオツ!」

――バキッ、ボキボキボキ!!

――

――

一時間後♪

ま、まさか、ゴリさんより強い奴らが居るとはな……。

今現在、女性陣は風呂でございます。

俺は、一人でぼうつとしています。

「誰に言ってるんだ、お前は？」

あ、すまん、コウモリモドキの事忘れてたわ。

「はあ、お前、やはり元気がいつもより無いな」

「そりゃ、あんな事が有ったんだ、元気も出ねえよ」

あいつを救えなかった時から、俺は、誰も救えないんじゃないか、
思っていた。

たった一人。

そのたった一人を、救えなかった自分が最低野郎なんだ、と。

「おい、藤馬、アンポンタンだなお前は」

コウモリモドキが、やれやれといった感じで言う。

「……何だと？」

「誰かを救えなかった、だからといってお前は立ち止まるのか？」

……。

「……私の知っているお前は、出来る限りの人間全てを、救おうと戦い続けた。

どんなに身体がボロボロになっても、救えなかった人達が居た。

でも、救えなかった人達の為にも、残りの皆すべてを救おうと、涙をいつも堪えて、戦い続けた。それがお前、バカな男、中都藤馬だ」

「……俺は、そんな大層な人間じゃねえよ……」

只の最低野郎だ……。

——きゃああああああああああ！！！！

な、何だ今の！？

「大浴場の方からだったな」

もしかしたら、ファンガイアか！

「ちょっと、行ってくる！！」

「あ、おい藤馬！」

俺はそう言っ、リビングから出る。

えつと、大浴場は……確か此処だ！

そして、大浴場のドアを開けた。

ーガラツ！！

「どうしたんだ、皆！？」

「「「「「……へっ？」「」「」「」

あれ、ちよつと待てよ、今の状況は…。

ー女子が入っている風呂に、男が入ってくるー

「なななな、み、みるな！」

律が桶を投げてくる、それと同時に皆から桶が、俺へと投げ込まれる。

「うおっ、危なっ！」

俺はなんとかして、投げられてくる桶達を避けながら逃げる。

これは、久し振りの……。

「あゝもつつ、不幸dつぎやふっ！…」

せめて、最後まで言わせてください……。

ちなみに、さっきの悲鳴は、梓が日焼けした所を、湯船につけたか

らしい。

はっはっはっ、なんたる不幸……。

↓

――

今は、外で寝られる場所を探している。

え、何でかと言うと律が、

「信用出来ないから、外で寝ろよ、藤馬」

という感じに言われまして、うなずいちゃった、てへっ。

今日はここで、寝るかな。

その前に、一曲弾いて、心を落ち着かせるか。

「よし、ここで弾こう」

俺はヴァイオリンを取り出し、ゆっくりと弾きだした。

♪演奏♪ ふわふわ時間 ヴァイオリンver♪

俺は、何をやっているんだろうな。

もしかして怖いのかな、目の前で誰かが死ぬのが。

そして、目の前で死ぬのが、軽音部の皆になるのが、何より怖いん

だろうな。

軽音部の皆は、記憶の無い俺にとって、なによりも大事な居場所なんだ……。

俺は、悩みをかき消すようにヴァイオリンを弾き続けた。

――

――

――ザッザッザッ

どうやら、だれかコッチに来たようだ。
俺が後ろをみると、

「……唯と梓か、どうしたんだ、こんな時間に？」唯と梓の二人だった。

すると唯が、

「なっちゃん、何かあったの？」

こいつ、エスパーかよ。

「何でそう思うんだ？」

「それは、藤馬先輩の音楽を聞くと、悲しい感じがしたので」

と梓が答えた。

スゴいな、この二人は。

「まあな、実はさー」

俺は、二人にキバと怪人の事は、伏せて話した。

一人で抱え込む、なんていう主人公みたいな事は、俺には出来なかった。

早く誰かに話して、楽になりたかった。

「ーていう事があつたんだ。俺って、最低な野郎だよな」と、自嘲気味に笑って話し終えた。

すると唯と梓が、

「ーとない」

ボロボロと泣きながら、

「「そんなことないよ（です）！！」」

否定した。

――NOW LOADING――

――唯side

「そんなことないよ!!」

私はなつちゃんの最後の言葉を否定した。
涙を、ボロボロと出しながら。

なつちゃんに、こんな顔見られたくないし、何でこんなに自分が、
泣いているのかわからないけど、

「なつちゃんは、その人を助けようとしたんでしょ。」

それに、なつちゃんは優しいから、最低野郎なんかじゃないよ!」

すると、あずにゃんも泣きながら、

「そうですよ、藤馬先輩は今日、私を助けてくれました!」

お願いだから……。

「もう、そんな顔しないでよ……、なつちゃん」

「唯、梓……」

なつちゃんが呟く。

「それに、今日風呂場に来たのだって、助けようと思ったからだよね?」

「え、あ、うん、そうだぜい!？」と、なっちゃんは誤魔化した。

あれ、何か怪しいなあ。

「本当に、助けに来たんですよね？」

あずにゃんも怪しく思ったらしく、なっちゃんに聞く。

「あ、当たり前だろ、何言っただ、それと……」
なっちゃんがそう言っ、私とあずにゃんの頭を撫でてくれた。

「ありがとう、本当に、凄く楽になったよ……」
と、笑顔で言ってくれた。

良かった、なっちゃんが元気になって……。

「じゃあ、私達は戻ろうか、あずにゃん」

「あ、そうですね」

その後、二人で別荘に戻りました。

―――NOW LOADING―――

――三人称 side

「さて、そろそろ出てきたらどうだ、ファンガイア？」

別荘とは、逆方向を向いて言う藤馬。

その直後、

「ふん、バレていたか」

シースターファンガイアが現れた。

「気配が丸出しだからな、コウモリモドキ!!」

そう言って、キバットを呼び、掴む藤馬。

「ああ、ガブリ!!」

「っ!!」

キバットを右手の甲に噛ませ、全身に《魔皇力》を流す。

そして、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

藤馬は仮面ライダーキバへと変身した。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え!!》」

そう言つて、シースターファンガイアへと向かい、拳を放つキバ。

シースターファンガイアは、それをガードしつつ、流れるように電気を放った。

キバはそれを避けて一旦距離をとる。

「ちっ！」

こちらら、明日も朝が早いんだ。

一氣にいかせてもらう！」

そう言つて、フエッスルを三本抜き取る。

「おい、藤馬！」

今のお前じゃ、三本は無理だ、二分しか持たないぞ！」
キバットが忠告する。

「はっ、じゃあ二分で片付けりゃいい話だ！」

キバは、攻撃を避けながら、そう言つ。

「ふっ、なら片付けてみせろ！」

キバは、まずガルルフエッスルを、

「《ガルルセイバー！！》」

そして、バツシャーフエッスル、

「《バツシャーマグナム！！》」

最後にドツガフェッスルを、

「《ドツガハンマー!!》」

キバットに吹かせた。

すると、三体の彫像はキバの元へいき、身体に吸い込まれる。

ガルルは左手に。

バツシャーは右手に。

ドツガは胴体に。

その瞬間、拘束具^{カタナ}が巻かれ、弾けとぶ。

胸はドツガブレスト、左手はガルルアーム、右手はバツシャーアームへと変質する。

キバは、ドガバキフォーム（以降、DGBキバ）へと姿を変えた。

「はあっ!!」

DGBキバは、ガルルのスピードで近づき、
バツシャーの疑似水中環境^{アクアワールド}で身動きを取れなくして、

「ふんっ!!」

「ズバツ、ズバツ!!」

「ぐっ!!」

ドッガのパワーで、左手のガルルセイバーでまず斬りかかり、
右手のドッガハンマーで、

ードゴンッ!!

「ゴフッ!」

思いつきり、シースターファンガイアをブッ飛ばした。

「ぐっ、…く…そ…人間…が」

息も絶え絶えなシースターファンガイア。

「これで終わりだ!」

そう言つて、DGBキバはウェイクアップフェッスルを、キバット
に吹かせた。

「《ウェイクアップ!!》」

「はあああ……!!」

精神を統一させ、右足を振り上げる。

すると、右足の拘束具が解放され、蝙蝠を象った扉が飛び出す。
そして、片足だけで飛んで、そのままファンガイア目掛けて蹴りを
放つ!!

「だりやああああ!!」

《ダークネスムーンブレイク!!》

ドスッ!!バゴオオオオン!!!

シースターファンガイアを中心に、キバの紋章が砂浜に刻まれ、

パリイイイイイン!!

シースターファンガイアは、消え去った。

――NOW LOADING――

――藤馬side

あの怪人を倒した後、コウモリモドキと空をみていた。

「……藤馬」

何だよ、急にしおらしくなって、気持ち悪いな。

「だまれ、……迷いは無くなったか？」

そうだな……。

「まだあるさ。」

俺はこんなとき、どんな風にすれば良いかわからない。

でも、前に進むぐらいの事はしないといけないんだよ。

そうじゃないと、また被害が出ちゃうんし、唯達には泣いてほしくないしな。

だから、力を貸せよコウモリモドキ」

すると、コウモリモドキは、

「ああ、やはりお前はこうでなくてはな、藤馬」
ははっ、改めてよろしくな、相棒。

その時、みた夜空は俺の心のように、すみわたっていた。

I i t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 第十四幕 合宿 後編!! (後書き)

どうでしたか？

藤馬「おい作者、さっさとストック増やせ、あと一つしかねえぞ」

わぁってるわい！

それでは、

全員「次回をお楽しみに!!」

小休止♪ラスボス（宿題）！！

――藤馬 side

あ、どうも私こと中都藤馬です。

今日は、夏休み最後の日で、現在午前九時三十分です。

そして、俺は……。

「こんな量の宿題、終わるかああアア！！」

「叫んでいる暇があったらやれ、…全く」

「はあ、チャチャッとやるぞ……」

「お兄ちゃん、早く終わらせようよ……」

夏休みの宿題、というラスボスと戦っている所です。

皆さんの予想通り、私こと中都藤馬、宿題を全くと言っていいほど、やっておりません。

というわけでラモン、次狼、コウモリモドキに手伝って貰っています。

あ、リキは宿題出来ないの……。

「後、何があるんだっけ、コウモリモドキ？」

すると、コウモリモドキは、課題の内容が書いてあるプリントを読み始めた。

「英数国の問題集一冊ずつ、読書感想文四枚半、一言日記一ヶ月分、後は、」「ごめんなさい、俺が悪かった」……はあ」

「もう終わんねえだろ、これ」

そう言つて、ソファーに座る俺。

「おい藤馬、何をだらけてるんだ、さつさとやるぞ」
と、次狼が数学の問題集を片手にそう言った。

よくやれるな、次狼さんよ。

「ふつ、前の時と比べればな……」

「そうだね、あのときは桁違いだったもん」

何か、悟りを開いてるな……ラモンと次狼。

「コウモリモドキ、何があつたんだ、前に？」
と、俺が聞く。

「ああ、それはな、お前が記憶を失う前の話なんだが、今の倍ほどの宿題をやったよ……ブルブル」
と、コウモリモドキは震えながら言った。

お前らスペシャリストだったんだな……。

「……俺も頑張ろう」

それから、国語の問題集を解き始めた。

↓

――

――三時間後――午後十二時三十分――

「あ、後は、な、何が残ってるんだ？」

国語の問題集を解きながら、次狼達に聞く。

「そうだな、後は読書感想文と一言日記、そして今、お前の解いている国語の問題集だ」

へっ？

「早すぎだろ、終わるの!？」

「お兄ちゃんが遅いだけだよ。それに、そろそろご飯にしようよ……」

ラモン君、ひどくね？

すると、次狼が

「おい藤馬、お前が作れよ、昼飯」

何ですと、飯にも俺が主人なんですけど!？

「お兄ちゃん、国語の問題集も終わって無いじゃん、本当に遅すぎだよ……」

「ラモンたちのスピードが異常なだけだろ！」

って、あれ？

「コウモリモドキは？」

いつもだったら、真っ先に弄ってくるのに、どうしたんだ？

「ああ、キバットなら……」

と言って、次狼が冷蔵庫を指差す。

オイオイ、マジかよ……。

俺はキッチンまで歩き、

ーガラッ

冷蔵庫を開けた。

すると、俺の目に飛び込んできたのは、

「ふう、やはりトマトジュースは、ドロドロしたものが高だな」
満足そうな顔をして、トマトジュースを飲む、コウモリモドキだった。

「おい、クソコウモリモドキ？」

俺は、かなりイライラしながら聞く。

「うん、何だ藤馬、今忙しいんだが？」

「幸せそつに言うな、この野郎。潰すぞ？」

次狼とラモンが、頑張ってくれてるのに、こいつはなんなんだよ！

「まあ良いや、ご飯作るか。リクエストあるか、お前ら？」

そう次狼達に聞くと、

「「「別に何でもいい」「」」

こ・い・つ・らアアアアア！！

「てめえら、今、全国のお母さんを敵にまわしたぞ、何でも良いつつのが一番困るんだからな！！」

俺は思いつきり、そうシャウトした。

毎日毎日、メニューを考える、俺の身にもなってください。

そう思いながら、昼飯の調理に取りかかった。

↓

――二時間後――午後二時三十分――

「「「おお、お見事！」「」」

どうだ、今回の昼飯はそうめんに、天ぷらだ、この野郎！

というわけで、皆でしっかりと頂きました。

「ふう、食ったな」

そうだな、次狼。

「じゃあ、僕達はそろそろキャッスルドランに戻るね」

「へっ、何で？」

もうちょい居れば良いのに、片付けながらそう思っていた。

「後の宿題は自分でやれよ、それじゃあな」
そう言って、次狼達は俺の家から出た。

「アイツらには、今度お礼しなきゃな」

さて、後は……って、あれ？

ふと見た、次狼達がやってくれたはずの問題集。

だが、見てみると空白がかなり多く、結果的に半分も終わっていない。

ここで、思い返してみよう。

残りの宿題は、読書感想文、一言日記と次狼は言っていた。

でも、英語と数学の問題集は、半分も終わっていない。

つまり、本当に居なくなつた理由は、

「わからなくて逃げだしやがつた、アイツらああああ!!」

すると、コウモリモドキが、

「それはアイツら、勉強は全くしてないからな」と、言ってきました。

「それを早く言えよ、コウモリモドキ!!」

ああもう、後少しだと思つたのに……。

――NOW LOADING――

――

――

――翌日、学校

「お、おはようございます……」

俺は、この世の終わりのような顔をして教室に入った。

「おつ、おはよう藤馬、って、どうした宿題が終わんなかったとか？」

律がニヤニヤしながら聞いてくる。

「はは、そうだよ、そうです、そうですよー!!」

「なんで、三段活用？」

ははは、最高にハイって奴だ!!

周りの皆が心配そうな目で見てくる。

そりゃもう、こんな朝から、ハイテンションな奴が居たらひくよね。

「だったら、今やれば良いじゃん」

「なっちゃん、大丈夫？」

「藤馬君、朝からハイテンションね」

約三名は違うようだ。

お前ら、最高です。

「そうだよな、今やれば良いじゃん、よし、やってやるぜ！」

「よし、その意気だ藤馬！」

「頑張つて、なっちゃん！」

「わからないところが有ったら、聞いてね」

じゃあ、まず何からしようか、読書感想文からやってみますか！

――ガラッ！！

――

――

「「「「へっ？」「」「」

「はい、みなさん席について〜！

あれ、中都君はどうしたの、ぼうつとして？」

先生、空気を読もうぜい……。

その後、ゴリさんの今学期初めての、鬼ごっこになったのは言うまでもない。

It to be continued?

小休止 ♪ ラスボス（宿題）！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「し、宿題が終わらない……」

ざまあゝ

藤馬「くそう。

そっいえば、次から二話ぐらいシリアスなんだよな？」

ああ、新しいライダー登場だ、直ぐに消えるけど……。

藤馬「……Σ（「。□。」」

それでは、次回をお楽しみに！！

第一楽章 ♪ 第十五幕 蜘蛛のライダー？ 前編！！（前書き）

どうも388859です。

今、初めてのスランプ中です。

それを、考慮して第一楽章 ♪ 第十五幕をお楽しみください！

第一楽章 ♪ 第十五幕 蜘蛛のライダー？ 前編！！

――藤馬 side

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

二学期に入り、文化祭まで残り一ヶ月とちょいなので、練習には合いが入っている！……わけもなく、毎日お茶してるが、皆、学園祭を成功させるというのは同じだ。

それで今は、

（コウモリモドキ、後、どれくらいだ？）

（そのの……ただ、またファンガイアと、何かが消えたぞ）

ファンガイアを倒そうと思ったんだが、居なくなったみたいだ。

「最近、いきなりいなくなるのが、多くねえか？」

と思わず声を出す。

二学期に入ってから、ファンガイア等の怪人と、それとは違う何か
が、急に消える事が多くなった。

原因がわからなくて、かなりイライラする。

（何が起きてるんだ……？）

とりあえず、家に戻ることにした。

┆

┆┆

┆┆┆翌日、放課後 部室

「なあ、藤馬はあの噂、知っているか？」
律が、チョコケーキを食べながら聞く。

「噂って、最近何かあったっけ？」
漣に恋人が出来たとか、かな？

「ーゴツンッ！！」

「……そんなのあるわけないだろ！」
漣さん、顔赤いな、もしかして「もう一発いるか、藤馬」すいませ
んでした。

「それで、噂って何なんだ、律？」

紅茶を口に含み、某ハードボイルドのように聞く。
しかし、その噂は俺の予想をかなり越えていた。

「それがさ、

仮面ライダーだよ、仮面ライダー……！」

「ぼふっ!!」

俺は、口に含んでいた紅茶を、思いっきり吹き出した。

「ちょ、ちよつと先輩、紅茶を吐かないでくださいよ!」
す、すまん、梓。

「ごほつ、ごほつ、……それで、続きは?」

「藤馬も見ただ怪人達を、倒してまわってる奴がいるらしくてさ。
それが、テレビに出ている仮面ライダーの姿をしているって、最近、噂になっているぜ」

やべえよな、それって……。

「ふ、ふーん、その仮面ライダーってどんな姿なんだ?」

「確か、蜘蛛みたいな奴で、名前はレンゲルだったはず」

……へっ、キバじゃないの?

俺がそんな風に思っていると、

「ええ、りつちゃんそれは違うよ!私は、クワガタみたいな格好の、
ギャレンって聞いたよ!」

唯が私こそ正しい、みたいに言う。

情報が交錯してるな。

「ムギ達は、何か聞いてない?」
と、聞いてみる。

すると、

「私はそういうのは、あまり聞かないの。……ごめんなさい」
ムギさん、何かこちらがすいません。

「私は律の言った事しか、知らないけど」

「私は唯先輩と同じです」

俺以外にライダーがいるってことだよな……。

「なあ、藤馬は何か知らないか？」
と、律が質問する。

「へっ？……俺は何も知らないけど」

考え事してたから、全く聞いてなかったな。

「って、そんなことより、練習しましょうよ！」
梓が、握りこぶしを作り言う。

「そうだな、練習するか！」
漣が嬉しそうに言う。

「ええ、もうちょいお茶しようよ」「」

律と唯は、いつもお茶してるよな。

まあ、そんなこと言いつつも、準備をする二人。

俺も、ヴァイオリンを取り出し、いざ練習！

「それじゃ行くよ、
1・2・3・4!!」

1

11

|||

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000 1001 1002 1003 1004 1005 1006 1007 1008 1009 1010 1011 1012 1013 1014 1015 1016 1017 1018 1019 1020 1021 1022 1023 1024 1025 1026 1027 1028 1029 1030 1031 1032 1033 1034 1035 1036 1037 1038 1039 104

――ジャーン！！

「今の、かなり良かったな！」

「うんうん」♪

「！！！！」

この感じ、今までの怪人とは違う……！

とりあえず、行かなきゃ！

「ゴメン、用事だから、また明日！」

荷物を持っていて、桜高から出る。

（コウモリモドキ、今回は何だ？）

(ふむ、今回は……不味いな、アンデッドだ)

（アンデッド？それって何の怪人なんだよ）

（生物の始祖で不死の生命体だ、ハッキリ言って、お前じゃ倒せない）

（はぁ！？じゃあ、どうするんだよ！）

（さっきの、小娘の話が本当ならば、勝てるのだが……）

（何だかわかんねえけど、足止めだけでもしないと！）

――NOW LOADING――

――三人称side

ここは商店街、様々な人で賑わっている。

しかしそこに、

「ウウウ……」

と、怪人、ライオンアンデッドが姿を現した。

そして、ライオンアンデッドは近くにいた人を襲い始めた。

「うわっ、誰か助けてくれ！」

襲われた男が、助けを求めるものの、人が誰もいない。

その時、

「だりやあああ！」

藤馬が、飛び蹴りをして現れた。

「……グアッ！」

飛び蹴りで、ライオンアンデッドから、男を離す事が出来た。

「き、君は「逃げてください、早く！」……は、ハイッ！」

男が一目散に逃げるのを見て、ライオンアンデッドが、男を追いかけようとする。

しかし、藤馬がライオンアンデッドを羽交い締めにするが、逆に投げ飛ばされた。

藤馬は、地面を転がりつつ、キバットを呼ぶ。

「ちっ、コウモリモドキ！」

「あくまで、足止めにしておけよ」

「わぁってる！」

「行くぞ、ガブリ!!」

「っ!!」

藤馬は右手をキバットに噛ませ、《魔皇力》を全身に流す。

その瞬間、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ!!》」

そう言っつて、キバはライオンアンデッドへ拳を放つ。

それに、ライオンアンデッドは、手にはめてあるメリケンサックで対抗する。

拳と拳がぶつかり合い、勝ったのは、

「くっ、思ったより力強いな、けど!」

「ードゴッ!!」

「ワウッ!!」

キバだった。

この数ヶ月間、色々な怪人を相手したキバに、ただ腕力が強いライ

オンアンデッドが勝てる道理はない。

そのまま、ライオンアンデッドに蹴りを放ち、投げ飛ばす。

「あれ、何だかあっさりだけど……」

そう言っつて、ウェイクアップフェッスルをキバットに吹かせた。

「《ウェイクアップ!!》」

すると、周りの景色が夜へと変わり、三日月が出てくる。

「はあああああ!!」

右足の拘束具^{カタナ}を解放し、蝙蝠を象った扉^{ヘルズゲート}が飛び出す。

そして、片足で一気に頭上へ飛び上がり、ライオンアンデッドへ蹴りを放つ!!

「どうおりやあああ!!」

《ダークネスムーンブレイク!!》

ドスッ!! バゴオオオオオン!!!

ライオンアンデッドの身体を中心に、キバの紋章が道に刻まれる。
そして、

ーードゴオオオオオン!!

ライオンアンデッドは爆発した。

「何か、拍子抜けだったな……」

キバは、思わずそう漏らし、変身を解いた。

その瞬間、

ーバキッ！

「ごはっ！」

藤馬が何かに、顔を殴られる。

「藤馬、油断するなといつも言っているだろう！」
キバットが怒りながら言う。

「ちくしょう、一体何に殴られたんだ……！？」
藤馬は自分を殴った正体を見て、絶句した。

なぜなら、さっき倒したはずのライオンアンデッドが、ピンピンしているからだ。

「な、何で……？」

藤馬がそう呟いた瞬間、ライオンアンデッドは藤馬の間合いに入り、メリケンサックを腹に食い込ませた。

「かつ……はっ……！」

五メートルほどぶつとばされ、地面を転がる藤馬。
生身の人間に、怪人の全力の拳がめり込んだということもあって、立ち上がれない。

「おい、しつかりしろ！」

キバットが藤馬を鼓舞するが、それでも立ち上がれない。

ライオンアンデッドが、藤馬へゆっくりと近づく。

「ぐ、くそ……」

そして、ライオンアンデッドが、藤馬に拳を振りおろす……

「ガキッ！！」

されず、ロッドのようなものに防がれた。

ロッドの持ち主は、そのままライオンアンデッドをロッドで殴り、投げ飛ばす。

「ふんっ！！」

藤馬が、よくロッドの持ち主を見ると、基本カラーは緑、外見は蜘蛛のようになっていて、複眼は紫、それはまるで……。

「まさか、俺以外の仮面ライダー……？」

と、仮面ライダー？に聞く。

すると、

「そう、俺は仮面ライダーレンゲル。

全ての怪人を倒し、

お前を倒す男だ!!」

と、レンゲルは藤馬に宣言した。

I I t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 ♪ 第十六幕 蜘蛛のライダー？ 後編！！

ー三人称side

「……はい？」

と、藤馬は間抜けな声を出す。

それも仕方無いだろう、味方だと思った仮面ライダーに倒すと言われたのだから。

レンゲルは、ラウズカードを二枚取りだし、杖、レンゲルラウザーにスラッシュする。

「《BLIZZARD・SCREW》」

スラッシュしたカードの絵柄が、レンゲルの体へと吸い込まれ、そしてライオンアンデッドへと、冷気を纏ったコークスクリューを放つ！！

《BLIZZARD GAYLE！！》

ドゴツ、パキイイン！！

ライオンアンデッドの身体が凍りつき、腰のベルトが展開する。

レンゲルはラウズカードを、ライオンアンデッドへと投げる。すると、

ーシューウウウウ……

ライオンアンデッドの身体がラウズカードに吸い込まれ、ラウズカードはレンゲルの手へと戻った。

「スピードスートのラウズカード……か」

レンゲルがそう呟く。

「てめえ……何しやがった？」

藤馬が立ち上がりながら、レンゲルに聞く。

「ああん？封印に決まってるだろ」

「封印ってそのカードにか？」

「はあ？今更なに言ってるんだ、お前もライダーだろうが、中都藤馬よお」

その瞬間、藤馬の顔が曇る。

「何で、俺を知ってるんだ……？」

藤馬はライダーである事以外は只の学生だ。つまり、ほぼ一般人。よって知っている人間は少ないはずなのだが……。

「お前は転生者だろ」

「っ！、そんなことまで知ってるのか……」

「もしかしてお前、自分の置かれている状況さえわかってねえのか？」

「何か知っているか、コウモリモドキ？」

「いや、私も知らないな」

藤馬とキバットが答える。

「はあ、一から説明しといてやる、事情も知らない野郎を、攻撃する趣味は無いんでね……」

――NOW LOADING――

――藤馬side

あのレンゲルつつつ野郎の話を簡単にすると、こういう感じ。

レンゲルは元々普通の人間で、神を名乗る男から俺を殺せば、元の世界へ帰してもらえるらしい。

そして、レンゲルが一度でも倒されればレンゲルは消滅し、代わりに新しいライダーが送られるらしい。

「それで、俺を殺すって言ったわけか」

成る程な……。

「それじゃあ三日後、ここに来て俺と戦え」

「ま、待てって、アンタと戦う気はないんだ！」

藤馬がそう言った直後、

――ジャキツ！

「残念ながら、コッチにはあるんでな」

首元にレンゲルラウザーが押し当てられる。

くそっ！どうすりゃ良いんだよ……。

「……それじゃあな」

そう言って、レンゲルは去っていた。

――

――三日後、 部室

「はあ」

お茶を飲み、ため息をつく。

どうすっかな、本当に。

人を守るためにライダーになった、ほぼ成り行きで。

でも、なって良かったと思う。俺の手が届くことが出来たから。

「……い、……馬！」

レンゲルは俺のせいで、ライダーになった。俺が居なけりゃ元の世界で幸せになってただろうに……。

「……馬、藤馬！……！」

「おわっ……！」

目の前に澪さんの顔がありました。

び、びつくりした。

「な、何、澪？」

「練習するぞ、練習！」

「へっ？」

周りを見ると、皆が心配そうに俺をみていた。

「藤馬君何があつたの、最近ぼうつとしてないかしら？」

「そうだぞ、お前最近変だぞ？」
と、律とムギが言ってくる。

「そ、そんなことあるわけ無いぜい！」と、笑いながら言うが、

「なっちゃん、顔ひきつつてるよ……」

「先輩って、嘘つくのヘタですよね」

ぐっ！！てめえら、俺が気にしている事を……。

「気にしないで良い！

……それで何が有ったんだ？」

「うん。鬼軍曹（ボソツ」

ーゴソツ！！

「サーセンしたああ！！」

「全く……私達は仲間だろ」

「っ！！」

「そうそう。

部長のあたしに、なんでも相談したいこと言ってみろよ」

「りっちゃん、部長は関係ないと思う」

「そうですよ、真面目に考えてください！」

お前ら……。

「藤馬君、あなたの悩みが何なのかわからないけど、話を聞くぐらいだったら出来ると思うの……」

ムギが、俺の手を握って天使のような笑みで言う。

全く幸せものだな、俺。

「みんなあー」だから……」へっ？」

ムギがちよつと顔を赤らめながら、

「その、

……R指定のもので、ドンと来てね!!」

部室の空気が、氷河期に突入した。

――ガシッ、グリッ!!

律のヘッドロックが、俺に炸裂した。

「オウッ!!」

俺よ、ついに（社会的にも、肉体的にも）死ぬときが来たな。

――ガッンッ!!

「タヒチッ!!」

そして、次に唯と梓のダブルゲンコツが頭に炸裂した。

ちなみに、澪は顔を真っ赤にして気絶してます。

「最低だな、藤馬……」

「なっちゃんのエッチ……」

「先輩、ドン引きです……」

澪とムギ以外の視線が、ゴキブリを見るような冷たさだ……。俺が、床に伏したままそう思っていた時、

「藤馬君、大丈夫？」

ムギさんや、貴方が原因なんですけど？

でも……。何か気持ちが楽になったな。

「本当にありがとうな、皆！」

「Σな、なっちゃんがM！」

「ち、違うわ！」

今のは気持ちが楽になったって意味だよ……」

「藤馬先輩、今のは誤解しますよ……」

梓まで、そう言うこと言わないで！

でも、コイツらがいなかったら、俺は何も出来ないんだろうな……よし！

「全く、いつも馬鹿な奴が馬鹿じゃないと、調子狂うよな」

「へえ、いつも藤馬を心配してたのは、誰だっけ？」

「零だって心配してたじゃん！」

「ふふふ、いつもの藤馬君に戻って良かった♪」

「っ！」「」

丁度良い、行きますか！

「みんなー！」「

「「「「え、何？」「「「「

「本当にみんなありがとう、それと……」

「みんなの事、絶対に守るからー！」「

「「「「っ！！／／／／／」「「「「「「

「それじゃあ、また明日な！」「

俺は、直ぐに桜高を飛び出した。

（コウモリモドキ、アンデッドをぶっ潰すぞ！）

（ふっ、気合いが入ってるな、小娘共の事を大切に思ってるのだな……）

（はっ？何言ってるんだ、仲間なんだから当たり前だろ？）

（はぁ、あの小娘達も相変わらず大変だな……）

――NOW LOADING――

――三人称side

「これで終わりだ！」

レンゲルが、レンゲルラウザーにラウズカードをスラッシュする。

「《BLIZZARD・BYTE》」

レンゲルへ、カードが吸い込まれる。

そのまま、アンデッドへ冷気を吹き付け、足で蹴り碎く！！

「おりゃああああ！！」

《BLIZZARD CRASH！！》

バキヤアアアン！！

レンゲルは、アンデッドにラウズカードを投げ、封印した。

「ふうっ！」

レンゲルが変身を解き、二十代ぐらいの男になる。

「……見つけたー！」

そこに、アンデッドを倒しに来た、藤馬が現れた。

「へえ、お前は……わざわざ倒されに来たのか？」
レンゲルが藤馬に聞く。

「違うな、俺は……コウモリモドキー！」
そう言ってキバットを呼び、掴む。

「アンタを助ける！」

「はあ！？……ふざけるな！」

「行くぞ、ガブリー！」

「っー！」

藤馬は、右手をキバットに噛ませ、全身に《魔皇力》が流れる。

すると、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

レンゲルも、レンゲルバックルを装着し、ミスリルゲートを開く。

「《変身!!》」

「《Open Up》」

藤馬はキバ、レンゲルはもう一度変身した。

「行くぞ!」

まずレンゲルが突っ込み、拳を放つ。

その拳をキバは防御し、お返しに左フックをぶちこむ。

レンゲルは一回下がる

「俺はお前を殺すと言った!なのに、その俺を助ける……」
そう言っつて、レンゲルラウザーを呼び出す。

「なぜだ!?!……俺には理解できない!」

そして、レンゲルラウザーをキバの腕、胴体、足、に振り回す。

ーバシ、バシッ、……ドゴッ!!

「……がっ!」あまりの連撃に地面を転がり、フラフラと立ち上がるキバ。

「げほっ、げほっ……俺は人を守るためにライダーになった、だから助けるんだ!」

キバは、自分を奮い立たせるように言う。

「お前に、俺の何がわかる！」

たった一回負けたら、俺は消えるんだぞ……」

たったの一回も負けは許されず、ただ戦い続ける。

「自分なら耐えられないだろうな。

キバは心の中で、そう思っていた。

レンゲルは、レンゲルラウザーからラウズカードを三枚取り出し、スラッシュする。

「《RUSH・BLIZZARD・POISON》」

ラウズカードの絵柄が吸い込まれ、レンゲルの最強の技が発動する！

「だから勝ち抜いて、皆の居る元の世界へ帰るんだ……！」

レンゲルはキバへ跳びながら、レンゲルラウザーから冷氣と猛毒が吹き出す……！

《BLIZZARD VENOM……！》

「あああああああ……！」

それに対してキバは……。

「……けんなよ」

キバ、いや藤馬は、

「ふざけんな、この馬鹿野郎オオオオ！！！！」

かなりキテいた。

「《ウェイクアップ！！》」

キバはフエツスルをキバツトに吹かせ、拘束具^{カタナ}を解放する。

「てめえが殺しなんかして、元の世界に帰ってから、幸せになんてなれるわけねえだろうが！！」

そんな事を、絶対にさせるわけには……」

キバは、ギリギリでレンゲルの攻撃を避ける。
しかし脇腹に毒が擦り、動きが一瞬鈍くなる。

――だからどうした？

「っあああ！！！！」

身体を奮い立たせ、力を解放した右足でレンゲルラウザーに回し蹴りをぶちこむ！！

「俺が許さねえんだよおおお！！」

《ダークネスムーンブレイク！！》

バキヤツ!!

必殺技を放ち、地面に着地する二人。

勝ったのは……。

ミシ、ミシミシミシ、カシャン!

そんな音と共に、レンゲルラウザーが壊れる。

キバだった。

「ははっ、やべえなこりゃ……」

思わずそう漏らし、変身解除しながら、地面に倒れ込む藤馬。

毒の効果が、後からきたようだ。

「おい藤馬、今回はきわどすぎるぞ!」
キバットが治療しながら注意する。

「……おい、なぜだ?」

レンゲルも変身解除して、藤馬に質問する。

「うん、何が?」

「何がじゃない!……何故俺にとどめをささない!?」

レンゲルにしてみれば、止めを武器にされたのだ。
疑問が出るのも無理はない。

「そんなの消えて欲しくないからに、決まってるだろ？」

「っー！」

「俺はもう、誰にも死んで欲しくない。そう思ったただけだよ……それに」

「お前を助けるって言ったしな！」

藤馬は笑顔でそう言った。

するとレンゲルは、

「はあ、何か俺が馬鹿みたいだな……」

「同情するぞ、レンゲル」

キバットと、レンゲルの間に絆が生まれたようだ。

「なんか、お前ら仲良くなってるない？」

「いや、そんなことないぞ」

「ウソつけ、息ぴったりじゃねえか！」

という感じで、コントをしていた時だった。

「っ、どうやら結局、消えるらしいな」

レンゲルがそう言った瞬間、身体が下半身から消えていく。

「おい、お前の身体……」

突然の事に、藤馬が少し混乱しながら言う。

レンゲルは、まだ誰にも負けていないのだから、消えないはず。

だが、

「どうやら、誰かが監視してたらしいな。大方、レンゲルバツクルに、カメラでも付けていたんだろう」
と、キバットが解説する。

「そんな……助けられる方法は？」

藤馬がキバットに聞くも、目を伏せる。

「くそっ、ふざけるな！！コイツは絶対に「藤馬！！」……レンゲル？」

レンゲルは悔しそうな顔をしながら、藤馬を制する。

レンゲルも悔しいのだろう。

生きたいと、心の底から思っているだろう。

――しかし、

「良いんだ、ありがとよ」

「何で笑ってるんだ、生きたいんだろ！」
藤馬はレンゲルの胸ぐらを掴む。

「まあ、落ち着け」

レンゲルはそう言って、藤馬を落ち着かせる。

「俺さあ、藤馬に助けてもらって良かったよ。

殺しなんかしたら幸せになれねえよな、そりゃ」

レンゲルは満ち足りた表情で、消えていく身体を見ながら言う。

「だから、本当に……」

――助けてくれて、ありがとうな。

「っ!!」

そしてレンゲルは消えた。

「あの野郎、何があったんだよ……」
そう言って藤馬は、空を見る。

――こちらこそ、本当にありがとう。すごく救われたよ……。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 ♪ 第十六幕 蜘蛛のライダー？ 後編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「何で、レングルをレギュラーにしなかったんだ？」

いやあ、一応けいおん！の二次創作だからね。
敵として、出るのは良いけど、味方だとちょっとな。

藤馬「本心は？」

捌ききれません。

藤馬「やっぱり……というわけで、次回から学園祭編だな」
ああ、お前一回フルボッコされるから。

藤馬「また、負けるの！？
最近負けすぎじゃねえか？」

大丈夫だ、後少ししたら、パワーアップ！

藤馬「何かキモいぞ、
それでは

全員「次回をお楽しみに！！」

第一楽章 ♪ 第十七幕 学園祭 前編!! (前書き)

どうも、388859です。

最近、一万五千PVを越しました!!

何かやる気ですよね、行き詰まったけど(え

というわけで、これからもよろしくお願いします。

第一樂章 ♪ 第十七幕 学園祭 前編!!

――藤馬 side

――声が聞こえる。

――なっちゃん、私達を守ってくれるんだよね……。

――ああ、皆を守るよ!だから……。

――でも、もう良いんだ、藤馬が苦しむのは見てられない……。

――守るからキミを。お願いだから……。

――さようなら……。

皆が、俺を置いていく、真っ暗な暗闇に……。

――待つて、お願いだから!!

――ガバツ!!

「待つて!!」

あれ、何か明るいような?

周りを見渡してみると、クラスメートの皆が俺を見てくる。
あつ、授業中でした！

「ほう、ボウフラはワシの授業を寝るんじゃない？」
「ーガシッ、グリグリ……！！」

しかもゴリさんの……。

つか、頭を捻り潰す勢いじゃね？

「いやいや、そんなわけ無いじゃないスか、ゴリさん！」

「ほう、おんどれはまだワシの事を、ゴリさんとよぶんじゃのお？」

あ、やべ、つい本音が！

く鬼ごっこスタートく

ーバツ、ガラッ！！

「待たんかい、ボウフラアアア！！」
待てるか、捕まったらフルボッコ確定ですよ！

「すいません、保健室行きたいんです、先生！！」

「そんな走ってる時点で、元気一杯じゃろう！！」

くっ、バレたか！

――NOW LOADING――

――梓side

あ、どうも、中野梓です。

今は、友達の憂と昼ごはんです。

「じゃあ、まだ唯先輩治らないんだ……」

「うん、あの調子だと多分また明日も……」

文化祭まであと少し。そんな時に、唯先輩は風邪をこじらせた。
……全く、困った人だなあ。

「残り、後二日か……」

「私が代わってあげられたらな」

代わるって、どうやって？

「それは……口移しとか!!」

大胆な子……。

と思っていたら、

「ほわたああああ!!」

ーードゴツ!!

『ビクッ!!』

な、何か聞いたことがある声、ドアを蹴破る、こんなことをするのはあの人しかない。

「あ、藤馬さん!
どうしたんですか」

「ていうか、蹴破っちゃダメですよ、先輩!」
なんか、ボロボロだけど……もしかして!

「また、郷田先生に追いかけてるんですか?」
「Oh yes!
だから、匿ってください!」

「別に土下座しなくても……」

藤馬先輩の好感度がドンドン下がっていく。

ーーガシッ!!

「ボウフラア、おんどれはまーた、ドアを蹴破ったのお、ええ?」

郷田先生が、藤馬先輩の肩に手を置く。
何かミシミシって聞こえるけど、き、気のせいだよね！

「せ、先生。弁当が食べたゝはゝい、説教の後でじやいゝ」ちよ、
頭が床で擦れてる、ゴリさん禿げるつゝあああああああああ
……」

先輩って、よく命が持つな……。

――NOW LOADING――

二時間後♪

――藤馬side

「や、やっと説教が終わった……」

最近、死の危険を感じるようになってきたな。

そう思った瞬間、

「「っ！……」」

ファンガイアの気配が出た。

しかし、

……何だよこれ！？

恐怖で、身体の震えが止まらない……。

くそっ、止まれ、止まれ、止まれ、止まれよ！

足を何回か殴り付ける。

ーガッツ、ガッツ！

はぁ、はぁはぁ……。

止まった……よし！

俺は教室へと、全速力で走る。

ファンガイアのはずなのに、威圧感が段違いだ！

嫌な予感がするな……！

そう思いながら、階段を一気に登ったとき、

（藤馬、急いでこい！

今回はかなりマズイ、《チェックメイトフォー》だ！）

やっぱり、不味い奴かよ！

よし、教室だ！

――ガラッ！！

「あら、中都君。席につきなさい。」すいません！今日は早退します
んでー！」

あ、ちょっと待ちなさい、中都君ー！」

荷物を持って、学校からフルスロットルで出る。

――

――

――三人称side

「……ゲームスタートだ！」

筋骨隆々の男がそう言って、裏通りを歩き出す。

実はこの男が、《チェックメイトフォー》の一人、ルークである。

「そこまでだ、《チェックメイトフォー》！」

走ってきた藤馬が、それに待ったをかけた。

「うん？……何だ貴様？」

ルークが藤馬に聞く。

「お前を倒しに来た！」

ちよつと間が空いて、

「ふふ、あっはっはっ！」

人間のお前が、俺を倒すだと！」
ルークが笑い出し、藤馬を見下す。

「……ナメるなよ、人間風情がアアア！！」

そう言っつて、ライオンをモチーフにしたファンガイア、ライオンファンガイアへと姿を変えた。

「コウモリモドキ！」

藤馬もキバットを呼び、掴む。

「ほう、成る程な……貴様が噂のキバか」
ライオンファンガイアが構える。

「気を抜くなよ、ガブリ！！」
「っ、わぁってる！！」右手をキバットに噛ませ、《魔皇力》が全身に流れる。

すると、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身！！！！》」

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え！！》」

キバはそう言っつて、ライオンファンガイアとの距離を詰める。

対し、ライオンファンガイアは重戦車のようにゆっくりと進む。

「オラア！！」

先手は、キバ。

胴体に拳の連撃を放ち、一気に攻める。

しかし、ライオンファンガイアは受け続けるものの、

ーガシッ！！

「その程度か……」

その拳は全然効いておらず、逆に腕を捕まれ、

「手間を掛けさせるな、雑魚が」
投げ飛ばされた。

「くっ、パワー不足か、なら！」

空中で受け身を取り、ドッガフェッスルを抜き取る。

そして、フェッスルをキバットに吹かせる。

「《ドッガハンマー！！》」

キバの元へ飛んできた、ドッガの彫像を掴み、Dキバへとフォームチェンジした。

Dキバはライオンファンガイアへ、ゆっくりと進む。

そして、ドッガハンマーをライオンファンガイアに叩きつける。

しかし、相手は《チェックメイトフォー》の一人。

Dキバのパワーをもともせず、逆にドツガハンマーを捕まれ、奪い取られた。

「ふっ……！」

そしてライオンファンガイアは、奪ったドツガハンマーで、Dキバを地面に叩きつける。その後、足で何回も踏みつけ、近くの壁まで蹴り飛ばした。

「ぐっ、くそっ……がっ……強い……！」

「弱いな、キバ？」

Dキバは、ヨロヨロと立ち上がり、ライオンファンガイアへと突っ込む。

すると、ライオンファンガイアは距離を一気に詰め、Dキバの胴体に蹴り込む。

Dキバは片手で防ごうとするが、そのスピードとパワーに防ぎきれず体制を崩してしまい、蹴りをもろに五発以上食らう。

そして、ライオンファンガイアは、指先からロケットクローをDキバへ放つ。

「ドガガガガッ！！」

「ぐああああ……！」

Dキバは強制的に変身解除され、藤馬は地面をゴロゴロと転がり、動かなくなる。

どうやら、気を失ったようだ。

「おい藤馬、藤馬!!」

キバットが呼び掛けるものの、気を失ったままだ。

ライオンファンガイアは、人間体、ルークへと戻る。

「興ざめたな……」

藤馬にそう言っただけでルークは去った。

――NOW LOADING――

――憂side

どうも、平沢 憂です！

今は学校から下校中です。

早く帰って、お姉ちゃんの看病をしないと！

「うん、あれって……?」

私の目線の先にいたのは……。

「藤馬、しっかりしろ、おい藤馬!!」慌てているキバット君と、

血だらけで道に倒れている、藤馬さんでした。

I I t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 第十八幕 学園祭 中編！！

――藤馬 side

俺はゆつくりと、目を開ける。

あれ、ここは唯の家だ……。

身体中が……痛えな……。

俺は……何やってたんだっけ……。

確か、ルークに……負けて……。

「そっだー!!」

俺は身体を起こそうとする。

「あ、痛え!」

身体中に鋭い痛みが走る。

よく見ると、身体のあらゆる所に包帯が巻かれている。

ボロボロだな、俺。

「むっ、起きたか、バカ藤馬」

「良かった、目が覚めたんですね!」

俺の声を聞いて、コウモリモドキと憂ちゃんが来た。

憂ちゃんには、感謝しないとな。

「憂ちゃん、ありがとな。助けてくれて」

「いいえ、良いんです。

困った時は、お互い様ですし」

本当にスゲエな、包帯もちちゃんと巻かれているし。

それにしても、強かったな。

《チェックメイトフォー》の名は、伊達じゃないか……。

「藤馬さん、大丈夫ですか？」

へっ、何が？

「すごく、気難しい顔をしてましたよ？」

そりゃ、

「まさか、ここまでボロボロにされるなんて、思いもしなかったかな……」

死ぬかと思ったわ、マジで。

ーブルブル……。

はは、体が震えてやがる……。

「藤馬さん……」

――

――

――

その後、憂ちゃんにはお礼を言って、家に帰った。

今は、ソファ―に寝転がってる。

「ふう……」

アイツにどうすれば勝てる……。

やっぱりてんこ盛り（ドガバキフォーム）とか。

でも、あれは制限時間があるからな……。

「……おい藤馬？」

ん、何だよ？

「いや、何でもない……」

変な奴だな。

あつ、もうこんな時間だ。

最後にヴァイオリンを弾いて、心を落ち着かせるか……。

そう思ってヴァイオリンを準備して、弾き始める。

――演奏♪ふでペン♪ボールペン♪ヴァイオリンverrr――

――NOW LOADING――

――

――翌日♪放課後

ああ、傷が痛えな。

ていうか、起きたら午後になってたんだもんな。

今は部室へと向かう途中。やっと着いたけど、音が全然聞こえないな……。よし、行きますか！

――ガチャ

「ちーす、三河屋です」

どうよ、この空気をぶっ壊すような入り方！

（いや、バカだろ……）

アンタはだまらっしゃい！

「うお、激しくデジャブ！」
へっ？

「藤馬、何で昨日は直ぐに帰った……どうしたんだ!？」

「大変、早く治さないと!」

「藤馬先輩、ボロボロじゃないですか!」

「藤馬さん、まだ怪我してるんですから、座ってください!」

「全く、面倒事を増やさないでよね」

「あれ、なっちゃんだ」

皆の反応がさっきのボケより、怪我の方に反応しとる。

何か、寂しいのう……。

「どうしたんだ、藤馬?何か泣きそうだけど」

「いや、良いんだ。うん……別に寂しくないもん」

「何か、キモいぞお前」

うう、心が折れそうです。

というわけで状況説明。

怪我については、不良をフルボッコした時に出来た、と言っておい
た。

「へえ、藤馬って強いんだな!」

「かつこいいわ、藤馬君」

「ま、まあな」

本当は、逆にボコボコにされたんだけどね……。

そして、梓。そんな睨まんという！

そう思っていたら、梓が涙目で、

「藤馬先輩は、危ないことしないでください！
心配したじゃないですか……」

梓って、本当に妹みたいだな。

俺は梓の頭を撫でながら、

「……大丈夫。
そこらへんの不良には負けねえよ！」
と、安心させるように言った。

「いや、その怪我だから心配なんですけど……」

あ、それもそうですね。

「そ、それじゃあ練習しようぜ！」

「……誤魔化した……」

「ていうか、藤馬はその腕でヴァイオリンは弾けるのか？
と、零が聞いてくる。

「あ、うん、大丈夫だぜい、こんな感じ……痛え！」
手をブンブン振り回してたら、パネエよ（痛み的な意味で）！

「そんなに振り回すからだろ」

「右に同じだ」

くそ、暴力コンビ（律と漑）め！

ーメリッ！！

「オオウツ！！」

だからって、アイアンクローニ発は無いでしょうよ。

！

――

――

というわけで部活も終わり、家に帰ってるんだけど……。

「何で俺が、唯を背負ってるんだ？」

「えへへ、なっちゃんの中であつたかいな」

「「む」」

そして憂ちゃんと、梓はなんで睨んでいるの？

「「なんでもないです！」」

さいですか。

ちなみに、何でもこうなったかというと、
唯が風邪でダウン↓誰か家まで担いで！↓藤馬がやれば？（by
漣）↓何でや！！↓なっちゃん、ゴメンね（涙目）↓……了解
という感じ。

それにしても唯は軽いな。

一体、何キ口何だろう……聞いたら死ぬな、多分。

そんな感じに考えていると、

「あ、私こっちなので、それでは」

と言って梓が帰っていった。

「おう、じゃあな！」

「梓ちゃん、また明日！」

「あずにゃん、まったね〜」

俺たちも家に向かって、歩き出す。

↓

↓

——三人称side

三人は梓と別れ、少し歩いたら平沢家に到着した。

「あの、今日は本当にありがとうございました。
怪我也全然治ってないのに……」

憂が申し訳なさそうに言う。

「いやいや良いんだ、じゃあまた明日ね」

「はい、また明日！」

そう言って、唯と憂は家の中に入っていった。

「さて、何のようだ、ずっと俺をつけてきて？」

藤馬は、後ろの方を見る。

そこには……。

「え、私はキミに、会いたかったただだよ？」
相変わらずフードを被った、クイーンがいた。

「まあ。

随分と感動的な事だな、それは。嬉しくないけど」

一回フルボッコにされた相手に会えて、嬉しい奴はMだ」作者……
潰すぞ」ハイ、スイマセンデシタ。

「それで用件はなんだ。
まさか、ただ会いに来ただけじゃないだろう？」
藤馬がクイーンに聞く。

「まあね、キミが持つべき物を渡そうと思ったんだ」
クイーンは円盤上の何かを取り出し、開ける。

「……メダルか、それ？」
中には、恐竜の模様入りの丸いメダルが九枚入っていた。

「違うよ、これは欲望の結晶^{オーメダル}、その中でも強力な《コアメダル》を
破壊できる《コアメダル》」

すると九枚のうち、七枚のコアメダルがひとりでに動きはじめ、

「ギルのコアだよ」

ーバシユン！

藤馬の体に吸い込まれた。

「ぐつ、ううう……あつ！」

藤馬が地面にのたうちまわる。

「大丈夫、直ぐに収まるよ、それとこれも……はい」
そう言つて、長方形の石みたいなものを取り出し、藤馬に渡す。

「はあ……はあ……な、何だよ、これ？」
藤馬は、クイーンから渡されたモノを見て呟く。

「これからの戦いで、いずれ必要になるもの……」クイーンは悲しそうに言って、言葉を切る。

「まあ、ルークぐらいには勝ってもらわないと!」
その声色はどこか無理をしていた。

「何で、そんな悲しそうな顔をするんだ、クイーン?」
藤馬は質問する。

「そ、そんなことないよ!」
「ウソ言つな、そんな悲しそうな声して信じられるか!」
藤馬が激昂する。

「……また、会えるといいね」
そう言つて、姿を消す。

「ちょ、ちょっと待てよ!……何なんだよ、アイツ」
藤馬はクイーンが消えた場所を、しばらく見ていた。

――

――別世界、教会

ここは教会。
その中でクイーンが廊下を歩く。

ーコッ、コッ、コッ

「ふう、なっちゃんはやっぱり鋭いなあ」

クイーンは歩きながら、そう呟く。

すると、

「おいクイーン、ズルいぞ。お前ばかり、アイツに会って！」

「久し振り〜」

前方から、クイーンと同じようなフードを被った女が二人あらわれる。

「ん……メズールちゃん、タブーちゃん！

何か、久しぶりだね！」

「誤魔化すなよ、クイーン！

それで、アイツにはあれを渡したか？」

メズールがクイーンに確認する。

「うん。でも、やっぱりなっちゃんにメダルを渡すのは、嫌だったなあ……」

クイーンが悲しそうに言う。

「でも、仕方無いわ。彼を助けるためですもの……」

タブーは、決心するように言って、

「それじゃお茶にしましょうか、久し振りに〜」

「……そうだな」

「さんせい！」

近くにある部屋に入り、三人はティータイムを始めた。

I t o b e c o n t i n u e d

第一章 ♪ 第十九幕 学園祭 後編!! (前書き)

挿入歌 ふでペン〜ボールペン〜

第一楽章 ♪ 第十九幕 学園祭 後編！！

――藤馬 side

「くそっ、何だったんだよ！」

クイーンの奴、何をしゃがったんだ？

コアメダルとか言うものが、俺の身体に入ってたし……。

俺は、石で出来た何かを見る。

「これって何なんだよ……？」

これから必要になるものって言ってたけど。

「コウモリモドキに聞いてみるかな……」

（おい、コウモリモドキ！）

（……（・・）zzz）

この野郎、潰してやろうか……。

俺はヴァイオリンケースに入っている、コウモリモドキにアイアン
クローをぶちこむ。

――メリッ！！

（うう……Σ（「。□。」）

「……何してんだ、てめえは？」

「こ、これは違う！コウモリは夜行性だ」「だまらっしゃい！」「……ぶべっ！」

コウモリモドキに、右ストレートをプレゼントしてやりました。

というわけで、家の中でコウモリモドキに状況説明。

「紫のコアメダルがお前の身体に入ったと！？」

コウモリモドキが声を荒げる。

「ああ……やっぱり、マズイ代物なのか？」

何も、変化はないけど。

「メダルの力は絶対に使っなよ、人に戻れなくなるからな……」

「そんなにやべえのかよ！？」

あの野郎、そんなやばすぎるモノを俺に入れたのか！？

「あとは……これも使っなよ！」

そう言っつて、コウモリモドキが指差したのは、さっきの石みたいなもの。

「そういえば、これは何なんだ？」

「これは欲望の王、オーズに変身するためのドライバーだ」
変身ベルトってことか？

「ああそうだ。」

今は封印されてこうなっているが、力はキバと同じぐらいだからな」

は、こんなガラクタみたいなものがね。

そう思いながら、ドライバーを見る。

「それより食事にしないか、腹が空いているんだ」

「そうだな、何にしようかな」

ドライバーをテーブルに置き、俺はメニューを考え始めた……。

――

――

――二日後、学園祭当日！

ついにこの日が、

「キター――！！」

「うるさい（です）！！」

三人とも、そんなにピリピリしなくても……。

今現在の時刻、十二時三十分。

もうすぐライブですよ、つつう時に唯はまだ来ない。

でも、多分……。

「そんなに心配しなくても、アイツは来るだろ？」

俺の言葉にみんながうなづく。

その後は、和が来たり、次狼達が冷やかに来たり（来た瞬間に、窓から投げ飛ばした）、さわっちが来たりしたが、唯はまだ来ない。

ふと、時計を見ると、時計の針は十三時を指していた。

「そろそろ、講堂に入らないとね」

「ちょっと、待ってy」……「P i P i P i」ああ、もう何だよ、こんなときに……」

そう言っつて、携帯のディスプレイを見ると……。

「っつて、唯じゃん!」

「……えっ、本当に!」……」

そう言っつて、皆が寄ってくる。
いや、狭いんですけど……。
とりあえず、電話に出るか。

「もしもし、今どこにいるんだよ、唯?」

「えっと、後、学校まで一キロぐらいだよ!
ゴメンね、寝坊しちゃて……」

よし、それならギリギリで間に合うかな。

「良いってこと。今度、埋め合わせはしてもらっからな」

「うん、わかつてるよ！」

あ、すいません！」

「おいおい、大丈夫か唯の奴？」

「これでライブにみんな、出られるわね〜」

「ふう、心配で、寿命が縮まるかと思った……」

「もう最低です、こんな日に寝坊なんて……」

「あ、ギー太を講堂に運んどいてね、それじゃー！」

――P i !

というわけで、ライブの準備なのだが……。

「ああ、えっと唯のギー太は……あれ？」

俺が、部室を探してみるものがない。

律に聞いてみるかな。

「なあ、律、唯のギターって何処だ？」

「ああ、それなら憂ちゃんが持って帰ったぞ」
律が、機材を運びながら答える。

ーードゴッ！！

「何で、頭を床にぶつけてるんだ、お前！？」

クールだ、COOLになれ、中都藤馬！

唯が今から取りに行っても、体力ねえから時間が足りない。
なら、俺が取りに行くしかないっしょ！

「ゴメン、律！

さわっちにギターお願いしといて！！」

「あ、ちよつと藤馬！？どこに行くんだよ！」

俺は、部室から飛び出し、階段を飛び降りる。

すると、

「はあ、はあ、うわっ、なっちゃん！……どうしたの？」
走ってきた唯に、鉢合わせた。

ナイスタイミング！！

俺は両手で、唯の両肩を掴む。

「なあ、唯！」

「え、な、なに？」

何か唯の顔が赤いな、もしかして風邪が治ってないのか？

まあ、それより……。

「お前の家の鍵、貸してくんない！」

「??」

「お前ん家に、ギー太があるからだよ！」

「えっ、そうなの!? ……取りに行かなきゃ！」

唯は、また帰ろうとする。

「はい、ストップ」

俺は唯の首元を掴む。

「お前が今から帰っても、間に合わないだろう？
だから、俺が行くよ」

「そんなあ、なっちゃんに頼めないよ！」

はあ、このバカチンは……。

俺は唯にデコピンを入れた。

「……ていつ！」

「いたっ、何するの、なっちゃん!?」

何か、デコを抑える唯、カワユス……。

って、そうじゃなくて、

「俺を、ちよっとは信じんしゃい！」

ぜってえ間に合わせるよ……それじゃ！」

そう言って、俺は走り出す。

すると、

「なっちゃん、カギ、カギ！」

唯がカギを投げてくる。

「あんがとつ、そんじゃあ、行ってくる！」

ライブ終了まで〳〵残り三十分

――

――

――

「はあ、はあ、これだな……」

今は唯の家に着いて、ギターを見つけたところ。

もうライブ、始まっちゃってるな。

ギターを背中に担ぎ、時間を確認する。

「残り時間は……十五分ぐらいか、急ごう！」

そして、俺は走り出す。

走りながら、俺はいろんな事を考えていた。

最初は記憶が無くて。

兄弟も、親も、友達さえ居なくて、普通の人間とは何かが違う。

怖かった、どうしようもなく。

怖かった、一人でいることが。

そんな俺が、桜高の軽音部に入って、毎日、毎日が楽しかった。

毎日しゃべって、お茶して、戦って。

誰かを見殺しにしたことがあった。

助ける、と約束したのに助けられなかった奴がいた。

そついう時に落ち込んだ俺を、いつも元気付けてくれた、軽音部の皆。

嬉しかった、誰かといることが。

嬉しかった、思い出がいくつも出来たことが。

だから、皆は俺が守り抜く。

何もなかった俺に、ありきたりな幸せをくれたアイツらを。

だから、皆のために頑張る。

アイツらに幸せになって欲しいから。

だから……、

「ほわたああああ！！！！」
「ーガチャッ！！」

俺は講堂のドアを蹴破る。

俺はまだ、頑張れる。

「ハア、ハア、ハア……着いた、よいしょ」

俺はステージへと上がる。

「みんなお待たせ！」

俺は、笑いながらそう言う。

「全く、遅すぎだぞ、藤馬！」

「私も律と同じだな、心配かけさせるなよ」

「信じてたわー藤馬君ならやるって」

「全く、先輩もムチャクチャしないでくださいよ!」

「いきなりだから、ビックリしたわ〜中都君」

ハッハッハ、めんご、めんご!

後は……。

「ほい、持ってきたぞ、ギー太!」
そう言つて、唯に渡そうとした。

唯は泣きながら、

「うう……グズッ……ありがとう〜なっちゃん!!」
抱きついてきた。

つて、チヨイチヨイチヨイ!

「あの……唯さん、抱きつくのは嬉しいけど……いろんな人が観てる
んですよね……」

「へっ?……っ／／／／／」

唯が観客の皆さんを見た瞬間、フリーズした。

そして、

「」「」「むう〜ん」「」「」

チミ達は、何でそんなに悔しそうなの?

「とりあえず、ライブの続きといきましょうや」

抱きついてきた唯を剥がして、準備を始める。

その時、

「なあ、藤馬がMCをしるよ！」
と律が言ってくる。

「……へっ？」
何で、俺？

「ああ、良いかもしれないな！」

「私、藤馬君のMC聞いてみたいわ」

「私も聞いてみたいです！」

「なっちゃん、がんばっ！」

何か決まってるし……。

「わあったよ、やりやあ良いんでしょ、やりやあ」
俺はそう言つて、マイクに近づき、スイッチを入れる。

「ええ、どうも。
軽音部もとい、放課後ティータイムです」

ちなみに、放課後ティータイムっていうのは、さわっちが勝手に考えたバンド名。

俺がそう言つと、観客から拍手と、歓声が出る。

あ、何か、ライブっぽい。

「今日は、そこでギターを忘れた天然娘の代わりに、ギターを取ってきたので遅れました。

講堂のドアを蹴破つてすみません、ゴリさん」

ー　ボウフラアアア、後で覚えとれよ！！

やべ、地雷踏んだ。

「俺は、二年生から軽音部に入りました。

最初は、お茶ばっか飲んで、大丈夫かなゝって思っていました。でも、コイツらと一緒にいると、毎日、毎日が充実してて、いつの間にか軽音部が大好きになってました。

実は、俺の家族って誰一人いなくて。

今も、一人でいることが怖いかもしれません。

まだ、数ヶ月しか一緒に過ごしてないコイツらだけど！

でも、コイツらとだったら！！

怖いことなんて、スグに楽しい事に変えられるはずですよ！！！！」

ー　ワアアアアア！！

観客から声援が聞こえる。

「それじゃあ、最後の曲聞いてください。」

ふわふわ時間!!」

「1・2・3・4・1・2・3!!」

唯から、順番に音を奏で、やがて曲になる。

ハァ、最高だなっ、おい!

これがライブか。俺は、一つ、一つの音を最っ高に楽しく弾いた。

『~~~~~♪♪♪』

ージャーン!!

やりきった感がばねえな、おい。

そう思っていたら、

ー~~~~~♪♪

ムギが笑いながら、ふわふわ時間のイントロを弾き始める。

そういうことかいな。

それに合わせ、律、漣、梓、俺が弾き、最後に……。

「けいおん、だいすき!」

Itobe continued

第一楽章 ♪ 第十九幕 学園祭 後編!! (後書き)

どうでしたか？

藤馬「ふにゅー（「」）」

おい、後書きでだらけるなボケツ！

藤馬「……ちよつとぐらい、休ませてくれよ作者」

はあ、まあ次の話で痛い目見るから良いか…（ニヤッ

藤馬「Σ（。°。）」

それでは次回をお楽しみに!!

第一楽章 ♪ 第二十幕 メダルの力!! (前書き)

はい、どうも皆さん388859です。

今回は独自設定が入っています。

その点を踏まえて、第一楽章 ♪ 第二十幕をお楽しみください。

P・S・あ、二万PV越しました、ありがとうございます！

第一樂章 ♪ 第二十幕 メダルの力!!

――藤馬 side

「うーん……」

そう言つて、俺は背伸びしてから、まただらける。

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

あのライブから、三日ぐらい経っていますが、

「はあ、何か燃え尽きたな」

「ホント、そうだね」

「むこう一週間は、演奏したくないな」

「お茶が入ったわよ」

「「「はい……ほげえ」」」

こんな風に、いつも以上にだらけています。何かあのライブがウソみたいだな。

お茶を飲みながら、そんなことを思っていると……。

「あつ、そついえばなっちゃんにお礼しないとね!」
と唯が言ってきた。

お礼?……ああ、ライブの時に埋め合わせしろよつて言つたっけ。
うーん……。

「別に良いよ、あんときはノリで言っただけだし……」

と言ってお茶を口に含む。
すると、

「なっちゃんなら、

R指定のモノ以外は何でも良いよ！」

「ぶほっ!!」

当然、俺は紅茶を口から吹き出す。

年頃の女の子が何を言ってるの！

「げほっ、げほっ、あのさあ、俺って変態じゃないんだけど!？」

「「「えっ、そうなの!？」」」

うう、別にエロい事してる訳じゃないのに……。
俺は、部室の隅で体育座りをしていじける。

「そ、そんなにいじけるなよ、藤馬！」

藤馬は、なんだかんだ言ってるときは、やるしな／／／／／

「そうだよ、なっちゃん!それになっちゃんは、や、優しいし／／／／／」

「そうね、藤馬君はカッコいいもの!／／／／／」

何か、話の方向性が斜め45度ぐらい違ってきてない？

ーガチャ！

「皆さん、こんにちは……今回は、どうしたんですか？」
そんな嫌そうな顔しないで、梓！

というわけで状況説明中……。

「成る程……。

結局、藤馬先輩は何がしたいんですか？」

いや、そう言われると逆に困るんですけど……。

うーん、したいことな〜。

しばらく考えてみるが、中々思い付かない。

「じゃあ、二人でご飯食べに行こうよ！」

それは、キミがしたいことでしょう、唯

「じゃあ、海外旅行とか？」

そんなお金ないです、ムギさん。

「映画を見に行けば良いんじゃない、〇の惑星とか？」
お前が観たいだけだろ、律！

ふむ、したいことな〜。

考えてみると、怪人と戦ったり、戦ったり、ストリートファイトしたり。

あれ、俺の休みって何してたっけ？

そんな感じで、自分を見失いそうになってたら、

「そういえば、藤馬先輩の家って、入ったこと無いです、私」と、梓が言ってきた。

ありゃ、そうだったか？

「あつ！

なつちゃんの家泊まり込む、っていうのはどうかな？」

「それ、良いな！」

「私、男の子の家に泊まるの夢だったの〜」

「私も良いと思います！」

何か、勝手に決められてる&断りにくい雰囲気になってる、俺のしたいことなのに……。

って、いつものツッコミ担当の漑がいないな。

「漑、漑はどうしたんだ？」

「漑なら、用事があるって言って帰ったぞ〜」

ふ〜ん、珍しいな……。

「「っ！！」」

新しい怪人。

しかも、ちょっと遠いな……急ぐか！

「ちょっと用事出来たから、後の事はまた明日な！」

「『『『え、また！』』』」

そんなこと言わないの、駄々っ子か！

俺はそう言っで、部室を飛び出す。

（なあコウモリモドキ、今回の怪人は何だよ？）

（今回は……人類の進化形、オルフェノクだな）

とりあえず、現場に行くか……。

――

――

――十分後、河川敷

ここら辺のはずけど……。

「えつ、いやぁ……こないでよぉ……」おいおい、デジャブ……」

そう思いながら、振り返ると……灰色の怪人に追われている澪が居た。

――NOW LOADING――

――三人称side

ここは、河川敷。

普通なら子供などの遊び場だが、

「いやあ……こないでよお……」

今は一方的な殺し（遊び）が行われていた。

澪は意味がわからなかった。

用事の帰り、いきなり目の前に居た人が、灰色の怪人、トードスツ
ールオルフェノクに変わり、襲い掛かってきた。

死に物狂いで逃げだしたが、河川敷に追い詰められてしまい今に至る。

（もう嫌だよお、律、唯、ムギ、梓、藤馬。
誰でも良いから助けて！）

「もう終わりだ、ゲヘヘヘヘ！」

そう言つて、トードスツールオルフェノクが使徒再生をしようとした時に、

「はい、ドーン！」

「ん？……ぶべっ！」

ーゴスッー！

藤馬が飛び蹴りをして、漑から突き放す。

「漑、生きてるかー！」

と、藤馬が漑に聞く。

しかし、漑から返事が全く来ないので、見てみると……。

「まあ、器用な奴だな……」

屍状態になっている漑が居た。

「ちつ、貴様、邪魔するな！」

そう言つて、トードスツールオルフェノクが藤馬に襲いかかる。

それを藤馬は避けつつ、トードスツールオルフェノクへと蹴りを入れる。

「コウモリモドキー！」

「ああ、ガブリー！」

「っー！」

そして、右手をキバットに噛ませ、全身に《魔皇力》を流す。
すると、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻か

れる。

「《変身！！》」

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「ちっ、仮面ライダーか！」

「《光栄に思え、絶滅タイムだ！！》」

そう言つて、トードスツールオルフェノクへと一気に距離を詰める、キバ。

それに対し、トードスツールオルフェノクは、ただ拳を放つだけ。

そもそも、スペックから経験まで、キバがすべて勝っているので、トードスツールオルフェノクは、スグに追い詰められてしまった。

「ぐっ、はあ……ハア…ハア…」

「んじゃ、決めますか！」

そう言つて、キバットにウェイクアップフェッスルを吹かせる。

「《ウェイクアップ！！》」

その瞬間、周りの景色が三日月の夜へと姿を変えた。

キバは、右足を振り上げ、右足の拘束具カタナを解放する。

そして、片足だけで一気に頭上へ上がり、トードスツールオルフェノク目掛けて、一気に蹴り込む！！

「だりやああああ!!」

《ダークネスムーンブレイク!!》

ドゴツ!! バゴオオオオ!!

トードスツールオルフェノクを中心にキバの紋章が刻まれる。

そして、トードスツールオルフェノクは、灰に変わった。

「……はあ、終わったかな？」

キバがそう漏らし、変身を解除しようとすると、

ーードガガガッ!!

「……ぐああああ!!」

どこからともなく、何かがキバに直撃した。

キバが何かが飛んできた方向を見ると、

「ふん、こんなところでお前に会うとはな、キバ？」

キバに手を向けている、ライオンファンガイア、ルークがいた。

キバは立ち上がりながら、

「俺はアンタに会いたくなかったよ、ルーク……」

ドッガ、ガルル、バツシャーのフェッスルを抜く。

「ほう、なら……死ねっ!!」

ライオンファンガイアはキバへと物凄いスピードで襲いかかる。

キバは一旦退きながら、キバットに三本のフェッスルを吹かせる。

「《ガルルセイバー・バツシャーマグナム・ドッガハンマー!!》」

三体の彫像が吸い込まれキバは、DGBキバへとフォームチェンジした。

「良いか藤馬、一気に決めろ！
時間もあまり無いぞ！」

キバットがそう注意し、キバは右手のバツシャーマグナムを連射する。

しかし、ライオンファンガイアはそれをロケットクローで相殺し、キバの身体を爪で引っ掻く。

キバは、右手をドッガハンマーに持ちかえ、左手のガルルセイバーで爪で受け流し、

「らあっ！」

持ちかえたドッガハンマーで殴り付け、そこから流れるように連撃を放つ。

一見、キバがかなり押しているように見える。
しかし時間制限、負荷などを考えると……。

「ぐっ、調子に乗るなアア!!」

そう言つて、ライオンファンガイアは怒濤の反撃に出る。

ーードゴッ、ドゴッ、ドゴッ、バキッ！！

「ぐあっ！！……は……っア……」

キバが圧倒的に不利だった。

「藤馬！

あと三十秒が限界だぞ！！」

キバットが藤馬を急かす。

「ちっ、やるしかねえよな！

賭けに出るぞ、コウモリモドキ！！」

キバは右手を胸に当てる。

ーメダル力は絶対に使うなよ！人に戻れなくなるからな……。

（俺一人が無茶して、誰かを救えるなら……）

「俺の中にあるクソメダル、お前の主人がピンチなんだ……」

その刹那、キバの複眼が紫に光り、

（それで十分だ！！！）

「家賃として、お前の力を貸しやがれ！！！！」

その刹那、キバの体からメダルが三枚飛び出し、右足に吸い込まれる。

すると、拘束具がメダルの力で解放された。

そして、本来なら紅いヘルズゲートが紫に変わっていた。

「うウツ……ッガアアアアア……！」

キバは獣のような声を出しながら、そのまま飛び上がり、右足に冷気を伴いながら、ライオンファンガイアへ蹴り込む！！

「ウオオオオオアアアア……！」

《ワイルドアイスマーンブレイク！！》

ドゴツ！！！！パキパキパキ……！！！！！！

ライオンファンガイアを蹴った箇所は凍っており、地面にはキバの紋章が刻まれる。

キバはバク転して、ライオンファンガイアから離れる。

「うう……ぐっあ……くっ……！」

蹴られた箇所を抑えながら、ルークは去っていった。

「ウウ……フウ……うつ……！」

キバの変身が解け、藤馬が地面に倒れる。

「藤馬、このバカ！何でメダルの力を使った！？」

キバットが藤馬に聞く。

「はは……やった……ぜ……！」

藤馬はそのまま気を失った。

「おい藤馬！……藤馬……藤馬、しっかりしろ、おい、藤馬アアア……！」

キバットの声が河川敷に響いた。

I I t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 ♪ 第二十一幕 入院！！（前書き）

どうも、388859です。

それでは第一楽章 ♪ 第二十一幕をお楽しみください。

第一章 ♪ 第二十一幕 入院！！

――藤馬 side

――声が聞こえる。

――■ ■のギターって、何か私と違うよね？

アコースティックだからな、俺の。

――■ ■ってヴァイオリンも弾けるから、スゲエな。

いやあ、それほどでもないです／＼／／

――お茶が入ったわよ♪

あいあい……旨し！

平和な日々、ずっと続くのだと思っていた。

そんな中で、俺は戦い続けた。

誰かを救えなくても、涙を堪えて。

自分の身体がボロボロになっても、皆を救うために。
そして戦い抜いて――

「っあ！！……はあ……はあ……はあ……はあ……」

何だよ、今の……。

何か、最近はあるのなかったのに。

俺は起きて、部屋を見回す。

「……何かデジャブってない？」
だって一話と同じ病室なんだぜ。

このままいけば、

「……むっ、起きたか藤馬？」

コウモリモドキが羽をパタパタと動かして俺の頭に乗る。

やっぱりお前か、コウモリモドキ……。

「やっぱりは無いだろう、半日もぐっすり寝て？」
ああすまん、すまん……って、

「俺、半日も寝てたの!？」
やっぱり、てんこ盛りにメダルの上乗せは無理すぎたかな……。
道理で身体の節々が痛いはずだよな。

と、俺がうんうんと納得していたら……。

「それで、なぜメダルの力を使った？
人に戻れなくなると言っただろう！」
コウモリモドキが俺の頭の上で激昂する。

そんなこと言われてもなあ。

「中都さん、病院では静かにしてくださいって言いましたよね……」
と、看護師さんが阿修羅を超える勢いのオーラを放ってくる。

ゴ、ゴリさんと同じレベルのオーラ……だと……！？

ちくしょう、ここの看護師は化け物か！

ーガシツ、グググ！！

「……返事は？」

はい、ワカリマシタ。

ー

ー

ー……夕方♪

あの後、看護師さんに学校に連絡してるか聞いたら、してたらしい。
無駄に命をすり減らしたような気がする。

それにしても……。

「なあコウモリモドキ、ルークにどうすれば勝てる？」

ルークには二回も負けている。

だから、次こそはアイツを絶対に倒すという思いから聞いたのだが……。

「そうだな……黄金のキバの力を解放すれば余裕で倒せるだろうな」

黄金のキバ？

キバにも色んな種類があんのか？

「ああ、最初にも言ったが、私が持っているのは黄金と闇。お前がいつも使っているのは、黄金のキバの力を制御したものだな」
成る程……。

じゃあ、力を解放すれば良いじゃん！

「はあ……それが出来たらしている！
それが出来るのは、タツロットだけだ」

じゃあ、そのタツロットを探せば良いんだよね？

「いや、タツロット自体はキャッスルドランに封印されているんだが……」
何だよ？

「封印の解き方が、全くわからん」

はあ、何なんそれ！？

「わからないものは、わからないんだ！
後、奴に勝つ方法は、闇のキバになるしかない」

闇って嫌な感じしかないんだけど？

「ああ、お前の予想通りだ。」

今のお前がなれば、寿命が大幅に減るか、もしくは死ぬだろうな」

つまり、八方塞がりってわけか……。

やっぱりそう簡単に強くはなれないよな。

そんな感じに考えていると、

「藤馬、皆でお見舞いに来たぞ」

と、病室のドアのむこうで律の声が聞こえた。

とりあえず、コウモリモドキにはヴァイオリンケースに入ってもらいました。

「あいあい、どうぞーりっちゃん隊長」

と俺が言つと、皆が病室に入ってきた。

そして俺に近づいてきて……。

ーゴツンッ！……！

「ゴフッ！？」

四人が俺に拳骨をぶちこむ。

つて、ちよつと待て！

「貴女達は、何しに来たんですか！？」

怪我人を普通殴らないですね、読者の皆さん！

すると、皆ちよつと涙目になりながら、

「うう……バカ藤馬、心配しただろ……グズッ」

「なっちゃんが生きてる、良かった、本当に良かったよぉ〜!」

「藤馬君、藤馬君だ、うわああああん!」

「良かったです、本当に良かったです!」

そう言って、皆が俺に抱きついてくる。

えっ、何で、どういうこと、what's、誰か説明してよ!?

(はぁ……。どう考えても昨日普通に帰った奴が、今日入院してたら心配するだろう、バカ藤馬)

ああ、成る程なコウモリモドキ……。コイツらにも心配かけたんだな。

「みんなありがとうな、心配してくれて……」

何か泣きそうだけど、泣かないよ。

だって男の子だもの!

って、澪が居ないような……。

「なあ、澪はどこにいるんだ?」

「グズッ…ヒック…ああ、澪なら……」

律が病室の外を指差す。

俺は皆をはがして、病室の外に出てみると……。

「……何であなたは外にいますか?」

そこには、小さく縮こまっている漣が居た。

「だ、だって、藤馬が大怪我をしたのは、私のせいなんだから……！
藤馬が……私を……助けなけ……れば……わた……し……が……うう……グズッ
……」

と、漣は泣き出してしまった。

これを周りに見られたら、俺が泣かしたみたいになっちゃってしまう！

「と、とりあえず、漣も病室に入って話そうぜ！

廊下じゃ話もできないし、周りの人の迷惑になっちゃうだろ？」

というより、看護師さん達の視線が痛いから病室に戻りたい……。

「……グズッ……うん、分かった、中に入る」

漣が涙目で答える。

何この可愛い小動物、俺のガルルセイバーがウェイクアツ（言わせんぞー！）、わあってるよ、コウモリモドキ。

そんなバカなやり取りをしつつ、漣（小動物）を病室に入れ、椅子に座らせ、他の皆を外に出させる。

「ちったあ落ち着いたか、漣？」

すると漣は、昨日からずっと悩んでいたのだろう、ポツポツと話し出す。

「藤馬が助けてくれて、凄く嬉しかった……でも、藤馬が血塗れで倒れてた時に、何で私じゃなくて……藤馬なんだろう……って思ってた……グズッ……そう思うと……凄く辛くて……逃げたくて……嫌だ

った……だから「……もういい」…藤馬？」

漣がビクビクしながら、俺の顔色を伺う。

そりゃそうだよな、途中で止められたんだからな。

「俺が勝手に助けたんだから、お前が気にすることは何もないんだよ」

すると漣が反論してくる。

「で、でも、私は藤馬を…グズツ…！」

はあ、いじっぱりだな、漣は……。

俺は漣を優しく抱きしめる。

「ひゃ、ひゃうつ！……ととと藤馬？」

「大丈夫、俺は全然大丈夫だから……」

お願いだから……。

「そんな悲しい顔して、泣かないでくれ……」

「うつ…うあああ！……ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい！」

漣が泣きながら謝ってくる。

「謝らないでくれ……お礼で良いんだよ、こついつ時は」

「うつ…うつ、ありがとっ、本当にありがとっ！」

↓

――

――三十分後」

「大丈夫、もう落ち着いたから……」
そう言つて、漣が離れる。

「はあ、なんか疲れたなあ」
と、俺は肩を叩きながら呟く。

すると、

――ゴンツ、ゴンツ、バガラツ……！

あれ、ドアが開いてる音じゃないよね、これ？

「お二人さーん」

仲睦まじいのは良いんですけど、ちょっと仲良すぎ！
律は腕を組み、

「むう、なつちゃんは漣ちゃんみたいな子が良いのかなあ？」
唯は首を横にして、

「あらあら、藤馬君」

何で、漣ちゃんとそんなにくっついてるのかしら？」

ムギは手を顔に当てながら、

「むう、藤馬先輩は、漣先輩がいいんですか？」

梓は、手をぶんぶん振りつつ、

「……とりあえず、離れて（ください）、二人とも……！」「……」

おい、ゆいあずの二人！

ほぼ同じ事言ってるし、萌え殺す気か！

後の二人は、笑顔がひきつってて怖いです。

俺はその後、定番の O H A N A S I されました。

……不幸だ。

I I t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 第二十一幕 入院！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「怪我が増えたんですけど？」

良かったじゃん。

この天然フラグメーカー（男の敵）。

藤馬「……事実だから言えない」

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

第一楽章 ♪ 第二十二幕 お出かけ 前編！！（前書き）

はいどうも、私こと388859です。

それでは、第一楽章♪第二十二幕をお楽しみください！

ちなみに、何でこうなったのか。

簡単に説明しよう。

――NOW LOADING――

〽一日前〃

ふう、明日で入院生活とも、おさらばか。

備え付けのテレビの、チャンネルを弄くりながら、そんなことを思っていた。

やっぱり今の時間だと、なにもないな。
テレビの電源を消して、身体を横にする。

すると、コウモリモドキがらしくないことを言い始める。

「藤馬、軽音部の小娘共に、何かお礼をした方が良いと思うぞ?」

……どうした?

気持ち悪いぞ、お前らしくもない。

「気持ち悪いは余計だ！……とにかく、お礼に何かしてやったらどうだ？」

うーん、そう言われてみれば確かに、アイツらには迷惑かけてばっかだな。

よし、皆にメールで聞いてみるか。

俺は携帯を取り出し、メールで聞いてみることにした。

〵数分後〵

――〵〵

「お、来た来た。えーとムギからだな……」

――私は、映画とか観に行きたいわー〵

何と言うか、ムギさんらしいです。

「あい、分かった、了解です……っと」

次は……零だな。

――遊園地とかどうだろう？

久しぶりに、メリーゴーランドとかの白馬に乗りたいたいやなー。

さすが、メルヘン女王。

期待を裏切らない、メルヘンっぷり……。

「ごめん、背中が痒くなってきました……っと」

次は、律か……嫌な予感しかない……。

――あたしは、藤馬の家に皆で泊まりたいです！

どうでしょうか、大家さん？

誰が大家だ、誰が！

つか、野郎の家に女子五人が泊まるってどうなんだよ？

いや嬉しいけどね！

「駄目だろ…っ」と

次は…天然娘、唯か。

――わたしは、皆でケーキバイキングに行きたい！…なっちゃんのおごりで♪（o^ ^o）

いや、食べ物から離れるよ…。

つか、全部俺が払うの！？

「他にないのか…っ」と

次は梓か…真面目だから、練習しましょうとか言いそうだな…。

――皆で新しく出来た、楽器店に行きたいです！

そういえば、俺もちょっと、気になることがあるんだよね…。

というわけで、土曜日を使って、皆の行きたいところに行くことになった。

――NOW LOADING――

お分かりいただけたかな？

というわけで、まずは映画を観に行くことになった。

そういえば、

「ムギは何の映画が、見たいんだ？」

「あ、うん。これが見たかったの！」

そう言って、ムギが取り出したパンフレットは……。

○の惑星―ジエネシス―

……（・―・）エツ．．？

「だって、お猿さんが沢山出るのでしょうか？
可愛いから、観てみたいなあって！」

……（@ㄥ@）マジスか？

「あ、ああ出ることは出るんだけど……」
「言えないっ！！」

猿が人間を支配する、そんなSF映画だなんて！

ムギの天使のような笑顔に言えないですよ、安西先生っ！

そう思つて、律達に助けを求めるが……。

「面白そうだね、ムギちゃん！」

「あつ、おさるさんとsing・sing・singなんて良いな
！」

「私も、この映画は観たかつたんだ」

やべえダメだコイツら、早くなんとかしないと……。
俺は思わず頭を抱えてしまう。

「あの、大丈夫ですか藤馬先輩？
頭を抱えてますけど？」

梓、いつか君もあなってしまうのだろうか……。

「何、黄昏てるんですか……他の先輩方はもう行っちゃいましたよ？」

え、マジで……俺を置いていきますか……普通ですか、そうですか……。

（映画を観た時の一部始終）

――序盤

「うわぁ、お猿さん可愛い」
「本当だね、ムギちゃん！」

――中盤

「うわっ、コイツ最低だな」

「ひっ!」

――終盤

「グズッ…ヒクッ…こんなの…うう…」

――

――

――

というわけで観てきましたよ!

俺? (作者は、映画を観てないのでノーコメントで)。

現在は、昼過ぎ。

近くのファミレスで、昼食を採ろうと思ったんだけど……。

「なっちゃん、なっちゃん!」

と、唯が目を輝かせ、どこかを指差す。

その視線の先は……。

男子が入りにくい、と百パーセント答えることができる外観の、ケーキバイキングだった。

いや、昼飯にケーキバイキングじゃあ、ちょっとな……
そもそも入りにくすぎるよ、唯さん……。

「ほらっ、早く早くっ!」

「ちょっと待って……っ！」

――また、会えると良いね……。

何だよ……くそっ……何で、クイーンと唯が重なるんだ……。

「どうしたの、なっちゃん？」

「い、いや、何でもない！」

と、身振り手振りを使い、誤魔化す。

そう言って、唯は店に入ってしまった。

「って、ちよつと待てつてば、唯！」

中に入ると、お昼時なのでめっちゃ混んでいます。

「な、に、突っ立ってんだ、藤馬？」

と、律が言ってくる。

「ああ、男が一人もないから、居づらいんだよ」

「そう言われてみれば、確かにそうだな……」

ですよね、澪さん！

そんなことを言いつつも、席に座る。

この店の制限時間は九十分で、ケーキバイキングっていうより、イタリアン系のバイキングのようだ。

良かった、ケーキだけしかないと考えた……。

俺は、イタリアンItalianな料理を取りに行こうとしたんだけど……。

「なっちゃん、なっちゃん！

ケーキがいっぱいあるよ、スゴいね！」

と、唯が遠足に来た小学生並みにはしゃいでいる。周りの人も、そんな唯に温かい視線を送っている。

「わかった、わかったから！

そんなにはしゃがないでも、ケーキは逃げないぞ？」

と、俺が言うものの……。

「うわあ、このケーキ美味しそう！」

あっ、こっちのケーキは可愛い」

……この子に、傾聴って言葉を教えたいよ。

まあ、そんなこんなでランチタイムは終了。

「ふう、お腹一杯だよ」

唯がお腹をポンポンと、叩きながら満足そうに言う。

「じゃあ次は、梓が言ってた楽器店に行くか？」

と、皆に聞くと梓が戸惑いつつ、

「えっ、本当に言って良いんですか？」

「もちろん。」

俺も、ちよつと楽器店に行きたいところだったからな」

というわけで、楽器店にレッツラゴウ。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一章 ♪ 第二十三幕 お出かけ 後編！！

〽 前回のあらすじ

ヒヤッホオオウウ！！

「全然意味わかんねえよ！！
確かに、ヒヤッホーな内容だったけどさ！！」

「うわあゝ、空に叫んでる…痛いな藤馬」
そんな目で見ないで、暴力コンビ！

ーゴスツ！！

「藤馬君達ゝ、ついたわよ」

あ、どうも、律と漑に拳骨をぶちこまれた、私こと中都藤馬です。

今は梓が言っていた、新しい楽器店に着いたところすな。

「うわあゝ、いつも行っているところより楽器がいっぱいだよ、あずにゃん！」

「まあ、規模が違いますから」

「あつ、これ見て律！
レフティモデルがいっぱいだ！」

「おつ、本当だなあゝ！
漑にとつちや楽園だな、ここは」

今の会話で分かる通り、俺達が来た楽器店はデカイ（作者は音楽知識皆無だから、企業名とかよくわからないんだ）。

さて、ここで俺は病院で見た映像を思い出す。

――■■のギターって、わたしのとなんか違うよね？

――アコースティックだからな、俺の。

誰かが、■■に話しかけていたこの映像。

なぜかはわからないけど、■■は俺だとわかった。
つまり、俺はギターを弾けることになるが……。

「何で、コウモリモドキはこの事を言わないんだ……？」

コウモリモドキにとって、何かまずいことでもあるのか、それとも俺の過去に何かあったのか……。
そんな感じで考えてみるが、全くわからないのでこの件は保留、ということにした。

とりあえず、ムギと一緒にアコースティックギターがある場所に行ってみる。

「藤馬君、何でギターを見たいの？」

「ああ、ちょっと唯が楽しそうに弾いてるの見たら、俺も始めてみようかなあ〜ってね」

「なるほど……。ボソツ（藤馬君は唯ちゃんみたいなのがいいのかしら？）」

「どうしたのムギ、ボソボソ言ってるけど？」

「い、いえ、何でもないの、何でも！」

「そ、そんなに大声ださなくても……おっ、着いたな」

というわけで、近くにあるアコースティックを触ってみる。

しかし、ヴァイオリンの時なら握った瞬間に弾き方が分かったのだが、アコースティックは分からない。

うーん、何か分かると思ったんだけどなあ。

そんなことを思いながら、アコースティックを元に戻す。

「うーん、どうしようかな？」

と、思わず呟いてしまっ、俺。

「他のギターを見て回れば良いんじゃないかしら？」

確かにそうだな、ムギ。

他のギターを見て、握ったりするが、何も起きない。

ちょっと、気分が右下がりになってきた……。

しかし、ふと近くにあった黒いアコースティックギターを見た瞬間、

「っあうー!!」

――声が聞こえる。

――■ ■、ギター教えてよー!

誰かが、俺に抱きついてくる。

あれ、いつもは全然顔が見えないのに……少しぼやけて見える。

俺は目を凝らす、どうしてもボヤけてしまう。

――あれ、■ ■ちゃんどうしたの?

え、俺にちゃん付けって、まさか……。

そう思った瞬間、

「っあー!!はあ……ハア……ぐっ……ふう」

俺は現実に取り戻され、膝をつく。

「大丈夫、藤馬君!?

顔色が凄く悪いわ!」

ムギが心配して、声をかけてくる。

「ああ、大丈夫だよ……」

「っ、でも「大丈夫だよ、ムギ。そんなに心配するなって」……うん」

ムギを落ち着かせた後、俺はさっき見た黒いアコギに近づき、しっかりと握る。

すると、ギターの弾き方だけじゃなく、何かが俺の中で解き放たれる。

そして、俺はギターを弾き始めた。

――演奏♪ふわふわ時間♪アコースティックver

なんだろう、何かが俺の中で変わった、いや、元に戻ったのかな……。

確かに、あの映像の中での呼び方は唯だった。

ということとは、俺は唯に会ったことがあって、なおかつギターを教えた……？

ますます、意味がわからん！

考え事をしていると、あっという間に演奏を終えた。

――パチパチパチパチ……。

するとムギが、拍手をして俺の手を取る。

「すごいわ、藤馬君！

いつの間にギター弾けるようになったの？」

「えっ、ああ、えっと、うん！

桜高に来る前に、ちよっとやってさ！」

「もう、何で言ってくれなかったの？」

あはははは、記憶喪失だからなんて言えねえ……。

「とりあえず、これを買って良いかな？」

「うん、どうぞ〜」

というわけで、クソ神印のポケットマネーを使って、ギターとその他もろもろ購入。

そういえば、現在時刻、何時なんだろう？

そう思つて、携帯を見ると……。

「げっ！

律から電話とメールが来てるし！」

俺は急いで律にかけ直す。

「あ、もしもし、律？

すまん、すまん」「すまんじゃない！お前、ムギも一緒だろ？」

「まあな、それで用は何だ？」

「ああ、そろそろ楽器店から出ようぜ！」

「ハイハイ、すぐ行くからちょっと待ってるよ」

――Pi！

というわけで、ムギと一緒に楽器店から出る。

「ギターって重いなあ、あの三人はこんなものを毎日担いできてたのか……」

そりゃ、力が必然的に上がるよな。

「藤馬君、唯ちゃん達に失礼よ」

心を読まないでよ、ムギさんや。

「なっちゃん、遅いよ！」

つて、背中に担いでるのギター？」

「まあな、ギターを買っちゃいましたよ、中都さん！」

「先輩、お金大丈夫ですか？」

「一人暮らしなんですよね？」

「大丈夫だ、問題ない。（実際はコウモリモドキがいるし、次狼達もときどきくるしな…）」

「何でギターを買ったんだ、藤馬？」

「藤馬君ね、アコースティックギターが弾けるの！」

「ちょ、ムギさん、興奮しすぎ！」

「え、藤馬ってギター弾けんのか！」

「手先が器用だなあ」

こんな感じで話しつつ、暗くなってきた道を歩く。

そろそろ、夕飯の材料を買わないと。

「俺、そろそろ夕飯の材料を買い物しないと。

それじゃあ、また月曜日な！」

と律達に言う。

「ああ、また（ニヤリ）」

「うん、またね（ニコニコ）」

「それじゃ行こうか、律、ムギ（ニヤニヤ）」
「うわあ、超怪しいし、気になるわ……」。

つか、後ろのゆいあずもニヤニヤするなよ！

――

――

――

というわけで夕飯の買い物なのだが、どうしようかなあ……。

（コウモリモドキ、夕飯は何が良いかな？）

（うむ、そうだな……トマト鍋なんてどうだろうか、次狼達も呼べば良い）

コイツが鍋にするって言ったときは、絶対にトマトだからなあ。

（まあ、それでいいけど……たまには、トマトじゃなくて寄せ鍋にしようぜ）

（なっ、貴様は今、トマトを侮辱したな！）

（違いよ！）

トマトはいつもしてるから、たまには寄せ鍋も良いよなって言っただけだ、このトマト伯爵が！)

(わ、私をほ、褒めても何も出ないぞ!?)

(いや全然誉めてないし、むしろ、おちよくってるけど。わあったよ、トマト鍋にするよ!)

そんなわけで、買い物終了。

次狼達も、家にあらかじめ呼んでいた。

つか、次狼達呼んだのにまたトマト鍋か……。

まあ、二人(一人と一匹)で鍋するよりは、賑やかだから良いんだけど。

↓

――五分後↓

はい、マイハウスに到着しましたと。

家のドアの前で、片手の荷物を下ろし、ドアを開ける。

「ただいま」よっす、邪魔してるぜ」「……」

――Σ(@_@)?

「憂ちゃん強すぎだよ、ボク何もしてないよ!」

「ラモン君が、弱いだけだよね……」「うう、憂ちゃんがいじめるよ、唯姉!」

「よしよし、良い子、良い子」
憂ちゃんとラモン、唯がゲーム。

「ど、どうですか、次狼さん？
私の煎れた紅茶……？」

「ふむ、悪くはないが……もう少しだな」

「ムギ先輩、挫けないでください！」

「うん、そうよね、梓ちゃん！」

ムギが煎れた紅茶を飲む次狼。
そして、梓がムギを慰める。

「うん、じゃあここでどうだ！」

「チェック…メイト……律…負け」

「じゃあ、今度は私とチェスをしてくれ、リキ」
律とリキはチェス。そして、澪がリキにチェスを申し込む。

「ーΣヴェツ！？」

俺は瞬時にテーブルを持ち、
「何やってんだてめえらアアアアアアアアアアアアアア！！
！！！！」

テーブルを思いっきり投げ飛ばした。

「……………Σヴエツ!?!」「……………」

「……………Σ落ち着け(落ち着いてください、落ち着いて)藤馬(さん、先輩、お兄ちゃん)!!!!!!」「……………」

「落ち着いてられるか、このバカどもが!!!!」

「だいたいなあ、何で次狼達と、唯達がこんなに仲が良いんだよ!?!それに唯達は、帰ったはずなのに何で俺の家にいるの!?!」

俺の疑問を、四文字熟語で解決してくれ!!!!!!」

「理不尽すぎだろ「シャラップ、このバイオレンスカチューシャ娘!!!!」……………はい」

俺はこのあと、アームズモンスターと軽音部の皆にノンストップで突っ込んだ。

——しばらくお待ちください——

「……………ふうー……………ふうー……………」

あれ、俺は何してたっけ……………?

(ご飯はまだか、藤馬?)

あ、ごめんな、コウモリモドキ。

俺は、トマト鍋を作る準備を始める。

うん、そういえば、

「何でみんな、魂が口から出そうになっているんだ?」

「……………お前のせいだ、お前の!!!!!!」「……………」

Σヴェツ！！そうなの、次狼さん！？

さっきのわけを聞いてみると……軽音部の皆が俺の家に泊まりに来たのだが、当然鍵は空いておらず立ち往生を食らっていた。

それを見かねた次狼達が家に招き入れ、遊んだり、お茶飲んだりしていくうちに仲が良くなった、という感じ。

↓

↓

——一時間後——

「えゝこの度は、心配かけてすみませんでした。
今日は、飲んで食って、めいっばい楽しんでください！

それではっ、かんぱーい！」

『かんぱーい！』

はい、というわけで皆でトマト鍋ですたい。

「あっ、律！

それ、私の鶏肉だぞ！」

「ふっふっふ、甘いすわよ、みおちゅわ〜ん」
「ふっ、ならお前も甘いな、律」

「あつ、次狼さん！　あたしのウインナー取らないでください！」

「りっちゃんの敵、取らせてもらいます！」

「いつけー、ムギちゃん！」「次狼も大人気ないな」

はあ、随分と騒がしいことで。

キャベツを口に入れながら、思わずため息をつく。

「どうしたんですか、藤馬先輩？」

いや、何でもないよ、梓。

リキがじゃがいもを物欲しそうに見ているので、とってあげた。

「ほら、じゃがいもだ、リキ」

「ありがとう……藤馬……」

いやいや、気にすんなって」

すると、梓と憂ちゃんが俺をジーっと見てくる。

な、なんか怖いな…。

「な、何かな、二人ともそんなに睨んで？」

「「い、いや、ついではしいなあゝって／＼／＼／＼／」」

はあ、この二人は妹キャラだな、本当に。

俺は二人の皿を取って、鍋の具材をとる。

「ほい、憂ちゃん。ほい、梓」「あ、ありがとうございます／＼

／／／
「『『『『むう…良いなあ』』』」

本当に、この二人は癒されるよね。

なんか、横から凄い嫉妬の視線が来るけど、気にしないよ。
そして、次狼とラモンは何でニヤニヤしてんの？

はい！

夕飯も食べて、お風呂に入りましたよ！
ちなみに、次狼達は帰って、軽音部の皆は唯の家の風呂に入りました。

「つか、マジで俺の家に泊まるのかよ！？」

「うん、そうだよ！」

いやいや、唯に言われると何も言えないんですけど。

とはいっても、結局は年頃の男と女。

部屋は別れますよ、もちのろんで。

そのことを伝えると、皆不服そうにして、ブーイングを食らった。

あーうるさい、うるさい、家からつまみだすぞ？

というわけで、おやすみなさーい（・・・）zzzz

l
l
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

小休止 ♪ 乙女心!! (前書き)

今回は藤馬が寝ているころ、女子はどんな事をしていたのか?……
という話です。

それでは、小休止♪どうぞ!!

小休止 ♪ 乙女心！！

――三人称 side

藤馬がぐっすり眠っているころ、隣の部屋では……？

「それじゃあ、電気を消すぞ」

そう言つて、漑が電気を消して布団に入る。

他の皆も布団に入った……ここで終わったら、良かっただろうに。

――数分後 ♪

「なあみんな、恋ばなしようぜっ ♪」

と、急に律が楽しげに言う。

布団に入って、まだ数分しか経ってないので、皆起きて律の方を見る。

「いきなりどうしたんだ、律？

好きな人でも出来たのか？」

と、漑が冗談で言つたのだが……。

「おう、あたしは藤馬の事が好きだ！／＼／＼／」
律はちよつと赤らめながら、そう宣言した。

「Σはいっ！？」

梓と漑がすつとんきような声を出す。

「だ、だって、初めて会った私を、怪人から助けてくれたし……ウ
アイオリンも上手いし……／＼／＼／」
律が軽く、キアラ崩壊を起こしていると、

「わ、私も藤馬君の事が好き！／＼／＼／」
ムギも、顔を赤らめながら告白した。

「ム、ムギちゃん！？」

「だって、藤馬君の事が凄く心配だし、藤馬君と話すだけで、幸
せになれるもの／＼／＼／……」
ムギが幸せそうに言う。

「唯ちゃんだって、藤馬君の事が好きでしょう？」

「え、わたし！？……うん、わたしもなっちゃんの事が好き、いや、
大好きだよ！／＼／＼／」

ムギに言われ、自分の気持ちに気づいた唯。

「なっちゃんがギターを持ってくるって言ったとき……すごくカッ
コ良かった。それに、なっちゃんの音楽が好きなんだよね！えへへ
／＼／＼／」

と、唯が好きになった理由を暴露する。

この時点で澪は、顔がトマトみたいに赤くなって、爆発。
すると梓も覚悟を決めたのか、枕に顔を埋まらせながら、

「わ、私だって、藤馬先輩の事が好きですっ！／＼／＼／」
と、告白した。

「あ、梓ちゃんもなの!？」

「へっ、もしかして……憂も？」

「あつ……うん／＼／＼」

顔を赤らめながら、初々しく返事する二人。

恋は人を大胆にさせる、というのは本当らしい。

まあ、澪のような例外もいるが……。

「それじゃあ、あたしたちは明日からライバルだ!」

「ライバル……良い響きね」

「皆には、なっちゃんを譲らないよ!」

「わ、私だって、藤馬さんは誰にも譲りません!」

「むう、先輩達に憂がライバルか……頑張る!」

なにやら、凄い状況になってきましたね、読者の皆さん……。

そのあとは、恋ばなに花を咲かせ、キャッキャッしていた。

三十分ぐらい、恋ばなをしていると……。

「なあ、皆で藤馬の寝顔を見に行こうぜ(ニヤニヤ」

律が、いたずらっ子のような笑みをしながら言う。

「面白そうだね、りっちゃん!」

「私もそう思う」

「藤馬の寝顔……／＼／＼／」

「藤馬先輩の寝顔かあ……可愛いかも」

「藤馬さんって、どんな寝顔なんだろう？」

天然フラグメーカー（藤馬）、爆発しろby作者

――隣の部屋」

「うん、やめろ……律、ヘッドロックは……ムギさん、お茶が美味しいです……むにゃむにゃ……憂ちゃんの味噌汁、旨し……梓のネコミミ、GJ……唯、足はそっちに曲がらん……漣、萌え萌えキュン……」

どんな夢見てんだよ、主人公……。

l i t o b e c o n t i n u e d ?

第一樂章 ♪ 第二十四幕 遊園地、そして……前編!!（前書き）

今回からシリアスに突入します。

初のオリジナル長編ですが、頑張っていきますよ！

それでは第一樂章 ♪ 第二十四幕、どうぞ！

第一樂章 ♪ 第二十四幕 遊園地、そして……前編！！

――藤馬 side

うーん、何か暑苦しいな……。

そう思い、目を開けてみる。

すると、俺の視界に飛び込んできたのは……。

隣の部屋で寝ているはずの、女子の皆さんの寝顔でした。

――(。°) what's!?

思わず、俺は枕に顔を埋まらせる。

どういうこと！？確か昨日は鍋して、風呂に入って、この部屋で寝たはずだ。

……はっ！

まさか、俺が連れ込んで無理矢理××な事を……？

いやいや、それはないよ！！

俺はそんな、最低な変態さんじゃないぜい！

確かに皆に変態だ、って言われたけどさ……。

でも、俺はそんな奴じゃないはずだ！

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は、桜が丘にある、とある遊園地の入口に來ています。なぜ、遊園地に來ているのかというと……。

今日はもう、ゆっくりするかな。↓ゆ、遊園地に行かないのか！
？by 漣↓えっ、遊園地に行くの？↓うう、何で私の行きたいところは行かないんだ、藤馬のバカ！（涙目↓泣つかした、泣つかした）by 女子の皆さん↓くっ、行ってやるよこの野郎おお！！

というわけで、身支度を済ませ、遊園地に來ていますよ。

何か、はめられた気がしてならないんだけどね！

「はあ、今日も振り回されるのかなあ……」

まあ、怪人とストリートファイトよりはましだけど。

ちなみにムギと梓は、用事があつて來れないため、悔しそうにしました。

それにしても……。

「なあ、律？」

「ん、何だよ、藤馬？」

「…漣の奴、遅くね？」

唯がもう來てるのに、漣が來てないのはあり得ない……」

そっ、まさかの言い出しっぺが來ていない。

つか、律は家が近いんじゃないの？

「ああ、そうなんだけど、漣の奴まだ準備できてなかったら、置いてきちったゝてへっ」

テヘツ、じゃないでしょうよ……律さん。

すると、

「あつ、漣ちゃんが来たよ、こっちこっち〜！」
と、唯が言つて漣に手を振る。

「ごめんな、準備に手間取っちゃってさ」
漣が謝りながら、こちらに走る。

「うわあ、漣ちゃんの服、可愛いね！」唯が漣の服を見て言う。

「あつ、もしかして勝ブーガスツ！！」
……何でもないです」

確かに漣に似合ってるよなあ〜。

え、どんな服着てるのって？
読者の皆さんの、賢い頭脳でご想像ください。

「よしっ、それじゃ皆揃ったことだし、しゅっぱ〜っ！」
律がそう言つて、遊園地に入る。

それに続いて、俺達も遊園地に入る。

「ほえ、すごいなこりゃ」

中に入ると、数え切れない数のアトラクションが目に見え込んできた。

ここの遊園地は、そこらへんの遊園地よりアトラクションが多い。

さて、どこから行こうかね。

パンフレットを見て、どこに行くか決めようとしたら……。

「まずは、ここだろ！」

そう言っただけで指差したのは、この遊園地で一番デカイ、ジェットコースターだった。

すると、唯が目をキラキラさせながら、

「りっちゃん、りっちゃん、早く乗ろうよ！」

と、テンションMAXだ。

まあ、良いんだけど…… 澪がダメなんだろうなあ。

そう思い、澪の方を振り返ると……。

「り、律、あんなの絶対に無理、無理、無理！」

案の定、澪は体をガクガク震えながら、必死に拒否する。

何か、デフォルメ化してるよ、澪さん。

しゃあない、一肌脱ぎますか。

「なあ、唯と律の二人でジェットコースター行ってこいよ。俺は、
漣と二人で待つてるから」

まあ、女子一人を待たせるわけにはいかないよね。

と、思っていると……。

「Σな、何ですと!」

急に唯と律の二人が、漣を連れて内緒話を始めた。

――読者の皆さんにだけ、三人の内緒話を公開します――

「漣ちゃん、なっちゃんと一緒にジェットコースター乗りたくない
の!」

「Σはっ、藤馬と一緒に!」

「そうだが、みんなで藤馬と一緒にジェットコースター乗ろうぜ!」

「う、うん、そうだな、よし、行くぞ!」

――終了――

どうやら、話は終わったようだ。
何やってたんだろうな?

「さて、それじゃ行こうか!」
律がそう言って、ジェットコースターに並ぶ。

え、漣は良いの?

そう思つて、漚の方を見ると……。

「ふっふっふ……大丈夫だ、問題ない（、ゝゞ）」とか、敬礼しながら言つてますけど、大丈夫じゃないよね、これ……。

というわけで、乗りました。

ちなみに右から、唯、律、俺、漚という席順。

（その時の一部始終）

「ひやつほおおおおおおお！！！」↑律

「いっえええええええい！！！」↑唯

「いや、やつぱり無理、無理、助けて藤馬つ、あああああああああああ！！！」↑藤馬の首を絞める漚

「いやっほおおおおおおおーガシッ！！……えっ、ちよっ、おまつ、あああああああ……」↑余りの力に気を失つた藤馬

うう、酷い目にあつた。

ま、まさか、ジェットコースターに乗っただけで、命の危機が訪れるなんてな……。

「ほ、本当にごめん、藤馬！」

澪が必死に謝ってくる。

なに、俺はなにもしてないのに、この罪悪感？

「そんなに謝らなくても大丈夫だから、な！」

とりあえず、次行こう、次！

というわけで、次のアトラクションに行こうとしたのだが……。

「「っ！！」」

久しぶりに、ファンガイアが出てきたけど、まさか……。

「わりい、トイレにちよつと行ってくるわ」

そう言っつて、俺はファンガイアが居る方角へ走る。

（ここら辺だが……不味いな、人の目が多すぎるぞ！）

そう、ファンガイアが居る場所は、ヒーローショーが行われているエリア。

子連れの人達で溢れていて、とてもじゃないが、テレビ等に出ているキバに変身出来ない。

（ちっ、どうする……このままじゃ、不味いけど身動き出来ない！）
そう思い、ファンガイアのいる方角を見るが、ファンガイアの姿はない。

（藤馬、奴は恐らく、姿を隠せるタイプのファンガイアだ！）

なら、お前の感知で場所が分らないのか？

（……無理だ、私でも分からないな）

コウモリモドキと策を練りながら、ヒーローショーのステージを見ると……。

ステージに居る人物の上に、ファンガイアが使う、牙のようなものが浮いていた。

「……っ、不味い!?」俺は人を退けながら、ステージへと走る。

しかし、休みという事もあり余りにも人が多く、上手く前へと進めない。

やばい、このままじゃ……くそっ、そんなのさせるかよ！

ードスッ!!

「ああああアアああああ!!!!」

しかし、時すでに遅しのように、また俺は人を救えなかった。

――NOW LOADING――

――???side

藤馬の居るところより、少し離れた場所。

そこに、十代後半ぐらいの少女が居た。

「ふん、あれが中都藤馬か……弱そうだなあ」

少女は、ペットボトルの中のジュースを飲みながら、そう漏らす。

すると、少女のペットボトルに蟹のような生物が映る。

「ああ、ちょっと待っててねボルキャンサー、もうすぐだから……」

そう言って、四角いケースの様なものを取り出す。

「ああアアアアああああ!!!!!!」

少女は、ライフエナジーを吸われた男を見て、楽しそうに笑みを溢した。

I
I
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第一樂章 ♪ 第二十五幕 遊園地、そして……後編！！（前書き）

どうも、私こと388859です。

シザースの容姿は、ISのボクっ娘のシャルです。

大事な事なので二回（ry。

それでは、第一樂章 ♪ 第二十五幕どうぞ。

第一樂章 ♪ 第二十五幕 遊園地、そして……後編！！

――三人称 side

「ああああああああああ………」

ステージに居た男の、ライフエナジーがみるうちに吸われ、身体がガラスのように変わっていく。

ここに居る、すべての人が目の前の非常識に目を奪われていた。

そして、男のライフエナジーが尽き、

――ミシ、ミシミシ、ミシミシミシ……パリイイイイイン！！！！

ひとつの生命が、消えた。

その場は一瞬静まり、

「い、いやああああああああ！！！」

誰が言ったかは分からない。いや、その場に居た全員がこう思っていただろう。

――ここに居たら、みんな殺される。

藤馬が気付いた頃には、周りに誰も居なかった。

「あ……ああ……つくそつ、何処だよ！

正体を現せ、この卑怯者！」

藤馬がそう叫ぶと、

ーバシッ!!

「かはっ!」

藤馬の顔に衝撃が走り、地面をゴロゴロと転がる。

すると、ステージの一部分が歪み、カメレオンを模したファンガイア、カメレオンファンガイアが現れた。

「貴様…人間ごときが、ファンガイアを侮辱するな……」
「どうやら、さっきの藤馬の言葉で激怒しているようだ。」

カメレオンファンガイアはゆっくりと、藤馬に近づく。

一方、藤馬は攻撃を受けた場所を擦りながら立ち上がる。

「何度でも言ってやる、てめえは臆病者だ!」
「だから……俺が倒してやる、コウモリモドキ!」
そしてキバットを呼び、左手で掴む。

「私もお前の意見に賛成だ……ゆくぞ、ガブリ!!」「っ!!」
キバットを右手に噛ませ、全身に《魔皇力》が流れる。

すると、藤馬の顔にステンドグラスの模様が浮かび、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《変身!!》」

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え!!》」
そう言って、キバはカメレオンファンガイアへと突っ込む。

「なにっ、人間がキバの鎧を使うだ!!?」
カメレオンファンガイアは、藤馬がキバである事に動揺して、キバの接近を許してしまった。

「おらあっ!!」
キバは、そのままカメレオンファンガイアの顔を掴み、地面に叩きつける。

「ぐっ、動揺している場合ではないな……」
カメレオンファンガイアは、地面を転がり、そのまま姿を消す。

「逃がすかよ、この野郎!!」
キバはドッガフェッスルを抜こうとした。

その瞬間、近くの窓ガラスから、蟹の怪物、ボルキャンサーが飛び出して藤馬を吹き飛ばした。

「ごはっ!……な、何だ、怪人……?」

「失礼だなあ、僕のボルキャンサーは怪人なんかじゃないよ?」
突然聞こえた声に、キバは声のした方向を向く。

すると、そこにいたのは……。

メタリックオレンジがメインカラーで、蟹を模したライダーだった。

「もしかして……ライダーか？」

「そうだよ、僕はシザース、仮面ライダーシザース」
ライダー……シザースは楽しげに言う。

ードゴッ！

「グハッ、な、何だ、お前は！」

キバが叫び声のした方向を見ると、ボルキャンサーがカメレオンファンガイアを、押さえつけていた。

「あ、ボルキャンサーはそいつをお願いね、僕はこの人と話があるから……さて」

そう言つて、シザースがこちらに向く。

「ちょ、ちょっと待てくれ！助けてくれたのは良いんだけど、あのファンガイアを倒さないと！」

確かに藤馬の言う通り、相手はファンガイア。

怪物一匹程度で倒せない……と、藤馬は思っていた。

しかし、目の前の非常識はアツサリと覆さる事になった。

ボルキャンサーが持ち前の鉄で、カメレオンファンガイアの身体を掴み、

「や、やめてくれ……頼むから……」

二体一緒に、窓ガラスへ吸い込まれた（・・・）。

「……へっ？」

藤馬は、思わず間抜けな声を出してしまった。

まあ、驚くのも無理はないだろう。

ミラーモンスター、簡単に言えば、鏡の世界の怪物。ミラーワールド

非常識にある程度慣れた藤馬でも、窓ガラスに怪物が吸い込まれる、という事態には驚かざるをえない。

藤馬が目の前の出来事に驚いていると……。

「よし、邪魔者も消えたことだし……」

そう言つてシザースは、鋏のような武器、シザースバイザーで、

ーズバツー!!

「……うあつ!?!」

「殺し合いといこうか」

キバの胴体を斬りつけた。

キバはゴロゴロと地面を転がりつつ、その勢いで素早く立ち上がる。

「てめえ、いきなり何するんだ!?!」

キバがシザースに質問する。

すると、シザースは首をかしげながら、

「え、何って……君を殺すために、送り込まれたライダーだけど、

僕？」

「な、何で、そんなに平然としてるんだよ！」

シザースの余りに平然とした声に、キバは驚く。

最初に送り込まれたレンゲルの時は、まだ倒す（・・・）だった。だが、シザースはレンゲルとは悪い意味で違う。

今までと全く違うタイプの相手に、キバは動揺していた。

「さて、あんまりよそ見しない方が良くよつと！」

そう言つて、キバにシザースバイザーを もう一回ぶつける。

キバは、それを右手で防御するが、無手と武器では部が悪い。

キバの右手を弾かれ、無防備な体にシザースの膝がめり込み、そのままシザースバイザーをキバの顔にぶつける。

キバは後退りながら、ガルルフエッスルを抜き取って、

「ぐっ……くそっ、これでどうだ！」

「《ガルルセイバー！！》」

キバットに吹かせ、キバはGキバへとフォームチェンジした。

「ウアッ！！」

Gキバは、持ち前のスピードでシザースに突っ込み、ガルルセイバーで斬りつける。

シザースは華麗に避けながら、カードデッキからカードを取り出し、シザースバイザーに入れる。

「《STRIKE VENT》」

バイザーから電子音声が鳴ると、シザースの腕にボルキャンサーの鍔、シザースピンチが装着される。

「っ!?!……くそっ!」

突然現れた武器に驚きながら、攻撃の手を緩めないGキバ。

しかし、シザースはシザースピンチとバイザーでガルルセイバーをはさみ、そのまま投げ飛ばした。

再び武器がなくなったGキバに、バイザーとピンチの連続攻撃が叩き込まれる。

「ガキッ、ガキッ、ガキッ、ズバッ!」

地面を転がり、Gキバはヨロヨロと立ち上がりながら、ガルルセイバーを急いで拾い上げようとするが……。

「シャアッ!」

「くそっ……退けよ、この蟹野郎!」

ガルルセイバーの前に、ボルキャンサーが立ち塞がる。

Gキバにとって、今の状況はかなり不味い。

Gキバは、この状況を打開する策を考えながら、後ずさる。

「こんなに弱いなんて、つまらないなあ。」

あ、そうだ、ボルキャンサー！」

シザースは何かを思い付いたようで、ボルキャンサーを呼ぶ。

その間に、Gキバはガルルセイバーを拾う。

「……うん、そうだよ、彼を呼んできてね！」

シザースがそう言うのと、ボルキャンサーはミラーワールドへと入った。

「何のつもりだ、お前は？」

Gキバは警戒しながら、シザースに聞く。

「別に、何も考えてないよ？」

ただ、状況を面白くしようと思っただけ」

そう言つて、しらばつくれるシザース。

それに痺れを切らしたのか、Gキバはガルルセイバーをキバットに噛ませる。

「《ガルルバイト！！》」

ガルルセイバーに《魔皇力》が流れ、切れ味が何倍にも膨れ上がる。

すると、周りの景色が満月の夜へと変わる。

Gキバは、ガルルセイバーを口に加えると、そのまま狼のように走り出す。

対してシザースは、何もせずただ突っ立っているだけ。

その姿を見て、Gキバは走った勢いで一気に飛び上がり、そのまま

斬りつける!!

《ガルルハウリングスラッシュ!!》

シザースまであと少し、というところで。

《BURNING SHOT!!》

ーパンツ、パンツ、パンツ……ドドンッ!!

「……ぐああっ!!」

突然、放たれた数発の炎の弾丸に、Gキバはもろに吹き飛ばされ、変身解除されてしまった。

「ふうゝ今のは危ねえぞ、シザース？」

そう言っただけ現れたのは、基本カラーは銀と赤で、複眼は緑色のライダーだった。

「悪いね、でも君なら出来ると思ったよ、ギャレン」

シザースが笑いながら、ギャレンに謝る。

「それで、ターゲットは殺れたか？」

ギャレンが、倒れている藤馬を見ながら言う。

「まあ、そう焦らない、焦らない」

やっと、奴が言っていたターゲットを見つけたんだよ……って、あらあら」

そう言ったシザースの視線の先には……。

「……はあ……はあ……ぐっ……うあ……あ……」

荒々しい息をしながら立ち上がる、紫色に目を光らせた藤馬だった。

「藤馬、おい藤馬！」

キバットが藤馬に呼び掛けるも、荒々しい息を繰り返すだけで返事をしない。

実は、ギャレンの《BURNING SHOT》の弾丸を紫のメダルの力で防いでいた。

しかし、最初しか防がれておらず、結局かなりのダメージと、紫のメダルの力の負荷も負ったので、戦える力は残っていない。

「……奴って誰だ… 答える……」
途切れ途切れに藤馬は質問する。

「はっ、答えるわけないだろ？」
ギャレンがそう答える。

「良いよ、教えてあげる…… 奴っていうのは僕達を送った人で、僕達はちよつと特別なんだよね」
シザースはギャレンと違い、すんなりと答えた。

「おい、シザース！
なぜ、敵にそんなことを教える？」
ギャレンがシザースに聞く。

「……別に理由はないよ」
シザースが楽しげに言う。

「そうか…… なら…… お前らを…… たお…… し……」

ードサッ……。

そう言って、藤馬が倒れた。

「中々、根性がある奴だったな……」
ギャレンはそう言つと、踵を返した。

「あれ？

彼を殺さないの？」

と、シザースがギャレンに聞く。

「そのコウモリに言つとけ、今回は見逃してやるってな」
ギャレンはシザースに言つと、その場を去った。

「はあ、でも中都藤馬か……ちょっと面白いかも」
そう言っつて、キバットに伝言を伝えに行った。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 第二十五幕 遊園地、そして……後編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「最近は負けすぎじゃない、マジで？」

だって、最初からチートじゃつまんねえじゃん？

藤馬「確かにそうだけど……」

大丈夫だよ、その内勝てるさ、主人公（笑）。

藤馬「うう、グレてやりたい……」

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

第一楽章 ♪ 第二十六幕 恐怖を捨てて……前だけを！！（前書き）

どうも、毎度私こと388859です。

今回はサブタイトルの方が悩みましたwww

後、刺客ライダーのリクエストがあれば、感想をお願いします。

それでは第一楽章 ♪ 第二十六幕どうぞ！！

第一樂章 ♪ 第二十六幕 恐怖を捨てて……前だけを！！

――藤馬 side

はぁ……また、負けちった。

シザースとギャレンに負けてから、月日は一ヶ月以上経って二学期も、もうすぐ終わる。

あの後も、色んなライダーと戦った。

……その度にシザースとギャレンが現れ、ボロボロになって負けた。

恐らく、奴等は手を組んでいるのだろう。

バカな俺でも、いい加減に分かる。

今のままじゃ、アイツ等には勝てない、いや、何時か殺されてしまうことに……。

最近じゃ、アイツ等が現れたら、体が恐怖で震えて動かなくなる。

俺も、本能的に感じているのだろう。

死にたくない、だから逃げたい……と。

そんな俺に、コウモリモドキは心配してくれたのか、気持ち悪いくらい優しい。

本当に……自分の情けなさには嫌気がさす。

強力なキバの力を持っているくせに、何も出来ない自分が。

皆を守るとか言っておきながら、結局は誰かを守れていない自分が……。

「馬……藤馬……」

もう、逃げ出したかった……どんなことから。

「おい、藤馬……!」

ふと顔をあげると、律の顔がドアップで見えた。

俺は内心ドキッとしながら、律に聞く。

「あ、ごめん、ごめん、それで何?」

「お前、練習の途中なのに……最近何か、おかしいぞ?」
律に合わせて、他の皆も俺に聞いてくる。

「確かに最近、なっちゃんがぼーっとすることって多いよね?」

「いつもの元気も無いし、藤馬君らしくないわ」

「何かあつたんですか、藤馬先輩？」

「まあまあ、皆少しは落ち着け」

そう言つて、漣が皆を落ち着かせる。

すげえ、かつこわりいなあ……俺。

実はこんなことがもう何回も起きている。

俺が練習中にぼーっとして、足を引っ張りまくり、その度にこんな感じになる。

「いい加減、何でぼーっとしてんのかぐらい教えろよ、藤馬？」
律がやれやれといった感じで聞いてくる。

「別に……ただ考え事してただけ」
そう言つて、俺は近くの椅子に座る。

すると、梓が俺の目の前に来て、

「藤馬先輩……いい加減にしてください！
皆、藤馬先輩の事を心配してるんですよ……！」
と、怒鳴つた。

その時、俺の中で何かがキレた。

「……ざけんなよ、てめえら……人の気持ちも知らないで……」
自分でも分かつていた。
俺が全部悪いし、コイツらは何も悪くない。
それでも……やってしまった。

俺は立ち上がり、思ったことを言った。

「もう嫌なんだよ!!!」

何もかもが嫌で、嫌で、嫌でたまらない!!!

目の前で人が死んだり、自分が死にそうになったり、自分が無力に感じるのも……」

もう逃げ出したい、コイツらからも……。

俺はそのまま荷物を持って、部室から飛び出した。

――

――

――

もう最悪だよ……いろんな意味で……。

俺は今、河原に来ていた。

すぐ近くの石を拾い上げ、川に投げる。

そんなことをしても、気分が晴れるわけでもないのに、そうせずにはいられなかった。

はあ、何やってんだかなあ、ホントに……。

女の子に八つ当たりなんて最低だよな……。

アイツ等に何て謝ろうか……ははっ、何言ってた？

心配してくれたアイツ等にあんなこと言って、許して貰えるわけない……。

そうやって自己嫌悪に陥っていると、後ろで怪人の気配がした。

「ッ！……今は誰とも話したくないんだけど？」

後ろを向くと、クイーンのようなフードを被った女がいた。

「中都藤馬君、よね？」

「だったらどうするんだ？」

身構えながら、女に聞く。

「まずは自己紹介ね、私の名前はタブーって言います。

それで……貴方とちよつと、遊ぼうと思ってきたの。」

そう言つて、女、タブーは懷から銀色のドライバーと、金色のUSBメモリを取り出した。

そして腰にドライバーを巻き、USBメモリをのスイッチを押す。

「《TABOO!!》」

電子音声が発せられ、タブーはUSBメモリをドライバーに挿した。

その瞬間、体に変質し……怪人、ドーパントへと姿を変えた。

――NOW LOADING――

――三人称 side

タブーが怪人化し、空中に浮く。

するとタブーの手が輝きだし、赤いエネルギー弾を作り出す。タブーはその赤いエネルギー弾を、

「ふうう……ハアッ!!」

藤馬に投げつけた。

藤馬はスグに走りだし、赤いエネルギー弾の範囲から逃げようとする。

ーードンッ、ドンッ、ドンッ、ドゴッ!!

「……ぐあッ!」

しかし、赤いエネルギー弾が藤馬のすぐ後ろの地面に着弾し、藤馬はその衝撃で地面に倒れこむ。

「……あれ？」

キバに変身しないの、藤馬君？」

そう言つて、タブーは再びエネルギー弾を作り出す。

藤馬は立ち上がりながら、タブーに言う。

「ははっ……それじゃ、ご期待に答えて……コウモリモドキ!!」

藤馬がキバットを呼び、掴む。

「はぁ……お前は相当怪人に愛されてるな……ゆくぞ、ガブリ!!」
「っ!!」

右手をキバットに噛ませ、藤馬の全身に《魔皇力》が流れる。

すると、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

今回は、最初からキバットにバッシェーフエッスルを吹かせている。

「《変身!!》」

藤馬はBキバへと変身した。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ!!》」
そう言つて、バッシェーマグナムをタブーに連射する。

「ふふ、そうこなくちゃね」
対して、タブーはエネルギー弾を一発放つ。

数発の水弾と、エネルギー弾がぶつかり合い、相殺する。

Bキバのバッシェーマグナムは、連射性能は優れている。

しかし、威力がやや不足しており、タブーのエネルギー弾に数発撃たなければ、相殺できない。

よって、必然的に……。

「あらあら、逃げてるだけじゃ……意味ないわよっ！」

タブーがエネルギー弾を二発放つ。

Bキバはエネルギー弾を避けながら、水弾を撃つ。

しかし、タブーは水弾を避け、またエネルギー弾を放つ。

このように、圧倒的にBキバが不利だった。

Bキバはエネルギー弾を回避し、一旦タブーとの距離を開ける。

そして掌から魔皇力を全開にして、疑似水中空間で水球を作り出し、アクアフィールド

「……いけっ!!」

ーードゴツ、ザバアアアッ!!

水球を地面に叩きつけ、そこから大きな津波がタブーへと襲いかかる。

「さすが、藤馬くんね♪」

でも……ハアッ！」

そう言つて、タブーは今までより大きいエネルギー弾を津波にぶつける。

津波はタブーの攻撃で崩され、水がタブーにかかる。

――これで終わりじゃないでしょ、藤馬君？

その瞬間、周りの景色が半月の夜へと変わった。

そして竜巻が起こり、緑色の渦々しい程に巨大な水弾が作り出される。

どうやら、キバは一気に勝負を決めるようだ。

「ふふふふ、なら……」

そう言つて、タブーはエネルギー弾を……

――パキパキパキ……

「あらあら……やるわね」

作ろうとしたが、手が凍っており、作れなかった。

Bキバの紫のメダルの力で、タブーにかかった水が瞬時に凍ったのだ。

Bキバは竜巻の中で紫に複眼を光らせながら、

「ウオオオオオオアアアアアアアア！！」

バツシャーマグナムの引き金を引き、緑色の冷気を纏った弾丸を放つ――！

《バツシャーマイストルネード！！！！》

――ドキュウン！！！！

ドパアアアアン！！！！

弾丸は着弾し、勝負は決まったはずだった。

しかし、そう簡単に勝負は……。

ーパキパキ……バキイイイン！！

「……ふう、涼しいわ」

ーー終わらない。

「な、何で、平気なんだ……？」

Bキバが、目の前の状況に啞然とする。

自身の必殺技に、メダルの力の上乗せ。

今までも、この身体に極度の負担が掛かる無茶で、色んな危機を乗り越えてきた。

だが、事態はBキバの思うより深刻なものだった。

ーバリ、バリバリバリ……！！

「あうっ！……ぐっ……あ……うあ……」

突然、Bキバの体から紫の火花が飛び散り、変身が解除された。

それを見たタブーは、驚くべき事実を言った。

「このままメダルの力を使えば……貴方はすべてを失うわ、藤馬君」

「……どういう意味だ、タブー？」

紫に目を光らせながら、藤馬は立ち上がる。

「貴方だって、気付いているでしょう？」

メダルの力を上乗せをする度に、暴走しそうになる自分が？」

「……っ!？」

そう、タブーの言う通り、実はメダルの力を使う度に、藤馬は暴走しそうになる自分を抑えていた。

だが、そう簡単に抑えられるものではなく、さっきのように変身を解除しないと止められない。

「もし……貴方が暴走すれば、貴方の大切な人達も傷付ける事になるわ……」

「でも……「でもじゃない!!」……ッ!!」

タブーが地上に降りて、ドーパントから人間に戻る。

「貴方には!……貴方には、大切に思ってくれている人達が、ただだけ居ると思っているの!!!」

少なくとも、軽音部の皆は貴方の事を……誰よりも大切に思っているわ!!!」

（……何でだ、なんでだろう？
タブーの姿と……）

――だから、私にとって藤馬君達は……。

（ムギの姿が被ってしまうのは……）

――かけがえのない人達なんですよ。」

タブーは藤馬に近づいて、藤馬を優しく抱きしめる。

「今の藤馬君は……恐怖しかありません。
恐怖は生きている証拠……でも、誰かを守りたいなら、恐怖を捨てて前だけを見て。」

だって……貴方は大切な人を護ると誓ったのでしょうか？」

恐怖は捨てる……言うのは簡単だが、実現は難しい。

しかし……人はふとしたきっかけで幾らでも強くなれる。

「……ああ、そうだったな……ありがとう……」

藤馬がそう言うと、タブーが離れる。

「いえいえ、また何時か……会えると良いですね。」

そう言って、タブーは姿を消した。

「藤馬……私は先に戻っているぞ……」

キバットが気をつかつて、先に家に戻る。

そして、藤馬はその場に寝転んだ。

（タブーの言う通りだよな……皆には内緒だけど守る、いや護るって誓ったんだ……怖がってどうするんだよ、俺）

空はもう暗くなっており、星が出ている。

（何がなんでも……皆を護って、この手を届かせる、そして……）

藤馬は自分の体の中にある、コアメダルに問いかける。

（お前の力……絶対に使いこなしてみせる……）

満天の星空の下、青年は自分の魂に誓った。

――NOW LOADING――

――廃工場♪

なんのへんてつもない、普通の廃工場。しかし、今ここはシザース達、ライダーのアジトになっている。

そして……。

「さて……皆ちよつと集まってくれない！」

シザースが近くの椅子に座りながら、そう叫ぶ。

すると、他のライダー達がシザースの前に、続々と集まってきた。

「え〜と……よしよし、皆集まったね！」

それじゃあ、今回集まってもらったのは……」

そう言つて、六枚の写真を出す。

その写真には軽音部の女子メンバーと、憂が写っていた。

「この写真の子達で、ターゲットと最期の遊びをしようと思つてね

〜」

シザースは心底愉しそうに笑った。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 第二十六幕 恐怖を捨てて……前だけを！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「本当にタブーとか、クイーンは何者何だろうな？
めっちゃくちゃ強いし……」

それは二期の中盤か、終盤らへんでわかるよ。

藤馬「ふうん、そういえば……リクエストを取るんだよね？」

ああ、リクエスト良いですか？……ていう質問があったから、取り入れようと思ってな。

藤馬「というわけで、気軽にリクエストしてください！」

お願いします！

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

第一楽章 ♪ 第二十七幕 因縁との決着!! (前書き)

どうも、私こと388859です。

すいません、更新が遅れました！

それでは、第一楽章 ♪ 第二十七幕どうぞ!!

第一章 ♪ 第二十七幕 因縁との決着！！

――藤馬 side

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

昨日の事もあって、少しは気分とか色んなものが楽になった。

今日は軽音部に行きたかったが、昨日のタブーとの戦いで疲れたので、サボっちった テヘッ ♪

はあ、やっぱりゴロゴロするのって最高だよな ♪

「何で、そんな急に元気になったのか知らんが……まあ、良しとしよう」

こまけえこたあいんだよ、コウモリモドキ！

とまあ、こんな感じで休みを満喫しようと思ったのだが、そんな簡単に休みをエンジョイ出来る訳もない。

「「っ！！……はあ」」

……こんな時に出る怪人は、爆発した方が良いよな？

「私もそう思うぞ……よし、行くぞ！」

俺達は家を飛び出し、怪人のいる場所へと走り出した。

平沢家の窓に写った、ボルキャンサーに気付かずに……。

――NOW LOADING――

――三人称side

一方、軽音部のメンバーは……。

「「「「「はぁ……」「」「」」」」

全員がお通夜モードに入っていた。

それもそうだろう、好きな男の子に拒絶されたのだから。

恋する乙女には、何よりも辛いだろう。

まあ、当の本人はもう機嫌を直し、今頃怪人をフルボッコしている頃だろうが……恋する乙女達は知るよしも無い。

「すみませんでした、私のせいで……」梓が申し訳なさそうに言う。

「そんな……梓ちゃんのせいじゃないわ!」
ムギが梓の言ったことを否定する。

「でも……わたしが……ヒクッ……グズッ……藤馬……先輩を……苦しめて……本当に……ごめんなさいっ……」
梓が席を立つて、泣きながら謝る。

すると、他の四人も席を立ち、皆で梓を抱きしめる。

そして、梓に一言ずつ告げる。

「梓が悪いわけじゃないよ……アタシだって、藤馬を傷付ける事を言っただけ」

「私も、藤馬君の悩みに全く気づけなかった……」

「私も……藤馬の事は、何もわかっていなかったなあ……」

「だからね……あずにゃん、皆でなつちゃんに謝りに行こうよ、ね!」梓は四人の言葉を聞いて、涙を拭く。

そして、顔を上げて……。

「……はいっ!」

とびっきりの笑顔で答えた。

「よしっ、そうと決まれば……今から藤馬の家に皆で行くか!」
と、律がテンションMAXで言う。

「ちょ、ちょっと、律!

練習はしないのか！」

漣がそう言って、律を止めようとするが……。

「さすがりっちゃん！」

それじゃ早く行こうよ、ほらあずにゃん！」

「はいっ!!」

「私も、行きたい行きたい！」

こんな感じで、一気に藤馬の家に行くことになっている。

「はぁ……結局こうなるのね」

皆が元気を取り戻し、これで解決したと思われた……しかし、

ーヒュン……。

近くの窓ガラスから仮面ライダーシザースが現れ、こう告げた。

「そんなことより、僕と遊ぼうよ」

運命は、他人の意思とは関係なく、最悪の方向へと向かっていく。

「かかか鏡から、かかか仮面ライダーが出てきた!……きゅう」
目の前の非常識に着いていけず、漣は気絶してしまう。

「み、漣先輩!？」

梓が駆け寄り、漣を支えるがそのまま倒れた。

「ほ、本物の仮面ライダーだよ、りっちゃん！」

「お、おう、そうだな唯！」

あ、一緒に写真撮りませんか？」

「私も私も」

この三人は平常運行のようだ。

すると、シザースはバイザーをなぞりながら……。

「さて、中都藤馬との遊びの為に……」

ーートン……。

「あうっ！……」

「眠ってもらっよう」

そう言っつて、シザースは梓に手刀を入れ、梓を背負う。

「梓！！……ちょっと、何するんですか！！」
律がシザースに問い詰める。

「そんなに手間を掛けさせないでね……」

ーブッ!!

ーNOW LOADINGー

ー藤馬side

「セイヤアアアアアア!」

《ダークネスムーンブレイク!!》

ドスッ、バゴオオオオオン!!

怪人を蹴り倒し、変身を解除する。

「はぁ、貴重な休みが消化された上に、かなり疲れた……」

（私も疲れたな……今日の夕食はトマト料理を頼む）

（自分で作りやがれ、クソコウモリモドキ）

くだらない事に意志疎通を使いながら、家に向かって歩き出す。

しかし……。

（っ!……不味い、学校の方からシザースの気配がするぞ!）

自分でも気配を感じたが、不思議と最近感じていた恐怖は無い。

ははっ、タブーには感謝しないとな。

俺は、直ぐに学校に向かって走り出す。

ミラーモンスターについては、コウモリモドキから聞いた。

学校には部活をしている生徒が居る……シザースがいるとなれば、ボルキャンサーもいる。

もしかしたら、ボルキャンサーの食糧目当てかもしれない。ーパン、パン、パン、パン……！

ふと聞こえた銃声に、俺は身体を横に転がす。

「すまんなあ、シザースに足止めを頼まれたんでな……」
そう言つて、ギャレンが現れる。

ちっ、ギャレンの野郎か……。

「コウモリモドキ……！」

「ああ……ゆくぞ、ガブリ……！」
すると、ギャレンが俺を見ながら、

「ほう、中々の面構えになったな……何かあったか、中都藤馬？」

「まあ、ちょっとな……」こは通させてもらつぜ、ギャレンー!」

「《变身!ー!》」

俺はキバに変身して、

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え!ー!》」

ギャレンとの戦いに身を投じた。

――三人称 side

ギャレンが銃、ギャレンラウザーを腰にかけ、キバと肉弾戦に持ち込む。

ギャレンが拳を顔に突き出し、キバがそれを流しながら、カウンタ―を放つ。

しかし、ギャレンはキバのカウンターをそのまま受け、腕を掴み近くの壁に叩きつける。

本来なら、キバの方がスペックは上だが、ギャレンの融合係数が非常に高く、性能が倍以上に上がっていた。

キバは立ち上がり、ギャレンの側面に回り込んで、攻撃する。

この一ヶ月、藤馬は色んなライダーと戦い、タイマンなら勝つことが多かった。

しかし……その中でも、このギャレンとシザースは格別に強く、ずっと負けていた。

ルークと同等、とまではいかないが、それでもキバよりは強い。

ーパンパンパン……！！

「ぐあっ……！」

ギャレンラウザーの弾を受け、吹っ飛ぶキバ。

ボロボロの体に鞭を打ち、ヨロヨロと立ち上がる。

「確かに、面構えは変わったが……所詮は雑魚だな……」

そう言っで、ギャレンはキバに一気に近づき、膝蹴りを叩き込む。

ードッ……！！

「っ……ぐっ……だからって……」

キバは、叩き込まれたギャレンの膝を掴む。

すると、キバの複眼が紫に光り、メダルの力を解放する。

「……こんなところで、負けらんねんだよおおオオオオ……！」
そのまま、ギャレンの無防備な体に拳のラッシュを放ち、最後に殴り飛ばす。

ーバキイツー！

「がはっ！……一体どこにこんな力が……ッ！」

ギャレンがキバを見ると、キバの様子がおかしい事に気付いた。

なぜなら……。

「ウウ……くっ……」

ーピキ……ピキピキピキ……。

キバの鎧にヒビが入り始めていたからだ。

本来なら、混じり合うことの無いキバとコアメダル、二つの力を無理矢理混ぜている……その代償で、負荷が藤馬だけでなくキバの鎧にもあった。

そして力を封印しているキバでは、その負荷に耐えきれず、崩壊を始めていた。

「ぐっ……ウオオオオオアアアアア……！！！！！」

ーダンッ、ドゴッ……！！

キバが地面がめくりあがる程の力で地面を蹴り、ギャレンへと飛び蹴りを放つ。

ギャレンは両腕で防御するも、威力を殺しきれず、そのまま横に転

がる。

「ちっ、暴走しかけてやがるな、仕方ない……」

ギャレンは左腕に嵌めてある、ラウズアブソーバーから、《QUEEN》を取り出してインサートリーダーにセットする。

「《Absorb Queen》」

そして、《JACK》のカードをラウズする。

「《Fusion Jack!》」

その瞬間、ギャレンの体に《JACK》の絵柄が吸い込まれる

そして、体中に金色の装飾があらわれ、背中にオリハルコンウィング、ギャレンラウザーに格闘専用のディアマンテエッジが付属する。

ギャレンは、ジャックフォーム（以降「ギャレン」）へと強化変身した。

キバはそれを見て、フェッスルを三本抜く。

こちらも強化変身するようだ……しかし、

「藤馬、もう良い……もう止める！」

今の状態でのドガバキは危険すぎる……！」

キバットの言う通り、このままだとキバは自滅するだろう。
キバもそれを悟ったのか、フェッスルを一本だけ吹かせる。

「《ドッガハンマー!!》」

キバはDキバへとフォームチェンジした。
しかし、キバの鎧の崩壊はさっきより進んでいる。

Dキバはそのまま、ドッガハンマーをキバットに噛ませる。

「《ドッガバイト!!》」

ドッガハンマーに《魔皇力》が伝達していく。

その瞬間、周りの景色が朧月の夜へと変わった。

ドッガハンマーの柄を地面に叩き付け、拳の握り目が開き、
トゥルーパーアイ 真実の目が見えてくる。

一方のJギャレンは、ギャレンラウザーからラウズカードを引き抜き、ラウズする。

「《Fire Drop》」

ラウズされたカードの絵柄が、Jギャレンに吸い込まれる。

「はああ……ふっ!!」

Jギャレンはオリハルコンウィングを開き、空へと飛ぶ。

空中の電気エネルギーを吸収し、そのまま炎を纏った両足蹴りを放つ!!

《BURNING SMASH!!》

Dキバも、トゥルーアイの冷気を伴う魔皇力を発し、技を放った」ギャレンの動きを止める。

そして、落雷エネルギーを纏ったオーラを、「ギャレンに振り下ろす!!!」

「ムウウウウン!!!」

《ドッガサンダーブリザードスラップ!!!》

ドゴッ!!!、バリバリバリ……!!!

「ちっ…やっかいだな……!!!」

「ウオオオオアアアアア!!!」

二つの技がぶつかり合い、その余波でコンクリートで出来た道路をみるみるうちに削り取る。

しかし……キバの鎧の崩壊がどんどん進んでいくDキバの技と、ダメージを受けたが、まだ余裕がある「ギャレンでは……」。

「ーバリバリバリ……ピキ、ピキピキ……ピキッ!!!」

Dキバの拳のオーラが、徐々に破壊されていく。

「これで、終わりだ……中都藤馬あ……！」

事実Dキバは、もうメダルの力は使えなくなっており、キバの鎧も崩壊寸前。

「くそっ……こんなところで……」

――やっぱり、俺じゃダメだったのか……。

Dキバがそう思ったときだった。

「……ぐう……藤馬、しっかりしろ……！」

貴様は何時だって、どんな状況でも諦めなかっただろう……！」

「っ……！……グウ……」

（そうだ、俺は昨日誓ったじゃないか！ 皆を護るって……）

――この手を、皆に届かせるって……！！

その瞬間、拳のオーラが雷と冷気を纏いつつ再形成され、

「むっ？……不味いつ！？」

そのまま、「ギャレンごと地面に叩きつける……！」

「ウオオオオオオアアアアアアア！……！」

ドゴツ、バゴオオオオオオオオオオオン！！！！！！

―――NOW LOADING―――

――藤馬Side

「じぼっ……はぁはぁ……ぐっ……」

吐血しながらも、俺はしっかりと立つ。

ギャレンは変身が解け、倒れている。

俺はフラフラとギャレンの元へと行き、ギャレンの脈をはかる。

良かった、生きてる……。

幾らなんでも、目の前で死なれたら困るもんな……。

そう思うと体から力が抜け、膝から倒れこみそうになった。

すると、何処からか現れたフードを被った女に抱き支えられる。

「全く……キミはいつも無茶をしすぎだよ？
本当にヒヤヒヤしたなあ」

ははっ、誉め言葉をどうも……クイーン。

クイーンに抱き支えながら、俺は話しかける。

「あのさあ……彼処にいる奴を「助けて欲しい」でしょ、わかってるよ」……ありがとう

ああ……眠い……な……おやすみ……。

俺はそのまま目を瞑り、眠ろうとした……その時。

「うん、おやすみ……なっちゃん」

えっ、どう……いつ……こ……と……。

俺はそのまま気を失った……その時の俺は凄く満足そうな顔をしていたらしい。

↓

↓

―――廃工場」

ーヒュン……。

窓ガラスからシザースが飛び出し、地面に降り立つ。

「よつと……到着！」

すると、シザースの近くに一人の男が寄り、こう告げる。

「シザース……ギャレンがやられたようですよ？」

「えっ、それ本当なのガオウ？……やられちゃったんだ、ギャレン……まあ、彼は足止めだったし、消えないから別に良いんだけど……あ、そうだ！」

そう言つて、シザースは男、ガオウの方に向く。

「ギャレンが帰ってきたら、最期の遊びの事……言つていてね」

「わかっていますよ……それでは」

ガオウが廃工場から出ていく……そして、シザースはある場所を見つめる。

そこには、シザースによって眠らされた軽音部のメンバーと憂が、ロープで縛られていた。

「後、もう少しだから……待っててね、皆……そして」
シザースは顔を歪ませながら、

「君達を巻き込んで……ごめんなさい」

涙をボロボロと流し、謝った。

I I t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 第二十七幕 因縁との決着!! (後書き)

藤馬「駄文なのに、更新が遅れるなんて……潰すぞ、作者……ああん？」

さーせんしたあああああ!!!

だから……頭をグリグリしないでえええ!!!

藤馬「ふう………これからは気を付けろよ？」

Yes , s i r ! !

全員「それでは次回をお楽しみに!!」

第一楽章 ♪ 第二十八幕 ギャレンの涙！！（前書き）

どうも私こと388859です。

三万PVを越えました！！

皆様のお陰です、ありがとうございます！

それでは、第一楽章 ♪ 第二十八幕どうぞ！

第一樂章 ♪ 第二十八幕 ギャレンの涙！！

――憂side

「うう……ん……あれ……ここは何処だろう?」

私は目を開け、周りを見渡します。

何処かの工場みたいだけど……腕はロープで固く縛られてるし。

確か、さっきまで家の掃除をしていた……そしたら、急に気を失っちゃって……あつ！

「お、お姉ちゃん！それに梓ちゃんや皆さんまで！」

皆、ロープみたいなもので縛られてて、気絶してる……。

とりあえず、私は皆を起こすことにしました。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん！！」

梓ちゃん、律さん、澪さん、紬さん！！皆さん、起きてください！！

「ううん……ういゝ……ごはん」

お姉ちゃんは、こんな時にご飯の夢を見ないで……！！

「つまり……皆さんは仮面ライダーに気絶させられて、ここに連れて来られたんですか？」

「うん、そうなんだ、憂ちゃん」

藤馬さん以外に、仮面ライダーが居るのはわかっていたけど、悪者だったなんて……。

でも、何で私たちをさらったんだろう……。

何か恨まれる事でもしたかな？

「ああ、お腹がすいて力が出ないよ……」

「アタシもお腹空いた〜、なんか食わせろー！」

「お前達はアンパンマンか……」

「でも、お腹は空いたわね……」

スゴいなあ、お姉ちゃん達。

こんなときでも普通に振る舞ってるもん。

「いや、無頓着なだけだと思うけど……」

へっ、そうなの、梓ちゃん？

「全く……君達はさらわれているのに、何でそんなに冷静なのかな？」

そんな声が聞こえると、窓からオレンジ色の仮面ライダーが飛び出してきました。

つて、窓から飛び出してきた！？

「ああっ！？」

お前はさっき私達をさらった奴！」

律さんが、仮面ライダーを見てそう言います。

この人がお姉ちゃん達を……。

「何で……私達をさらったんですか？」

紬さんが落ち着いた声で質問します。

スゴいなあ、紬さん……凄く落ち着いてる。

「簡単に言うと中都藤馬で遊ぶため、そして君達はその遊びに必要な道具だね」と、仮面ライダーは楽しげに言います。

「……………っ！？」

な、何で藤馬さんがこんな時に出るんだろう……？

「とりあえず、静かにしてね？
そうじゃないと……」

仮面ライダーはベルトからカードを取り出し、腕の機械に入れました。

「《STRIKE VENT》」

すると、何処から現れた鍔のようなものが、仮面ライダーの腕について……。

「……こうなるよ？」

ードゴンッ！……ミシ、ミシミシ……。

そのまま地面に叩きつけ、地面には亀裂が走ります。

あの攻撃が人に当たったら……そう思うと、寒気がします。
皆もそう思ったのか、さっきから口を閉じています。

「よし、それじゃ静かに待っててね」

仮面ライダーは、また窓の中に入っていました。

私たち、どうなるんだろう……藤馬さん……。

私は、心の中で好きな人の事を呟きました。

――NOW LOADING――

――藤馬side

――声が聞こえる。

――おい、小僧……名前は？

そう言つて、コウモリモドキが名前を尋ねる。

――はあ、俺は■■■■だ。

お前は確か……コウモリモドキだよな？

――誰がコウモリモドキだ、小僧！

私は誇り高きキバツト族の、キバツトバツトII世だ！！

「何か……懐かしい夢を見た気がする……」

最近は、記憶の逆行なんて全然無かったのにな……。

あの後、どうなったんだろう？

俺は頭だけを動かし、周りを見渡す。

どうやら家の中のような。

隣にはギャレンがぐっすりと寝ている。

それにしても、このぐらいで済んで良かったな。

全身が軋んでるけど……入院するほどじゃないしな。

と、包帯で巻かれた部分を見ながら思っていた……すると。

「…何を勘違いしている、充分に重傷だぞ？」

コウモリモドキがヒラヒラと跳んできて、俺の頭に乗る。

え、いつもよりはマシだろ？

「バカ藤馬が……キバの鎧は崩壊寸前、ハッキリ言って一ヶ月は使えん、それに……」

そう言つて、俺の頭から目の前に移動する。

「メダルの力は危険すぎる……このままでは何時か、お前の身体が本当に壊れるぞ？」

そうだな……これからは気を付けるよ。

「はあ……お前の約束は一番信用が出来ん……」

自分でも薄々気付いてたよ。

「うう……ここは何処だ？」

どうやら、ギャレンが起きたようだ。

「ここは俺の家だよ、ギャレン」

「そうか……何故だ？」

うん、何がだよ？

「お前を一ヶ月の間、ずっと殺そうした俺を……なぜ助けた？」

コイツも、レンゲルと同じタイプなのかな？

「……だからどうした？」

俺がお前を殺す理由は無いら……第一、誰かを殺して幸せになんかなれるわけねえだろ、バーカ」

俺がそう言つと、ギャレンは笑みを溢す。

「ふつ、貴様の馬鹿さ加減には呆れたな……」

誉め言葉をどうも。

「ていうか、お前は他の奴とは違って消えないな、何で？」

前に戦ったレンゲルみたいに、変身を解除しなくても消える奴は居ただけだ。

「ああ、実はな……俺とシザース、後はガオウという奴も俺と同じで、負けても消えない」

そういえば……一ヶ月前にシザースがそんな事を言ったな。

「何で消えないんだ？」

お前達はレンゲルと同じで、変な男から俺の抹殺を頼まれたんだろ？」

負けたら用済み……それがコイツらを送った奴の考え……だが、

「少し違うな……厳密に言えば、俺達は奴の仲間に自ら望んで……」
「なった」

……はあっ！？

「お前……自分が何言ってるのか、わかってんのか！……」
俺がギャレンの胸元を掴む。

すると、ギャレンが悲しい雰囲気醸し出す。

「ああ、わかってるさ。」

でもな……俺だって、好きでこんなイカれた事をやってるわけじゃない」

そう言っつて、俺の手をどける。

「藤馬……少しは落ち着け、話が進まないだろう？」

……わあっ たよ、コウモリモドキ。

「続けるぞ……俺とシザースはある日、奴に家族を人質にとられ、そして体を弄られた。

アイツ等の言う通りにすれば家族を解放する、そう言われてな」

そう言っつて、ギャレンは着ていたＴシャツを捲る。

するとそこには、何かに切られたような跡が数え切れない程あった。

酷い……シザースにもこんな傷が……。

「……だが、俺はまだ良い」

そう言っつて、ギャレンは拳が白くなるほど握る。

「シザースは……身体を弄られたせいで、家族から化け物呼ばわりされた。

それでも……アイツは人質にとられている家族を、救おうとしている。

やりたくもないことを、遊び（・・・）と称してやり続けている。

おそらく、遊びっで思いこまなければ、精神が狂っぐらい辛いんだろっ」

「そっちはよろしくね、僕はこの人と遊ぶから！」

シザースに、そんな辛いことを一ヶ月もさせていたのか……。

思わずバカな自分を殴りたくなる衝動を抑えつつ、ギャレンの話を聞く。

「だが、最近シザースは狂い始めている……このまま遊び（・・）を続ければ、精神が崩壊するだろうな……」

ギャレンはそのまま、俺の方を見る。

「中都藤馬……お前には本当に申し訳ない事をした。謝っても、謝っても、謝りきれない……ッ……ぐらいの事を……お前にしてしまった。そんなお前に、頼み事なんて……ぐっ……馬鹿げてるとしか……思えないっ……」

ギャレンは身体を震わせながら、悔しげに涙を流す。

「自分が……無力だった……一人の女の子を……助ける事も出来ず、慰める事も出来ず……見ていることしか出来なかった……ッ……表

では笑顔で話しながら……影では……助けを誰よりも求めていたはずなのに……自分が……誰よりも……アイツの……近くにいた……はずなのに……くそっ……くそっ……くそっ……」

そう言ってギャレンが俺の身体を掴む。

「頼む……アイツを……シザースを……助けて……やってくれ……」

はあ……コイツは……。

「とりあえず、落ち着け……ギャレン」

そう言って俺は、ギャレンの手を離れさせる……そして。

「全く……そんなもんを知らんぷり出来る程、俺はバカじゃないんでね……とりあえず、傷を先に治さねえとな……」

そう言って、俺は布団に寝転んだ。

「ありがとっ……本当にありがとっ、藤馬……」

「キャラが崩壊しすぎだ、気持ち悪いぞギャレン……」

まあ、そう言っちなよ……コウモリモドキ。

「そういえば……俺は、あれからどれだけ寝てたんだ？」

なぐんか忘れてるような……？

「約三日だな……二人とも疲労が溜まっていたんだろう……」

「三、三日だと！？……不味い！」

そう言って、ギャレンが家から飛び出そうとする。

しかし、それを俺が止める。

「離せ！……俺は戻らなければならないんだ！」

「待て待て待て待て、何でそんなに急いでいるんだ？」

l l P i P i P i P i l

俺がそう言つと、携帯から着信音が鳴る。

とりあえずディスプレイを見ると、唯からだった。

何の用事だよ、こんな時に……。

そう思いながら、電話に出てみる……すると。

「もしもし、中都藤馬で合ってるよね？」

……シザース!?

「てめえ……何で唯の携帯を持っていやがる？」

少なくとも、コイツは唯の事は知らないはずなのに……。

「そんなの決まってる……君の大切な人たちを、僕が誘拐したんだよ」

「なんだとっ!？」

達つて事は……唯以外にも誘拐しやがったのか、くそっ!

「何で誘拐した?……唯達には関係ないだろ？」

「奴からの命令だよ……そろそろ遊び(・・)を終わらせろってね、ほら……聞いてみる？」

シザースがそう言うと、誰かに代わる。

「ごめん、藤馬……皆捕まっちゃった」と、律が暗い声で喋る。

俺は悔しさで、拳が白くなるほど握る。
くそっ、助けに行かなきゃ……。

「藤馬……別に、アタシ達の事は助けなくても良いよ」

……はあっ！？

「何言つてんだ、絶対に助けてやる！
だから大人しく「…だって」……」

律が嗚咽を漏らしながら……喋り始める。

「藤馬が……ここに来たらっ……殺されちゃう……藤馬が……死ぬな
んて……そんなの……皆……見たくないよおっ！！！」
そう言つて、皆が泣き始めた。

すると、またシザースが話し出す。

「というわけで、場所はそっちに送るから……それじゃ♪（絶対に
助けてあげてね）……」

ーブツンッ！……ツー、ツー、ツー……。

くそつたれが、シザースの野郎……。

「自分が一番……助けて欲しいと思つてくせに……見栄張りやがつ
て……」

携帯を閉じると、俺は直ぐに服を着替えて、体に巻かれた包帯を千
切る。

傷はまだ、全然治っていない。

――だからどうした？

そう思いながら、家を出ようとする……しかしギャレンが俺を遮る。

俺はギャレンの腹に思いっきり拳をぶちこみ、

「ぐっ……無理だ、危険すぎる……」

「知るか、ボケ」

怯んでいる隙に、指定された場所へと向かい始める。

――

――

――

（コウモリモドキ、あと、どんぐりの距離だ！）

（おい藤馬……ハッキリ言って今のお前だと死に行くようなものだぞ！）

わかってるさ……。

（わかってない！

そもそもキバには変身が出来ないんだ、どうやって助ける！！）

.....。

（第一、相手が多すぎる.....少なくとも十人以上はいて、その中でもお前と同じ強さの奴とそれ以上が一人ずつ居るんだ！！

どうやっても勝てないぞ、また小娘供を悲しませるつもりかっ！！）

コウモリモドキの言う通りだ.....このまま戦っても殺されるのがオチ。

キバに変身できても、人数の差で負けるだろうな。

だけどさあ.....それでもよ。

「それでもっ！！！！」

（っ！！）

立ち止まり、俺は叫んだ。

「確かに、今だって死ぬのが怖くて怖くて、逃げてえよ！.....でもな」

「ーそっ...か...ぼく.....は.....しぬ.....んだ...ね.....」

「ー助けてくれて、ありがとうな。」

俺の脳裏に、レンゲルや今まで救えなかった人達の顔が浮かぶ。

そして……。

――よしっ、零のいちごもーらい♪

――ちょっと律、私の苺返せ！

――はいどうぞ藤馬君、ケーキ♪

――唯先輩、猫耳はしまってください！

――ええゝあずにゃんのいけずゝ。

アイツ等と過ごした日々を思い出す。

「それでも！

やれることはやらなきゃ絶対に後悔する！！！！！！」

（藤馬……）

「だから俺は……絶対に逃げない！！！！」

そう叫んで、また俺は走り出した。

I
I
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第一楽章 ♪ 第二十九幕 そんなの関係ない!! (前書き)

どうも、私こと388859です。

この長編も今回も含めて、後三話です！
最後までお楽しみください！

それでは、第一楽章 ♪ 第二十九幕をお楽しみください!!

第一樂章 ♪ 第二十九幕 そんなの関係ない!!

――三人称 side

シザースが藤馬に電話してから、かなりの時間が経ったが……藤馬はまだ来ない。

「中都藤馬は来ないねえ、どうしようかガオウ？」
シザースがそう言っ、ガオウに聞く。

「そうですね……試しにこの中の一人を殺してみますか、例えば……」
ガオウが、唯達を値踏みするように答える。

そして、律の目の前に来て……。

「……この子とかどうでしょう？」

「ちょっと待ってください、何で律を殺すんですか……やめてください！」
漣が辞めるように説得する。

「そうです、りっちゃんは殺させません！」

「りっちゃんは私達の大切な仲間です！」

「律先輩は大切な軽音部のメンバーなんです！」

「み、皆……ありがとう……」

律が感動していると、ガオウはとんでもない事を言ってきた。

「はあ、見苦しいですね……この期に及んで友情ごっことは……全員、喰い殺したくなってきましたよ？」

「ちょ、ちよつと、ガオウ！……幾らなんでも、それは不味いでしょ！」

流石にシザースが止めにかかる。

「うるさいですね……貴方も喰い殺してあげましょうか？」

そう言うのと、ガオウの腰に炎と共に黒いベルトが巻き付く。

ベルトからパイプオルガンのようなミュージックホーンが鳴り響き、ガオウはマスターパスを頭上に投げる。

「《……変身》」

するとマスターパスが自動的にセタッチされる。

「《Gaoh Form》」

電子音声と共に、ガオウのフリーエネルギーが銅色のオーラアーマーに変換、装甲に装着される。

すると、電仮面が顔のレールを移動しワニの形に変形する。

体のあらゆる所に牙の装飾、その姿はまさに……牙の王。

「さて……どう喰い荒らしましょうかね？」

そう言つて、シザースにゆつくりと近づく。

「下がつて……まだ死にたくないでしょ？」

シザースは唯達を下がらせ、カードデッキを取り出そうとする。

しかし、後ろからライダーの一人が、シザースのカードデッキを奪い取り、突き飛ばす。

「ぐっ……何のつもり、ガオウ？」

シザースは体制を立て直しながら、ガオウに聞く。

「貴方はそろそろ、使い物にならなくなりそうですからね……私が喰い殺してあげます」

ガオウが、腰に付いているパーツを外し、組み立てる。

するとパーツは、フリーエネルギーを纏いながらガオウガッシャーへと形を変えた。

ガオウは、ガッシャーの感触を確認するように振り回す。

「さて、どうしよう……このままじゃ殺されちゃうな」

唯達を庇うように、シザースは前に出る。

唯達は、今まで敵だったシザースがいきなり自分達を守ることになり動揺しているようだ。

「なあ、アタシ達を何で助けるんだ……？」

律が耐えきれなくなっただのか、シザースに聞く。

「そんなの、死んで欲しくないからに決まってるよ……それに」
そう言つて、シザースが唯達を見る。

唯達は、シザースが振り返った瞬間に驚く。

なぜなら……。

「僕が君達を勝手に誘拐して、殺そうとした……許される事じゃないけど……本当にごめんなさい……」

シザースが静かに、笑顔で泣いていたからだ。

おそらく本人は気付いていない……それほどシザースは、自分のした遊び（・・・）に自責の念を抱いているのだろう。

「だから、今は安らかに……」
「ーートンッ……」。

「うつ……」

シザースが唯達に手刀を入れ、気絶させる。

しかし、そうしている間に十人のライダー達はライオトルーパーへと変身し、シザース達へと武器、アクセレイガンを構える。

そして、ガオウはガツシャーを……。

「じゃあ、さようなら……シザース」

シザースへと、物凄い速度で振りかぶった……。

運命は時々、一人では背負いきれない事実さえも、背負わせようとする。

それで……誰が悲しもうが、誰が死のうが関係なく。

だが……一生懸命抗い続ければ、いつかきつと……。

「そこまでだ！……！」

――運命は、ハッピーエンドへと変わる。

――ガキイイイッ！……！

ガオウガツシャーが、何処からか跳んできた青い剣に弾かれる。青い剣は瞬時にガルルへと姿を変え、ガオウを投げ飛ばす。

よく見ると、バツシャーとドツガも来ており、ライオトルーパー達を蹴散らしている。

そしてもちろん……。

「はあ……はあ……大丈夫か、あんた!!」

藤馬が荒い息をしながら、シザースに聞く。

「……………へっ?」

シザースは、思わず間抜けな声を出す。

「早くここから出るぞ……唯達を背負うの、手伝ってくれ!」

そう言ってシザースを急かすが、シザースはぼーっとしたままだ。

その瞬間、シザースの後ろからライオトルーパーが襲いかかる。

「何やってんだ、早く……危ねえっ!!」藤馬はシザースを突き飛ばし、脇腹にアクセレイガンの斬撃を受ける。

「ズバツ!!」

「っ……………くそつたれ!!」

藤馬は脇腹から血を流しながら、ライオトルーパーを押さえつけようとする。

しかし、あくまでもライダーと人間。

ライオトルーパーの力に負け、逆に床へと押さえつけられる。
逃れようと必死にもがくが、びくもしない。

「グヘヘ、観念しろ……お前はここで死ぬんだよ」
ライオトルーパーが勝ち誇る。

その瞬間、藤馬はライオトルーパーの股を思いっきり蹴飛ばした。

「……ギャンツー！」
踏まれた犬のような声を出し、悶える。

「はっはっはっはっはっ、ざまあwwwwww」
ライオトルーパーを見下し、笑う藤馬。

主人公とは思えない、卑怯な奴である。

藤馬はそのままアクセレイガンを取り、それでライオトルーパーの鳩尾に何回も殴る。

ライオトルーパーはピクピクと痙攣し、気を失った。

するとライオトルーパーから、シザースのカードデッキが転がり出た。

藤馬はそれを拾い、ポケットに入れる。

「あつ、唯達を運ばないと……」
藤馬は、スグに唯を担ぐ。

「あ、あの…それ、僕の何だけど…」
シザースがモジモジしながら言う。

「へっ……もしかして、あなたがシザース……さん？」
藤馬がよくわからない口調で喋る。

それにシザースは首を縦に振り、肯定する。
「というか、ギャレンの話を全く聞いてないのか、主人公？」

「はあああつ!？」

マジかよ……男だと思ってた……じゃあ、ほれ」
藤馬は、カードデッキをシザースに投げる。

そしてここから脱出しようと、逃げ出す。

「ちょ、ちよつと待つてよ!

何で、僕の事を怒らないの?……君には、酷いことを沢山したのに……」

シザースが俯きながら、藤馬に言う。

「お前の事は、ギャレンから聞いたし……」
「だったら……」
「うん?」

シザースが身体を震わせながら、喋り出す。

「だったら余計に可笑しいよ……化け物の僕を……何で……何で……僕は化け物なんだよ!?!……だから」

そして、シザースは手から血が出るほど握り、顔をぐちゃぐちゃにしながら……。

「家族を差し置いて……助かっちゃ……いけないんだよ……」
涙がとめどなく流す。

シザースのそんな姿を見て、藤馬は……。

「そんなこと、俺には関係ねえよ……」

「へっ……？」

「お前を助けてくれ、ってギャレンから頼まれたんだ……アイツが、みつともねえぐらいボロボロ泣きながら……」

「あの……ギャレンが？」

シザースの問いに、藤馬は頷く。

「ああ……誰よりも近くにいたはずなのに、何も出来なかった……誰よりも助けを求めていたのに……そう言ってたよ」
藤馬は唯を運びながら、話を続ける。

「そんなに頼まれたら助けるしかないでしょ……それに」
するとシザースの方を振り向く。

「俺、バカだから……お前が普通の女の子とどう違うのかなんて、全然わかんねえしな……だから、俺がお前を助けてやる……」
そう笑いながら言っ、再び走り出す。

その姿を見て、シザースはぼーっとしながらも……。

「ふふっ……あはははははははー!!」
吹っ切れた様に笑い出した。

するとシザースはカードデッキを窓にかざし、ライダーに変身する。

そしてカードデッキから、カードを取り出しバイザーに入れる。

「《Adventure》」

電子音声と共にボルキャンサーが現れ、零と律、梓を背負う。

シザースも憂と紬を背負い、藤馬を追いかける。

「ふう〜、外に出れた……これでよし!」

藤馬が工場の外に飛び出し、一息つく。

すると、近くの窓ガラスから……。

「ーフォン……」。

「あれ、随分遅かったね♪」

シザースとボルキャンサーが、出てきた。

「て、てめえ!

ミラーワールドを使うなんてセコイぞ!」

藤馬が指をさしながら、シャウトする。

ていつか、女の子なんだから別に良いと思うが……。

「はいはい、とりあえず……どうするのこの子達？」

「ああ、それなら……おい！」

藤馬がそう言つと、銀色のオーロラが出現する。

その中から現れたのは……。

「全く、ちゃんとボディーガードぐらいしろよな……激安のバーゲンセールに行けねえだろうが？」

この世界の神だった。

「まあ、ケチケチすんなつて……それじゃ頼むぜ、クソ神？
そう言つて、唯達を指差す藤馬。

神は腕を振り回しながら、

「じゃあ今度、お前の家の夕飯を分ける……それが報酬だ」と、カッコつけて言い放つ。

端から見れば、変人にしか見えない。

その証拠に、シザースと藤馬は五メートルぐらい神から離れている。

「はあ、お前はどれだけ金がねえんだ……わあつたよ」

頭をかきながら返事をする藤馬。

この時、神のテンションはMAXだったと言っておこう。

神は唯達をオーロラに入れると、そのまま消えていった。

「藤馬くん……さっきの誰？」

「聞かないでくれ……今、アイツと関わった過去の自分をぶん殴りに行きてえよ……」

そんなバカなやり取りをした時だった。

「くぐあああああああ……！！」

工場から次狼、リキ、ラモンがボロボロな人間の姿で転がってくる。

「おい、三人とも大丈夫か！？」

藤馬が三人に聞くが、すでに意識が無い。

「うーん、喰いごたえがありませんねえ……」ガオウとライオトルーパーが藤馬達の元へと来る。

「下がって……藤馬くんは、あっちを頼むよ？」

「……っ！？……ああ、分かった」

シザースはガオウ、藤馬はライオトルーパーへと向き合う。そして、藤馬はライオトルーパーと一緒に工場内へと消えた。

「へえ、化け物の貴方がターゲットを庇うとはね……」
ガオウが近づきながら、シザースに言う。

「別に……僕の事は化け物で良いよ……でもね」
そう言うと、シザースは一気に近づき、

「どんな化け物でも、大切な人達を守れるんだ！..」

ーガキイイイイイイン！！

そう叫ぶと、シザースがバイザーをガオウの顔に叩き付け、ガオウはそれを片手のガツシャーで防ぐ。

甲高い金属音が鳴り響き、ガオウはガツシャーを滑らせ、そのままシザースの腹を切り裂く。

シザースは下がりながらバイザーの無い腕で防ぐが、その威力に顔をしかめる。

（やっぱり、ガオウと僕じゃ力も経験も負けている……でも）

「ボルキャンサー！！」

シザースがそう言うと、ガオウの後ろからボルキャンサーが飛び出し、ガオウへと襲いかかる。

完全な死角からの攻撃……だったか。

「甘いですよ……ふんっ!!」

ーズバツ、ドゴツ!!

「ギギッ!？」

ガオウは、襲いかかってきたボルキャンサーをガツシャーで切り裂き、蹴飛ばした。

ボルキャンサーがゴロゴロと転がり、シザースの前で止まる。

「貴方の戦い方は把握済みです……モンスターを使つての奇襲もね」
ガオウは後ろにある、ボルキャンサーが飛び出した窓ガラスを指差す。

シザースの戦術は、初見の相手にはかなり有利だ。
普通、鏡から奇襲がくるなんて誰も思いはしない。

しかし今回は、さっきまで味方でさらには格上の相手。

ガオウの驚異的な戦闘センスも相まって、奇襲は通じなかったのだ。

シザースはボルキャンサーと共に、ガオウへと肉弾戦を挑む。

まず、シザースがバイザーでガオウの腕に攻撃する。

ガオウはそれを避け、後ろで鉄を振りかぶるボルキャンサーにガツシャーの柄で殴打する。

そしてシザースのバイザーを素手で掴み、

「だから言つたでしょう……あなたの戦術は把握済みだと」
ガツシャーで何回も身体を斬りつける。

ーガキツ、ガキツ、ガキツ、ズバツ！！

体から火花を散らし、シザースは地面を転がる。

それから何回か立ち向かうが、一撃さえ入らない。

「うう……ぐう……」

シザースは呻き声を上げながら、バイザーにカードを入れる。

「《Strike Vent》」

電子音声と共に、シザースピンチが装着される。

「行くよ、ボルキャンサー！！」

「ギギツ！！」

今度は、別々の方向から同時に攻める。

その攻撃をガオウは冷静に見極め、捌く。

「何故、貴女はそこまで一生懸命になるんですか……ターゲットを殺せば、家族は戻ってくるんですよ？」

ガオウは質問をしながら、シザース達を一気に吹き飛ばす。

ードッ！！！！

「ぐあっ！！……はぁ……はぁ……」

シザースは地面に這いつくばり、荒い息をする。

「貴女が、ターゲットに何を吹き込まれたか知りませんが……好きでやってた訳じゃないですが、貴女の今までやったことは……帳消しにはなりませんよ？」

ガオウがガッシャーを振り回し、担ぐ。

「そんな……ことは……分かってるよ……」

シザースがヨロヨロと立ち上がりながら、言う。

「僕が……やったことは……許される……事じゃない……だけど……だから……といって……これ以上……罪を重ねて……良いわけが……ないっ……！」

シザースはカードを取り出し、バイザーに入れる。

「《Final Vent》」

「全く……貴女にも呆れたものですね」
すると、ガオウもマスターパスをセタッチする。

「《Full Charge》」
電子音声が鳴り響き、ガオウガッシャーにフリーエネルギーが流れる。

一方のシザースも必殺技の準備をするが……。

その前にガオウのガッシャーが分離し、そのままシザース達を切り裂く!!

「遅いですよ……喰い殺されなさい!!」

《タイラントスラッシュ!!》

ガッシャーがシザース達の目の前に来た瞬間、後ろにいたボルキャンサーがシザースを上 to 投げる。
そして……。

ーギャリリリ、ズバツ!!!

ガッシャーがボルキャンサーに食い込み、切り裂いた。

「ギギッ、ギギギッ……ギギッ!!」

ーードゴオオオオオオオオオン!!

《タイラントクラッシュ》をともに受け、ボルキャンサーは爆散した。

「ボ、ボ、ボルキャンサー……!!!!」

シザースがボルキャンサーを呼ぶが……この世にはもう居ない。
すると、シザースの姿がブランク体へと変わる。

「さてと……チェックメイト、です」

ガオウが、シザースを近くの壁に物凄い速度で投げる。

このまま当たれば、シザースは動けなくなるだろう。

(やばいなあ……死にたくないよお……)

シザースがそう思った瞬間、何かに抱き止められる。

そこには……。

「はあ……はあ……はあ……全く、無理しやがって」

ギャレンが、息を切らしながらシザースを受け止めていた。

「ギャ、ギャレン……」

「ほう……裏切り者が何のようです?」

ガオウが、ゆっくりとギャレン達に近づく。

「シザース……藤馬は?」

「藤馬くんなら、大丈夫だよ……でもどうしよう?」

はつきり言って、シザースは足手まとい。

ギャレンは傷が全く治っていない。

だが……。

「俺が時間を稼ぐ……その間に藤馬を連れて逃げる」

ギャレンがバツクルを巻き付け、ラウズアブソーバーに《QUEEN》と《JACK》をラウズする。

「《変身!!》」

「《FUJON JACK!!》」

一気に「ギャレンへと強化変身した。

「えっ、ギャレンを置いてそんなの出来ないよ!」

シザースの言う通り、ギャレンを置いていけば死は免れない。

しかしこのままだと、どちらも死んでしまう。

すると、「ギャレンはシザースの手を握り……。

「お前は今まで、誰よりも頑張ったんだ……少しは、俺にも見栄を

はらせる」

「ギャレン……分かった、でも死んじゃダメだよ？」

「わかつてる……またな」

「うん……また！」

シザースは工場へと入っていった。

「それじゃあ……始めましょうか？」

「ああ……行くぞ！！」

二人は同時に地面を蹴り、武器をぶつけあった。

そのままつばぜり合いになる。

火花が飛び散り、甲高い金属音が鳴り響く。

「全く……なめられたものですね、ギャレン？」

「黙れ、倒させてもらうぞ……ガオウ！」

二人とも一旦下がり、「ギャレンがラウザーを撃つ。

ガオウは銃弾を剣で何発か弾くが、流石に弾ききれず体に受ける。
「ギャレンはそのまま一気に近づき、ダイヤモンドエッジでガオウを切り裂く。

一方のガオウは直ぐに体制を整え、受け止めてから蹴りを入れる。

しかし、Jギヤレンは吹っ飛びながら、ラウザーで撃つ。

どちらの実力も、かなり拮抗している。

だが……。

「はぁ……はぁ……はぁ……ちっ」

Jギヤレンが腹を押さえる。

どうやら傷口が開き、激痛が走っているようだ。

その証拠に、身体がプルプルと震えている。

「どうやら、傷口が開いたようですね……一気に行きます！」
ガオウは宣言通り一気に近づく。

それに気付いたJギヤレンが慌ててラウザーで撃つが、ガオウがス
トップで華麗に避け、ガッシャーでJギヤレンが押さえていた場所
を切り裂く。

「ぐう……くそっ！」

Jギヤレンがやけくそ気味に、ガオウをダイヤモンドエッジで斬り
つける。

それをガオウは受け止め、さらに斬撃を入れる。

（やばいな……くそっ、ここまでか……）

「ギャレンが攻撃を受けながら、そう思っていた。

（全く、見栄を張ったのにこのザマとは……シザースはすげえな）
「ギャレンはシザースの強さに驚いていた。

（そつえば、アイツには助けられてばかりだったな……まあ、最後に目の前でカッコつけられたから良いか……）

「ーガキンッ！！」

ガオウの攻撃を受け、ボロボロながらも立ち上がる「ギャレン。

「ぐはっ……くっ……」

「ギャレンは三枚のラウズカードを取り出し、ラウズする。

「《BULLET RAPID FIRE》」

「ギャレンは空へと飛び上がり、空気中の電気を吸収して、炎の弾丸を放つ……！！

「はあああああー！！」

《BURNING SHOT！！》

一方のガオウも、マスターパスをセタッチする。

「《Full Charge》」

フリーエネルギーがガッシャーに伝わり、分離する。

そして、弾丸ごとJギャレンを切り裂く!!

《タイラントスラッシュ!!》

二つの技が激突し、エネルギーが地面をも傷付ける。

しかし、徐々にガオウが押していく。

(悪い、シザース……約束は無理そうだ……)

Jギャレンがそう思った瞬間、

ーガリガリガリガリ……バキヤツ、ズバツ!!!

Jギャレンのバツクル、そして身体を凶刃が貫いた。

I i t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 第三十幕 ゴールデン・フィーバー！！（前書き）

はいどうも、私こと388859です。

ついに来ましたよ、あのフォーム！

この話は、書いてて楽しかったですね。

それでは第一樂章 ♪ 第三十幕、どうぞ！

第一樂章 ♪ 第三十幕 ゴールデン・フィーバー！！

――三人称 side

「はぁ……はぁ……はぁ……何とかなったか、ふう」

そう言った藤馬の視線は、気絶しているライオトルーパーへと向けられる。

どうやら藤馬が勝ったようだ……すると。

「藤馬くん、大丈夫！？」

シザースが人間の姿で走ってくる。

「シ、シザース！？……アイツは倒したのか？」
藤馬がシザースに聞くが、首を横に振る。

「いや、倒せなかったんだけど、ギャレンが代わりに時間を稼いでくれてる……だから早く行こう！」
シザースがそう言った瞬間、

――ガリガリガリガリ……バキャツ、ズバツ……！！

外から、何かが切り裂かれる音がした。

「っつー！！」

藤馬達は直ぐに外へと飛び出す。

するとそこには……。

「へっ………？」

腹からおびただしい量の血を流した、ギャレンの姿だった。

シザースはフラフラと駆け寄り、膝をつく。

ギャレンは顔から生気が無く、目を閉じている。

藤馬も駆け寄り、ギャレンに問いかける。

「おいギャレン、しっかりしろ！……クソッ、コウモリモドキ、何とかならねえのか！？」

「無理だ……この出血と傷だ。

私ではどうにもなら無い……すまん」

「くそっ、またなのかよ……何でいつもこうなるんだ！？」

藤馬が悔しさの余り、地面を殴り付ける。

シザースがゆつくりとギャレンの顔を撫で、話しかける。

「嘘だ…嘘だよ……ギャレンが……ギャレンが…死ぬなんて……そ

んなわけ……ないよ……」

シザースは分かっていた。もう、ギャレンが間に合わないことに。

「約束……したじゃない……さっき……またねって……うつ……生きて……
……帰ってくるって……ひぐつ……だから……」

シザースは分かっていた。あの約束が守れるものではないぐらい。

それでも……家族以外であんなに親しかったギャレンを、亡くした
くなかった。

「目を……開けてよお……ギャレン……グズツ……お願いだから……お
願いだから……死なないでよお……」
シザースは分かっていた。泣いても、ギャレンが助からない事ぐら
い。

それでも……シザースは、泣かずにはいらなかった。

そして、ガオウがこちらへガツシャーの切っ先を向ける

「さて……あなた達も、ギャレンの元へと連れて行ってあげましょ
う」

「ああ……ああ……ああ……ああ……」

シザースの身体が恐怖で動かなくなる。

ギャレンが死んだことによって、シザースに死の恐怖が襲っていた。

ガオウはゆつくりと、だが確実にシザース達へと向かう。

「ちょっと待てよ、クソ野郎……」

その時、ガオウの前に藤馬が立ち塞がる。

「何も出来ないターゲットが……今頃になって何のようです?」

ガオウの言う通り、藤馬はキバに変身出来ない。

だが……。

「ギャレンが……アイツが命をかけたんだ……」ウモリモドキ!!」
藤馬がキバットを呼び、掴む。

「どうするつもりだ、藤馬!?!」
キバットが藤馬に問いかける。

「決まってる、もう一つあるだろ……とっておきのが」
藤馬はもう一つのキバ、闇のキバに変身しようとしていた。

だが……。

「なっ、バカを言うな!!」
変身を解除したら、今度はお前が死ぬぞ!!!!」

「だったらどうするんだよ!?!……このままじゃ皆死んじゃう……
もう嫌なんだよ」

藤馬が顔をしかめ、叫ぶ。

「こんな奴等の為に……皆が傷つくのは!?!」

「藤馬くん……」

藤馬のそんな姿を見て、シザースは呟く。

藤馬の目が紫の色を帯びる。

「力が欲しい……もう誰も失わなくても済む……みんなを護れる力が、俺は欲しい……！」

（――欲しいかい？）

突然、藤馬の耳にそんな声が聞こえる。

「っ！？……誰だ！」

藤馬は周りを見回すが、声の主は居ない。

（俺の事はどうでも良いでしょ……それより欲しくないの、皆を護れる力？）

謎の声の問いに、藤馬は考え込む。

だが、今の藤馬に考えている暇など無い。

「もう待てませんね……さようなら」

そんな声と共に、藤馬へガッシャーを振りかぶるガオウ。

当然、反応出来ないはずだが……。

藤馬の体から五枚のメダルが飛び出し、二枚はガオウへと当たり、そして……残りの三枚は空へと消える。

藤馬は、今起こった出来事に驚いた。

（全く、少しは待てよな……あつ、どうするの？）

冷静になりながら、藤馬は考える。

（どちらにしたって、このままじゃ死んじゃうしな……よし！）

「欲しい……皆を護れる力が、俺は欲しい！！」

（良く言った！！……それじゃあ、その欲望……解放しろ）
その瞬間、藤馬の身体が震える。

ーギヤオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

そして咆哮と共に、キャッスルドランが現れ、中から黄金色の光が吐き出された。

その光は、そのまま藤馬達の目の前に止まり、弾けた……中にいたのは。

「びゅんびゅん、びゅーん！！

このタツロット、ただいま帰還しました！！」

黄金の小さな竜、タツロットだった。

「……………はい？」

思わず間抜けな声を出す藤馬。

それに対し、キバットは……。

「おお、タツ坊じゃないか！

およそ一年ぶりだな、元気そうで何よりだ！」

「いえいえ、キバットさんと藤馬さんも元気そうで！」

めっちゃ、タツロットと話し込んでいた。

「あのさ、コウモリモドキ……「行くぞ、藤馬！！」……わあったよ」

藤馬がキバット達に説明を求めるが、キバットがそれを遮る。

一方のガオウは、メダルをやっと全部、薙ぎ払った所だった。メダルが自動的に藤馬の体へと戻る。

「ふっふっふっ、よくも小賢しい真似をしてくれましたね……喰い殺す……！」

ガオウが口調を変え、襲いかかる。

「そうはいかん、ガブリッ……！」

「っ……！」

藤馬はキバに変身する。

しかし、やはりキバの鎧は至るところがボロボロ。

「どうすんだよ、一発でも受けたらシメーだぞ……！」

「心配するな……久し振りに頼むぞ、タツ坊!!」

「ええ、了解です!!」

それでは、ドラマチックに行きましょう!!」

そう言つて、タツロットが鎧の拘束具^{カテナ}を全て解放する。

すると、鎧から黄金の翼が開き、無数の蝙蝠が空へと飛び立つ。そしてキバは左手を真上へ上げ、紅い止まり木に^{バワールスロット}タツロットが填まり、最後の封印を解除する。

「《变身!!》」

タツロットがそう叫んだ瞬間、空へと飛び立った蝙蝠が体に吸い込まれ、鎧が強固なものへと変わる。

そして左手を力強く振り下ろし、背中に炎と共に血のように紅いマントが出現する。

さっきまでのボロボロな姿とは違い、キバ本来の禍々しい紅い複眼に、神々しい黄金の鎧。

その姿はまさしく……黄金の皇帝。

キバはエンペラーフォーム（以降、Eキバ）へと強化変身した。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ!!!!》」

Eキバはマントを翻し、ガオウへと宣言する。

「…………ふざけるなアアアアア！！！！」

ガオウが叫びながら、何かに弾かれたように走り出す。

それに対し、Eキバは威風堂々とゆつくりと歩く。

Eキバのプライドを踏みにじるその態度に、ガオウはガッシャーを全力で振り下ろす。

しかし……。

——ガシッ！！！！

「なっ…………くそっ、離せ！」

Eキバがガッシャーを片手で掴み、ガオウがそれを抜こうと引つ張る。

「…………その程度か？」

その瞬間、Eキバがガッシャーを放し、体制を崩したガオウへと片足で連続で蹴り込む。

Eキバは装着者のライフエナジーを吸い上げ、驚異的な力を発揮する。

しかし、藤馬は普通の人間。

そのまま使い続ければライフエナジーが尽き、死へと繋がる。

だが、藤馬にはそれを補って余るほどの強大な力「コアメタル」が七枚ある。

よって、藤馬は死のリスクが無くなり、力をフルに使っていた。

「ふっ、ふっ、ふっ……おらぁっ!!」

ーードゴッ!!!

「がはっ……あう……くっ……」

Eキバが最後に回し蹴りを放ち、ガオウを近くの鉄パイプの山へと吹き飛ばす。

ガオウはフラフラと立ち上がり、マスターパスをセタッチする。

「《Full Charge》」

電子音声が鳴り響き、ガッシャーに稲妻状のフリーエネルギーが迸る。

「貴様などに……この私が、この私があぁ!!」

ガオウは叫び声と共にもう一回セタッチする。

「《Full Charge》」

マスターパスを放り投げ、そのまま構える。

すると、さっきの倍以上のフリーエネルギーが蓄積され、分離。

そのまま、Eキバへと振り下ろす!!!

「死ねえええええ!!!」

《タイラントスラッシュ!!!》

一方のEキバは、左手に止まっているタツロットの頭部を引き、胴体にある特殊な回転盤が、インベリアルスロットキバの紋章の図で止まる。

「《ウエイクアップ・ファイバー!!!》」

タツロットの声と共に、Eキバは両腕を顔の前に構え、広げる。

すると、踵にあるルシファースナイフが足裏に移動し、紅い魔皇力が身体から溢れだす。

そして頭上へと飛び上がり、足から紅い翼のエネルギーが出現、そのままガオウへと両足蹴りを放つ!!!!

「だりやアアアアアア!!!」

《エンペラームーンブレイク!!!》

ガッシャーと蹴りがぶつかり合い、拮抗……せず、ガッシャーを破壊し、そのままガオウの体へ着弾する。

「……ぐっ……な、何だ、これは!？」

すると、翼のエネルギーが生き物の様にガオウを連続で蹴りまくり、ガオウもろとも工場の壁をぶち破る……そして。

ー ドゴッ、ドゴッ、ドゴッ、ドゴッ、ドゴッ……バゴオオオオオオオオオオ……！

最後に床へと叩きつけ、キバの紋章を刻んだ。

Eキバはその場でバク転をして離れる。

「ぐあああああああああ……！！！！！！！！」

その瞬間、ガオウの体が爆散した。

Eキバはマントを翻し、そのままシザースのもとへと向かった。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 ♪ 最終幕 家族！！（前書き）

はいどうも、私こと388859です。

今回で第一楽章 ♪ は終了です。

今後は番外編、第二楽章 ♪ e t c …… みたいな感じになります。

この話は、変なテンションで書いたので、クオリティが低いです…
…すいません。

それでは、第一楽章 ♪ 最終幕をどうぞ！！

第一楽章 ♪ 最終幕 家族！！

ーシザースside

「凄い…あのガオウを…あんなに……」

藤馬くんが、ガオウを圧倒する光景を見て、僕は驚く。

藤馬くん、あんなに強かったんだ……。

「ごほつ、ごほつ……がふつ…シザース…か……」
すると、ギャレンが吐血しながら僕の名前を呼ぶ。

「…あつ！…ギャレン、喋ったら傷に障るから喋らないで！-」

とはいっても、ギャレンの容体は最悪。

このままじゃ、ホントに死んじゃうよ-！

すると、ギャレンが喋りだす。

「……言っただろ…お前は充分に…頑張ったんだ……だから…俺なんかは見捨てて…逃げればいい……」
そんなこと……。

「そんな事、出来るわけ無いよ-！
だって……ギャレンは僕にとって……家族と同じぐらい、唯一無二の仲間なんだよ-！-」

ギャレンは何時だって僕の味方でいてくれて、心配してくれた……。

そんなギャレンを、見捨てるなんて出来わけない。

それに……。

「お願いだから……見捨ててなんて、そんな悲しすぎる事……言わないでよお……」

僕はそのまま、また泣き出してしまふ。

こんな事をしてる場合じゃないのに……ギャレンを、助けなきゃいけないのに……。

「涙が、全然止まってくれない……」

すると、ギャレンが僕の顔に手を伸ばし、涙を拭き取る……そして。

「良いんだ……お前からは……十分に……色んな物を……貰った……かな……ごほっ……ごほっ……ぐっ……」

「ギャ、ギャレンー!!」

もう良いから……お願いだから……本当に死んじゃうよ!!」

何で、僕はいつもこうなんだろう。

「今まで……お前には……世話に……なりっぱなし……だったな……ぐっ……」

家族には、化け物って言われて。

「今まで……本当に……ありがとう……そして」

ギャレンは僕を庇って死んじゃうし。

「……もし今度、また会えたら……」

――お前の家族に、なれたら良いな。

もう、大切な人を失いたくないのに……僕は何時までたっても、弱いままで泣き虫。

そう、心の中で思ったときだった。

「それは違うだろ、シザース……!」

――NOW LOADING――

――三人称side

「お前は弱くもねえし、泣き虫なんかじゃねえよ……!」
シザースが驚きながら、藤馬を見る。

そのまま、藤馬が思ったことを言う。

「お前は、何もかも背負い込みすぎなんだよ……自分だけじゃなく、他の奴のモノまで背負ってるんだ。

そりゃあ、溜め込みすぎてそんなボロボロに泣くだろうよ……だから、お前は泣き虫じゃないし、弱くもない」

藤馬の言葉に、シザースが泣きながら反論してくる。

「でもっ……僕には……ライダーとしての……力も……仲間も……何もない」

それを見て、藤馬は溜め息をつく。

「はぁ……んなもん、もう一回全部手に入れば済む話だろうが？」

「……あっ……」

シザースが藤馬の言葉を聞いて、はっとする。

藤馬の言う通りだ。

力も、仲間も……どちらも、もう一回手に入れば済む話ではないか。

しかし、失ったものを再び取り戻すのは、何よりも難しい。

しかし、どれだけの難しさだろうと、今のシザースには関係なかった。

「ありがとう、楽になったよ……藤馬くん」

シザースがそう言うと、藤馬がシザースの手を握る。

「へっ……な、何？」

「だから、俺が……お前の家族になるし、護りきつてみせるよ」

――世界が止まった気がする。

藤馬としては、シザースが放っておけなかったので、そう言ったのだが……。

ここで思い出して頂きたい。

ギャレンがそう言ったときは、まだ彼とシザースの関係が兄妹のような感じだから良かった。

しかし、藤馬とシザースは同じ年頃で、まだ会って一ヶ月。よって、シザースは……。

「へっ……かかか家族!？」

そんな、まだ会ってゴニョゴニョ／／／／／

と、こんな感じで思いつきり、結婚と勘違いしてしまった。

「……え？、なして、あなた様の顔が赤くなるんでせう？」

俺、何か変なこと言ったかな？……的な顔をする藤馬。

「あのー、キバットさん。」

もしかして、記憶を失っても、藤馬さんのああいふ所は全く……？」

「ああ、お前の思い通り、全く変わらん」

それを、外野でニヤニヤしながら見守る二体。
何だか甘い時間がゆっくりと過ぎる。

そして……。

「あの……不束ものですが、よろしくね／／／／／」

「こ、こ、こちらこそよろしくお願い致します!!」
シザースは顔を赤らめながら、藤馬は（、ゞ↑こんな感じで答えた。

こうして事件は終了し、家族が二人（一人と一匹）増えた……かに
思われたのだが？

――NOW LOADING――

――藤馬side

――P i P i P i P i P i ♪

俺の携帯から着信音が鳴り響く。

ディスプレイを見ると、知らない番号というかなんと言つか……と
りあえず、下をご覧ください。

×××―×××××―××××↑ディスプレイにある番号？

……Σ(「。□。）」えっ？

「電話番号が××××××××って、ありえねえし、何かイヤらしいわ……」

とか言いつつ、電話に出る。

ーP i！

「もしもどちらs「キャッホーイ！！！！！！」、どわあ！？」
すると携帯電話のディスプレイから、ハイテンションなクソ神が飛び出してきた。

「って、なんちゅう登場の仕方してんだ、てめえは！！」

携帯がぶっ壊れたら、どうすんだよ！？

と、俺がキれていると、クソ神がマジな顔をして喋りだす。

「おい、クソガキ……俺は神として、コイツをちよつと捕まえなきゃいけねえ……」

そう言つて、指差したのはシザース。

「な、何でシザースが捕まんなきゃなんねえんだ？」

別に何もしてない……って、もしかして。

「ああコイツがやった事は、主要人物の誘拐……世界を壊しかねない事だ」

前にもクソ神が言ったが、世界には主要人物がいて、その全ての人

物がイレギュラーに殺されればその世界は消滅する。

つまり、シザースは世界を壊そうとした罪人、ってわけだ。

まあ、仕方ないことだ……知らなかったとはいえ、幾らなんでも無罪は無いしな。

「それ以外にも罪が幾つかある。

いくら強要されていたとはいえ、無罪とまではいかないな」
成る程……だいたいの状況は分かった。

「藤馬くん、全然話が分からないんだけど……？」

ああ、ゴメン、シザース。

俺は、直ぐにシザースに今の説明をする。

「え」と……つまり、僕は今から神様の所に行って、裁判を受ける
ってことだよな？」

ああ、だいたい合ってるよ。

つか、よく信じたな、今の話？

だって、神様なんて普通信じなくね？

「うん、まあ説明したのが……家族の藤馬だったから／＼／＼／
教えてよ、おじいさん……！！

シザースさんはさっきから、なぜ顔が赤くなるのオオオオ……！！

そんな風に悶えると、生暖かい視線が三つ。

おい、コウモリモドキとクソ神はわかるけど、何でタッチちゃん（タ

ツロツト)までそんな目で見るんだああああ!!!

「と、とりあえず、僕は今すぐ裁判に行くんでしょ？」
シザースさん、貴女だけが味方だよ。

「ああ、だいたい……半年か一年ぐらいだな、終わったらこの世界に返してやるから、安心しろ」

クソ神がそう言うと、シザースはほっとしたのか、笑みを溢す。

うん、やっぱり笑顔が一番ですよ!!

「それじゃあ、別れの挨拶でもしとけ……そこで待ってるぞ」
すると、クソ神とコウモリモドキ、そしてタツちゃんまでもが一緒に行く。

タツちゃん、溶け込むの早すぎだろ？

というわけで、シザースと向き合うのだが……言葉が何も思いつかない。

だって俺、バカだもの。

「あのね……藤馬くん？」

すると、シザースが話し出す。

「僕ね……藤馬くんに会えて、本当に良かった。

失うものも有ったけど、その分一番欲しかったものが手に入ったんだ……」

……ああ。

「最初はね……君も知ってるけど、殺そうとしたんだよね……それが一ヶ月経って、今は家族……本当、人生はわからないね」

俺も同感だよ、シザース。

「ギャレンは死んじゃったけど……僕は前に進むよ……泣いてたらギャレンに怒られちゃうからさあ……」

本当に強いよな、シザースは。

さっき、大切な人が死んだのに泣かないように頑張っている。

「あれ……泣かない……つもり……だったのに……ヒゲツ……何でだろ……」

はあ……しょうがない奴だな、全く。

俺はシザースを優しく抱きしめる。

「へっ……とうま……くん……?」

「家族の前では、別に泣いて良いんじゃないの。だってさ、我慢するのって凄く辛いし……それに」

――家族って、そういうもんだろ？

すると、シザースの目からボロボロと涙が流れ落ち、声を上げながら泣き叫ぶ。

「うう……辛かった……辛かったよぉ……うう……ウワアアアアアアアア……！」

「……よしよし……もっと泣いて良いんだ……家族なんだから」

「うん、うん、うん……うう……くう……あああああ……！」

こうして、少女を繋いでいた運命の鎖は解き放たれた。

数分が経ち、今から裁判の場所へと行くところ。
周りは、もう真っ暗ですよ。

「それじゃ、もう行くね……」
シザースがそう行って、クソ神が開いたゲートみたいなものに入ろうとする。

俺は、何か餞別を送ろうと思ったのだが……何もない。

すると、シザースは笑顔を浮かべながら、俺の目の前に来て……。

「行ってきます、藤馬くん」

――頬にキスをした。

Σ（。。）ヴェー！？

俺は、突然の事態に驚きながらも、同じく笑顔を浮かべて、

「うん、行つてらっしゃい……気を付けろよ？」

「うん、分かつてる……またね！」

シザースはこの世界から去った。

はあ……まさか、シザースにキスされるとはね……はずいわ。

「それじゃあ……帰るか、プレイボーイ？」

「そうしましょう！……あつ、私の歓迎会とかやらないんですか、色男？」

お前ら、後で潰してやるよ……。

帰り道、バカ共にアイアンクロウを食い込ませながら、夜空を見上げる。

こうして、本当に事件は終幕した。

――

――

――桜ヶ丘 とある教会』

教会内は暗く、廃墟のように静かだ。

しかし足音と共に、松明の火が次々についていく。

「ふむ、同盟側のガオウがやられましたか。

やはり、腐ってもキングの残滓……脅威的ですね」
眼鏡を掛けた体つきの細い神父が、そう呟く。

すると、神父の真横にルークが現れる。

「おい、ビショップ！」

あのキバをこれからどうするんだ？」

ルークが神父、ビショップに聞く。

「とりあえず、キングの考えを聞きましょう……話はそれからです」

ふと、ビショップとルークがある部屋で立ち止まり、ノックする。

「キング、入ってもよろしいでしょうか？」

『ああ、良いぞ』

部屋から青年の声が聞こえた瞬間、ビショップとルークが部屋に入る。

中にいたのは……藤馬と瓜二つな青年だった。

だが、こちらは目が紅で茶髪、左腕にはキバの紋章が手の甲から、肩まで刻まれている。

ルークとビショップが目の前まで行くと、ひざまずく。

「話は聞いている……俺の残滓が鎧の力を解放したらしいな？」

「はい、その通りでございます。
いかがいたしますか？」

すると、キングは椅子から立ち上がる。

「今は様子を見る。もし、残滓が我らに逆らった時の判決は……」

キングの顔から蝙蝠のオーラが漏れだし、左手の紋章を見せ宣言する。

「……………死だ」

l l t h e f i r s t m o v e m e n t e n d .

l l t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 最終幕 家族！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「なあ、最後の英語は何ていう意味なんだ？」

第一樂章は終了、って意味だな。

エキサイト翻訳を使った。

藤馬「ふ〜ん、それにしても……この小説、後何話ぐらいやんの？」

俺の脳内では、倍以上はやると思う。

藤馬「Σそんなに！？」

原作にオリストを混ぜたら、こうなるでしょうよ？

藤馬「た、確かにそうかもな……」

というわけで、これから応援よろしくお願い致します！

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

第一楽章♪番外編 事件後！！（前書き）

どうも、私こと388859です。

今回からはちょっとだけ、二期に入る前に番外編を入れます。

予定では、約六話ぐらいですね。

それでは、第一楽章♪番外編をどうぞ！！

第一楽章 ♪ 番外編 事件後！！

――藤馬 side

「やべえええええ！！！！遅刻だああああああ！！！！」

（だからいつも早起きしろと言ってるだろう……はあ）

（本当にアナタのこういった所は、全然変わりませんねえ）

つか、お前らも爆睡してただろうが！！

あ、どうも、久しぶりに担任からラブコールを貰った、私こと中都藤馬です。

シザースと別れてから一週間ほど経ち、今年もあと十日。

実は、この一週間は怪我を治すために自宅療養をしていた。

一昨日に買ったi podをカバンに入れて音楽を聴き流しながら、約一週間ぶりの学校へと全力疾走。

タツちゃんにも、コウモリモドキと同じ意志疎通が出来るらしく、学生靴に入ってもらってます。

それにしても寒いな、また一段と今日は。

俺には手袋しかないから、首回りが寒すぎる。

まあ、走ってるから今は良いんだけどね。

そんな感じに考えていると、学校が見えて来た。

よしつ、後もうちよいd「ーガシッ!」……ぐえっ!?

誰かに、制服の首を捕まれる。

「掴んだの誰だ、ゴルアアアア!!!」

俺はこの時、後ろを向かなければ良かった……何故なら。

「久し振りなのに、それは無いじゃろ……ええ、ボウフラア?」

ゴリさんが、阿修羅なんて目じゃないレベルのオーラを解き放っていました。

ウォー、デジャビュ……。

ーダッ!!

「待てえい、ボウフラアアアア!!!」

くそ、休み明けなのに何で鬼ごっこをしなきゃなんねんだよ!!

(そんなの、お前が遅刻しているからだろう?)

でも、時計を見たときはまだ遅刻じゃなかったぞ!

（あの時計、電池が切れてましたよ？）

それを早く言えよ！

とりあえず、俺はそのまま靴箱に行き、そのまま校内でゴリさんを撒くことにした。

……………不幸だ。

――NOW LOADING――

――梓side

「ふう、やっとご飯だ」

身体を伸ばして昼食の準備をする、私。

あ、どうも皆さん、中野梓です。

あの事件から一週間が経ち、私たちは平穩を取り戻しました。

私たちは、仮面ライダーに捕まってたはずなんですが、いつの間にか家のベッドで寝ていました。

今考えたら、あれは夢なのかな……………なんて思うのですが、他の皆も

私と同じ体験をしていたので、謎は深まるばかりです。

「おい、梓！

売店にご飯買いに行こうよ」

今の声は、私の友達の鈴木純です。

「うん、今行く！」

私は財布を持って、純達の元に行きます。

そして、売店がある場所へと歩き出しました。

「梓ちゃん、もしかして……あの事を考えてたの？」
すると、憂が心配そうに聞いてきます。

あの事とは、事件の事ともう一つあります。

それは、藤馬先輩がまた大怪我をして自宅療養をしていることです。

その事を聞いたのは、事件の翌日。

どう考えても藤馬先輩が、今回の事件で何かしたんだと思います。

あの仮面ライダー達は、藤馬先輩を殺すって言ってたし。

そんな風に考えながら、何を買おうか選んでいた時でした。

――……トトトトトト――

靴箱から、何やら騒がしい音がします。
すると、

「そこでじつとしてろー!!」

その声に私達は従うと、頭上を何かが飛び越えていきました。

よく見ると……。

「おんどりゃあ、さつさと捕まらんかい!!」

「無茶言わないでください!!」
模造刀を振り回しながらゴリさんが追っ掛けてきたら、誰でも逃げるわ!!」

「模造刀じゃない、ドスって言うんじゃない!!」

「Σそいう問題じゃないし、本物だったの!？」

「ボウフラは、ここいらで徹底的な駆除、もとい拷問をせんといか
んとおもってなあ……というわけで捕まれ!!」

「どちらも殺す気満々だし、余計に捕まれるか!!」

所々汚れている藤馬先輩と、それを何故か刀を持ちながら追い掛けている郷田先生……その二人が私達の頭上を飛び越えていきました。

つて、藤馬先輩!？」

「ほえ……また、藤馬先輩が追っかけられてる。

あの人の運動神経は本当にスゴいよね」

純が呑気に言います。

いや、そんな場合じゃないよね!?

「でも……藤馬さん元気そうで良かった!」

確かに、藤馬先輩がああしてると……日常が戻ってきたって気がするんだよね。

私はそう思いながら、ご飯を持って教室へと向かいました。

後ろから、何かが斬られる音がしたけど……大丈夫だね?

――NOW LOADING――

――放課後♪

――藤馬side

結局、いつも通りゴリさんのありがたい説教を、放課後までくらってしまった。

「よ、良かった、タマはあったよ……昼飯食べなきゃ
自分の生命力に感心しながら、お腹をさする。」

さて、昼飯（放課後だけでも）を食べますか、部室で。

（そういえば、タツ坊のご飯はどうするんだ？）

あ、確かに……タツちゃんは何が良いんだ？

（私は別に、きのこ以外ならなんでも良いですよ）

じゃあ、売店のパンでいつか。

売店で自分とタツちゃんの菓子パンを買い、鞆に入れた瞬間モゾモゾと動き出す。

何かタツちゃんは、ペットみたいだな。

そんなことを考えていると、部室の前に到着。

取りあえず、今例のあれ……やりますか」

ドアから離れると助走をつけ、一気に蹴破る。

「ほわたあああああー！」

ーバゴツ！

ドアは綺麗に跳び、そのまま部室に着地する。

ふう、やっぱり蹴破るって良いよね！

（そんなのお前だけだろ？）

（普通の人は、蹴破ったりしませんよね）

うんうん……あれ？

「何で皆、固まってんの……？」

そう、何故か皆が俺を凝視してる。

何かしたっけなあ………あゝっ！

皆を怒鳴り散らして、そのまま逃げ出したんだっ！

シザースの事があったから、忘れてた。

俺は直ぐに、JUNPING土下座へと移行し謝る。

「さーせんしたあああああ！！！！！！」

「………Σはいっ！？」「……」
皆が声を揃えて驚く。

「今回は皆に酷いことを言ったんだ………本当にごめん！」

謝っても、許される事じゃないけどね。

「はあ、藤馬はそんなことを気にしてたのか？」

「なっちゃんはやっぱ優しいんだね」

「うんうん、それでこそ藤馬くんよ」

「全く、少しは私たちを信用しろ？」

俺……やっぱり、皆と会えて良かったつす。

と、思っていると、梓が気まずそうにしている。
もしかして、まだ気にしてるのかな？

「梓、別にあの事は全然気にしてないぞ……」

「いや、そうじゃなくて……藤馬先輩なんですよね、私達を助けたの？」

「あり、ばれちったか……まあ、次狼達も手伝ってくれたんだけどな」

「……っ!?……何で(ですか)!!」「」「」

皆が、俺に詰め寄ってくる。

そんな事言われても……。

「俺が助けたいから、助けただけだし……それに一人、大切な家族が出来たからな」

ザ・ワールド!!

そして、時は動き出す……。

「……その家族って女の子か？」

律が、肩を震わせながら俺に聞く。

「ああ、そうだけど……何か不味いことでも？」

俺が言った瞬間に、女子の皆さんが内緒話を始める。

そして……。

「藤馬、ちよつと説明しろ？」

いや、律さん……というより、皆のオーラが黒すぎなんですけど？

俺はこの後、しっかりと拷問、もといお話された。

もう疲れたよ、パトラッシュ……。

I t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 ♪ 番外編 ライブハウス、そして正体 前編！！（前書き）

はいどうも、私こと388859です。

番外編を書いてたら、何だか長くなりそうな予感が……アニメの『冬の日！！』は省こうと思います、すいません！

それでは、第一楽章 ♪ 番外編をどうぞ！

第一楽章 ♪ 番外編 ライブハウス、そして正体 前編！！

――藤馬 side

「ライブハウス？」

「そうそう、ちなみにお前は強制な！」
と、律が言う。

前回のお話の後、菓子パンを食べている俺に律がそう言ってきた。
どうやら、律の友達からライブハウスに出てみないか……と言われ
たらしく、皆も参加するようだ。

つか、俺は強制なのね……まあ、暇だから別に良いんだけど。

俺が思ったことを言うと、今から参加を申し込みに行くことになっ
た。

「そういえば、なっちゃんはどうやってわたし達を助けたの？」

ライブハウスに向かう途中で、唯が鋭いことを言ってきた。

「藤馬の事だから、また無茶したんだろう？」

澪がやれやれみたいな感じで言ってくる。

失礼な！……確かにムチャクチャしたけど。

良く思えば、これまでの怪人、ライダーとの戦い。

最近は危なすぎるよな……もっと強くないと！

「あ、ここみたいだな……すいませーん！」

俺がふんす、と気合いを入れている間に目的地に着いた。

律が呼ぶと、カウンターの奥の方で返事が聞こえた。

すると、さわつちと年齢が同じぐらいの女性がカウンターに出てきた。

「あ、あの……出演希望なんですけど！
放課後ティータイムです！」

律が少しガチガチになりながら、ライブのポスターを出す。
そして、女の人は俺たちとポスターを交互に見てから言う。

「ええ、話は聞いてるわ。ラブクライシスのマキちゃんからの紹介
ね」

ラブクラッシュ！？

ーゴスツ！！

「アオウツ！！」

「クライシスだ、クライシス！」

だからって鼻に肘をぶつけないでよ…… 澪さん。

「放課後ティータイムって、何だか可愛いバンド名ね。」

女の人は、俺たちのやりとりを笑いながら、そう言ってくる。

ていうか、放課後ティータイムって明らかにガールズバンドみたいな名前だよな。

とまあ、この後はライブ当日の予定を聞いたり、楽屋を見たり、ステージを見たりしたよ。

そして、唯の家で今はその日の打ち合わせ。

憂ちゃんが出してくれた、お菓子と茶を飲みながら曲や衣装を決めていく。

「えっと、曲目は四つだったな。

ふでペン、ホッチキス、カレー、ふわふわで良いよな?」

律の問いに皆が頷く。

「何着て歌う?」

唯が、目を輝かせながら言う。

うーん、校外だから制服の方が良いんじゃない?

それに…… 変なの着たら、澪が歌えなくなるし。

そう思いながら澪を見ると、案の定アワアワしてた。

すると唯が制服のポケットから、ライブのチケットを二枚取り出していた。

あのライブハウスのマネージャーさんから頂いたものだ。

「はい、これ憂と純ちゃんの！
二人で見に来てね」

唯から受け取ると、チケットをジーっと見つめる憂ちゃん。

「お姉ちゃんが、初めて出るライブの記念のチケット……勿体なく使えない！」

やっぱりこの姉妹、所々似ているよ……天然という意味で。

「後は和ちゃんにも渡さないと……あつ、なっちゃんもラモン君達に渡したら？」

と、唯がチケットを差し出す。

うーん……アイツ等ってバンドとか好きなのかな？

（次狼さん達は、アナタの心の音楽が大好きですよ）

（チケットを渡してやれ、藤馬）

分かったよタッチちゃん、コウモリモドキ。

「というわけでチケットだ、見に来てくれよな？」
はい、現在いるのはキャッスルドランの大広間です。

次狼達はチケットをジーっと見る……そして。

「お兄ちゃん、ここでライブするんだ……スゴいね！」
ラモンは素直でよろしい！

「まあ、藤馬だったらこれぐらいやってもらなわけかな？」
わあってる……上等だよ、次狼。

「藤馬……頑張れ……」
リキの拙い言葉で言われると、何だか心に来ますよ。

何だか皆、応援してくれるので嬉しい限りです。

「よし、今日は俺が飯を作ってやる！ 何が良い？」

すると、皆がニヤリツとして……夕食がいつもの数倍以上の出費を記録した。

……コイツ等、本当に俺の従者だよな？

I

――

――

《ガルルハウリングスラッシュュ!!》

――ズバツ、ドゴオオオオオオオン!!!

俺は一体のオルフェノクを斬り倒し、変身を解除する。

ああ、何で夜中に出てくるかなあ……。

思わず欠伸をして、うとうとしてしまう俺。

「全く、こんなところで寝ようとするな。

シャキツとしろ、シャキツと」

夜行性のコウモリモドキと一緒にするなよ……。

現在の時刻は、十二月三十一日午前二時……あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は見ての通りで、夜中に怪人が出たので斬り倒した。

「ほら、タツ坊も寝るな!」

「キバットさん……私は、夜行性じゃないんですよ?」

今日は十三時からライブの準備があんのに……早く家に帰ろう。

「私はキバットさんと違って、夜は静かにしたいんです!」

「そんなものは関係無いだろう！」

誇り高きドラン族が、うとうとしてどうする！」

とりあえず、そのこのうるさい珍獣をどうにかしなきゃな……。

「おい、そのこの珍獣二体……声のトーンを下げろ、近所迷惑だろ？」

「バカは黙ってる（黙ってください）！！」「

もうやだ、この二体……あれ、今は俺が悪いのかなあ？

その後俺は、相棒達の口喧嘩をBGMに、心の涙を流しながら家に帰った。

はあ……不幸だ。

――NOW LOADING――

――三人称side

そんな藤馬達を、遠くから見つめる神父の男……ビショップがいた。

「今日はキングが言っていた物語の日ですね。

この方法はキングに禁じられてるんですが……」

ビショップは視線を藤馬から、近くをフラフラと歩いている酔っ払いに向ける。

すると、ビショップはポケットから地球の記憶が詰まったUSBメモリ、ガイアメモリを取り出しスイッチを押す。

「《BEAST!!》」

電子音声が鳴り響き、ビショップがガイアメモリを投げると、独りで酔っ払いの左腕に挿入する。

「うぐっ……がっ……ああアアあウウウアオオオオオオ!!」

酔っ払いが声を上げながら、その体を変質させていく。

青い体毛に体色、そしてどんなものでも切り裂けそうな爪……猛獣、ビーストドーパントは変質を終えると、ビショップの元へと一気に跳ぶ。

すると、ビショップは写真を取り出す。

「コイツ等を……襲いなさい」

ビーストドーパントは頷くと、その場を凄い速度で離れる。

そして、夜は明けていった。

I
I
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第一樂章 ♪ 番外編 ライブハウス、そして正体 中編！！

――藤馬 side

「……馬……おい……馬」

勘弁してくれよ、まだ寝足りないんだよ…… z z z。

「仕方がない、久し振りの……ガブリー！」

――ガブツ、ブシュウウウウ！！

「痛ったあああああああああああ！？」

ダメだよ、吹き出してるって、イケないモノが噴水が如く……！」

そう言いながら、ベッドの周りを走り回る。

すると、クソコウモリモドキがやつとこさ離してくれた。

「なーにしくさってくれとんじゃ、おんどりやアアアアアア……！」
俺はブチ切れながら、ゴリさんみたいな口調で話す。

今日は大晦日……全国民が紅白みたり、ソバくったり、ガキの使い
みたり、千差万別な日だ。

そんな日に、主人の頭を噛むなんて普通「ブー、ブー、ブー、ブー、ブー」
何だよ、全くもう！

――Pi――！！

俺は乱暴に携帯を掴むと、電話に出る。

「もしもし、うちは新聞なら間に合ってますけど」「バカ藤馬、今どこに居るんだ！
まさか家じゃないだろうな！？」……………あゝ」
律の声を聞いた瞬間に、昨日の事も全部思い出し、頭が真っ白になった。

――明日は遅刻厳禁だからな！

遅れた奴は、ふふふ分かってるよな……………。
↑俺を見ながら手をワキワキさせる、律……………

――遅れるわけねえだろ、この俺が？
↑皆に向かつて、自信満々に言い放つ俺……………。

――それを、白い目で見るみんな……………。

やべえ……………ある意味フラグ立ちまくってたわ。

「おーい藤馬、聞いてんのか？
集合時間まであとちょっとだぞ？」

俺は時計がある場所へ、思いっきり振り向く。

現在時刻 十二時五十分

頭から出続ける赤い噴水

俺はすぐさま携帯を切り、右手に包帯を巻き、制服へと着替えを済ます。

そしてヴァイオリンケースを持つ（ギターは今回のライブでは弾かない）。

そのまま、家からライブハウスへとフルスピードで走り出す。

すると、律からもう一回電話が掛かってきた。
すぐに電話に出る。

「こちら藤馬、こちら藤馬。
りっちゃん隊長、応答願います、どうぞー！」

「藤馬隊員、すぐに現地へ来たまえ！
漣鬼軍曹がお怒りだ！」

「Sir yes sir!!」

「漣、ちょ、ダメだって……アッー！」バカやってないで、早く来い藤馬！」

漣の声を聞いた瞬間、俺はりっちゃん隊長へ敬礼した。

りっちゃん隊長は、明日の礎になったんだ……さらば、隊長（T
Tゞ。

そう思った瞬間、

「「っ！」「」

この感じ……タブーに似てるような……。

（藤馬、今回はドーパントだ！
場所は……右に転がれ！！）

俺はコウモリモドキの言う通り、右に転がる。

ーードゴッ！！

するとさっきまで居た地面に、何かが拳を叩きつけていた。
青い体毛に体色、大木でも斬れそうな爪……さながら獣のような怪人。

……今回はちょっと不幸すぎじゃねえか、俺？

（藤馬、そいつだ！気を付けろよ！）

わぁってるよ、とりあえず裏路地に惹き付けるか。

そう思っていたらドーパントは写真を取り出し、俺と見比べる。

「ウウ……お前……違う……」

ドーパントは首を横に振り、そのまま近くの建物の屋上へと跳躍して、去っていった。

「……何なんだよ、あいつ？」

とりあえず警戒を解いて、ドーパントの去った方向を見つめる。

いつの間にか気配も無くなってるし……。

「って、急がなきゃ！」

澪軍曹に怒られちまうよ……多分殴られるけど。

そのまま荷物を持って、また走り出す。

――

――

「本っ当にさーせんしたああああ!!」

俺は集合場所に着いた瞬間、直角九十度まで頭を下げ謝る。

周りの視線が痛い、致し方ないんだ！

「全く……あれほど遅刻厳禁だつて言つたろ？」澪が額を押さえながら言う。

律も頷きながら、腕を組んでいる。

本当にごめんなさい……。

すると、ムギと梓が俺の頭をずっと見ている。

唯？、唯は菓子をボリボリ食ってますよ？

「どうしたんだ、ムギ達？」

そんなに俺の頭を見つめて？」

何か付いてたつけ、そう思いながら頭を触ってみる。

ーベチャツ……。

何かすんごい赤くて、自分の頭から流れ出てる……どうみても自分の血ですね、本当にありがとうございました。

って、まだ血が出たのかよ！

道理でここに来るまでに、視線をいっぱい感じるはずだよ！

俺がまた悶えていると、ムギが心配そうに言ってくる。

「藤馬くん……止血してあげましょうか？」

やばい、ムギさんがナースに見えてきました。

でも、自分で出来るから良いや。

「ああ、大丈夫、大丈夫」全然大丈夫じゃない（です）！！「はい……ムギさん、梓さん……」

何でそこでキレるの……乙女心はわからんわ。

とりあえずムギ達に止血してもらって、ライブハウスへと向かうことにした。

ライブハウスの前に行くと、既に人だかりが出来ていた。

ほえ、すごい！

『お疲れさまでーす！！』

俺達を見た瞬間に、全員が労いの言葉をかけてくる。

何だろ、スタッフの人かな？

「あ、どうも。」

ファンの子達だろ、多分？」

律が、ファンの子達に挨拶しながら言う。

なるへそなあ。

そんな感じでライブハウスへの扉へ行き、開ける。

「こんにちはー！」

「よろしく願いしまー、Σひいっ！」

中にいたのは凄い髪の色した人や、メイクがめっちゃ濃い人……ぶっちゃけ怪人を見まくってるから、そこまで怖くない。

「これは皆さん、手強そうで……」

でも他の面々には、刺激が強かったようだ。
とりあえず、挨拶しないとな！

「あ、どうも、放課後ティータイムのヴァイオリン担当、中都藤馬だ！

今日はよろしくな！」

ーガシッ、グリッ！！

「タピオカッ！？」

その瞬間、律がヘッドロックした後、皆からお叱りを受ける。

「何やってんだ、お前は！
刺激したらダメだろ！？」

「そうだよ、そこら辺の河にぶちこまれるかもしれないよ！？」

「Σひいつ！何も聞こえない何も聞こえない何も聞こえない何も聞こえない」

「藤馬くんは、やっぱり藤馬くんね」

「とりあえず、謝ってくださいよ！」

皆が機関銃より早く文句（約一名違っけど）を言ってくる。
俺は直ぐに反撃に出る。

「だー、うるせえんだよ！！！！」

何で挨拶したら俺がヘッドロックされた後、お前等の文句を聞かなくやなんねえんだ！！

挨拶しただけで、オデノカラダハドボドボだよ！？」

咄嗟にオンドウル語を使いながら、マシンガントークをする。

すると、端に居た他のバンドの人が俺たちに近付いてくる。

「あゝ、やっぱり、りっちゃんだゝ！」

「へっ……あゝ、マキちゃん久しぶり〜」
「澪ちゃんもね!」

どうやら、マキちゃんの登場のようだ。
つか、律さんの態度が百八十度変わったよ?

「みんな、紹介するね!
この子が、ラブクライシスのドラムのマキちゃん。
このライブに誘ってくれた子」

「よろしくね〜!」

はいはい、クライシス帝国のマキちゃんね〜。

ーゴスッ!

「只のクライシスだ、ク・ラ・イ・シ・ス!」
すんません、わかったからぶたないでよ、澪さん。

「あゝ、澪さんだ〜」

「あ、紹介するわね。
こちらうちのベースのアヤ。
澪ちゃんの大ファン」

スゴいな、校外にファンとか居たんだな。
「学園祭のライブ、かつこ良かったです!」

「あ、ありがとう……」

何かやっぱり、皆フレンドリーだな。

すると、アヤっていう子が俺のヴァイオリンを見て、目を輝かす。

「あ、あの……前に助けてくれましたよね、怪人から？」

……（。。） what's !?

「アヤ、怪人なんて噂に決まってるじゃん！」

マキちゃんがバカにするが、居るんですよ……怪人。

それにしても、この子を助けた覚えがな……がつつりあるんですよ、これが。

とりあえず誤魔化さないと！

「マキちゃん……怪人はね、本当に居るんだ……かくいう私も、藤馬に助けてもらったし」

……肯定しちゃったよ、律さん。

「ふうん、本当に居たんだ……とりあえずありがとね！
うちの仲間を助けてくれて！」

「あの、本当にありがとうございました！……その……と、とっても
かつこ良かったです／＼／＼／＼」

何か凄く純粹だよ、この子……憂ちゃんを思い出すわ。

つか全方位から俺に向かって、殺氣がくるんですけど？

特に律と漑、何かスタンド出しそうな勢いだからめっちゃ怖い。

「良いよ別に、ただ助けただけだし」

確か怪人も弱かったから、全然怪我しなかったしな。

「じゃあ……メルアドとか交換して貰えますか？」

「良いよ」ホントですか!!」……うん、ちゃんと交換するから！
色々近いよ、アヤさん！」

というわけで、他のバンドのメンバーともそれなりに仲良くなれた。

「あゝ、何か疲れたな……」
俺は体を伸ばしながら呟く。

今は色んな準備をして、リハーサルを終えたところ。

色んな人から、励ましの言葉を貰ったから気分最高です。

「ねえ、なつちゃん！
お菓子買いにいこうよ！」

もうすぐ本番なのに、お菓子買いに行くんかい！

「えゝ、だって美味しいんだもん！」
唯が口を尖らせながら言う。

「じゃあないな、それじゃ……」

「っっ！……」

オイオイ、あのドーパント……このタイミングで出るか、普通！！

「どうしたの、なっちゃん？」

唯が不思議そうに聞いてくる。

俺は唯の肩を掴み、目をジーっと見る。

「な、なっちゃん／＼／＼？」

ど、どうしたの、いきなり／＼／＼？」

「ごめんな……後でお菓子はおごってやるから、絶対にライブハウスから出るなよ！」

俺は一気にそう言つと、楽屋から飛び出す。

「えっ、ちょ、ちよつと！」

何処行くの、なっちゃん！？」

唯の制止も聞かず、俺はすぐにライブハウスの裏口から外に出る。

（コウモリモドキ、場所は！？）

（ここから約百メートル程度だ……むっ、どうやら獲物を見つけたらしい、動き出したぞ！）

やばいだろ、それ……ライブもあるから、一気に片付けるぞ！

I
I
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第一楽章 ♪ 番外編 ライブハウス、そして正体 後編！！

――憂side

「はあ、はあ、はあ……うわっ！」

私は、何かに引つかかってこけてしまいました。

「あつ、憂！」

ほら、早く立って！」

純ちゃんが手を伸ばしてくれる。

ありがとう、純ちゃん！

「ほら二人とも、早く逃げないとまた怪人が来るわ！」

和さんが、私達の後ろを見ながら言います。

事の始まりは数分前。

私達がライブハウスへと向かっている途中、怪人が目の前に現れました。

すると、怪人は懷から写真を取り出し、写真と私達を見比べます。

私と純ちゃんは怪人に威圧されてましたが、和さんにつられてその場から逃げ出しました。

「それにしても……何なんだろう、あの怪人？」

純ちゃんが逃げながら呟きます。

「解らないわ……でも、あのままだったら不味かったと思うわよ」

和さんが冷静に言ったその時でした。

「ウォアッ！！！」

「ーゴドンッ！！！」

「「「きゃっ！！！」」」

獣のような叫び声がすると、凄く重い音がしてから地面が揺れました。

私達は思わず尻餅について、前を見ました……そこには。

「見つけたぞ……ターゲット！！」

さつき居た獣の怪人が居ました。

私達は、振り返ってそのまま逃げようとしています。

「ガアッ！！」

しかし、怪人は私達の後ろに回り込んできました。

「ど、どうしよう、憂！」

そ、そんな事言われても……。

「不味いわね……」

私達がゆっくりと後ずさっている……。

「ーガシッ！！」

「早くここから逃げろ、お前等!!」

ライブハウスに居るはずの藤馬さんが、怪人を羽交い締めにしていました。

――NOW LOADING――

――三人称side

藤馬がビーストドーパントを羽交い締めにするが、逆に身体を塀に投げ飛ばされる。

「大丈夫、しっかりして中都くん!？」
和達が藤馬に駆け寄る。

「……っああ、大丈夫だ……早く行けよ、死にたくねえだろ？」
藤馬が、立ち上がりながら言う。

「先輩はどうするんですか？」
純が、藤馬の腕を引っ張りながら言う。

すると、藤馬は純の腕を離しながら説明する。
「俺がアイツを引き付けるから、その間にお前等は逃げろ」

「そんな事出来るわけじゃないじゃないですか、先輩が死んじゃいますよ!？」

純の言う通り、ライダーに変身していない藤馬では、ビーストドーパントに殺されてしまうだろう……しかし、藤馬がここで変身すれば正体がバレてしまう。

だが、相手は待ってくれない。

「でもな……危ないっ！」

ビーストドーパントは一気に近づき、爪で純達を切り裂こうとする。

藤馬は純達を突飛ばし、咄嗟にその場にしゃがむ。

ーガゴツ!!、ガラガラ……。

ビーストドーパントの攻撃によって塀が音を立てて崩れる。

藤馬達の背中に冷や汗が流れる。

(ちくしょう、このままだと死んじゃうな……仕方ねえ!)

「お前等、これから起こることは誰にも言っなよ……憂ちゃん、説明よろしく!」

「ええっ、私ですか!?!」

「中都くん、何言ってるの?」

「ちょっと憂、どういつ事が説明してよ!」

藤馬はそう叫びながら、ビーストドーパントと距離を取る。

憂は残りの二人に説明を求められ、かなり困っていた。

「つまり、こういうことだ……コウモリモドキ!」
藤馬がキバットを呼ぶ。

「先ずはお前を……ぐっ、何だ!？」

その瞬間、ビーストドーパントが跳んできたキバットに突き飛ばされる。

「ふむ……コイツ等には正体をばらすのか、藤馬？」
キバットが藤馬の頭に止まり、質問する。

「な、何あれ、こウモリ……?」

「何か見たことあるような……」

「キバット君久しぶりだね!」

「ああ、久し振りだな憂」

和達がキバットを見て、思った事を口にする。

「おい、ちゃちゃつと済ませるぞ、コウモリモドキ!」
藤馬が右手の包帯を外し、左手でキバットを掴む。

「ああ……行くぞ、ガブリ!!」

「っ!」

右手の甲をキバットに噛ませ、全身に《魔皇力》を流す。

すると顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれる。

「《变身！！》」

藤馬がそう叫び、キバットを逆さにつるす。

藤馬は、仮面ライダーキバへと変身した。

「藤馬先輩が、仮面ライダーになっちゃった……でも」

「何で、中都くんが……でも」

「何か納得……」

二人は目の前で起こった事に驚きながら、どこか納得していた。

彼がいつも授業を抜け出す理由、そして人並外れた体力……彼がライダーなら、あり得ると思ったのだらう。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え！！》」

キバはそう宣言した後、ビーストドーパントへと拳を二発叩き込む。

ビーストドーパントは爪で受け流しつつ、そのまま爪でキバの腹を切り裂こうとする。

キバは直ぐに左腕で防ぎ、鳩尾に膝蹴りを入れる。

ビーストドーパントは少し怯みながら下がり、巨体には合わない凄
いスピードで突進する。

キバは予想外のスピードに反応しきれず、そのまま塀まで押し出さ
れる。

「くそっ、なんつうデタラメな野郎だよ！」

悪態をつきながら、ビーストドーパントの腹に蹴りや、拳を入れる
キバ。

しかしビーストドーパントはものともせず、逆に爪で鎧を切り裂い
ていき、憂達の方へと吹き飛ばす。

「大丈夫ですか、藤馬さん!？」

「ああ、大丈夫、大丈夫……時間もあんまり無いんだ、一気に決め
るぞー!!」

そう言つて、キバは金色のフェッスルを引き抜き、キバットに吹か
せる。

「《タツロットー!!》」

その瞬間、法螺貝のような音楽が鳴り響く……そして。

「びゅんびゅんびゅん♪」

テンション・フォルテッシモー!!」

タツロットが飛んできて、キバの拘束具カタナを全て解放していく。

すると、鎧から黄金の翼が開き、そこから無数の蝙蝠が空へと飛び立つ。

そしてキバは左手を真上に上げ、赤い止まり木にタツロットが填まり、最後の封印を解除する。

「《变身！！》」

タツロットそう叫んだ瞬間、空へと飛び立った蝙蝠が体に吸い込まれ、鎧を強固なものへと変えていく。

そして左手を力強く振り下ろし、背中に炎と共に血のように紅いマントが現れる。

キバは、Eキバへと強化変身した。

「凄く綺麗ね……」

「うわぁ、藤馬先輩カッコイイっ」

「藤馬さん、がんばって！」

Eキバは三人が感想を喋った後、マントを翻して構える。

一方のビーストドーパントは、Eキバの姿に恐怖を抱いていた。

野生の勘のようなモノで解るのだろう。

目の前の敵には勝てない事に。

だが、ビーストドーパントは自分を奮い起たせ、Eキバへと突進する。

対してEキバはゆっくりと、散歩をするように歩く……そして。

ーードゴッ、グ…グググー！

Eキバはビーストドーパントの突進を軽々と受け止めた。

「どうした、熊野郎？」

Eキバは、そのまま蹴りのラッシュを的確にビーストドーパントにぶちこむ。

その威力に、ビーストドーパントは身体を曲がらせながらも耐えきろうとするが、

「これで、ラストオオオオオオオオ！！」

ーードゴッ！！！！

「グガッ……」

Eキバの最後の回し蹴りに吹っ飛ばされ、地面をコロコロと転がる。

そしてEキバは、インヘリアルスロット左手にとまっているタツロットの頭部を引き、胴体にある特殊な回転盤がキバの紋章の図で止まる。

「《ウエイクアップ・ファイバー！！！！》」

タツロットの声と共に両腕を腰の位置に構え、顔に上げていく。

すると、踵にあるルシファーズナイフが足裏に移動し、紅い魔皇力が溢れ出す。

そして頭上へと飛び上がり、足から紅い翼のエネルギーが出現、そのままビーストドーパントへと両足蹴りを放つ！！！！

「セイヤアアアアアアアアアア！！！！！」

《エンペラームーンブレイク！！！！》

「ゴガッ！？」

ードゴッ、ドゴッ、ドゴッ……！！！！

《エンペラームーンブレイク》がビーストドーパントに着弾し、そのまま押し出していく……そして。

「これでどうだあああああ！！！！！」

ードゴッ、ドゴッ……ゴドンッ！！！！

ビーストドーパントを地面に叩きつけ、キバの紋章を刻んだ。

Eキバはその場を離れ、マントを翻す。

ードゴオオオオオオオオオン！！！！

その瞬間、ビーストドーパントが爆発し、壊れたメモリとスーツを

着た男性が出てきた。

――

――

――藤馬 side

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

コウモリモドキとタツちゃんが鎧から離れ、変身が解除される。

「大丈夫ですか、藤馬さん？」

ああ、ありがとう、タツちゃん……って、おっとつと！

少し目眩がして、倒れそうになるがなんとか持ちこたえる。

「無理をするな……元々はファンガイアの王の為に作られた鎧だ。そのお前がエンペラーになれば、負荷はかなりのモノになる」

コウモリモドキの言った通り、エンペラーは強いんだけど……メチャクチャ疲れる。

実を言うと、魔皇力の代わりにコアメダルの力をエネルギーに使うからな……。

ていうか、アイツらは何処に居るんだろう？

「とりあえず探さないで、藤馬さん！」あつ……ゴッッ！」
憂ちゃんの声がしたので振り向いたら、鳩尾に憂ちゃんの頭がジャストミートした。

「もう、心配しましたよ！
怪我したらどうするんですか!？」

憂ちゃんが鳩尾ら辺で何か言ってるが、こっちはそれどころじゃないんですよ？

「憂さん……とりあえず、離れてくれる？」
胃の中の物が、リバーサンドリリースしそうなんで。

「あ、すいません!……怪我は無いですよね？」
憂ちゃんが涙目で聞いてくる。

何か罪悪感が沸いてくるよ？

「ああ、大丈夫だから……本当はボロボロだけど」

あのドーパント、一撃が速いし、重い。
エンペラーが無かったら、ギリギリだったろうな。

そして……。

「「中都（藤馬）くん（先輩）……」」

和と純ちゃんにはバレしまったなあ……。

「先輩……」

嫌われるかな……それとも拒絶され「助けてくれて、ありがとう
ございました！！凄くかつこ良かったですよ！！」……………えっ？

純ちゃんが俺の手を握って、ブンブンと振る。

「助けてくれてありがとう、中都君。

それにしても、仮面ライダーって本当に居たのね……都市伝説だと思
ってたわ」

俺は都市伝説じゃないですよ、和さん？

「つか、何でもっと驚かないの？」

「だって、中都君の授業を抜ける理由と、人並み外れた体力は仮面
ライダーだから……と考えたら、しっくりきたのよ」

「それに、先輩が変身した仮面ライダー、私はテレビで見たことあ
りますよ！」

はあ、何だか拍子抜けだな……。

「とりあえず、この事は他言無用な？」

俺の言葉に二人が頷く。

「そっいえば藤馬さん、ライブは？」

…Σ（「。□。」）「っ！？」

「まさか……本当に忘れてたの!？」
和が俺にずいっと寄ってくる。

あれ、こうしてみると和も結構可愛い……じゃないよ!!

俺は右腕の甲を素早く巻き、元来た道を走り出す。

「あーもう、不幸すぎるー!!!
人を救ってるのに何なんですか!！」

頭を掻き回しながら、現在の時間を携帯で確認する。

ちなみに、ここからライブハウスまでは十分程度、俺達のライブが始まるのは、午後八時……そして。

現在時刻 七時五十五分（お前涙目・テ・ラ・ワ・
ロ・スｗｗｗｗ byクソ神）

（- - #）……何時かクロス。

「あーもう、理不尽だああああ!!!」

――

――

「はあ……はあ……良かった……はあ……間に合った……ふう……」
ライブハウスのステージ裏で息を整える。

「オイオイ、大丈夫か藤馬？」
精神的に泣きそうですよ、律さん。

「うう、大丈夫かなあ……うう……」
そして、デフォルメ化している漑……やばい、俺のガルルセイバー
がウェイクアップ・フィーバーして（言わせんぞ！）……今回は止
めてくれてありがとう。

「おい、みーお……こけるなよ（ニヤッ）」

「ーゴスツ……！」

「痛ったあ……何すんだよ、藤馬あ？」

漑が再起不能になりそうな気がしてな……もっとゲンコツしてやろ
うか、ああ？

「……すみませんでした」

「ぷぷっ……くくっ……あははっ！」

漑が、俺と律とのコントを見て笑いだす。
それにつられて、皆で笑い合う。

やっぱり楽しいよな、コイツ等といると！

「じゃあ放課後ティータイムの皆さん、お願いします……！」
スタッフの人が声をかけてくる。

「それじゃあ……行きますか、マドモアゼルの皆さん？」

「うん（はい）……」

こうして俺達、放課後ティータイム二回目のライブは大成を収めた。

「っはあゝ、疲れたあ……」

ライブハウスから出て、白いため息をつく。

夜空には雲一つ無く、星が輝いていた。

はあ、眠い……家に帰ってゴロゴロしたいな……。

「皆、お疲れさま」

声がした方を見ると、さわっちと和達が居た。

つか、さわっち居たんだ……影薄いな。

「ああ？」「サーセンしたあああああ……！」

俺は直ぐに、JUNPING土下座へと移行して謝る。

さわっちの後ろに、なまはげのスタンドがついてるよ！

それを見て皆が笑う……最後の日も、いつもの風景を見るって良いな。

その後は、軽音部の皆で唯の家に行き、速攻で寝ました……だってさ、疲れたんですもの。

「……Σはっ！」

やべえ、初夢がコウモリモドキに噛まれて、出血死とかありえますね、本当にありがとうございます。

「あつ、なっちゃん！」

ほら、初日の出を見に行こうよ！」
上半身を起こし、欠伸をする。

新年に入って初めて見たのが唯か……なんか、天然な一年になりそう。

とりあえず皆を起こし、初日の出が見える場所へと移動する。

「さわっちは……別に良いか」

「「良くないだろ」」

新年初ツッコミ、頂きました。

そんなこんなで到着！

高台に登り、皆で一列に並ぶ。

高台の上には、オレンジ色に輝いた初日の出が見えていた。
凄く綺麗だな、初日の出……。

「つか、何で俺は皆の真ん中なのよ？」

そう、何故か俺は女子の皆さんに挟まれていた。

「まあ、ええじゃないか、ええじゃないか」

何で歴史なんですか、唯さん？

「まあまあ、小さいことは気にしないで良いじゃない……ね」
ムギさんの顔が日の光に当たり、凄く色っぽく見える。

ていうか皆、凄く色っぽく見えるんですけど!？

やばい、俺のバツシャーマグナムが水を発射（言わせませんよ!!）
……ありがとう、タツちゃん！

すると、澪が何かに気付いたみたいで、深呼吸をする。

「あけましておめでとうございます!」

そういえばそうだったな。

澪に言われて皆で挨拶する。

そのまま黙って、初日の出を見続ける……すると。

――ギョッ……。

隣に居た唯とムギが、手を繋いでくる。

唯達の顔を見ると、笑顔で返してきた。

それに気付いた律達も手を繋ぎ、笑い合う。

（そうだよな……こんな日々が来年も続くと良いな……皆で笑って、お茶して、バンドして……そんな日々が壊れないように、これからも戦い続けよう……そして）

「皆を護るために、もっと、もっと強くなりたい……」

自分が為すべき事を改めて確認する事が出来て、良かった。

「それにしても、梓はいつまでトラミミ着けてるんだ？」

「ニヤッ！？／＼／＼／」

l i t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 番外編 ライブハウス、そして正体 後編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「番外編も後二話か……その後は大丈夫なのか、作者？」

いや、大丈夫じゃないよ……だから更新が遅れると思う。

藤馬「出来るだけ早くしろよ？」

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

第一楽章 ♪ 番外編 ハッピーバレンタイン 前編！！（前書き）

どうも、私こと388859です。

今回はパロディネタが多いです。

それでは、第一楽章 ♪ 番外編をどうぞ！！

第一章 ♪ 番外編 ハッピーバレンタイン 前編！！

世の中には、絶対に負けられない戦いというものがある。

受験、就職活動…… 自分の人生を決めるものならば、誰でも負けられないだろう。

恋愛もそうだ……好きな人と結婚したい、そんな思いは誰にでもあ
る。

今回の物語は、そんな恋する乙女達に振り回された男の話である。

――藤馬 side

季節はまだ寒い冬が続いており、風が吹く度に身体を震わせてしま
う。

あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は二月に入っただけで、まだまだ冬は続きそうな予感。
ちなみに、冬は大好きですよ？

「……………」

そして、二月と言えばバレンタイン！

バレンタインって、チョコが貰えないのにわくわくするよね！……
言ってて悲しくなってきた。

俺は正座をしたまま寒い部室の外で、

『作戦会議中〱男子禁制だよ〱テヘッ!』

と、ドアに貼ってある紙を見ながら、溜め息をつく。

事の始まりは一時間前……俺が、

「そつえば、もう二月に入ったよな……」

みたいな事をお茶を飲みながら言った瞬間、外に閉め出されてこの状況になっていた。

確かに俺は冬が好きですよ……でもさ、

「いくら冬が好きでも、部室の外で一時間はキツイよ……」

ていうか、一時間ぐらいずっと思考の渦……何ていうのは無理です。

十分に飽きましたよ、はい。

タツちゃんとコウモリモドキは、呼び掛けても返事しないし……何、この地味な嫌がらせ？

「あれ……藤馬先輩は何してるんですか？」

階段の方を見ると、純ちゃんがこっちに歩いてくる。

話し相手k t k r!

ここに座って、早一時間と少し！
ようやく俺にも救いが来たんだ！

「まあまあ、ここに座りんしゃい純ちゃん♪」
純ちゃんを座らせ、少し泣きながら状況説明。

すると、純ちゃんはうんうんと頷いてくる。

俺の苦しみが分かるんだな、ありがたい！

……そう思っていた、自分が居ましたよ。

俺が話し終わると、純ちゃんは俺の手を取り、

「先輩、良かったじゃないですか！」
と、笑顔で言ってきた。

……（・・）エツ・・？

あ、ありのまま起こったことを話すぜ！

俺が純ちゃんに、『苦しかったこの一時間』について話したら、

「良かったですね！」

って、笑顔で言われたんだ！

勘違いとか、聞き間違いとかそんなチャチなモンじゃねえ！
もっと恐ろしいモンを味わったぜ……

今の話は、俺の苦しみを話したのに……俺はMじゃないよorz

余りの急展開に、その場でorzポーズを取ってしまう。

純ちゃんが何か言っているが、何も耳に入っていないよ……。

しかし、今度は俺の不幸スキルが発動する。

ーガチャ、ドグオツ!!!

「ゴパアツ!？」

「Σだ、大丈夫ですか先輩!？」

俺の顔と腹に、勢い良く開かれたドアの角がめり込んだ。

俺は鼻血をドボドボ出しながら、顔と腹を抑えて踞る。

オ、オデノカラダハドボドボダ!!

すると、女子の皆が部室の中から荷物を持って出てくる。

「よし、今週末は唯の家に集合だ!

皆で頑張るぞー!」

「「「「「おー!!」「」「」

律の掛け声に合わせて、他のメンバーも腕を挙げて返事をする。

その後ろで鼻血を拭いている、俺。

すると、皆が俺の状態に気付く。

「あれ……藤馬先輩、鼻血が出てるじゃないですか!？」

「あら、大変!……はい、ティッシュ」

「うわぁ、凄い量の鼻血だね」

「どうせ、エッチな事でも想像したんだろ？」

「藤馬はやっぱ変態なんだな？」

「……うんうん!」「……」

律のまとめ方、絶対に可笑しいだろ!

「おいおい、鼻血が出たのはお前等のせいだし、俺は変態じゃない!」

「……Σえっ、そうなの(そうなんですか)!?」「……」

何かもう嫌だよ……純ちゃんまで言ってるし……。

とりあえず鼻にティッシュを詰め込み、荷物を持って帰る事にした。

――NOW LOADING――

月日は経ち、約一週間後……二月十四日。恋する乙女にとっては決戦の日、モテない男子は絶望する日だ。

そんなことを思いながら、遅刻ギリギリで登校する。

い、いや別にチョコ欲しいとか思ってたねーし！

チョコみたいな甘いものを食べたいよな……って思っただけだから！

そんな、一個も貰えなかったらどうしようとか思ってたないよ！

（苦しいな、タツ坊？）

（そうですね、キバットさん）

そこ、自分でも苦しいって分かってるんだからな！？

相棒達とそんなやりとりをしながら校門を潜り靴箱に着く。

靴を脱ぎ、上履きを履こうとしたときだった。

「さて、行きますか……って、うん？」

よく靴箱を見ると、ピンク色の手紙が入っている。

「何なんだろ、これ………Σはっ、こ、これはあ！？」
手紙の側面を見て、思わず声を出してしまう。

――中都藤馬くんへ↑手紙の側面にあった文。

手紙を持つ手がガクガクと震える。

こ、これは……で、伝説の……アレなのか……いや待てよ……手紙なんて絶滅したはずだろ……？

「あ、藤馬さん！

おはようございます！」

「うおっ！？」

「どうしたの、なっちゃん？」

後ろに振り向くと、唯と憂ちゃんが二人仲良くコツチに歩いていた。

俺は手に持っている手紙を鞆へと、光の速さで突っ込む。

「い、いやあ、何でもない！」

なにもないさ、あるわけないよ！

あ、今日も良い天気だなH A H A H A！！」

俺は、雪がおもつくそ降っている空を見ながら言う。

「「？？？」」」

二人が首を傾げているがそんなの関係ないよ！

「あ、俺ちよっとトイレに言ってくるわ、んじゃ！」

俺は直ぐに男子トイレへと向かう。

この時気付けば良かった……後ろで律が笑いながら見ていたことに。

「ふう……それじゃあ開けるか……」

トイレの個室に入り、手紙を開けて読む。

「ええと……なになに……」

突然の手紙すいません……

アナタの事が誰よりも好きです。

放課後、焼却炉の前で待ってます。

その気があれば、来てください……」

――ゴスツ、ゴスツ！！

手紙を読み終え、頭を壁にぶつけてみる。
だが血しか出なくて、夢から覚めない。
本物……これが……あの伝説の……！！！！

I Love…Letter…

「生まれて初めて、こんなものもらったあああああ！！！！！！」
「」

思えばさ……俺、この小説のオリ主なのに全然モテてなかった……

誕生日……いつの間にか過ぎてた……

夏祭り……溜まった宿題で、それどころじゃなかった……

今年のクリスマス……怪人とドッグファイトして過ごした……

……だかな…！

俺は手紙を手で叩きながら、叫びまくる。

「今はモテてるんだ！

ハハ、ハハハハ、ヒヤッハアアア！……！！

俺、イケてる！

NOW、今、イケてるウウウウヒヤッハアアアアアア！……！！」

そう叫んで、俺はトイレの個室から出る。

このままだと誰だかわからないけど、でもこれを送ってくれた人に、

「惚れてまうやろおおおおお！！！！」

案の定、ゴリさんに追っかけられ、ボコられました。

――NOW LOADING――

――梓side

今日は二月十四日、バレンタイン……この日のために、先輩方と一緒に作戦を練ってきました。

その名も……『これで藤馬の心もぴゅあ　ぴゅあハート』大作戦！
！……まあ、作戦名はあれだけど、内容は良いと思う。

ちなみに内容は、

1・藤馬先輩に嘘のラブレター（気持ちは本当だけど）を送る。

2・ラブレターで指定した部室で、藤馬先輩を待つ。

3・藤馬先輩が来たら、椅子に座らせてチョコを渡す。

4・藤馬先輩の心は『ぴゅあ　ぴゅあ』！

という感じです……ちなみにチョコは憂に教えてもらいながら、皆で作りました。

これで、鈍感の藤馬先輩でも私達の気持ちがわかると思っていました……ところが、事態は変な方向に進んでいきそうです。

私達が部室で、藤馬先輩を待っている時でした。

ーガチャッ！ー

ドアが開かれた方を見ると、息を切らした律先輩が居ました。そんなに慌てて、どうしたんだろう？

「どうしたんですか、律先輩？」

「はあ……はあ……はあ……藤馬は！？」

すると、ムギ先輩がお茶を淹れながら言います。

「まだ、ここには来てないけど……何かあったの、りっちゃん？」

「実はさ……藤馬の奴、本物のラブレターを貰ってたんだ！」

律先輩以外の皆↓(@A@)エツ・・？

「……律、それが本当だとしたら……」

湊先輩の顔が、どんどん青白くなっていきます。

「ああ……多分、告白されてると思う」

律先輩以ry↓(。□。;)マジで？

「皆、どうする……このまま藤馬の事を諦めるか？」

律先輩の問いに、私達は考えます。

藤馬先輩を諦める……もし諦めて、忘れることが出来るのかな……
いや、

「そんなの……出来るわけじゃないですよ！ 私は、藤馬先輩が大好きだから……」

考えていたら、咄嗟に大声を出していました……恥ずかしい。

「ふふっ……あーずにゃん」

「にゃうっ！？」

すると、唯先輩が私に抱きついてきました。

「ゆ、唯先輩？」

私がそう言つと、唯先輩はギュッと、抱き締める力を強くします。

「わたしもね、あずにゃんと同じなんだ」
唯先輩……。

唯先輩はそのまま話しを続ける。

「わたしだけじゃないよ……漣ちゃんにムギちゃん、りっちゃんに憂も……みんなみんな、なっちゃんが好きっていうのは同じだよ？」

私が皆を見ると、皆が顔を赤らめながら頷く。

すると、律先輩が不敵に笑い……。

「よろしい……ならば、皆で戦争だ！」
クリーク

ここに、第一次バレンタイン大戦が勃発しました。

I i t o b e c o n t i n u e d

第一樂章 ♪ 番外編 ハッピーバレンタイン 後編！！

――梓side

今私達は、藤馬先輩が居る焼却炉に着きました。

「何処なんでしょうか、藤馬先輩……って、私達は何で隠れてるんですか？」

そう、私達は全体を見回せる近くの茂みに隠れています。

「バカ……ここで監視するんだよ、ほら来たぞ！」

律先輩が指を指した方向に、藤馬先輩が歩いてきました。

私達は息を潜めながら、その様子を監視します。

「あゝ、何だか凄いムラムラしてきた、ごほんっ……ドキドキしてきたな」

藤馬先輩がポケットに手を入れながら言いますが、私達の中では好感度が一気に下がりました。

「なっちゃん……やっぱり変態さんなんだ……」

唯先輩、分かりきっていた事ですょ？

私は再び藤馬先輩へと視線を向けます。

「いったい誰がくれたんだろう……ていうか、初めて告白されたから何て答えよう？」

藤馬先輩が唸りながら、手を組む。

しばらくするとふんす、と気合いをいれて……。

「やっぱり断ろう……今の俺じゃ、護りきれないと思うから……」
悲しそうに言います。

「どうしたんだろう、藤馬……何だか辛そう……」

私達は、その場ではつが悪そうな顔がします。

『ダダン、ダンダン、ダン……!……!』

その時、あの有名な。ミネーターのテーマが流れます。

私達が周りを見回しますが、誰もいません。

すると焼却炉の扉が開き、中から……。

「死にさせいいいい、ボウフラアアアアアア!……!」

郷田先生が飛び出してきました。

――NOW LOADING――

――藤馬 side

はあゝムラムrじゃない、ドキドキする。

呼び出された場所に着いたものの……誰も居ない……。

しばらく待っていると何処からともなく、

『ダダン、ダンドン、ダン！……！』

という音楽が流れてきた。

ていうか、何でターミネー。ー？

――ガゴンッ！――！

音がした方を見ると、焼却炉が開いて中から何か出てくる。

俺が身構えていると……。

「死にさらせいいいい、ボウフラアアアアア！――！」

殺気だけで人を殺せそうな、ゴリさんが飛び出してきました……Σ
ヴェー！？

「な、何で、ゴリさんが！？」

あの手紙は、教室に置いてるはずなのに……。

まさか……いや、そんなことはあり得ないよ！

俺は、恐る恐るゴリさんに質問する。

「あの手紙……まさか、ゴリさんが送ったわけじゃn」……そうじや、裏切り者を成敗しようとなあ」……オウ、神よ……orz」

俺が何をしたっていうんだ……ちよつとムラムラしただけだろ！？
……思春期なら誰でもあり得るのに！

今度クソ神に会ったときは、。ン玉潰す！

俺が復讐を誓っていると、ゴリさんが指をパキパキ鳴らしながら、
衝撃の事実を言う。

「ワシの娘……何やら、お前さんと付き合つとるらしいのお……それなのに、裏切つて二股とは……コロス」

――（・・）エツ・・？

……何か近くから物音がしたけど、それどころじゃない！

「あ、あの……ゴ、ゴリさん……話が全く読めないんですけど……？」

俺は誰とも付き合つてないし、好きな人もいない……ましては告白されたことなんて一度も（一年しか記憶ないけど）、無い。

「白々しいのお、ワシのアヤ（・・）とアドレス交換までしおったのに？」

アヤ？……あつ、ラブクライシスのアヤちゃんか……うん？

「ていうことは、アヤちゃんはゴリさんの娘って事すか……？」

「なんじゃ、今頃知ったんか？」

そ、そ、そうなのおおおおお！？

でも、アドレス交換してメル友なだけなんだけど……。

ちょっと意味が分からないので、改めて状況を確認すると……。

1・アヤちゃんはゴリさんの娘。

2・ゴリさんは、アヤちゃんと俺が付き合っていると思ってる。

3・そして、俺がアヤちゃんを裏切らないかラブレターを送ってみる。

4・死にさらせいいいいいい、ボウフラアアアアア！！
↑現在ここ。

OK、死亡フラグが立っている事だけは分かった。

とりあえず、ゴリさんの勘違いから解いていこう。

「ゴリさん、俺とあんたの娘は付き合ってるんじゃないくて、メールのやり取りをしただけですよ？」

俺がゴリさんにそう言うが……。

「うるさいんじゃ、おんどりゃあ！！」

ーギャングギャングギャング……！！

ゴリさんがそう叫びながら、パンチの嵐をぶちこんでくる。

ていうか、パンチの音がギャンとか可笑しいだろ……死んだんじゃないのこれ？

あれ、何だか攻撃がやけに遅く感じるな……はっ！？

その瞬間、俺の髪の毛が全て逆立つ。

――攻撃回避アビリティLv4発動！弾幕確認、させるか！――

――ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン………！！！！

「な、なんじゃと！？」

「ふっふっふ……、甘い、その程度で俺を倒そうだなんて、イチゴ牛乳にアンコ入れるくらい甘いぜ！！」

俺はゴリさんの残像が出るほど速い攻撃を全て見切り、避けていく。

てか、当たれば死ぬよね……だって残像出てるもん。

そう思いながら、ゴリさんを説得する。

「だーかーらー、ちよっとは人の話を聞いてくださいよ！？」

「だまらっしやい！！」

年頃の男と女がアドレス交換した↓遊びと称してデート↓そのままランデブーに決まってるじゃろおおおおお！！」

アンタは恋愛小説（笑）で何言ってたアアアアアアア！？
このままだと不味いよ（色んな意味で）、どうにかしないと……あ、
そうだ！

俺は一旦距離を置いて携帯を取り出し、ある人物に電話をかける。

その間も、回避アビリティ（ギャグ補正です）でゴリさんの攻撃を避ける……って、今顔にかすって血が出たぞ、どんだけだよ！？

ープルル……………ガチャン！

「もしもし、アヤですけど……………何でしょうか？」
よそよそしくアヤちゃんが出る。

そう、俺の作戦はアヤちゃんに付き合っていない事を、ゴリさんに言ってもらうという作戦だ。
これなら、誰も傷付かないで済む。

ていうか、段々と俺にかすり始めてるから急ごう！

「あのさ、今ゴリさんもとい、アヤちゃんのお父さんがアヤちゃんに聞きたい事があるんだって！」

「え、そうなんですか？
うーん、何の事だろう？」

「と、とりあえず…うおっと！…代わるよ……………はいゴリさん電話です、アヤちゃんから！」

するとパンチの嵐もやみ、電話をぶんどられる……………これで助かった。

「もしもし、何じゃアヤ？」

「お父さんこそ、私に聞きたい事って何？」

あ、ゴリさんに言っとくの忘れてた。

「さっきの事を聞けば良いじゃないすか、ゴリさん？」

「ああ、そうじゃった……アヤ、藤馬くんとは付き合ってるのか？」

ゴリさんが藤馬くんって……寒気がするわ。

——ここからの会話は、藤馬には聞こえてません——

「ふえっ!？」

な、何言ってるのお父さん! / / / /

藤馬さんとはまだ友達だよ!？」

「まだ、という事は……好きなんかあのボウフラの事!？」

「ううゝ、お父さんズルいよ!

何気に誘導尋問して聞き出すなんて、もう知らないっ!——ガチャッ、ツー、ツー……」

——バキヤッ!——↑携帯が握り潰される音

「ボウフラア……コロス!——」

「えっ、ちょっ、ゴリさん……不幸だああああ!——」

……ふふふ、ふふふ、アハハハ……上等だよ！

怪人だろうが、ライダーだろうが、まとめてブツ飛ばしてやらアアアアアアア！！！！

多分、この時の俺は可笑しかったんだと思います……てへりんこっ♪

――何だかんだで放課後♪

怪人を蹴り倒し、幾つもの授業を眠り倒した……そして放課後。

俺は日直になっていたため、色んな仕事をせつせとやっていた。

「これで良いんだよな、さわっち？」

音楽のプリントを、さわっちに渡しながら言う。

「ええ、ありがとうね……そういえば、藤馬くんはチョコを買ったの？」

「オフツ！？……いえ、誰からも貰ってないです……」

さわっちの言葉に、かなりのダメージを受ける。

そんな俺を見て、さわっちは少し微笑む。

「それじゃあ、部室に行きなさい……皆、待ってるわよ。」

あ、私は会議だから、後だね♪」

さわっちはそう言って職員室へ行った。

今のどういう意味だろう……まあいいや、部室でムギのお茶でも飲んでゆつくりするか。

俺は、教室に荷物を取りに行った。

ああ、重いよ……。

ギター（インヴァイオリン）を担ぎ、鞆を手に持ちながら部室へと歩く。

あ、そう言えば……。

俺は鞆から、ラブレターを取り出す。

「誰から何だろう……うん？」

ラブレターを見ると、呼ばれる場所が軽音部の部室、と書かれている……。

まあ、行けばわかるよな……よし着いた！

俺は部室のドアを開ける。

ーガチャ……。

「よしす。

ムギさん、お茶をよろす」お、来た来た」……うん？」

声がした方を見ると、軽音部女子メンバー＋憂ちゃんが座っている。

つか、何で憂ちゃんが居るんだろう？

「はいはい、主役はここに座れって」

すると、律が俺の手を引いて椅子に座らせる。

椅子に座り、皆を見ると……何だか顔が赤いものの、幸せそうな顔をしている。

「どつたの、皆？」

何か良いことでもあった？」

俺が皆に聞くが、首を横に振る。

「それより、なっちゃんに渡したい物があるんだよ！」
唯がそう言つと、みんな鞆から何かを取り出し、隠す。

そして、椅子から立ち上がつて俺の前に来る。

俺、何かしたかな……。

「あの……何でしょうか？」

俺は、ちよつとビクビクしながら聞く。

すると皆がクスクスと笑い、律が「せーの！」と言つて……。

「ハッピーバレンタイン……！！」「……」

小包を俺に差し出した。

「……………へっ？」

俺は、余りの急展開に目をパチパチさせる。

「なーに驚いてるんだ？」

バレンタインチョコだよ、ほら。」

律が黄色の小包を俺に渡す。

「藤馬くんのために、前々から計画してたのよ……はい」
ムギが赤色の小包を俺に渡す。

「全く……手作りだから、大変だったんだぞ？」
漣が青色の小包を俺に渡す。

「……ていうか、これ手作り！？」
俺はかなり驚いていた。

何故なら、明らかに料理が出来なさそうな奴が一人いるし。

「藤馬先輩が思っている通り、色々大変でしたが唯先輩も頑張りましたよ……どうぞ」
梓が緑色の小包を俺に渡す。

「あの藤馬さん、このチョコは皆で心を込めて作りました……」
憂ちゃんがチョコを見ながら、優しく言う。

「うん、皆で一生懸命に作ったんだ……あ、わたしも頑張ったよ、本当だよ！」
唯がブンブンと腕を振りながら、言う。
唯に言われて皆の顔を見ると、笑いかけてくる。

「これが、私達の気持ちです……はい」
二人が、白とピンクの小包を俺に渡す。

俺、今日まで本当に生きてて良かったなあ……。
俺は泣きそうになるのを堪える。
だって、不幸が続きに続いてからのこれだよ？……そりゃ泣きそうになるよ。

俺は唯の小包からチョコを取り出す。

トリュフって奴だろうな……あむっ。

皆から、特に唯から視線を受けながらチョコを食べる……うおっ！

「これ……うますぎじゃね！

本当にこのチョコ、唯が作ったの？」

「むう……さつきから、そう言ってるよ？」あはは、すまんすまん。
その後も皆のチョコを食べてみたが、どれも最高に美味かった。

「皆……本当にありがとうな？」

「……………えへへ、どういたしまして……………」
皆、幸せそうに笑うけど何か恩返ししなきゃ……あっ、そうだ」

俺はギターケースの中に入っている、ヴァイオリンを取り出す。

「あのさ、お礼といっちゃなんだけど、演奏で返すよ！」

俺の言葉に皆が目を輝かせ、催促する。

それじゃあ……行きますか！

そして、俺は静かに弾き出す。

——演奏♪ 仮面ライダーキバOST 渡

皆が、俺の為に何かをしてくれた……それだけで、力が沸いてくる
気がする。

皆が、笑顔でいてくれる……それだけで何でも出来る気がする。

俺は弾き終わるが、そのまま次の曲を始める。

――演奏♪ ふわふわ時間ヴァイオリンver

あれ、何かの音が聞こえる……これは何だ？

（それは心の音楽……皆が、心で無意識に弾いている音だ）
コウモリモドキの意志疎通が響く。

成る程……何だか分からないけど、皆の心の音楽を聴いてると護りたいって思うな……。

俺はその後も弾き続け、皆とのふわふわ時間を過ごした。

l i t o b e c o n t i n u e d

第一楽章 ♪ 番外編 ハッピーバレンタイン 後編！！（後書き）

どうでしたか？

藤馬「これで第一楽章 ♪ はおしまいかな。
んで、次は第二楽章 ♪ に入ると？」

うん、次回更新は……月曜日からにしようかな、土日は色々あるし。

藤馬「というわけでここからが本番なので、ぜひ応援よろしく願
いします！」

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

第二楽章 ♪ プロローグ!!(前書き)

どうも、私こと388859です。

今回から、第二楽章 ♪ に突入!

ここからは、恋もバトルも激しい展開になっていきます。

それでは第二楽章 ♪ プロローグをお楽しみください!

第二楽章 ♪ プロローグ!!

――演奏♪私の恋はホッチキス・ソロギタ―ver

――藤馬side

季節はもう春真っ盛り……桜も咲き誇り、風が吹く度に花弁が舞い上がる。

今日から新学期であり、俺も三年生になるのだが……。

――ダッダッダッダッ……!!

「何でこうなるんだよおおおお!!?」

(今日という大事な日に、貴方は遅刻とは……)

(いつもの事だろう、気にするなタツ坊)

はい、ガッツリ遅刻……俺はとにかく遅刻しないためにも一生懸命に走っています、新歓ライブで弾く曲を口ずさみながら。

そして、校門までやっとたどり着く事が出来た。

現在の時間を確認するため、時計を見ると……。

現在時刻 八時

(・|・)エッ……?

「……見間違えた……だ……!?!」

その場でorzポーズを取り、絶望する。

もう嫌だよ、パトラッシュ……。

そんな俺に、さらなる不幸が訪れる。

「……っ！」「……」

東の方から、ファンガイアの気配がする。

……今から行ったら、完璧に遅刻確定なんだけど？

俺が正論を相棒達に言うが……。

（何を言っている、早く行くぞ！）

（そうですよ、早く行きましょう！）

「あーもう、わあっただよ！！」

殺りますよ、殺らせていただきますよ！！」

俺は踵を返し、怪人退治へと走り出した。

――NOW LOADING――

――三人称side

スーツを着た男は、息を荒げながら公園の中を走る……その後ろには。

「ウウ……貰うぞ、お前のライフエナジー！！」

熊をモチーフにした怪人、グリズリーファンガイアが追いかけていた。

「く、来るな、来るなよ!!……うわっ!？」

スーツを着た男は近くの石に躓いてしまい、転んでしまう。

それを見て、グリズリーファンガイアが牙のようなモノを空中に出現させる。

「な、何だよそれ……やめろ、くるなあぁ!!」

危険を感じた男が石などを投げるが、ファンガイアは全く怯まない。

そして、グリズリーファンガイアが襲いかかるうとした時だった。

「ウウ……いただき「はい、ドーン!!!」……グッ?」

誰かの声がした瞬間、急な衝撃で地面を転がるグリズリーファンガイア。

目の前の事に目をパチパチさせながら、男は聞く。

「あの……君は?」

すると青年、藤馬は男を立ち上がらせながら、言う。

「全く、派手にしやがって……あ、貴方は早く会社に行った方が良
いんじゃないすか?」

藤馬に言われて顔を青白くさせながら、男は去っていった。

「ふう、これでよし……後は」

藤馬が右手の包帯をほどきながら、グリズリーファンガイアの方を

向く。

「貴様、何者だ……只じゃおかんぞ！」

グリズリーファンガイアは藤馬へと突進……しかし。

ーバキン、バキン！！

「グフツ、な、何だ！？」

突然何かに攻撃され、戸惑うグリズリーファンガイア。

「ふむ……ビーストクラスでも強い方だな……」

攻撃した一体、キバットが呟く。

「それじゃあ、エンペラーで行きましょう。

時間も余り無いですし」

するともう一体、タツロットが藤馬の周りを翔びながら言う。

「ええー朝からそれは……まあいいや、さつさと済ますぞ？」

藤馬がそう言うのと左手でキバットを掴み、右手に噛ませる。

「ああ……行くぞ、ガブリ！！」

「っ！！」

その瞬間、右手から全身へと《魔皇力》が流れる。

そしてキバットを右手に持ちかえ、顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれ、左手を真上に上げる。

「《変身……！！》」

キバットをベルトに、タツロットは自分で左手に填める。

すると、藤馬の体が黄金に光っていく。

「……ハアッ!!」

藤馬が左手を振り下ろすと、炎と共に紅いマントが出現する……その瞬間藤馬の姿は、仮面ライダーキバ エンペラーフォームへと変質していた。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ!!》」

Eキバはマントを翻し、グリズリーファンガイアへと宣言した。

――運命は変えられない……そう決めたのは誰だろうか？

――確かに、運命は変えられないかもしれない……。

――しかし、運命に抗い続ける事は出来る。

――そして、抗い続ければ、何時かきつと……。

――運命は、ハッピーエンドへと変わる。

この物語はバカだけど、運命に抗い続けた男のお話。

I l t h e b e g i n n i n g o f t h e s e c o n d
m o v e m e n t .

I
I
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第二楽章 ♪ プロローグ!!（後書き）

どうでしたか？

藤馬「ちなみに最後の英語は第二楽章が始まる、みたいな感じです」
さて、次回からこの小説は三日に一回の更新になります。

藤馬「実は、まだ話の構成が出来てないらしく……全く、早くやらないさい！」

イエッサー!!

藤馬「これからも迷惑をかけると思いますが、どうかこの小説をよろしく願います!!」

全員「それでは、次回をお楽しみに!!」

第二楽章 ♪ 第一幕 意外な転校生！！（前書き）

どうも、私こと388859です。

タイトルでも分かる通り、あの子の再登場回ですよ！

それでは第二楽章♪第一幕をお楽しみください！！

第二楽章 ♪ 第一幕 意外な転校生!!

――藤馬 side

《エンペラームーンプレイク!!!!!!》

ドゴツ、ゴガアアアアアン!!!!!!

グリズリーファンガイアに必殺技をぶちこみ、その体を爆散させた。

俺はバク転してその場を離れる。

「はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…はぁ…ごほっ、ごほっ!」

俺は変身を解除してその場に膝を付き、口から何かを地面に吐き出す。

地面を見ると……赤く光る血がついていた。

「……やはり、エンペラーは人間の藤馬には危険すぎるな……使う頻度を減らさない」と

「ですが、最近は強い怪人が多くなってきましたし……」

前にも言ったが、キバの鎧はファンガイアの王の物だ。

人間が使えば、それだけで負荷はかなり増えていく。

俺は近くの水道で口を濯ぎ、相棒達にこう告げる。

「大丈夫だよ……ちょっと吐血しただけだしな……それに」
相棒達を鞆に入れながら、話を続ける。

「俺しか居ないんだよ……奴等と戦えるのは」
俺の言った言葉に、コウモリモドキとタツちゃんは雰囲気を暗くさせる。

「だから、多少の無茶はしないとダメだろ？」
だってさ、あんな奴等の為に誰かが不幸になるなんて……そんなの許せるか？

俺は、そのまま学校へと歩き出した……もう遅刻してるからね。

「やっと着いた……ゴリさんはどこだ？」

校門に着き、ゴリさんが居る場所を確認するが誰も居ない。
良かった、追っ掛けられなくて済むわ。

そう思いながらルンルン気分で校庭を歩く。

すると講堂の方から、校歌の音が漏れ出てきた。

あ、もしかして、もう始業式が始まってたのか！

今更行っても仕方がないので、靴箱の方へと歩き出す……しかし。

……！！

何かが靴箱の方から土埃を撒き散らし、コッチに向かってくる。
もう嫌な予感しかないんだけど……。

俺は嫌々目を凝らしてみると、

「まーた遅刻しおつて、ボウフラアアア!!」

竹刀を持ったゴリさんがコツチに向かってきていた……はあ、不幸だ…。

俺はスグにクラウチングスタートの体制を取る……そして。

「これで、捕まえ」よーい……ドンッ!」……うおっ!？」
追いかけてスタートさせた。

校庭を走りながら、やり過ぎす場所を考える。

うーん、隠れられる場所は……よし!

俺はスグに講堂に向かって走り出した……その間も竹刀を避けたり、フエイントをしたりして捕まらないようにする。

「ちょこかまと……ああうつとおしい!!」
さっさと捕まれ!!」

ゴリさんがイライラしてるのか、怒鳴り込んでくる。

それを受け流し、講堂のドアを……。

「どうおりやああああああ!!……」

――ガスッ!!!!

思いつきり蹴破った。

ふう、後は紛れればいい

「何やっとなじゃ、おんどりやあああああ！！」

やっぱり蹴破らなきゃ良かったあああああ！！

半分涙目になりつつ、新二年生の集団に紛れる。

いきなり俺とゴリさんが現れたことによって、その場に居る全員が混乱していた。

よし、これならイけるん「な」にやってんだ、藤馬？」……へっ？

ーガシッ、バキヨッ！！

「ナスカツ！？」

いきなり首へと走った衝撃にビックリする。

体をガクガクさせながら後ろを見ると……そこには。

「……（――＃）」「……」腕を組んで、いかにもぶちキレている軽音部の皆さんが居ました。

くそう、まさか皆に裏切られるとは……不覚っ……。

「さて、死ぬ準備は出来たかのぉ？」

そして死亡フラグ乱立ですね、本当にありがとうございました。

――NOW LOADING――

やっと解放された……もう最悪だよ……。

三年二組……俺が一年間過ごすクラス。

ちなみに、軽音部メンバー+和の全員が一緒に担任はさわっち……仕組んだ感じがプンプンする。

その教室の机で突っ伏しながらため息をついた。

「お前が遅刻するから悪いんだろ？」

確かにそうですね、律さん。

「本当に大丈夫なの藤馬くん？……遅刻したのも、怪人がらみなんでしょ？」

和の問いに首を縦に振る。

正体を和にばらして以来、和は何かとサポートしてくれる……主に勉強だけ。

「あ、そういえばなっちゃんは知ってた？」

このクラスに転校生が来るんだって！」

唯が少し興奮しながら言う。

つか、何でそんなに興奮してんの？

「だって転校生だよ！
何だかワクワクするじゃん！」

「うんうん、私もするする〜」
唯とムギが手を取り合ってテンションを上げる。

転校生か……どんな奴だろうな？

「というか新歓ライブがあるんだぞ、新歓ライブ！」 澪が皆に言い聞かす。

「それで本心は？」

「転校生、喋りやすい人だといいな……」
結局そうなるのね……。

そして俺達が転校生について色々想像していると、

「ーガラッ」はい、ホームルーム始めるから席について」

さわつちがやってきた……それにしても、さわつちが担任とかうるさくなりそうだな、このクラス。
さわつちの声に皆が席に着く。

ちなみに俺は男子なので、廊下側の一番前の席に座っていて隣は居ない……多分、転校生が座るんだろう。

「え〜と、ホームルームを始める前に一つ、このクラスに転校生が来ます」

この言葉に皆がざわざわする……俺もこんな感じだったのかなあ。

「センサー、転校生は男子ですか、女子ですか？」
律がさわつちに質問する。

「えっと中都君は特例中の特例なの。
だから、今回は女の子よ。
仲良くしてあげてね……じゃあ入って」

ーガラッ。

さわつちがそう言うつと扉が開き、転校生が入つ……Σ（。）。マ
ジで？

俺と唯達はその転校生を見て、思わず固まってしまった……なぜな
ら。

「じゃあ須藤さん、自己紹介をお願いね」

およそ五ヶ月前、俺と死闘を繰り広げ、最終的には家族になった……
大切な人。

「はい……どうも初めまして、ボクの名前は須藤美紗すでつ みさです。
一年間よろしくお願いします」
裁判を受けているはずのシザース、もとい美紗がこのクラスに転入
してきたからだ……。

俺は放心状態になりながら、さわつちの説明を聞く。

「須藤さんは、家の（・・）用事でこの学校に転校してきました。
それで須藤さんの席は……」

さわつちが教室を見渡すが、空いている席は俺の隣にしかない……よって。

「中都君の隣しか無いわね……須藤さんはそれで良い？」

「はい、むしろ嬉しいです！」

美紗がさわつちに返事をして、スキップで俺の隣に来る。

「久しぶりだね、藤馬くん」

美紗が座りながら俺に笑いかけてくる。

美紗の言葉に、約四名がこちらを睨んできた。特に、席が近い漣とムギは凄い目をしている。

「おいシザ「今のボクは美紗だよ？」……なんで美紗がここに居るんだよ？」

俺は視線をスルーしながら美紗に聞く。
すると指を唇に当てて考え込む美紗。

「うーん、あれから忙しかったからね。

とりあえず一段落したから、藤馬くんが居るこの学校に来たわけ」

成る程……大体わかったよ、美紗。

「素直でよろしい！」

さて、問題は……。

「……（――#）……」

怒ってるマドモアゼル達をどうするかだよな……。

「おいお前等、後で説明をするから……だから殺気を抑えてください！」

俺はJUMPING土下座をしながら言う。

「……あ、ごめんごめん……てへっ」「……てへっ、じゃないでしょうよ！」

うっかりで殺気出されたら寿命縮むわ！？

「あはは、何か楽しそうな人達だね藤馬くん！」

寿命が縮んで楽しいなら良いよね、美紗さん。

「それじゃあホームルームを始めるわよー！」

さわっちの言葉に俺達は素直に従った。

――昼休み♪

「……親戚い！？」「……」

カレーパンを食いながら、唯達に美紗との関係（簡単にまとめると、美紗とは親戚なんだ）を話していた。

ていうか、そんなに驚かなくても良いんじゃない？

ちよつと傷つきながら、売店で買ったジュースを飲む。

それにしても……。

俺は自分の手を見て、握ったり閉じたりする。

俺が戦い続け、一年が経った……怪人達は少なくなるどころか、逆に増えた気がする。

それに強くもなり、エンペラーを二週間に一回ぐらいのペースで使わないといけないぐらいになっていた。

それに、記憶も取り戻していない。

断片的には取り戻してはいるが、何の記憶なのか分からない……ただ。

俺はふと憂ちゃんお手製の弁当を食べている唯を見る。

唯はおかずを食べて幸せそうな笑顔を返してくる。

他の面々も、この平和な時間を楽しんでいた……特に美紗。

凄く良い笑顔をしていて、幸せそうにしている。

それだけで、自分のやった事に意味が在ったんだと思うと、凄く嬉しかった。

「藤馬くんどうしたの、そんなにぼーっとして?」

美紗が牛乳を片手に聞いてくる。

他のメンバーも俺に視線を集めてくる。

「いんや、別に何でもないよ。」

俺が今までやってきた事は無駄じゃないんだなあって、思っただけ

皆がきよんとするが、美紗だけは分かっているようで笑顔だった。

俺はゴミを片付け、心地よい春の暖かさに包まれながら眠りに入
った。

――ここからの質問タイムは、藤馬には聞こえていません――

「ねえ、須藤さんは今まで何処に居たの?」

「美紗で良いよ、私もりっちゃんって呼ぶから」

「お、おう、それじゃあ美紗って呼ぶな、よろしく」

そう言っ二人は笑い合う。

すると、唯がちよっとモジモジしながら美紗に言う。

「あ、あの美紗ちゃん……あの時はありがとうね?」

「へっ、何が……って、あああの時ね……。」

別に良いよ……それに、こちらこそ怖い目に合わせてごめんなさい」

「い、いやいや、何で美紗ちゃんが謝るの!？」

二人が謝りあっていると、漣が止めにかかる。

「こらこら、譲りあいしてどうするんだ？」

過去の事はもう良いだろ？」

「うんうん、漣ちゃんの言う通りだわ」

漣とムギの言葉に二人は頷く。

こんな感じで普通に仲良くなっていたのだが……恋する乙女達に死角は無い。

「ふん、そんな事が有ったんだ……ねえ、今度は皆に聞きたい事があるんだけど？」

「えっ、何、美紗ちゃん？」

美紗がそう言って唯達の視線を集め、質問する。

「皆、藤馬くんの事が好きでしょ？」

「……ふえっ!?!?!?!」

「だってバレバレなんだもん……まあ、渡す気なんてサラサラ無いけどね」

「じゃあ……美紗ちゃんもなの？」

「そりゃあねえ、藤馬くんは命の恩人だから、ボクも大好きなんだよ」

美紗の言葉に唯達は顔を合わせ、溜め息をつく……なんというか、愁傷様です。

その後、唯達と美紗は自分達の苦労話を話したらしい。

――NOW LOADING――

――藤馬side

初日の授業も終わり、やっと放課後になった。

俺達軽音部は荷物をまとめ、部室へと移動を始める。

すると美紗が俺の隣に来て、質問する。

「あれ、藤馬くんは何処に行くの？」

「あつ、美紗には言ってなかったな。

俺達さあ、実は部活でバンド組んでるんだ。
今から行くんだけど、美紗も行くか？」

すると美紗が頷いて、笑顔をみせる。

「ちょ、ちよつと藤馬！」

ライブも近いんだし、練習しないと！」

漣が拳を握りながら力説する。

「そんな事言われても、唯達はお茶する気満々だぜ？」

俺は、目を輝かせながら話をする唯達を指差す。

その姿をみて、漣は溜め息をつく。

というわけで部室に到着……あり、先客が居るようだな。

ーガチャ……。

「よゝす、頑張つてんな梓？」

ギターの練習をしている梓に、労いの言葉をかける。

「あ、こんにちは先輩……って、貴女は！？」

梓が美紗を見て身構える。

「あーはいはい、ストップストップ」。

今から説明するから……ムギさんや、お茶の準備をお願いな」

「了解」

というわけで状況説明 and ティータイム。

ちなみに今日のお菓子はマドレーヌですたい……うん、美味し！

「すみませんでした、美紗先輩！」

「別に良いよ、梓ちゃん。」

そのかわり、これからよろしくね。」美紗が笑いながら梓に言う。

「それにしても……ああ、落ち着くね。」

「アタシも春休み中、何回も部室に来たくなったよ。」

「私です！」

そう言いながら皆でお茶を飲んだり、マドレーヌを食べる。
すると律が閃いたように言う。

「よし、新学期だからやることは！」

「新入部員「ムギのお菓子を食ーべよう！」……ぶう！」

「ウソウソ、お約束お約束。」

頬を膨らませる梓を律が諫める。

「もう、真面目にやってくださいよ！」

「そうだよ、りっちゃん」

突然だらけていた唯が話し始めたため、皆で唯を見る。

「新入部員が入らなかったら、来年あずにゃん一人になっちゃうんだよ？」

唯の言うことは最もだが、だらけているためイマイチ迫力が無い。

つか、言われたくない。

しかし他のメンバーもそれはまずいと感じたのか、難しい顔をする。

「それもそうだな……」

「梓ちゃん、一人って寂しいんだよ……」

美紗、お前が言くと現実味がありすぎる。

「でも、このままなら確実に来年部長になれるぞ……こんな感じ
っ」

律に言われて皆の脳内に、部長になって高笑いしている梓がイメー
ジされる……何かバカっぽい。

すると梓がはっとして、

「そ、そんなのはどうでも良いんです!!」

慌てて弁解している……考えたよね、この子。ちょっと良いかも、
って思ったよね絶対に。

そのまま弁解を続ける梓。

「それより、早く部活の勧誘に行きましょう？
早くしないと良い人材が居なくなっちゃいます!」

（（（（誤魔化した……今絶対、焦って誤魔化した））））

皆の心がフルシンクロした時、唯が思い出したように立ち上がる。

「そつえばわたし、ビラ作ってきたんだよね！」

「「「「「嘘お!？」「「「「「

「うちの憂の勧めでしてねえへへ」

ああやっぱりね……憂ちゃん、いつもありがとう。

「ねえ藤馬くん、憂って誰？」

「ああ、憂ちゃんは唯の妹で、かなりのしっかりものだよ」

「ふーん、そうなんだ……」

「はいどうぞ、軽音部です！」

というわけで、It's ビラ配り!!

美紗は他の部を見回ってからまた来るそうだ。

何故か、ちょっとだけ汗臭い臭いがする牛の着ぐるみを着てビラを配る……いや、何で牛なの？

ていうか、全員が着ぐるみを着てビラを配ったら、仮装パーティーのビラにしか見えないよね？

その証拠に誰も受け取ってくれない。

俺達は一回部室に戻り、新入部員を待つものの……

「誰もこない……」

ムギの言う通り、誰も来ない……ですよね。

「こりゃあ来年は廃部か？」

「あずにゃんが一人になっちゃうよ……」

確かにこのままだと不味いな……うん？

漣が喋っていないことに気付き、漣の方を見ると、

「あわわわわ……」

何故かガタガタ震えていた……why？

とりあえず安心させることにしよう。

「……おいおい、どうしたんだよ漣？」

俺がそう言っ、肩に手を置いた……すると。

「ひつ、嫌ああああああ！？」

「ーガシッ、ブオン！！！！」

「フォッサマグナ！？」

「ーヒュン、バキヤ！！」

「「「「Σ（@A@）えっ！？」「」「」

漣にその手を掴まれ、思いつきり部室の外へと投げ飛ばされた。

漣は、その後泣きながら何処かに行ってしまった。

その時投げられた勢いで、部室のドアを壊してしまった事をここに記します……。

「お、おごお……なかなかの投げ技だったぜ……」俺はフラフラと立ち上がり、部室へと戻る。

「廃部なんてダメっす！」

「自分もそう思います！」

唯とムギが気合いを入れている。

まあ確かに後味悪いよな、廃部なんて……というわけで！

「……部長！……」

皆で律の判断を仰ぐ……一方の律は腕を組んで考え込んでいる。

「そうだな……部員が増えれば部費も増えるしな……」

「部費部費（ブヒブヒ）」

いや律、そういう問題じゃないだろ！

「よし、部員獲得大作戦を実行だぜ！」

「ぶひー！……！」

というわけで作戦を立てたのだが、もう帰らないといけない時間なので、美紗も一緒に下校することになった。

そして今は、俺と美紗で帰っている。

あつ、唯は憂ちゃんに買い物を頼まれてスーパーにいきましたよ。

「ていうか、美紗は何処に住んでんだ？」

……あれ、ちよつと待てよ？

そもそも、美紗はこの世界の住人じゃなくて異世界の住人だ。

俺の場合は、怪人を倒す代わりに衣食住を保証してもらったけど……
…今の美紗に以前のような力は無い。

俺が、あーでもないこーでもないと考えていると……。

「ああそれなら、藤馬くんの家に住むことになったから♪」

――(@A@)???

俺はたつぷり十秒ぐらい固まった後、

「…………ウソダンドコドーン!!」
夕日に向かって吠えた。

「……大丈夫？」

今日はボクがご飯を作ろうか？」

ああ、美紗さんの優しさが針のように突き刺さるぜい……。

心にダメージを負いつつ、美紗に聞きたかったことを聞いてみる。

「なあ……俺って男だけと良いのか？」

いくら何でも同年代が一つ屋根の下は……」

すると、美紗は俺の手を握って懐かしそうに言う。

「藤馬くん言っただじゃん……ボクと家族になって、護ってくれるって……家族はいつまでも一緒にいるもの……そうだよね」

はあ……参りましたよ、マドモアゼル。

というわけで、俺の家に大切な居候がまた増えました。

I i t o b e c o n t i n u e d

第二楽章 ♪ 第三幕 新歓 前編！！（前書き）

はいどうも、私こと388859です。

今回は独自設定が出てきますが、予想はつくと思います。

それでは第二楽章♪第三幕をどうぞ！！

第二楽章 ♪ 第三幕 新歓 前編！！

――藤馬 side

小鳥の鳴き声が耳に聞こえ、目を開けると爽やかな朝を迎える。

ううーん……よく寝たな……「ムニユツ」……えっ、ムニユツ？

ふと手を握ると、枕より柔らかい感触がする。

そっちに視線を向けると……。

「あつ……ダメエ……ううん……キミなら良いよ……」

何やらエロい声を出して、幸せそうな美紗さんが寝てました……そして俺が握っているのは男のロマン……どうみてもパイオツですね、本当にありがとうございます。

つて、冷静に言ってる場合じゃない！！

昨日は飯食って、風呂入って、自分の部屋でずっと一人で↑ここ重要、寝てたはずなのに何故美紗が居るんだよ！！

俺は直ぐに手を離そうとするものの、美紗に手を掴まれて離れられない。

パイオツの余りの柔らかさに、頭の中が真っ白になってきた。

「ううん……な、な、ななにをやっているのかな藤馬くん！？」

Σ（・ー・）……終わったな……俺の短い人生……。

――NOW LOADING――

――放課後――

パイオツタツチ事件（俺が名付けた）の後、美紗が「ボクに話しかけないでよ、変態……」的なオーラを出していたので、とりあえず美紗を焼却炉に連れ出した。

そして、

「あの……その…朝は本っ当にごめんなさいでした!!」
俺は朝からずっと怒って口を聞いてくれない美紗に謝る。

反応が無いので顔をあげるが、目の前に美紗は居ない。

俺が周りを見渡そうとした瞬間、

「……………えいつ!」

「へあ? ……ちょ、ちょ、ちょっと美紗さん!？」

いつの間にか後ろに回り込んでいた美紗が背中に抱き着いてきた。

ああ男のロマンが惜しみなく押し付けら……じゃないよ！

「あ、あの、何で貴女は抱きついてるんでせう？」

「えっ……ダメかな？」

いやダメ……じゃないです、はい。

美紗の涙目にやられましたよ、だって可愛いんだもん。

しばらく抱きつかれていると、美紗が喋りだす。

「……別に怒ってないよ……朝の事は」

へっ……そうなの？

意外な返答に拍子抜けする俺。

「うん、別に怒ってないよ。ボクが勝手に君の部屋に入ったんだし……それより行かなくていいの、部員の勧誘？」

あ……忘れてたあああ！！

美紗の言葉に、思わず頭を抱えてしまう俺。

スグに教室へと駆け出そうとするが、一言だけ言いたかった事を美紗に言う。

「あのさ……家に帰るときは先に帰ってきてくれないか？」

「えっ、何で？」

いやいやわかるでしょうよ、何となく。

「だってよお、唯達にバレてみる……俺が殺されるぞ?」

「ああ……あはは、確かにそうかも」

「それじゃあ、また後でな!」

俺は教室へと荷物を取りに行った。

というわけで部員獲得大作戦を説明しよう。

作戦1 ・行き倒れ作戦……実行中。

作戦2 ・なまり作戦

作戦3 ・スパイ大作戦

作戦4 ・新歓ライブ

という内容になっている。

現在は、作戦を実行している律以外は全員部室でくつろいでいる。

ていうか、なまり作戦ってなんなん?

まともな作戦じゃねえだろ?

「「ごめんください……」」

「ーガチャ……」。

「はい……」

俺が考えている間に、カモが来たようだ。

律に肩を貸す新入生、律儀に声までかけている。

「大丈夫ですか、着きましたよ？」

「お気を確かに」何というか、罪悪感が芽生えますね。

俺がそんなことを思った瞬間、律の目が怪しく光り、ミッションがスタートした。

まず、律が新入生の耳元で呟く。

「ありがとうございます……そして、軽音部へようこそ」

律はスグに前へと飛び出し、唯とムギの三人で勧誘を始める。

「ウェルカム……！」「お茶いかが？」

「はい、ここにサインして！」

押し売りに近いこの勧誘に新入生は……。

「「ま、間に合ってます！」」

光より速く逃げ出した。

「く、クッキーもある」「ーガチャッ!」…むう…」
ムギが止めようとしたものの、無理だった。

つか、お菓子じゃ唯ぐらいしか引き留められないと思う。

「くっ、行き倒れ作戦は失敗か……」

「りっちゃん、諦めるのはまだ早いよ!」

唯が自信満々に言い放ち、次の作戦を実行する。

部室に繋がっている階段の下、その廊下で唯が新入生を待っていた。

その様子を近くの場所で俺、律、梓の三人で見守る。

唯一人で勧誘が出来るのかな……無理だろ?

その証拠に梓も心配そうな表情をしている。

すると新入生が通りかかり、なまり作戦が発動する。

「あのくすまんこっですか?」

音楽室つてどこですか?」

唯が田舎の爺さんよりなまったしゃべり方で新入生に聞く。

「なまった?」

「何やってんだ?」

「つか何言ってるのあれ？」

俺達はツッコミをいれた後、そのまま傍観するが……。

何やら新入生が音楽室への行き方を唯に教えている。

「あつ、行き方教えてもらってますね」

「まあそうなりますよね」

「新入生、マジ良い人すぎる」

唯が笑顔でお礼を言い、こちらに来る。

「Σはっ、これじゃ意味無いよ！」

「」「バカですよね、この子？」「」

とりあえず次の作戦へGO！

次のスパイ大作戦で俺の出番は無いので、大人しくビラを配った（着ぐるみはもちろん着た）。

はあ、やっぱり着ぐるみ着ない方が良いよな……誰も貰ってくれない。

「大丈夫なのかしら、このままで……」
部室に帰る途中、ムギが呟く。

確かにビラを貰ってくれた人は数人しか居ないし、誰も部室に来てくれないけど。

隣にいる澪とムギの前に来て言う。

「俺達が不安になってたらダメだろ？」

梓はもつと不安なはずなんだから、な」

俺の言葉に二人が優しく頷く。

その瞬間――。

――ドクンッ！――！

「……っ……あ……ぐっ……うあ……な、何だ……？」

身体が謎の圧迫感に襲われ、胸を手で押さえる。

「きゅ、急にど、どうしたんだ藤馬！？」

「だ、大丈夫、藤馬くん！？」

急な出来事に、俺は膝をついてしまう。

そして、

――チャリン、チャリン、チャリン……。

「っ………何だよ、これ………？」何かコインのようなモノが擦れ合う映像が頭の中に写し出された。

すると映像が消えた瞬間、何もなかったかのように圧迫感が消えた………が。

「「っ!」」

今度は知らない怪人の気配が現れた。

「ごめん、用事が出来たからまた明日!」

俺は部室へと駆け込む。

――ガチャ!!

「いらっしやい……って藤馬かよ?」

「すまん、今日はもう帰るわ!」

着ぐるみを律に投げ、荷物を持って飛び出す。

「おいおい、藤馬……って居ないし藤馬、おい藤馬あああ!……!」
律の叫びが俺に聞こえたが、そんな関係ないんじゃない!

――NOW LOADING――

――三人称side

ここは有名な宝石店……その中では。

「いやっ、食べないで、食べないで、お願いだから……」

泣きながら懇願する五十代の女性と、

「うう……もつと……もつとだ……もつと欲しいイイイイイイ！」

その女性が身に付けている宝石類を吸収する、ミイラ男のような怪人、ヤミーだった。

事の始まりは数分前、いつものように店で宝石を買いに来た女性。

しかし、女性の視線にある男が目にとまった。

その姿はさながら神父のようで、体は痩せ細っている……なりより、こちらをずっと見ている。

まるで何かを見極めるように。

女性は神父を気味悪がり、宝石へと視線を移したその時だった。

「その欲望、解放しなさい……」

そんな声が聞こえ、自分からヤミーが出て来て……今に繋がる。

ヤミーは女性の宝石を全て吸収し、店内の宝石も吸収します。

店員が止めようとするがヤミーの力に翻弄され、逆に気を失う始末。

そして、全ての宝石を吸収した時――

「ウウウウ……」

ミイラ男のような姿からカマキリのような怪人、カマキリヤミーへと変わった。

カマキリヤミーは神父の元へ行き、命令を待つ。

神父はカマキリヤミーの状態を見て呟く。

「ふむ、少々心許ないですね……もっとメダルを蓄えてきなさい」
神父はカマキリヤミーへと指示を出し、カマキリヤミーはそのまま店から出た。

怪人が出たことによって周りに人気がない……はずだった。

「ちょっと待て！」

肩で息をしながら、藤馬がカマキリヤミーの前に立ち塞がった。

すると藤馬の頭にキバットが停まり、ヤミーを見る。

「むっ、ヤミーとは……めんどろな相手だな」

「とりあえず倒せば問題ないだろ……行くぞ！」

藤馬がそう言って左手でキバットを掴み、噛ませる。

「ああ……気を付けろよ、ガブリー！」
「っ――！」

噛みついた右手から全身へと《魔皇力》が流れる。
すると顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれ

る。

「《変身!!》」

藤馬は仮面ライダーキバへと変身した。

カマキリヤミーは腕の鎌を磨きながらキバを見る。

「貴様がキバか……先ずはお前の中のコアメダルを貰うぞ!」

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え!!》」

キバがヤミーへと一直線に突っ込む。

ヤミーは鎌でキバの頭を切り裂こうとする……しかし、

「甘いんだよ、カマキリ野郎が!」

それを軽く避け、振り下ろした鎌を掴んで、ヤミーを引き寄せる。

カマキリヤミーの鎌は腕についているため、間合いの中に入ってしまえば当たらない……つまり。

そこからキバは蹴り、拳、頭突き等を駆使してカマキリヤミーを追い詰めていく。

そして大きくカマキリヤミーを蹴り飛ばした時、

「ぐああああ!!!!」

ーチャリン、チャリン、チャリン……！

カマキリヤミーの身体から、セルメダルが溢れる。

キバはセルを掴んで、それを見回しながら呟く。

「これって……さっき見た奴だよな……っ！？」

キバの体が急に動かなくなり、膝をつく。

「おいどうした、しつかりしろ藤馬！」

キバットが呼びかけるが、キバは返事をせず、かわりに複眼が紫に光る……そして。

地面に腕を突っ込み、何かを引き出す。

「……何だこれ、恐竜みたいだけど？」

その何かは紫色の大斧みたいだが、全体的にはティラノサウルスの頭を模している……すると。

（おっ、メダガブリューを出したってことはかなり進んでるな、侵食）

キバの頭に聞いたことのある声が響く……五ヶ月前キバに護る力をくれた、あの声だった。

（……おい、何で今まで話し掛けなかった？）

キバは謎の声に問いかける。

（それは簡単、侵食が進んでなかったから。
今の藤馬なら自由に話せるけど……まあ、まずはヤミーを倒す事に
専念しよう）

謎の声に従ってキバはヤミーの方を向く。

（メダガブリューを使ってヤミーを倒せ……まっ、メダガブリュー
の使い方は自然に分かるでしょ。

あっ、そういえば！）

謎の声が思い出したように言う。

（自己紹介をしてなかったな。

俺の名前は火野映司、またはギル。
よろしくな？）

（……ふふっ、わかった。

これからよろしくな、映司！）

そう答えると、キバは近くのセル一枚を掴み、エナジーエンハンサ
ー（ガブリューの口の部分）に入れる……そして。

「《ゴックン！ー！》」

セルメダルをビュレットチャンバーに投入し、エネルギーを圧縮。

「《キバー！ー！》」

すると、キバに変身する時の音楽が流れ、メダガブリューは赤色を
帯びていく。

それを見てカマキリヤミーは鎌から真空刃を放つが、キバは一気にメダガブリューを振り抜く。

真空刃を掻き消し、そのまま赤い軌跡を描きながらカマキリヤミーを叩き斬る！！！！

「セイヤアアアアアアア！！」

《グランドオブレイジ・キババージョン！！》

そして、カマキリヤミーに当たる一歩手前というところで……。

「……っ！？」

キバは横に飛び退く。

キバが居た場所には鱗粉が舞い上がっており、あのままでいれば危なかっただろう。

キバがスグにヤミーを探すが、その姿はどこにも無かった。

――NOW LOADING――

――藤馬side

変身を解除し、散らばっているセルメダルを集める。

コウモリモドキと映司が言うには、そうした方が良さそうだし、つか、さっきの斧は何なんだろう……あれもコアメダルの力だって言ってたけど。

そんなことを考えつつ、集めたセルメダルを触った時だった。

ーゴポツ、ゴポツ、ゴポポ……。

「なっ!？」

セルメダルが俺の手に入っていた。
俺は取り出そうとするものの、その方法が分からない。

「どうした藤馬、そんなに自分の手をつねってるが……ついに頭が壊れたか？」

うっさいんだよ、クソコウモリモドキ!

コウモリモドキに事情を説明すると……。

「ふむ……メダルの力……グリード化が進んでるな……何故だ……？」

コウモリモドキがブツブツと言っているが、何の事やらさっぱり。

とりあえず帰るか、考えても分かんないし……それに。

(……(・・・)zzz……行けますって……ちよつとのお金と……明日のパンツがあれば……)

知ってそうな奴は寝てやがるし……はあ。

俺は暗くなりつつある道路を、ゆっくりと歩き出した。

I I t o b e c o n t i n u e d

第二楽章 ♪ 第四幕 新歓 後編！！

――藤馬 side

「ううーん、曲はいつもので良いんだよな？」

ギターとヴァイオリンを点検しながら、漣に聞く……あ、どうも、私こと中都藤馬です。

今は最後の作戦、新歓ライブの準備をしている。

今回の作戦が上手くいけば、部員がもっと増えるはずなので、皆には気合いが入っていた。

特に梓なんかはスッゴク気合いを入れている……だが、漣だけは涙目になって小動物みたいになっている。

可愛い……Σはっ、これが萌えの文化なのか！

「先輩、新境地に目覚めないでください」

分かってますよ、あずにゃん。

「ほんじゃ、気軽に頑張っついていこうか、マドモアゼル？」

「……うん（はい）！！」「」「」

というわけで本番中なのだが……。

『
』

梓の奴、力みすぎて演奏がぎこちないんだよな……何か顔が怖いし。

あ、そんなに睨まんといてよ！

今は三曲目で、次に唯のMCが入る。

その間に、ちよつとだけ励ましてみるかな？

俺はヴァイオリンを弾きながら、笑みを溢した。

――梓 side

あれ、何かいつも通りに弾けない……次で最後の曲なのにどうしよう！

私のピックを持つ手が震え、軽いパニックに陥ってしまいました。

もし、このまま誰も新入部員が来なかったら……いつもならこんな事は考えないのですが、パニックになった事でネガティブ思考になってしまいます。

唯先輩の安心できるMCも耳に入ってきてません。

どうしよう……その時。

「おゝい、梓？」

そんな声と共に、震えていた手を握られます。

何だか温かい感じがして安心できます。

振り向くと、やっぱり藤馬先輩でした。

「お前はもちつと気軽にやりんさい。

今のお前は楽しんでないだろ？」

「あつ……確かにそうですね」

藤馬先輩に言われて気づきました。

私は勧誘の事ばかり考えて、このライブを楽しんでませんでした。

「まあ、せめて最後の曲ぐらい皆で弾いて、皆で楽しもうぜ……な？」

そう言つて藤馬先輩が頭を撫でてきます。

ああこのまま死んでも良いかも……Σはっ、ダメダメ！

私は頭をブンブンと振り、

「……はいつ、頑張りましょう！！」

笑顔で答えました。

藤馬先輩も安心して戻っていきます。

「うつし、それじゃあ最後の曲に行きますか！
りっちゃん隊長、カウントをお願いしやす！」

「あゝ、MCはわたしの役割だよなっちゃん！」

「ありやうや、ごめんごめん」

このコントに講堂は笑いに包まれます。

どんな時でも、これが放課後ティータイムなんだよね。

会場の笑いが一段落した所で唯先輩のMCの続きになります。

『それでは最後の曲、聴いてください……ふわふわ時間!!』

皆でアイコンタクトをして……。

「1・2・3・4・1・2・3!!」

――演奏♪ふわふわ時間

――藤馬side

「軽音部いかがっすかっ！」

俺が着ぐるみを着て新入生にビラを配るものの、誰も貰ってくれない。

もうすぐ四月も終わり……桜の花弁が地面に沢山落ちていて。
新歓ライブが終わった後も、ビラ配りや色んな作戦をした。

しかし誰も来てくれず、不安だけが募っていくばかり。

いい加減やばいなあ……それに、最近の梓は元気が無い。

今日のお菓子でも梓にあげて、元気を出してもらうか。

そんなことを思いつつ、部室のドアを開ける。

ーガチャ……。

すると、仁王立ちをして深刻そうな表情をしている軽音部三年組と、憂ちゃん。

その前には美紗が正座をしてガタガタ震えている。

「よゝす……って、何やってんのお前等？」

俺は着ぐるみを物置に置きながら質問する。

「と、とうm「あらあら、ちょっとお口を閉じましょうか、美紗ちゃん？」は、はいっ！」

美紗が何かを言いかけたが、ムギの負のオーラに縮こまっている。

こ、怖すぎるよ、ムギさん……。

ムギのオーラにゆっくりと後ずさるうとすると、

ーガシッ、ギリ、ギリギリギリギリ……。

「おい藤馬……ちょっと聞きたい事があるんだけど？」

「奇遇だな、律。」

私も藤馬に聞きたいことがあったんだ」

いつの間にか後ろに移動していた律と漣が、俺の肩を握り潰そうとしてくる。

「あ、あははは……何でしょうか皆さん？」

「……なっちゃん、心当たりはあるよね？」

「いんや、別に？」

「ーガシッ、バキッ！！」

「オウツ！？」

「そんなの、なっちゃんとミサミサが愛の巣を作っている（どつきよしてる）ことだよ！」

唯さん……ブンブンと腕を振りながら言っけど、副音声に凄く昼ドラ臭がするよ。

「藤馬くん、拷問おはなししないとダメみたいねえ？」

ムギさん、悪意を感じるんすけど。

……まあ、こういう時に限って運が悪いわけで……。

「ーチャリン、チャリン、チャリン……」。

「「っ！……」」

この前のヤミーと、チェックメイトフォーよりは弱い怪人が……急ごう。

「美紗、ごめんな……お説教は一人で頑張れ（Ｔ―Ｔゞ」

「えっ？「ーガチャー！」ちょ、ちよつと藤馬くん！？……あつ、唯ちゃんそれはダメだ」

……部室から粉碎音が聞こえたけど、美紗なら大丈夫さば。

俺はそのまま廊下を走り抜ける。

（うゝん、グリードだけど……グリードじゃない）

映司がそう呟く。

（グリードって、強い方の気配か？）

意味が分からず映司に問いかける。

（うん、グリードはヤミーのボスみたいな奴なんだけど……なんか混じってる感じがするな）

映司は懐かしそうに言う。俺はもう少し気配を詳しく辿っていくと……これって！？

俺は自分の推測をコウモリモドキに言う。

（コウモリモドキ、グリードとファンガイアの混合なんてあり得んのか？）

（は？……何をバカな、そんなことを言っている暇があれば早く走

れ！)

そんなの言わなくても、後もうちよいだ！

よし彼処だな……あれはっ！！

――NOW LOADING――

――三人称side

「梓、こつちこつち！」

「ありがとう、純！」

梓は走りながら後悔していた。

今日は弦を買いに先に純と帰っていた。

しかし、その時やって来たのが……。

「待て、小娘共！！」

カマキリヤミーだった。

既に五分程鬼ごっこが続いているが、仮にも怪人と人間。
このままでは梓達が捕まってしまうだろう……。

「死ねっ！！」

ーブォツ、ガガガガ……！！

梓達へとカマキリヤミーが真空刃を放つ。

真空刃は梓達の足下の道を削り、梓達は瓦礫に躓いてしまう。

「痛つ……なんなのよ……あ、梓！」

純は汚れをはたきながら、梓の方を向く。

梓の腕からは血が出ているが、少しの量なので大丈夫だろう……しかし、倒れた拍子に気を失ってしまった。

純が梓を起こそうとするものの、その間にカマキリヤミー達との距離も縮まってきた。

「梓、梓、しっかりしてよ梓……あつ……」

純が前を見た瞬間、カマキリヤミーは目の前で鎌を振り下ろそうと――。

「待ちやがれっ……」

ーガシッ……

する前に、カマキリヤミーに藤馬が飛びかかった。

「と、藤馬先輩……」

「おお、純ちゃん！ とりあえず梓連れてどっか逃げとけ……おら

っ！」

藤馬はそう言ってカマキリヤミーを蹴り、右手をキバットに噛ませる。

「行くぞ……ガブリ!!」

「っ!!」

藤馬の全身へと《魔皇力》が流れる。

顔にはステンドグラスの模様、腰には赤黒いベルトが巻かれている。

「《変身!!》」

藤馬は仮面ライダーキバへと変身した。

その間に純が梓を担ぎ、少しでも逃げる。

「《絶滅タイムだ、ありがたく思え!!》」

キバはまっすぐに突っ込み、カマキリヤミーの体に連続で拳を入れる。

カマキリヤミーはそれを軽く避け、キバの体を鎌で切り裂く。

「ちっ、何か強くなつてねえか!？」

前とは比べ物にならないスピードにキバは驚く。

「恐らくセルメダルを溜め込んでいたのだろう……しかしおかしいな、もう一体いるはずなんだが……」

「そんなことより目の前の事だろ!」

一回キバは下がり、ガルルフエッスルをキバットに吹かせる。

「《ガルルセイバー！！》」

キバはGキバへとフォームチェンジした。

「ウアッ！！」

Gキバはカマキリヤミーへと斬撃、離脱、斬撃を繰り返す。
カマキリヤミーはその動きに翻弄され、ダメージを蓄積させていく。

「よし、ならこれで！！」

Gキバは真空刃を避けながら下がり、ガルルセイバーの柄に腕を当てて衝撃波を放つ。

衝撃波は隙だらけのカマキリヤミーへと直進する……が。

ーブオツ、ガンツ！！

「なっ！？」

突然現れた第三者に掻き消された。
だが驚いている暇は無い。

「っち！？」

Gキバが驚いた隙に、第三者がその手に持った剣で攻撃をする。

「ガキイイイン！！」

「くう……！！」

それを左手のガルルセイバーで受け止め、鍔迫り合いになる。

第三者は、全体的に揚羽蝶モチーフにした怪人……いや。

「チェックメイトフォーだな、てめえ？」

Gキバはガルルセイバーを両手で持ち、押し返そうとする。

しかし、Gキバはスピードが売りのフォーム。

力が足りず、鍔迫り合いが続く。

「ええそうです……私はビショップ。

初めまして、王の残滓よ」

その瞬間ビショップは剣を滑らせ、柄でGキバの腕を殴る。

それを受けガルルセイバーを落としてしまい、無防備なGキバへ鱗粉が襲いかかる。

「ぐあっ！？」

「ふっ……！！」

「ヒュン！！」

体から火花が散り、よろけるGキバに後ろにいたカマキリヤミーの真空刃が追い討ちをかける。

ーズバツ!!

「ぐああああー!!」

G キバはキバへと戻り、地面をゴロゴロと転がる。

二つの技を連続でくらった為、キバはヨロヨロと立ち上がる。

「只の人間に二対一とか……案外セコイな、ビショップさんよ?」

「いえいえ……人間の身で黄金のキバの力を解放できるあなたには、加減など必要ないでしょう……それに」

キバの挑発にビショップが返す。

「あなたは、仮にも王の残滓ですから
ビショップの言葉にキバが考え込む。

(王って誰だ……それに残滓って……どういう意味だ?)

キバはそう思いながらタツロットフェッスルに手を伸ばす……が。

「そんなことをして良いんですか、貴方は?」

ビショップの言葉にキバの手が止まる。

「貴方は、今まで私達ファンガイアを倒してきました……しかし、
貴方が倒すのは人間に害のあるものだけ。
その行いは非常に感謝しています」

キバはその言葉に面食らう。

まさか、ファンガイアを倒して感謝されるとは思わなかっただろう。

「ですが……」

ビショップが剣を撫でながら続ける。

「貴方は黄金のキバの鎧の封印を解いてしまった……キバの鎧はファンガイアの秘宝。

それを人間が使う等、もつてのほか！

貴方はさらに、それで同族を何体も倒してしまった。

一族の象徴である黄金のキバの鎧で、これ以上戦い続けるならば……

……」

ビショップがキバに剣を向ける。

「貴方を一族の敵として認識させていただきます。

私たちの一族は、世界中にいます。

もしそうなれば、世界中にいる怪人達が貴方を殺しに来ますよ？」

ビショップの目は本気だった。

チエックメイトフォーとして、個人として。

一族の平和を願っているのだろう……だが。

「……ああそうかい、コウモリモドキ！」

キバがタツロットフェッスルを吹かせる。

「《タツロットー！！》」

——この男は、それぐらいじゃ止まらない。
バカ

「なっ、正気ですか!？」

貴方は今、この世界にいる全ての怪人を敵に回したんですよ!！」

ビショップが啞然としてしまう。

只の人間が、世界中の怪人を……しかもたった一人で？

(そんなの正気ではない……よほどの実力者がバカぐらいしか……)

「世界中が敵?……それがどうした?」

「なっ!？」

ビショップはさらに驚く。

目の前にいる男は世界を敵にして、それがどうしたと言ったのだから。

「貴方は事の重大さが分かっていない!

只の人間風情に何が出来る!？」

万を軽く越える相手が貴方を狙っているのに、なぜそんなことが言える!？」

「そんなの、バカだからに決まってるだろ?」

ビショップはもう意味が分からなかった。

「怪人? チェックメイトフォー? 世界中が敵?……確かに勝てるなんて思っていない……だがな、そんな事で俺の意志は揺るがねえよ!! 立ち止まったら、そこで全てが終わっちまうんだ!!!!」

「――そうだ……誰かが死んで、良いことなんて何一つ無い。

「びゅんびゅんびゅん！！

ドラマチックに行きましょー！！」

タツロットが飛んできて、キバの拘束具カタナを全て解放していく。

すると、鎧から黄金の翼が開き、そこから無数の蝙蝠が空へと飛び立つ。

そしてキバは左手を真上に上げ、赤い止まり木パワーにタツロットが填まり、最後の封印を解除する。

「《变身！！》」

タツロットそう叫んだ瞬間、空へと飛び立った蝙蝠が体に吸い込まれ、鎧を強固なものへと変えていく。

そして左手を力強く振り下ろし、背中に炎と共に血のように紅いマントが現れる。

「――だから戦うんだ、抗うんだ。

例えば世界が敵になろうとも……！！

「もし、俺の大切な人達に手を出してみろ……その時は全員まとめて！！」

「――バサッ！！！！

マントを翻し、Eキバは宣言する。

「《光栄に思え、絶滅タイムだ！！！！》」

その堂々としたEキバの態度、そして覚悟……。

ビショップがそれを見て無意識に一步下がる。

（な、なんだこの男の覚悟は……私が無意識に一步下がるだ！？）

カマキリヤミーも威圧されたのが、同様に震えている。

「どうした、ビショップ？」

俺を殺すんだろう……かかってこい！」

Eキバが二体に挑発する……あからさますぎるが、

「貴様人間風情が……許さん！」

カマキリヤミーが一気に懷へと入り、鎌を振り切る。

ーガアン、バキャツ！！！！

「なっ！？」

しかしEキバの鎧は全く傷つかず、逆にカマキリヤミーの鎌がへし折れた。

Eキバは、驚くカマキリヤミーの腹へ何度も蹴りだす。

蹴りをいれる度にセルメダルが溢れ落ち、その威力を物語っている。

「そらそらそら……らあっ！！！」

ーードゴッー！

「グフッ……」

カマキリヤミーは蹴り飛ばされ、もはや瀕死。

そしてEキバは、左手にとまっているタツロットの頭部を引き、胴体にある特殊な回転盤がキバの紋章の図で止まる。
インベリアルスロット

「逃がすかよ、タツちゃん！ー！」

「はい、《ウエイクアップ・フィーバー！ー！ー！》」
タツロットの声と共に両腕を顔の位置に構え、腰に下げていく。

すると、踵にあるルシファーズナイフが足裏に移動し、紅い魔皇力が溢れ出す。

そして頭上へと飛び上がり、足から紅い翼のエネルギーが出現、そのままカマキリヤミーへと両足蹴りを放つ！ー！ー！

「おらああああー！ー！ー！」

《エンペラームーンプレイク！ー！ー！》

ーードゴオオオオオオオンー！ー！ー！

紅いキバの紋章がカマキリヤミーに刻まれ、爆散。

それを見て、ビショップは逃げ出した。

――藤馬 side

「ごほっ、ごほっ、ごほっ……よしっ……はぁ……やったぜ……はぁ……はぁ……」

変身を解除し、思わず膝をつく。

「藤馬先輩……!!」

物陰から梓を背負った純ちゃんが飛び出してくる。

良かった……二人とも無事だった。

コウモリモドキ達をギターケースに入れながら立ち上がる。

「う、うゝん……あれ……藤馬先輩!？」

どうやら梓がやっと起きたようだ。

「……よっす、大丈夫か？」

「あつ、はい大丈夫ですけど……怪人は？」

というわけで梓に状況説明……ちなみに怪人は仮面ライダー（もちろん俺じゃないよ）が倒したことにして、オレは夕飯の買い物をしてる最中に出くわした事にした。

純ちゃんは用事を思い出したと言って帰ってしまった。

今は、近くの店で買ったたい焼きを公園で食べている。

「ふゝん……そうだったんですか／＼／＼／＼」

梓は何故か赤くなりながら、笑顔で元気一杯だ。

確か、昨日まで元気が無かったのだが……？

「つか、良いことでもあったか梓？

顔がニヤけてるぞ？」

「ふにやつ！？……あ、はい、実は……」

「なるほど、『今年はこの六人でやりたい』……ね」

梓によると、唯がこう言ったらしい……まあ唯らしいなあ。

「はい、私も皆さんと一年間やりたいです！……」

梓は話を終えると、何だか俺をジーツと見ている。

いや、正しくは俺のたい焼きみたいだけど。

段々捨てられた子猫みたいな感じが……Σはっ、脳内補正が入った！

俺は首をブンブンと振り、梓に聞く。

「俺のたい焼き……いるか？」

「あ……でも「良いから良いから、ほれ！」……あ、ありがとうございます／＼／＼／＼……」

たい焼きを食べる梓の頭を荒っぽく撫でる。

ホント子猫みたいで、撫でたくなる衝動に駆られるな……それにしても。

これからどうするか……はつきりいつて世界を相手にして、勝てるビジョンが浮かばない……負ける気なんてサラサラ無いけど。

「せ、先輩、どうかしました？
顔がこわばってますけど……」

どうやら梓を心配させちゃったらしい。

「いんや別に何でもないよ……よしっ、帰るか梓？
俺は勢い良く立ち上がり、梓に聞く。

「はい、これからはもっと練習を頑張っていきましょうね！」

「はいはい、ほどほどになっ」

「あ〜！」

やる気が無い返事ですよ、それは〜！」

あーキコエナイ、キコエナイ！

……とりあえず、目の前の人達を護っていこう。

ただそれだけで良いよな……よっしゃあ！！

「先ずは楽しむぞ、ティータイム！！！」

「練習もやりましょうよ！？」

――数分後……桜ヶ丘 とある教会」

「成る程、やはりそう来たのか……」

そう呟きながら、キングは祭壇の前にあるステンドグラスを見つめる。

そのステンドグラスには、人が神に救済を求める絵が描かれている。

キングの前にはビショップがひざまずき、どうやら先程の報告をしていたようだ。

「あの男……意思だけは本物です。

これ以上野放しにすれば、キングを殺しに来るかもしれません」

キングはそれを聞き、ステンドグラスを手でなぞりながら話し出す。

「……甘さ（やつ）は捨て置いて大丈夫だ。

それほど強くもなければ、奴の弱点は私が一番知っている。

それより、あれ（・・・）はどうなっている？」

キングの問いに、ビショップは身体を震わせる。

「は、はい……」。

現在第一段階は終了しましたが、合成態はまだ無理です。

私の場合、ヤミーを作るのが精一杯でございます」

教会が沈黙に包まれる……そして。

――バキヤアアアアアアアン!!!!!!!!!!

キングが殴ったことによつて、ステンドグラスが欠片へと変わる。

「……何をモタモタしている？」

一族の繁栄を望むなら、さらに力を蓄えなければいけない……わか
るな、ビショップ？」

「で、ですが、我々は誇り高きファンガイア」……ビショップ」……
ぐっ!？」

――バオツ!!!!!!!!!!

キングの身体から、赤い羽が飛び出す。

それはまるで、不死鳥のような神々しさがあった。

羽が飛び出した影響で松明の火は消え、椅子が吹き飛び、教会は一
瞬で廃虚のように変わる。

「分かっているな？」

誇りなど捨てろ……そんなモノがあるうが、何もかも亡くなってしま
えばおしまいだ……早く最後まで終わらせろ、良いな？」

キングは悲しそうにそう言い、教会を去っていった。

I
I
t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

第二楽章 ♪ 第四幕 新歓 後編！！（後書き）

どうでしたか？

キバット「今回は藤馬が軽音部からお話を受けているので、今回は私がするぞ。

それにしても、あの主人公は……」

ご立派な啖呵切っちゃったね……これが発端で、後半は死にかけるけどな？

キバット「後は感想だな……一人しか貰ってないからな、人数」

やかましい！……というわけで、大至急どんな感想でも下さい！！

キバット「私からもお願いするぞ、頼む」

全員「それでは次回をお楽しみに！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2418x/>

けいおん!～例えば、俺が全てを忘れても～

2011年11月23日21時47分発行